
プラス魂 ♪ ～ Season ? ～

corplash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラス魂 ♪ Season ？ ♪

【Nコード】

N7474G

【作者名】

corplash

【あらすじ】

吹奏楽生活の3年間を自伝のごとく綴ったプラス魂♪シリーズ第2弾。中学2年生に進級した泰徳たちは、後輩を迎え入れて新たなスタートを切った。ニューカマーも続々登場し、常套中学校吹奏学部は忙し騒がしの毎日を送る。少しずつ成長していく泰徳たちの、ちょっぴりおふざけな吹奏楽ストーリー！。

序章 「ご挨拶」

みなさんこんにちは。G T・spiraiです。

前回もお知らせしたとおり、みんなのHarmony（夢と希望のアンサンブル）は、プラス魂として生まれ変わりました。ということ、コラムの方もちょっと趣向を変えて面白おかしく作品を書き上げて生きたいと思いますので、よろしくお願いします。

さて、ここからは今後の泰徳達の活動とあらずじ、そして主幹となるストーリーについて少しか言っておきます。流れが分からなくなったら、いつでもここを読んでください。

この作品では、泰徳が中学2年生に進級してからの、常套中学校吹奏楽部での奮闘振りを描いています。ここでは行事が増えてきてさらに他の学校との接触も増えてきます。また、コラボ企画が進んでいる『奏（Kanade）（につくん）さん著』と読み合わせることで、もっとこの作品を楽しんでいただけるかと思っています。

ただし、変更点がひとつだけあります。この作品を本格的に執筆を開始したら、主導は『一本の棒 《ザ・マエストロ》』に変更になります。つまり、更新頻度が高くなるのは、マエストロの方になります。プラス魂は1ヶ月に3話の割合で執筆を進めて行こうと思っていますので、よろしくお願いします。

さて、皆さんお待ちかねのあらすじです。

新年を迎えた泰徳達は、年賀状を通してそれぞれの抱負を語り合います。それを元に泰徳達が気合を入れて頑張っていくわけですが、卒業式を控える3月に、とある学校からジョイントコンサートの依頼を受けます。立石先生は迷いますが、結局ジョイントコンサートに出席する事になります。

そして卒業式も終わったところで、今度は新入生歓迎会と入学式、そして部活動紹介の曲決めに移ります。なかなか大変なスケジュールですが、これが泰徳の体を蝕んでいく事になります。

2学期、そこまでの疲労が泰徳の体を祟り、拡張型心筋症の発作を再発します。コンクールも近い6月末の出来事です。意識を失ったまま、回復の兆しを見せない泰徳ですが、この後どうなるのかは本編で確かめてください。

こんなところでしょうか。尚、今年度の日程は次のようになっています。

1月初旬	部活開始
3月初旬	ジョイントコンサートの依頼
3月中旬	卒業式・ジョイントコンサート本番
4月初旬	入学式・新入生歓迎会・部活動紹介
5月中旬	部活動参観
7月中旬	第54回全日本吹奏楽コンクール愛媛県大会
8月初旬	サマーコンサート
8月中旬	第54回全日本吹奏楽コンクール四国支部大会
9月下旬	愛媛県連合音楽会
10月下旬	第54回全日本吹奏楽コンクール
12月中旬	アンサンブルコンテスト本番

これをもとに物語を進めて行きます。

尚、新入部員を含めた人物紹介は、部活動参観日が終わり次第入れようと思います。

これからの『プラス魂』 Season 2』をお楽しみに！

「年度始めの褒め言葉」

時は2006年1月1日。今冬休みの真つ只中で、泰徳達一家はのんびりとしたお正月を美奈と未来とともに過ごすのであった。

「去年は色々あったねえ」

「ホント。最初はどうかと思った」

「そんなこと言っただって、成長したんだからいいじゃないか」

「そうよね」

蜜柑をほおびりながら、美奈はテレビをつけた。尚、場所は泰徳の自宅であるが、両親と泰徳の妹と弟は外出中である。

「でも一番ビックリしたのはあの高校の先輩よね」

「翔のことか？」

「うん。いきなりくるんだから」

「ああ、アンコンの時ねえ」

と、
思ひ出話に耽るふけ3人。

実は、12月に行われたアンサンブルコンテストで初めて、美奈と未来が翔と出会ったのである。それは会場である生涯学習センターでの事。

[illegible]

「よお、泰徳。いい演奏だったな」

「ああ、本当に」

と肩を並べてやってきたのは、無論翔であつたが、もう1人は面識が無かつた。

「なあ、翔。そのもう一方のやつ誰やねん」

「え？　これが佐野先輩？」

「ああ」

「ほえ……」

美奈と未来は同時に感嘆の声を上げた。その理由として上げられるのは2つ。まず翔の胸板の厚さ。これには以前、泰徳がサマコンで翔と話していたときでも話題になった。そして身長の高さである。小学校の頃からの付き合いである泰徳と美奈、そして未来だったが、一番身長が低いのが泰徳だった。しかし、いざ中学生になってみると泰徳の方が高いことに気付いた。だが、その泰徳より10cmほど高いのである。

「身長高えな、お前」

「当たり前やがな。高1やで」

「ちょうど4つ離れてるんだ!」

相槌を打つ未来。

「それより、お前の横のやつ誰や?」

「おお、そうそう。拓あんや」

「拓あん? 食いもんかよ……。まあいいや。拓あんってことは、同じチューバ吹きやろ? せやろ? 本堂^{ほんどう} 拓真^{たくま}君」

いきなり本名を見ず知らずの人に言われ、パニくる拓真。しかし、すぐにハツとした。

「あ、もしかして竹林君?」

「ああ。そうだけど」

「へえ。なあ、翔。音楽の才能が抜群なやつって、竹林君だったろ?」

「ああ」

これは以前、翔と電話で話していた内容である。あくまで泰徳はこのことを否定し続けてきたのだが。拓真はマジマジと泰徳を見つめると、翔に耳打ちした。

「やつぱ、音楽の才能ありそうな顔してんな」

「そうやろ?」

と2人で笑いあう翔と拓真。泰徳は不気味そうに、

「やめろよ、鳥肌立つじゃねえか」
と苦笑いした。

.....

「あれからだつたな、高橋先輩と拓あんが付き合い始めたのは」

「え？ そうなの？！」

「あら、知らなかったの？ 未来。高橋先輩、休みの日はずっと携帯握り締めてるでしょ」

「いわれて見れば……」

実はこのときに、写真撮影が行われた。このときに、拓真は美並に對して恋心を抱き、付き合っている。ちなみに、この写真撮影の写真は2人とも、ディスプレイに設定されている。

「撮影に参加したのって誰だった？」

「確か、俺らと永井と、朝倉と、翔と、水谷と、拓あん」

「美奈は入ってないでしょ？」

「ああ。打楽器だったから」

「ええ！ 私も映りたかったー！」

ほつぺを河豚の如く膨らませる美奈に、泰徳がなだめをかけた。

「まあまあ。そう焦るなって。写真あるから」

と、泰徳はアンコンの本番直後に撮られた写真を取り出してきた。

そこには、最後列左から美並、拓真、トロンボーン吹きの川崎慎也^{んや}。そして中列に泰徳、翔、未来、香織。そして最前列にホルン吹きの永井雪子^{ながい ゆきこ}と陽乃とユーフォニアム吹きの水谷春樹^{みずたに はるき}が映っていた。

「うわあ、拓あん顔強ばつとる」

「ホント。緊張してるって顔ね」

「でもそれが逆にいい味出してるじゃん」

「確かに」

そして3人は笑いあつた。

「まあ、これから何がおきるか分からんけど、頑張つて行こうや」

「そうだね」

「やっぱのんびりが一番！」

と、3人がカーペットの上に大の字になつた。と、泰徳は美奈が握っている一枚の紙に目をつけた。寝つきが恐ろしいほど早い美奈は、既に熟睡していた。泰徳はこっそりとその紙を広げ、読んでみた。そこには、

『あけおめー！！』

今までいろんなこともあつたけど、

成長したねえ（´・ω・｀）

つくづく悲しくなるわい（ワロス）

ま、これからもがんばろー！

P・S・ おまえつーばうまいど♪

こむとらばす中井 』

泰徳はクスツと笑うと、その紙を美奈の手に握りなおさせ、呟いた。
「美奈も成長したよ。ありがとな……」

そうして、泰徳も目を閉じた。これからどんな奮闘振りをこの3人が見せてくれるのか、とても楽しみである。

第1楽章 「年度始めの褒め言葉」（後書き）

最後に記した美奈のメッセージの中での「つーば（＝チューバ）」や、「こむとらばす（＝コントラバス）」などの表記は意図的にや
つてることですので、綴りがおかしい、日本語がなっていないなどの
評価への返信は致しかねます。あらかじめご了承ください。

第2楽章 「え？ オーディション！？」

1月8日。部活動初めの日であり、始業式である。泰徳達吹奏楽部は午前で修行を終えた後、昼食をとってそのまま部活というスケジュールだ。今回は、その昼食をとっているところから物語が始まる。

「今日って合奏あつたっけ？」

「合奏？ あつたんじゃねえの？」

「予定表見ればいいじゃない」

「それが忘れちゃって……」

手持ちの弁当をつつきながら話はずむ泰徳、美奈、そして未来。3学期が開始されたばかりなので、事実上泰徳達はまだ1年生である。

「あ、合奏あるよ。卒業式」

「何の曲するんだ？」

「エアーズと、校歌と、大地讃頌と、旅立ちの日に」

「結構やるなあ」

「だって本番2カ月後だし」

「新人生歓迎会とか、入学式の演奏もあるでしょ」

「あ、そっか」

そう言つて、泰徳は玉子焼きをほおばった。

「あ、そうそう。話題変わるけどさ」

「何？」

美奈が珍しく話題を変えてきた。美奈は普段、話題を自分から振る事は無く、ただ会話に流れていくだけの単純な性格であった。

「ジョイントコンサートするっていう噂があるんだけど」

「ジョイントコンサート？」

「うん。なんか県内屈指の中学校と高校を集めてコンサートするんだって」

吹奏楽部の噂というのは、ただでは済まない内容の事が多い。恐れ多くも、泰徳は聞いてみた。

「何処が出るんだよ？」

「えっとね、常套うちづちと、北佐屋と、齋木さいぎ高校」

「齋木高校っていったら、全国大会の常連じゃねえか」

「うん。その3校からそれぞれ選抜で奏者を決めていくんだって。最後はみんなで演奏するらしいけど、おおもとはその選抜メンバーでコンサートを進めていくみたい」

「そのオーディションみたいなのってあるの？」

「今日の合奏中に、立石先生がひそかにやるらしいって」

選抜で選ばれるのはジャスト50人。3校の部員合わせて200人以上いる中から選抜で奏者になるためには、およそ4倍率の壁を抜けないといけない。

「で、枠は決まってるのか？」

「らしいよ」

「どんな風に？」

「トランペット1人、トロンボーン1人、ホルン1人、ユーフォ1人、チューバ1人、弦バス1人、クラリネットは各ポジションから1人ずつ、サクスはアルトが1人、テナー1人、バリトン1人、フルート1人」

「バスクラは？」

「ここには該当者がいないって言ってた」

「濱田先輩いるじゃん」

「選ばれなかったんだって」

「じゃあ……？」

「高校の先輩がやるらしいよ」

「ふーん。でもさあ、殆ど1人枠じゃん」

「そうよ。だから頑張るの」

以上の選抜割合から行くと、単純計算では次のようになる。

- トランペット3人
- トロンボーン3人
- ホルン4人（高校から2人選出）
- ユーフォ2人（北佐屋中参加不可）
- チューバ3人
- クラリネット9人
- フルート3人
- サクソス ・アルト3人
 - ・テナー3人
 - ・バリトン2人（高校不参加）
- コントラバス2人（3人の中からさらに選出）

「厳しすぎだろ。とくに弦バスとか」

「本当だ。さらに絞られるみたいだね」

「私頑張るもん！」

美奈が大声を上げる。それに未来と泰徳は腰を引かせ、

「う、うん……。分かってるよ」

と美奈を落ち着かせた。

「ともかく、今日の合奏でそれが決まっちゃうんだったら頑張らないとな」

「48分の13の確率だからね」

「でも、入れなかつたらどうする？」

「そうならないために頑張って練習して、今日の合奏に挑むんだよ。所詮エアーズじゃないか」

「でも、されどエアーズよ。簡単な曲ほどバカにしてたら痛い目に遭うんだから」

「あ、悪い……」

「でも、もし愛なんかが入ったら、私合格してても辞めさせてもらうし！」

未来がボソツと呟いた。しかしこれに関しては、3人とも同意見だ

った。

「確かに。選抜に入ってこれちゃ、やる気があるのも一瞬でなくなるわ」

「ま、頑張ればいいってことで」

「どうせ私たちは愛よりかは絶対に上手いし」

「ああ。ま、自分が一番上手いとかは絶対思わないけどな」

「あそうよね」

気がつけば時計の針は14:50を差していた。

「やべ！ もう3時じゃねえか」

「ホント！」

「そろそろ練習始める？」

「当たり前だろ！」

「今日オーディションあるんだから」

「合奏16:30からだし」

「あはは。そうよね」

こうして3人は、3学期初の部活に精を出すのであった。

隠れオーディションまで、あと1時間30分。

第3楽章 「結果発表」

場所は変わって第2音楽室。これから合奏が始まるつかという緊張感の中、B a s s パートの例の3人はオーデイションという大きな存在に飲まれそうだった。

「始まつちやうぜ……」

「皆、今日オーデイションあるとか知らないもんね」

「人数が変わったりするのかな？」

「何の？」

「オーデイション」

「そりゃあ、そうだろ。微妙なずれはあるさ」

「そうよね」

気がつけば時計は合奏の時刻を指し、立石先生が入室してきた。

「こんにちは！」

「おし、座って、座って」

部員たちが席に着く。立石先生は、指揮台の上に置かれたコントラバス奏者専用の椅子に腰掛け、話を始めた。

「えっと、皆パートリーダーから聞いていると思うが、3月初旬、卒業式の前日にジョイントコンサートに出席する事になった。つまり3月14日の日曜日だな」

この噂を聞いたのは、パートリーダーからではなく美奈から。美奈は誰から聞いたのかは存じ上げないが。

「そのジョイントコンサートに概ね出演する、選抜メンバーをオーデイションで決める。その時期は未定だが、メンバーが決まり次第、その場で発表する」

泰徳達は、この台詞を言った後の立石先生が、不気味な笑みを浮かべたように見えた。3人は鳥肌が立った。

「じゃ、今日の合奏はエアーズのみで」

「はい」

ここで、『エアーズ』について少し説明しておこう。

エアーズは、2004年度の吹奏楽コンクール課題曲である。作曲したのは田嶋 勉さん。とある学校の元音楽教諭で、卒業式の為に書いた曲がこのエアーズだという。田嶋さんが作曲している最近のものでは、2008年度コンクール課題曲の『ピッコロ・マーチ』が挙げられる。

「よし、じゃあインテンポで」

インテンポというのは、楽譜に書かれてある指示のテンポ通りに演奏することである。立石先生がゆっくりとタクトを下ろした。

グロッケンの静かな3連符に古ーとのメロディーが静かに重なる。ここはピッチが狂いやすいところなので、フルート奏者は細心の注意を払って演奏しなければならない。そしてサククス、クラリネットが加わり、低音の不定期なリズムに導かれながら、曲はだんだんと盛り上がる。エアーズは上記でも書いたように卒業式のために作られた曲の為、これは無論卒業式に使う予定である。

中間部サククスソロ。ここは珍しく愛が担当していた。泰徳達も期待はしていなかったが、想像以上の表現力に驚かされた。入部当時は自分勝手なことを言っていた愛だったが、この日の合奏では何か違う姿を見た気がした。

（濱田のサククス、下手したら翔より上手いかもしれへん……）

泰徳は心の中でそう思いながら、次の出番を待った。転調し、同じリズムが泰徳の前に現れる。このとき、泰徳は少し前の美奈の発言を思い出した。

（されどエアーズよ。簡単だと思ってる、逆に痛い目見るんだから）

確かにそうかもしれない。そう思った。実際泰徳は、チューバ奏者だが低音域が苦手である。そんな低音域がマシنگンの如く登場す

るのがこのエアーズで、最後はペダルGと呼ばれる、チューニングのB から1オクターブ下がって、さらに下がったところの『ソ』の音の8分音符で曲が終了する。立石先生曰く、はく時のロスが多いらしいが、泰徳にその自覚は全く無かった。

（吐くときのロス？ よく分かんねえ……）

泰徳の頭の中に『？』が並ぶ。そのままエアーズを吹き終えてしまったが、美奈と立石先生の言葉だけが頭から離れなかった。オーディションの事などは、すっかり忘れていた。

「よし。じゃあ、今から選抜メンバーを発表する」

えー！ と、大ブーイングがかかった。部員たち殆ど、オーディションがあると知らなかったのだから。

「選抜？ 何のことだ、中井？」

「馬鹿！ 忘れたの？ 今日隠れオーディションじゃない」

「あ！ 忘れてた！！」

そんな泰徳や他の部員たちを尻目に、立石先生は話を進める。

「こっちから出すメンバーは18人。クラ4人、フルート2人、サクソ各1人、弦バス1人、チューバ1人、ホルン2人、ユーフォ1人、ラッパ2人、ボーン2人。弦バスは確定だから、明日またオーディションだ」

あたりが静まり返る。そして立石先生は容赦なく、発表を開始した。「それじゃあ発表する。クラリネットは、新良、四之宮、原畑、長野。フルートは安田、久保。サクソは福田、上野、河野。トランペットは恵理子、白石。トロンボーンは新原、高畑。ユーフォニアムは谷。チューバは竹林。打楽器は全員参加だ」

打楽器パートは5人しかいない為、今回の合奏ではオーディションの仕様が無かった。ゆえに、打楽器はコントラバスと同様、後々他の選抜メンバーとの合奏を重ねていくうちに正式なメンバーを発表する形をとった。

「以上！ 合奏終わり」

「起立！ 気をつけ！ 礼！！」

「ありがとうございました！」

こうしてオーディションは終了した。その後すぐさま、泰徳達は部員たちがいなくなったのを確認してから、歓喜の声をあげた。

「いよっしゃああ!!！」

「やったね！」

「私たち一緒じゃん」

「でも、弦バスは明日もって言ってたぜ」

「私絶対残るもん！」

楽器を囲んで談話する泰徳達の輪の中に、愛が入ってきた。

「まさか、最初から分かってたんじゃないの？」

「何がよ！」

「オーディションの事よ。まあ、今回は認めてあげる」

そう言つて愛は去つていった。

「何よ、あいつ！」

「まあまあ。今回は多めに見てやろうぜ。あいつも上手くなつてたんだし」

「そうよ、美奈。今日だけは許してやってよ」

泰徳と未来の2人からそういわれると、許せざるを得なくなつてしまうのが美奈の性格である。

「はあ……。仕方ない。今回だけよ」

「ああ」

「それで十分」

「じゃ、ジョイントに向けていっちょ、頑張りますか！」

「うん！」

「そうね!!！」

こうして泰徳達の緊張した時間は幕を閉じたのであった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 48 日。

第4楽章 「深刻？ な相談」

その翌日、職員会議のため部活が休みの泰徳は、楽器を持って帰って防音室で練習していた。するとそこへ、紀子がやってきた。

「泰徳、電話よ」

「ああ」

練習を一旦中断させ、受話器を受け取る。泰徳の家の防音室は結構広めな方だが、グランドピアノとアップライトピアノの1台ずつが場所を占領している為、チューバの練習場所として総合的に考えると少し狭い。楽器を置くところに少し戸惑いながらも、何とかぶつけることなく置ける程度の広さである。

「もしもし？」

「あ、泰徳？ 私、美奈」

「ああ、中井か。どうした？」

「今から家に行きたいんだけど、いいかな？」

「いいけど、家知ってるの？」

「今横に未来が居るから平気」

「そうか。じゃ、待ってるぜ」

そういつて泰徳は電話を切った。

「誰からだったの？」

「中井だよ」

「何て？」

「今から家に来るってさ」

「そう。じゃ、お菓子の準備でもしてるね」

「ああ」

そう言つと、泰徳は再び練習を開始した。今練習している曲は、マ―チ『春風』。入学式と、新入生歓迎会の入場で演奏予定の曲だ。これは去年の課題曲の2番で、確か泰徳が入学してきた時もこれを演奏していた。

入部当時の泰徳とは大人びて少しかけ離れてしまったが、それと比例するように音色もサマになりつつある。まだ完璧ではないが、そこその音色を出すようになった。なにしろ伝説の楽団といわれたセントラルウィンド・フィルハーモニーにオフアーされたほどの実力を持つ泰徳である。周りの人から見ても、泰徳の実力はこれだけのものではないと誰もが確信していた。だが、それに気付かないのは泰徳本人だけであつた。

「ふう……。春風のテンポ設定って結構速いんだな」

と楽譜を眺める泰徳だが、その楽譜は既にアナリーゼで真つ黒であつた。アナリーゼとは、原曲を聞いたうえでその曲を自分なりに解析し、分析・組み立てを行う作業である。音楽大学に行くと、この作業は欠かさず講義に入れられるほどの重要なものである。英語の analyze に由来している。

「つていうかここユニゾンだからなあ……。ピッチの問題が」

と言いながら、楽譜に書き込んでいく泰徳。既に書き込まれている上から書くため、今では付箋を使用している。そうこうしている内に、美奈と未来が来た。

「泰徳、美奈ちゃんたち来たわよ」

「ああ。レッスン室に通して」

「分かつたわ」

紀子は言われるがまま、泰徳の入るレッスン室に美奈たちを通す。

「お、泰徳、やってるねえ」

「まあな」

「それにしてもピアノが2台あるって、贅沢じゃない」

「逆に邪魔なんだけどな」

ぶっきらぼうな口調で楽譜に書き込みながら答える泰徳。すると美奈は、椅子に座りながらいきなりこんな話を始めた。

「私ね、オフアーされたの」

「実は私も」

泰徳の手が止まった。美奈だけならともかく、未来までとは。まさ

かとは思うが、聞いてみた。

「そのオファーされたのって何処の楽団だ？」
すると2人は口をそろえて言った。

「セントラルウィンド・フィルハーモニー」

それを聴いた瞬間、泰徳の手からシャーペンが落とされた。実は以前、泰徳がオファーされた時、泰徳自身からの推薦で、翔、由美子、陽乃、慎也の4人を担当楽器は後回しで入団を決定してきたところなのであった。泰徳にとっての美奈たちの入団がどれだけまずいかわくというのは、後々説明していこう。

「ん？ どうしたの、泰徳」

「いや、なんでもない」

「ふーん。あ、でさ、泰徳もオファーされたんでしょ？」

「あ、ああ」

「その時さ、どんな人に誘われた？」

「クソジジイだったよ。意味分かんなかったけど、この人は真つ当な音楽家だと思ったよ。自分でもおかしいくらいにな」

「実はね、私たちもなの」

それを聞いてさらに泰徳の思考が停止する。いくらなんでも偶然が重なりすぎている。そう思った。

「オファーされたの何時だ？」

率直に泰徳が聞くと、率直な答えが即答されて帰ってきた。

「四国大会終わった後よ」

泰徳は倒れそうだった。何を基準にして奏者を決めているのかは分からないが、それより何より、あの4人が一緒に入団するという事がヤバイ。別に入団してもいいのだが、一斉に入ってこられると翔のテンションが計り知れなく高くなってしまう。

「泰徳、どうしたのよ？ さっきから頭抱え込んで」

「いや、何でもないよ」

「本当？」

「ホントだってば」

「怪しい……」

「大丈夫だつて！ ホントに」

そういつて振り切り、泰徳は考え直した。翔はただでさえ好奇心旺盛な人間。空気が読める奴に違いないが、初対面の人、しかも泰徳側の知り合いや身内となると、急に高慢ちきなところが出てしまうのが翔の汚点である。これは泰徳の経験からして確実に言えることであつた。

「ふーん。まあいいや。おめでとう」

泰徳が営業スマイルで言う。

「うん。オフアーされたのは嬉しいんだけどね、問題はこれから先なのよ」

「これから先？」

（良かった。気付かれてないみたいだな）

翔のことに關しては美奈も未来も興味津々。話題を少し与えるだけで話が勝手に膨らんでしまう。

「そうなの。私たち、中学卒業したら高校進学でしょ？ けどプロ口になるとしたら東京の高校とか行かなきゃいけないじゃない」

「それが何か問題なのかよ？」

「大問題よ！ 東京の高校なんて私たち田舎物から見れば雲の上の存在だもん。私はなるべく地元の高校に通いたい。もちろん楽団活動しながらね」

「私も同意見よ」

と、美奈の熱弁に未来が便乗する。確かに2人の意見も分らないではないが、やはり何処か難しいところがある。とここで、泰徳がある提案をした。

「よし、分かつた。俺の知り合いに相談してみよう」

「知り合い？」

「ああ」

「もしかして佐野先輩？」

「違えよ！」

間髪入れずに泰徳がつっこんだ。

「じゃあ誰よ」

「俺と同じ年でセントラルウインドで仕事してるやつだ」

「へええ!!」

と、美奈と未来の2人は興味津々。結局その場で電話する事となった。

「ちょ、近っ！」

泰徳は動悸を抑えながらボタンを押した。

第5楽章 「相談相手はやっぱり旧友」

(ち……近い……)

泰徳は美奈と未来に見つめられながら、ある親友に電話をした。泰徳曰く同じ年のセントラルウインド・フィルハーモニーに所属している人物だという。コール音が響く事2回半。男性の声で返事が返った。

「モシモシ？ 要かなめですが」

「お、毅つよしか？」

「あ？ もしかして泰徳か？」

「ああ。久しぶりだな」

そう、その人物とは言うまでも無く要 毅であつた。

「で、どうしたんだよ？」

電話の向こうで楽器の音が聞こえる。休憩中なのだろうか。

「あ、そうそう。実は俺セントラルウインドにオフアーされてさ」

「マジ？ 良かったじゃん。もしかして、ジジイに誘われた？」

「ああ」

「あ、それうちの指揮者だぜ」

「指揮者？！」

「ああ。ちよつとシモなところはるが、到底会えない指揮者だ。いい腕してるぜ」

泰徳は呆然とした。指揮者がシモいとかはどうでも良かった。ただ、指揮者がオフアーをしにくるというのは珍しい話だ。

普通オフアーというのは、その楽団のコンサートマスターが楽団から手紙を送付されてくるものである。しかし泰徳達の場合は、指揮者が東京から遙か離れた愛媛にまで来てのオフアーである。いくらセントラルウインド・フィルハーモニーが一度解散したからとはいえ、ありそうでない話である。

「でもよ、何で指揮者が直接頼みにきたりするんだ？」

「一回解散しただろ？ 再建を吹っかけてきたのがあの指揮者、つまりあのジジイだ」

「じゃあ、全てはあのジジイの仕業か？」

「ああ。でも、悪い気はしねえぜ」

あの毅がジジイを認めている。ということは、相当の実力の持ち主なのだろうか。泰徳はにわかに期待した。毅は、パリにあるコンセルヴァトワール音楽学院を今年卒業したつわものである。その毅が一見何処にでもいそうなジジイを認めているということは、音楽的な実力はあるはずだ。そう考えた。

「そうか。ところでさあ、お前今、学校どうしてる？」

「学校？」

「ああ」

「通ってるぜ」

「やっぱ転校しないとダメか？」

「いや、そんなことはねえよ」

「どうすんだよ？ じゃあ」

「そのまま在籍つつうか、お前今度から高校生だろ？ 受かった学校の担任に話しつけて、校長に許可書貰えば単位は少なくとも10はもらえるからな。何しろプロになるんだぜ？ そこまで悪くはしねえだろう」

「そうかなあ？」

「そうだって。俺がそうさ」

「お前、何処出身だった？」

「神奈川」

「のどこ？」

「七海」

「じゃあ、翔って知ってるか？」

「あ？ 佐野？ 知ってるよ。七海高校の部長やってるやつだよな。直接聞いたわけじゃないが、あいつらも今度来るそうじゃねえか」

「ああ」

さすがプロ。そっち系の話は情報が早い。何しろ毅はオーケストラ編成のコンサートマスターを務めるだけあって、情報の管理は全て彼に任されてある。

「じゃあ、高校在籍していいんだな」

「ああ。仕事はあるときだけきてくれればいいよ」

「滞在費とかは？」

「スポンサーが全部負担してくれるって」

「そっか。ありがとな」

「ああ。おっと、いけねえ。合奏始まっちゃう。じゃあな！ また後で」

「ああ」

と言って泰徳は電話を切った。

「ええ?! 毅君と話してみたかった!」

「私も!!」

「アホ! 迷惑や」

泰徳はそういうと、駄々を捏ねる未来と美奈にこう付け加えた。

「実はな、毅は俺より硬派なやつだから女と話したがるのを嫌うんだよ。そんな事されたら落ち込むどころか笑っちゃうぜ」

「へえ……。で、なんて言ってた？」

「高校に進学しても別に問題は無いってよ」

「じゃあ交通費とかは？」

「スポンサーが全額負担」

「単位も？」

「ひと仕事に着き単位は10ほど取れるんだと」

「ふうん。じゃあ安心ね」

「そういうことだ」

「じゃ、私たち帰るから」

「バイバイ、泰徳」

「ああ」

と、泰徳と未来、美奈とは別れ、再び練習を開始する泰徳だったが、

どうしても気になる点が1つだけあった。

「俺の担当楽器は後から知らせが来るって言ってたからいいけど、練習場は何処なんだろう？ やっぱホールとかかな」

と、泰徳の期待は膨らむばかりであった。『一本の棒 《ザ・マエストロ》』を読んでいただと分かるが、実際にはあの指揮者が保有する鉄工所の倉庫なのだが。

「ま、いいや。今はやること一杯あるからな。そっちが先だ」

泰徳は練習を再開し、やっと終わった頃には外は真っ暗であった。

「おっと、もうこんな時間か。今日はここで止めとくか」

今日1日で色々あったことからくる疲労感の為か、今日は溜息をつく回数が多かったかもしれない。が、泰徳の期待は時間を過ごすごとに少しずつ膨らんでゆくのだった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 47 日。

第6楽章 「14歳の初恋」

一週間後。この日はジョイントコンサートのメンバーだけが集う日である。他でもなく、ジョイントコンサートで演奏する楽譜を貰うことに始まり、その曲の新曲試奏、そして振り付けの確認など、色々な事をやらなければいけない1日である。が、そんな時に泰徳は、流行風邪にやられたらしかった。

「あ……熱い……」

朝の7:30。いつも未来と一緒に部活に行く為、遅れるわけにはいかない。本当は休みたかったが、今日楽譜を貰わないと貰う機会がなくなってしまうので、どうしても行くと泰徳は親の注意を振り払って登校するのであった。

「どうしたの？ 泰徳。顔真っ赤よ」

「いや、何でもねえ」

「でも……」

「大丈夫だってば！」

時は冬休み明けの1月14日。よく冷える時期とあって風邪もひきやすいのだが、それ以上に恐ろしいのがあかざれ皫と霜焼けである。未来は霜焼けに悩んでいるようだった。

「お前こそ指真っ赤じゃん」

「霜焼けなのよ……。もう痛くて痛くて」

「痒いんじゃないのか？」

「痛いよ。少しでも触ったら膿出てくるし」

「霜焼けって膿出るのか？！」

「わかんないけど、何か黄色いものが出るのよ」

と未来は言う。泰徳の経験上、霜焼けは体に付着した水分を十分にふき取らず乾かした場合に、手や足の指が膨れ上がる減少だと思っていた。しかもその霜焼けを触るだけで膿が出るとは、初耳である。「それにしても寒いなあ……」

「そうねえ」

泰徳と未来の2人は、同時に息を吐いた。その息が白くなって空に消えてゆく。愛媛といえども冬は寒い。関東や北海道ほどではないが、雪さえ降ることもある。

「今年は雪降らないのかな？」

「降らねえだろ。ニユースじゃ段々地球が暖かくなってるって言うぜ」

「そっか。確かに今年は暖かいね」

実際、この年の冬は本当に暖かった。無論、熱が28度を超える泰徳についてはその冬でさえ涼しく感じられただろうが。

「でも大丈夫なの？ 鼻声だし」

「ああ。ちよつと風邪をこじらしたただだよ」

「こじらせたの？ 休めばよかったのに」

「楽譜もらえないじゃん」

「でも、いけないよ。心臓病も患ってるんだから」

「平気だって。発作は早くても6月初旬だ」

「またあ。そうやって冷やかすんだから」

「悪い、悪い。でもま、ホントに大丈夫だから」

「そう？」

「ああ」

「ならいいけど」

と、学校に到着する2人。車のフロントガラスに霜が降りている。所々雫になって跡として残っていたり、黒光りの車に真つ白い霜がびっしりと隙間無く降りていたり、この微妙なコントラストは冬でしかみることの出来ない風情である。

「うっす」

「おはよ」

「あ、未来と泰徳。おはよー」

珍しく美奈が泰徳達より早めに着ている。ちなみに美奈は、いつも遅刻ギリギリで部活に来る。

「どしたの？　今日は早いね」

「ちよつと早起しちやつた」

「へえ。美奈にしては珍しいじゃねえか」

「まあね」

「それにしても熱いなあ」

「え？　窓全開にしてんのに？」

「ああ。火照つて仕方ねえんだ」

「それつてもしかして……」

美奈が顔を真っ赤にした鼻声の泰徳に大接近し、おでこに手をやって自分の体温と比べた。

「熱っ！　こんなに熱があるのに部活来たの？」

「楽譜もらえなくなるじゃん」

「バカでしょ、あんた。今日ぐらい休んだって怒られはしないわよ」

「そうよ。だって今日は選抜メンバーしか集まらないんだから」

「そんな事言つたつて、俺は―――っ！」

「……………？　どうしたの？」

美奈が問いかけると、泰徳はセカンドバッグを投げ捨て、トイレに全力疾走した。

「ゲホッ、ゲホゲホ……！」

「ちよつと！　泰徳、大丈夫？」

「ああ。ちよつと吐き気がしただけさ」

ハアハア言いながら答える泰徳に、流石の美奈も対処せざるを得なくなつてしまった。

「未来！　先生に頼んで早退させるのよ」

「馬鹿！　そんなことしたら俺……」

「馬鹿はあんたの方でしょうが！　ゆっくり体休めないと、ただでさえ心臓弱いのにこれ以上悪くなっちゃうじゃない！」

上履きを履いたまま男子トイレにたたずむ泰徳と美奈。それは傍から見れば異様な光景だが、2人は無意識にこうなっていた。特に美奈は必死だつた為に、自分が何をしているのかまるで分かつていな

いようだった。

「今先生に言ってきたから」

未来が戻ってきた。

「ありがとう。どう？ 泰徳。落ち着いた？」

「……少しは」

「歩ける？」

「ああ。すまねえ」

「何言ってるの。困った時はお互い様よ。じゃ、未来。私泰徳を下まで送っていくから」

「分かった。準備しとくね」

「うん。お願い」

そう言つて泰徳を下へ送る美奈。階段を下りながら、美奈は泰徳にこう話した。

「あのね、泰徳。私にお姉ちゃんがいるんだけど、そのお姉ちゃんも心臓病があるの。分かんないけど、心壁に穴が開いてるんだって。だから今入院中なんだけどね」

「お見舞いに行ってるのか？」

「勿論よ。頼りないけど、やっぱりいないと寂しいわ。改めて実感した。やっぱり家族だったんだなあって」

「……………」

泰徳は何も答えることが出来ない。自分も心臓病を患っている身。美奈の姉の事は十分察するが、家族の存在の重大性までは考えた事が無かった。無論、泰徳が周りからどう思われているかも。

「泰徳って凄く硬派で女性に興味が無いじゃない。だから知らない間に人を傷つけたりしちゃうのは私も分かるわ。私がそうだから。でも、気にする事はないんじゃない？」

「……………」

核心を疲れた。そう思った。美奈が言うとおり、泰徳は硬派で、女性には一切興味を持たず、『恋愛』というものをしたことが無かった。その為か、口調がきつく、他人に配慮は出来るが傷ついた人の

立場になったことが無かった。

「だから私心配なのよ。心臓病の悪化も、泰徳が変わってくれるかってことも。私は変わってくれるって信じてるけど、それは泰徳自身ね」

1階に着くと、紀子が既に車で迎えに来ていた。

「じゃ、体ゆっくり休めてね」

「ああ。ありがとうな」

「うん」

そう言って泰徳は紀子に送られていった。この時、美奈には初恋の芽が吹いていた。泰徳がどう感じたかは別にして、今美奈の気持ちの表し方が変わりそうであることを、上から密かにのぞいていた未来は察知していた。

ジョイントコンサート本番まで、あと 40 日。

第6楽章 「14歳の初恋」 (後書き)

なるべく前話と関連付けて執筆をしたつもりなのですが、脈絡がばらばらになってしまいました(汗)

次はこんな事が無いようにもうちょっと推敲したいと思います。なので、今回に限り『文章構成が分かりにくい』という評価及び感想の返信は致しかねます事をご了承ください。

第7楽章 「選抜チーム結成式 前編」

翌日の放課後、泰徳は元気な顔を見せた。

「おっす」

「あ、泰徳。もう大丈夫なの？」

「ああ。完璧さ」

泰徳は胸を張った。泰徳の言ったとおり、完全に風邪は治ったよう
だ。

「あ、そうそう。これ楽譜ね」

「すまねえ。結構やるんだな」

「当たり前じゃない。ジョイントコンサートよ」

「だよな。ところで中井は？」

「委員会で少し遅れるって」

「そうか。で、どんな曲をやるんだ？」

泰徳はマジマジと、暑さ1cmはあろうかと言う楽譜の山を捲った。
そこから読み取れた曲目は、以下の通りである。

・吹奏楽の為の『風之舞』

・をどり唄

・ヘンリーマンシーニメドレー

・アルメニアダンス Part 1

・野球拳ファンタジー

「へえ、アルメニアンか。通りでこんなに楽譜が多いわけだ」

言わずと知れたアルメニアダンスPart 1は、楽譜が膨大な量
存在する。テューバパートを数えただけでも、4枚ある。

「で、風之舞とをどり唄、それにヘンリーマンシーニ？ 聴きなれ
ない曲だな」

「そりゃそうよ。メドレーなんだから」

「何がメドレーなんだよ？」

「えっと、確かピンクパンサーとか酒とバラの日々とか」

「……聞いたことねえなあ」

「私もよ。あ、そうそう。17:00からメンバーの合同合奏があるって」

「え?! それを早く言えよ! あと30分もないじゃないか!」

「仕方ないじゃない。泰徳が楽譜を見てたんだから」

「そんな理由になんねえよ!!」

いつもと変わらない慌しい光景。美並と香織は、この光景を遠くから見ていた。

「とうとう追い抜かれちゃったね」

「寂しいような、嬉しいような……」

「でも、成長したね。泰徳君と未来」

「ホント。それは確信できるわね」

「あ、そう言えば美奈ちゃんどうするの? メンバーでしょ」

「あ、ホント。どうすんだろ……」

にわかに不安を抱く美並と香織の2人。しかし泰徳と未来はそんなものには目も触れず、慌しく合奏の準備に取り掛かっているのだった。

「譜面台は?」

「ある! 譜面は向こうで入れるから」

「当たり前でしょ! もう高校の先輩とかきちゃってるし!」

「ええい! 当たって砕けろお!!」

泰徳と未来は、急いで第2音楽室に足を運んだ。

「相変わらず慌しい2人」

「でもそこが良いんじゃない?」

美並と香織も、後輩の事はよく理解しているつもりだ。入部当初から変わっていないところというのは、誰でもあるものである。

「未来ちゃんなんか、最初からそうだったでしょ」

「確かに。未来なんか金管バンドにいたときからだっただよ」

「泰徳君はどうかなあ……」

「私から見たら大分変わったわよ」

「どうして？」

「だって泰徳君、あんなシニカルな性格してなかったでしょ」

「……意識したことない……」

香織は苦笑いしながら答えた。実際、泰徳のことは敏に任せっきりで意識的に見たことなど1回も無い。

「だからあんたは天然って言われるのよ」

「そんな事言ったって！」

「じゃあ聞くけど、泰徳君って何時から『俺』って言うようになった？」

「う……。それは――」

「分かんないんでしょう」

美並が意地悪そうな口調で香織を挑発する。

「分かんないわよ!!」

香織が諦め半分に美並に食って掛かる。しかし肝が据わっている美並は微動たりともしなかった。

「あれ、諦めちゃうんだ。まあ、正直でよろしい。実を言うと、私も分かんない」

「なんで美並が分からない事私に聞くのよ!!」

「だって香織は泰徳君の先輩じゃない。私が香織より泰徳君のこと知ってたら逆に変人だと思わない？」

「それは確かに思うけど……」

「だったら反抗しない!!」

「はい……」

香織はこういう口激戦になると弱い。堅実で他人に気を配るが故に知らない間に相手を傷つけてしまうかも知れないと不安になるからである。しかしそれは私の立場からすると、最も賢い人間の接し方ではなかるうかとも思う。

「美並はそうやってすぐに人の弱みに付け込むんだから……」

「漬け込んでなんか無いわよ。ただ私が言いたいのは、もつと香織の後輩である泰徳君のことを分かってあげてってこと」

美並に言われるまで気付かなかったが、確かに泰徳の事は考えてあげられてなかったのかもしれない。そう思った。南の言っていることは最もだった。

「なんか…ごめん……」

「ううん。分かればいいの」

読まれていた！ そう思うと無性に腹が立ってくるが、今回ばかりは見逃さなければ、自分の非を認められない。香織は一生懸命我慢した。

「ねえねえ、合奏聞きに行こう！ 気になる」

「名案ね！！」

そろそろ始まるのではないかと思われる選抜チームの合奏を聴くことになった美並と香織。しかし香織は、この行為に対する美並の気持ちが十分に理解できていなかった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 39 日と 7 時間 30 分。

第8楽章 「選抜チーム結成式 中編」

同日17:00。選抜メンバーによる、ジョイントコンサートの合奏が今始まるうとしていた。練習場である第2音楽室には、すでに北佐屋中学校と齋木高等学校の選抜メンバーが顔を揃えていた。

「結構いるなあ」

「うん。緊張してきちゃった、私」

「先輩がこの中の3割はいるんだから当然でしょ」

未来は手汗を拭いながら答えた。泰徳や美奈も、定位置に着く。この緊張感は半端ではない。いくら初顔合わせだからといっても、右が見知らぬ部員、左が高校生というのは、寿命が5年は縮まりそうである。そんな泰徳の横から、

「ねえ、君常套中学校の子？」

と、高校生らしき女子が話しかけてきた。破裂しそうな心臓を押さえ、

「あ、は…はい……」

と答える泰徳。

「何年生？」

「中1です……」

「え、まだ1年生なの?! それで選抜入るって、すごいねえ! 私でも必死だったのに」

私でも、ということとは、自分の上手さ、あるいは下手さ加減を把握しているのだろうか。泰徳はそう思いつつ、話を進めることにした。

「齋木高校の人ですか？」

「ううん、私は北佐屋」

「北佐屋って言ったら、四国大会出てましたよね」

「うん。結構大変だった。慣れてても、あの演奏前の緊張感は慣れないわね」

「同感です」

2人はくすつと笑った。

「はい、起立!!」

立石先生の豪快な号令により、場が一瞬として厳かな雰囲気になる。こっぴどいのは、先生が本気の時にだけ分かる特別な雰囲気である。ではその他の場合は違うのかというと、そうではない。立石先生は『穏やかに、密度の濃い練習』を目標としている為、いくら優しく接しようと、部員たちがその課題をこなしていなければ本気で怒る。穏やかかつ、内容の詰まった合奏というのが、立石先生の理想なのである。

「今日から合同合奏に出るチームメンバーは、見ての通りだ。指揮の担当はもう決まったので、その先生の指示に従って動くように」

「はい!」

「それから、同じパートのやつとはすぐ仲良くなつとけ。困った時にもつと困る!」

「はい!」

泰徳は、これはもう大丈夫だと思った。合奏前に北佐屋中の人とあれだけ話をしていれば、少しは溶け込めただろうという感じがしたからである。

さて、選抜チームの編成だが、以下の通りだ。

- クラリネット 12人
- フルート 5人
- ピッコロ 2人
- オーボエ 2人
- アルトサックス 3人
- テナーサックス 3人
- バリトンサックス 3人
- ファゴット 2人
- トランペット 6人

- トロンボーン 6人
- ホルン 6人
- ユーフォニアム 3人
- チューバ 3人
- コントラバス 3人（合奏終了後、再オーディション）

以上、合計64人がメンバーとなる。尚、コントラバスに関しては、この日の合奏が終了後2本に絞られるので、実際は63人がメンバーとなる。

「それでは、アップ代わりにをどり唄から」

「はい！」

をどり唄。詳しくは『ブラス魂』のコラム【楽曲まとめ in 2005】を参照していただきたいが、ともかく日本風の、和風の曲である事だけは頭に入れていただきたい。立石先生は静かに深呼吸し、タクトを下ろした。

ミュートトランペットの静かな始まりから、トウツティの厚い響きに広がってゆく。トウツティは全員で演奏するところという意味を表し、『Tutti』と表記される。クラリネットの温厚な響きによってメロディーが導かれ、スネアドラムの刻みとともに、和風の音楽が奏でられる。これを外で聞いていた美並たちは、圧倒された。

「やつぱり凄いね……」

「うん。私たちと比べ物にならない」

暫くたって、中低音のメロディーに移り変わる。ここで泰徳をはじめ、常套中学校の部員たちは鳥肌が立った。低音独特の重厚な響きに加え、ユーフォニアムやトロンボーンの勇ましい響きが絶妙にマッチしている。それにより、なんとも言えない大地を震わすサウンドが、質素な第2音楽室を豪華に彩った。

「聞いた、聞いた？ 今の低音！ 凄くない？」

「何か、私たちよりずっと先を言ってる感じがするね……」

中間部。ここは立石先生曰く、『子守唄のイメージで』という指摘があつた。最初にピッコロのソロがあるが、これを担当したのは安^{やす}田^{ただ}佳代^{かよ}であつた。透き通るような音色で、次に控えるホルンソロを導く。

「佳代ちゃん、上手くなつたね」

「下手したら白石先輩より上手いかもね」

「ああ、伝説の白石先輩？」

「うん。伝説の」

問題のホルンソロ。ホルンはギネスブックに載るだけあつて、音程の操作が難しい。だが、斎木高校の生徒はそれを諸共せず吹ききつた。そして再びトゥッティ。再現部に差し掛かる直前に、トランペットのタンギングが始まりを告げる。サクスのタツカリズムに乗りながら、メロディーの範囲を広げていく。

「うわあ。私ここ無理だつたんだよね」

「どうして？」

「跳躍進行が多かつたから」

「またそんな単純な理由で……」

「単純とは何よ!!」

「ゴメン! ほら、もうすぐ終わっちゃうよ」

最後に中低音のメロディー。立石先生曰くどつしりと、でも重くなくという非常に難しい注文が入っていた。それをどう演奏するかと今日まで研究していた泰徳は、とりあえずテヌート気味に演奏することに決定した。実際楽譜にはこのような指示は書かれていないが、アナリーゼの段階でここまでする事で、初めて本物の演奏になると立石先生は言っていた。その甲斐あつて、難なく吹きこなす事が出来た。

「すごいをどり唄だつたね……」

「そうね。私たちも練習しましょうか」

「そうだね」

香織と美並は、持ち場へ戻った。

「うん。初めてにしてはいい演奏だった。よし、30分休憩！」
立石先生はそう告げ、第2音楽室を去った。合奏後半は、19:30からだ。

ジョイントコンサート本番まで、あと 39 日と 5 時間。

第9楽章 「選抜チーム結成式 休憩中」

前半の合奏が終わり、休憩に差し掛かった選抜メンバー。泰徳達 Bass パートは、選抜全9人で話をしていた。

「まず自己紹介からかな？」

「当たり前じゃない！ じゃないと何すんのよ」

「だからさっさと自己紹介しろって！！」

コソコソと揉め合う泰徳、未来、美奈を尻目に、他のメンバーが自己紹介を始めた。

「私はユーフォ担当、かんばら 斎木高校の神原 ひろみ 浩美です。よろしく」

会釈をされ、泰徳達も同様に返す。

「同じく斎木高校、弦バス担当の おがさわら 小笠原 みさ 美佐です」

「同じく斎木高校、チューバ担当の にしやま 西山 はるか 晴香です」

名前と顔を覚えるのに必死な泰徳達。その様子見て、斎木高校の先輩たちはくすくすと笑いあった。

「北佐屋中、ユーフォ担当の きたはら 北原 めぐみ めぐみです」

「同じく北佐屋中、チューバ担当の きくち 菊池 たくや 拓也です」

「同じく北佐屋中、弦バス担当の おかた 岡田 さゆり 早百合です」

北佐屋中は、Bass パートのメンバー3人中2人が男子部員。比率が女子より多いようであった。そういえば四国大会の時も、舞台に乗っていたのは男子のほうが多かったかもしれないと泰徳は思っていた。

「じゃあ、今度は私たちね」

上がり症の美奈は、大きく深呼吸して落ち着いた様子で自己紹介した。

「常套中学校、弦バス担当の中井 美奈です」

「同じく常套中、ユーフォ担当の谷 未来です」

「同じく常套中、チューバ担当の竹林 泰徳です」

自己紹介も終わり打ち解けたところで、晴香が話題を振ってきた。

「ねえ、今年のコンクールどうだった？」

「あまり……ねえ？」

「うん……」

「え？ どうして？」

「そんなに意識して演奏できるほど成長してませんでしたし、全国行っても実感がわかなくて……」

「ああ、分かる分かる。最初はそんなだよねえ」

妙に盛り上がっている美奈と未来、美佐、そして晴香。このテンションに付いて行けない泰徳を含むほかのメンバーは、他愛も無い世間話で盛り上がっていた。

「ユーフォって難しいんですか？」

「どうだろう……。意識したこと無いなあ」

「でもアンブツシユアとかきついんじゃないやありません？」

「ああ、それは言えるかも」

浩美、拓也、めぐみ、早百合、泰徳の4人は、向こうとはまったく別の話題であった。

「逆にチューバとかどうなの？」

問いかけたのはめぐみだった。

「そりゃあもう、楽器が大きい事をいい事に、寝るのが一番です！
そう答えるのは泰徳。

「僕も大体そうですよ。特にピストンなんかは密集してますからね」
「たまに弦バスも立ったまま寝てますよね。中井がそうですから」

「そうそう！ あれ椅子があると気持ちよくて寝そうになるときある」

早百合曰く、特にコンクール合奏での自由曲の練習は、暇すぎて幾度となく睡魔が襲ってくるのだという。

「分かります。でもそれが低音の宿命なんですよ……」

泰徳は悲しそうに楽器を弄りながらぼやいた。

「でも、逆に利点もあるんじゃないですか？」

拓也はかつて、入部当時に自分からチューバをやりたいと名乗り出

た、数少ない男子部員の中の1人であった。

「利点？」

「ええ。例えば、あの大地を支える重厚な響きとかは僕好きですけどねえ」

「確かに。和音がハモった時は鳥肌立つよね」

大地を支える響き。これは立石先生に昔からよく言われていたことだった。しかし泰徳自身、この大地を支える響きのイメージが分からず、ただひたすらに、先輩に言われるがまま我武者羅に練習してきた為、そういう精神的な、もしくはフィーリング的要素は、この今の段階での泰徳にはインプットされていなかった。

「皆、演奏する時はどんな事に気をつけてるんですか？」

「そりゃ、まず音量でしょ」

「出るようになったら音程だよね」

「私チューバのことは分からないけど、とりあえず周りに合わせてみるとか」

「だって縁の下の力持ちですからね」

「ふうん……」

皆色々な事を考えながら練習しているんだ。泰徳は改めてそう考えた。今思えば、自分自身何も考えずに吹いていたのかもしれない。

もう2年生になるのにと、どこか未練がましいところが感じられた。

「考えながら吹いたら、上手くなりますかね？」

「さあ？ それは君次第じゃないですか？」

「私もそう思うよ」

「でも、考えられないんです」

「まずは意識しすぎないことですよ」

「意識しすぎない？」

「ええ。人は無駄に力が入っていたら絶対に本領は発揮できませんからね。リラックスして、周りに合わせながら吹くことです」

「これは全部の楽器に言えるよね」

「そうかもですね」

“考えながら吹く”ということを意識しすぎないようにリラックスして演奏するという事は、この時期の泰徳にとっては相当難しい注文だったに違いない。しかし、全国常連、ましてや選抜に選ばれたメンバーが言う事には間違いは無いはずである。泰徳はそう考え、こう言った。

「僕にも出来ますかね？」

「出来ると思いますよ。中1で選抜に来てるんですから」

「竹林君意外は、全員高2か中3よ」

「え……？」

思考回路が一瞬停止した。

「どういうことですか？」

「だから、中1で、バスパートで選抜にいるのは、中井さんと、谷さんと、竹林君だけだったこと」

「そんなバカな事無いでしょう」

「でも実際そうですよ」

「だから、竹林君にこの“難しい注文”は今の實力でも十分に果たせる可能性があるって子とよ」

泰徳は、なんだか励まされているように思った。

気が付けばすでに30分を過ぎていた。メンバーたちは急いで定位置に戻るのだった。

「はい、合奏再開！」

立石先生の気持ち良い声が、第2音楽室に通った。

ジョイントコンサート本番まで、あと 39 日と 4 時間 30 分。

第10楽章 「選抜チーム結団式 後編」

「アルメニアン」

「はい！」

合奏後半、アルメニアンダンスの指揮をするのは、齋木高等学校吹奏楽部顧問の、益栄^{ますえ} 伸吾^{しんご}だ。

「アルメニアンダンスは金管群がきついけど、頑張ってくれ」

「はい！」

益栄先生の独特な指揮法。それは打点が無く、いかにも『自由に演奏しろ！』としか受け取り用の無い指揮だった。しかしこの方法は部員たちの無駄な力を抜けさせ、のびのびと演奏する事が出来る。そのため、息苦しい演奏にならず齋木高校の定期演奏会はいつも評判が良かった。

アルメニアンダンスPart1は、吹奏楽経験者なら知る人ぞ知る、吹奏楽界の名曲中の名曲である。アメリカの作曲家：アルフレッド・リードがこれを作曲し、アルメニアンダンスは本来、今回演奏するPart1と、農民の踊り、結婚の舞曲、ロリの歌の全4部分からなる。Part1はもともと1つの楽章であったが、その内容が多すぎるために単独で発表され、農民の踊りと結婚の舞曲、ロリの歌の3楽章をあわせてPart2として発表した。

今回泰徳達が演奏するPart1には、杏の木、ヤマウズラの歌、ホイ私^{ホイミ}のナザン、アラギアス山、Go Goの5つが収録されている。これらはアルメニア地方の民謡や童謡をもとに作られたものといわれ、特に最終楽章のGo Goは200小節以上にも及ぶ大フイナーレで終わりを告げる。今回はその描写ゆえ、文章が無駄に長くなる事を先にお許しいただきたい。

益栄先生のタクトが振られる。その堂々とした姿の後ろから、直

管楽器の勇ましいファンファーレが『杏の木』の始まりを告げる。続きホルンの高音域な対旋律。これを俗に“裏メロディー”や“裏メロ”などというが、それも対して変わらない意味である。むしろそっちの方が、対旋律を引き立たせたい時に役立つ表現だと私は思う。実はここ、低音域が苦しいところである。スラーが続く為にブレスが取りにくく、音域も低いので酸欠状態になることも少なくない。イングリッシュホルンがソロを奏でているときだけが、唯一の救いだ。しかしそれも束の間、再び盛り上がって直管楽器のファンファーレ。ホルンの勇ましい対旋律もなくなり、オーボエの哀愁溢れるソロで、『ヤマウズラの歌』へと移り変わる。

ここはヤマウズラをイメージにかたどり、フルートやピッコロなどの木管楽器が効率よく配置されている。クラリネットの柔らかなメロディーを受け継ぐフルート、その裏で小さくなるピッコロが、なんとも可愛らしい。ここでちょっと場面転換してフリーユーゲルホルンのソロが入るわけだが、このソロはなんと健吾だった。そんなことに気をとられながらも、オーボエとユーフォのソロを担当した部員は、それを見事にこなした。転調し、低音がメロディーの場所が変わる。常套中学校のBassパートは、メロディーが出てくると『これでもか!』と言わんばかりにキツク演奏してしまう事が多いが、この日は曲想を重視し、そんなことは無かった。そしていよいよ最難関、『ホイ、私のナザン』に変わる。

3楽章『ホイ、私のナザン』は、8分の5拍子と8分の6拍子が延々と続く最難関である。リズムの取り方も難しく、指揮法も困難を極めると立石先生は言っていたが、益栄先生はそんなことなど苦にもせず、ここの楽章を振り切った。サクスのソロに続き、オーボエがメロディーを奏でる。その裏で刻みを吹いているのが低音パートなのだが、これがまた良い味を出すのである。良い感じに全体がまとまり、やっと安心できると思えば、次は『アラギアス山』で

ある。

4楽章『アラギアス山』。コラル風の曲調で、ユーフォニアムの対旋律が異常なほどに美しいところである。メロディーがころころと移り変わり難しいところではあるが、吹きこなせるとそれなりにのびのびと吹けるところである。チューバパートもユーフォにつられてベースを奏でるのだが、スラーのかけ方によって曲想が全く変わってしまう。チューバ奏者にとって最もプレッシャーのかかるところでもあった。上手くブレスを交互に取り、最終楽章『Go』へとつなげる。

最終楽章『Go Go』。テンポ208の速いテンポで進むのだが、これが約200小節もの間キープされる。最初にメロディーを演奏するのは木管群。シロフォンが所々景気付けに和音を奏で、そして時々ユニゾンで中低音がズンズンと刻みを加える。そして何時しか、シロフォンとユーフォの掛け合いのメロディーになり、それが2回繰り返されると今度は中低音の出番である。直管楽器の短いファンファーレに先導されて、せわしいメロディーを一気に駆け上がり、下降する。フィンがリングも大変なのだが、それ以上に肺の方が大変であった。泰徳がふと木管楽器のほうを見ると、驚くほどの速さで指が動いている。それだけかと思えば、ギネスに乗るほど難しいホルンが木管と同じ動きをしている。そしてトランペットにつられ後半部分の演奏。ここまでで約120小節分ある。トランペットがメロディーを奏で、それに段々と木管楽器が加わり、再び中低音のせわしいメロディー。そしてフィナーレは直管楽器のハイトーンと、中低音の忙しい下降音形で終わりを告げた。

「ふう。皆お疲れ」

益栄先生も汗びっしりだ。

「明日も合同練習があるが、頑張っていこう！」

「はい！」

「今日の合奏はここまで」

「起立！ 気をつけ！」 礼！

「ありがとうございましたあゝ」

ここまでの合奏で約4時間。半日練習に慣れている常套中学校の吹奏楽部員には考えられない合奏の量であった。

「いやあ、疲れた疲れた」

「ホントねえ」

「アタシ手汗かいちゃった」

「かきすぎ!!」

口々に喋るB a s sの部員たち。しかし椅子に座っている泰徳がいた。

「泰徳、大丈夫？」

美奈が問いかけても反応しない。

「ちよつと泰徳い」

と未来が泰徳のそばに行ってみると、泰徳は放心状態だった。

「泰徳、大丈夫？」

「し…死ぬ……」

肩を動かしハアハア言う泰徳。

「余裕ぶっこいて吹いてるのかと思ったら、そうじゃなかったのね」

「私もそう思った。ブレスの時超普通な顔してたから」

斎木高校と北佐屋中学校の部員は、先生に連れられて先に帰校した。

「まあいいんじゃない？ チューバは大変なんだし」

「うん。前楽譜見せてもらったけど、休みがなかった」

「じゃ、落ち着いたら帰っておいで」

「ああ。すまねえ」

「何の何の」

そうは言うが、泰徳が復活したのはそれから15分後の事であった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 38 日。

コラム No.1 「選抜メンバー紹介 指揮者・木管編」

今年発足した『ジョイントコンサート選抜バンド』。メンバーは現在64人ですが、この後に行われるコントラバスオーデションで1人落ち、63人となります。編成的には少し大きいですが、このコラムではそのジョイントコンサート選抜バンドのメンバーを紹介します。

【Conductor】 コンダクター

○立石 たていし 和則 かずのり

常套中学校吹奏楽部顧問、音楽科教諭。選抜バンドの団長を務め、大まかな指示はこの人が出す。それに従い、他の2人の指揮者は部員たちを動かす。

○益栄 ますえ 伸吾 しんご

齋木高等学校吹奏楽部顧問、音楽科教諭。主に木管セクションを動かす。オーボエ専攻で、独特な指揮法が人気を集めつつある。

○大西 おおにし 智彦 ともひこ

北佐屋中学校吹奏楽部顧問、音楽科教諭。主に金管セクションを取りまとめる。チューバ専攻で、実は泰徳の遠い親戚に当たる人物。

【Piccolo】 ピッコロ

○安田 やすだ 佳代 かよ

常套中学校吹奏楽部員。フルートとの持ち替えも行うが、今回は

大部分ピッコロで演奏する。ソロも担当。

○高須賀 美保 たかすが みほ

齋木高校吹奏楽部員2年生。初心者のようなだが、技術力や表現力の両点から見て並外れの能力を持つ。

【Flute】 フルート

○杉田 満 すぎた みちる

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。主にバード形の曲を得意とし、息の長さではダントツトップを飾る長さを誇る。逆にマーチ系やノリの良い曲は苦手。

○久保 彩 くぼ あや

常套中学校吹奏楽部員。フルートパートで唯一のMY楽器保持者。立石先生直々の指導の下、ホームレッスンに通っている。

○佐竹 千佳 さたけ ちか

齋木高等学校吹奏楽部員2年生。超絶技巧による指の動きはもはや神業。中学校時代、吹奏楽部を主席で引退している。

○東雲 はるか しのめ

齋木高等学校吹奏楽部員3年生。しっかりした性格と的確な指示により、周りからは『姉さん』と呼ばれる。姉貴タイプの少し怖がり屋。

○松本 さゆり まつもと

北佐屋中学校3年生。満と肩を並べるほどの実力の持ち主で、愛媛の吹奏楽部員でこの学生を知らないものはいないほど超有名。コ

ンクールでも数々の賞を受賞している。

クラリネット
【Clarinet】

○津野 徹 つの とおる

斎木高等学校3年生。実は去年から入部した超初心者。以前はチューバを吹いていたといい、その為か肺活量はずば抜けたものがある。

○新良 薪 にいりょう まき

常套中学校吹奏楽部員。E クラリネットを担当し、かなりの木管楽器マニア。特に自分の担当するクラリネットについては辞書より詳しいほど。

○松永 美崎 まつなが みさき

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。おっとりした性格で、殆ど他人とは目をあわさない。しかし合奏となると、指揮者を凝視して演奏する。

○前田 蓮 まえだ れん

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。整った髪型と顔立ちの良いルックスで女子部員から大人気。しかし中身は泰徳と同じく硬派で、付き合ったことが一度も無い。

○四之宮 香奈 しのみや かな

常套中学校吹奏楽部員。かなり華奢な性格で、気持ちの浮き沈みが途轍もなく激しい。『きまぐれの香奈』という異名で通っている。

○斉藤 〓 R o o s e b a l k 〓 美穂子 さいとう りーずベルク みほこ

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。一昨年転校してきた、日本人とカナダ人のハーフ。茶髪で色白だが、気性が少しばかり荒い。

○有井 雅彦
ありい まさひこ

斎木高等学校2年生。かなりの秀才で、成績は常に単独トップ。楽器の実力もかなりのもので、みんなから一目置かれている存在。

○原畑 理恵
はらはた りえ

常套中学校吹奏楽部員。選抜メンバーとして選ばれた、数少ない1年生部員の1人（まだ物語り上3学期の為）。

○飛永 悦子
とびなが えつこ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。小学校の頃からクラリネットを始め、今ではそこまでの努力が開花した状態にある。努力という言葉が嫌い。

○高橋 美紀
たかはし みき

斎木高等学校1年生。高校からクラリネットを始め、中学生時代はオーボエを担当していた。その為かフィンがリングテクニクは超一流である。

○長野 尚輝
ながの なおき

常套中学校吹奏楽部員。持ち前ののほほんキャラとゆるゆるキャラで、密かに人気を集めつつある。今回に限り1st限定。

○武弘 晴美
たけひろ はるみ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。男気の強い女子で、一人称を『俺』と読んでいる。高校1年生の兄がおり、サッカー部所属。

オーボエ
【Oboe】

○新橋 早苗 しんばし さなえ

齋木高等学校吹奏楽部3年生。ソロコンクールにおいて中学1年の頃から5年連続第1位を獲得。今年は残念ながら出場ならず。

○高田 美奈子 たかだ みなこ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。根っからの文系で、理科や数学が大の苦手。その代わり実技4教科と国語、英語はずば抜けて成績が良い。

ファゴット / バスーン
【Fagotto / Bassoon】

○鐘崎 隆 かねざき たかし

齋木高等学校2年生。コントラファゴットの持ち替えも担当し、かなりの力自慢。Lサイズのティンパニを1人で運ぶ事が出来る。かなりの長身。

○崎山 詩織 さきやま しおり

大手食品会社の社長嬢令。割と話が分かり、嫌味はそんなに言わない。金持ちである事は事実だが、質素な生活を送っている。

アルト サクソフォーン
【Alto Saxophone】

○上野 斎 うえの いつき

常套中学校吹奏楽部員。ソプラノサクソと持ち替えを行い、ソ口を担当する。楽器の手入れについては妥協しない。

○佐藤 和昌 さとつ かずまさ

齋木高等学校吹奏楽部員3年生。県内でも有名なサックス奏者で、あちこち飛び回って演奏会を行ったりしている。それゆえ、実力は県内一を誇る。

○安藤 麻美 あんどう まみ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。繊細な音と高度なテクニクで、どんな人の耳も虜にする。キラーサウンドの持ち主。

【T enor Saxophone】 テナー サクソフォーン

○河野 栞 こうの しおり

常套中学校吹奏楽部員。両親から愛とスパルタの教育を受けて育った、精神的に鋼の体を猛女子部員。肝の据わりっぷりには誰もが驚かされる。

○神崎 稔 かんざき みのる

齋木高等学校吹奏楽部員2年生。対旋律の分析を得意とし、即興作曲をする事が出来る。譜面に書かれた指示は確実に守る正統派。

○西岡 弓子 にしおか ゆみこ

北佐屋中学校吹奏楽部2年生。幅広い音域を武器としてコンクールに多数出場。その受賞数は数知れず、サックス業界の新星。

【B aritone Saxophone】 バリトン サクソフォーン

○福田 倫子 ふくだ のりこ

常套中学校吹奏楽部員。選抜メンバーで選ばれた数少ない1年生

で、マーチを吹かせれば超逸品と立石先生からも認められたほど。
逆にバラードは苦手。

○ 庄司 しょうじ 沙希 さき

齋木高等学校吹奏楽部員3年生。ハードロックが大好きで、今回
ソロは彼女が受け持つ。たまにリードミスをするが気にしない。

なかじょう かなえ
○ 中城 なかじょう 鼎 かなえ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。去年転校し、愛媛にやってきた。
バリトンサクスは初心だというが、センスがよく1ヶ月で選抜メ
ンバーに選ばれた。

選抜メンバー指揮者・木管編、ここで終了です。
金管編はまた後日更新予定です。余りにも量が多すぎたので、なる
べく早めに更新しようと思います。

コラム No.2 「選抜メンバー紹介 管弦打楽器編」

前回に引き続き、今回は管、弦、打楽器の選抜メンバーを紹介します。尚、コントラバスと打楽器パーカッションにおいては後にオーディションが再び入ってきますが、メンバーになる予定の人のみ載せておきます。あくまで予定なので、変わってしまうかもしれません。

【Trumpet トランペット】

○石塚 零 いしづか みお

齋木高等学校吹奏楽部員3年生。トランペットに関しては、彼女の右に出るものはいないほどの実力の持ち主。ハイトーンを得意とする。

○内田 政幸 うちだ まさゆき

齋木高等学校吹奏楽部員2年生。今年入部したばかりの新米。しかし父親が有名交響楽団のトランペット首席奏者を勤めている為、今のところ苦労は無いようだ。

○久保 恵理子 くぼ えりこ

常套中学校吹奏楽部。今回同時出場の健吾の先輩に当たり、技術面に関しては文句なし。歌が苦手なためか、オーケストレーションをつけるのが苦手。

○白石 健吾 しらいし けんご

常套中学校吹奏楽部。通称チョコワ。由来は分かっているが、小学校の時から呼び名がチョコワである。数少ない1年生の1人。

○井伊元 梨花 いもと りか

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。上がり症で、緊張するとすぐに顔が真っ赤になる。その為みんなからは『りんごちゃん』と呼ばれている。

○和田 和巳 わだ かずみ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。母親が小学校教師で、音大卒。母親がクラリネット専攻だが、どうしてもという事でトランペットに編入。根っからの初心者だ。

【Trombone】 トロンボーン

○倅 龍之介 さち りゅうのすけ

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。グリッサンドを得意とし、絶対音感を持つ。チューナーを使わずチューニングをすることも可能。

○卯月 美佳 うづき みか

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。少しエゴイストかつナルシストなところあり。分かりやすく言くと愛タイプだが、楽器を吹かせる谁也文句は言えない。

○新原 美穂 にいはら みほ

常套中学校吹奏楽部員。勇ましい音色と鋭い突き抜けるような息のスピードを武器とする。ロングトーンは彼女が一番長いと思われる。

○高畑 樹里 たかはだけ じゅり

常套中学校吹奏楽部員。バストロンボーンとの持ち替えを今回担当し、現在ロングトーンの特訓中。タンギングとスライドのFast

t ポジション
Position が大の苦手。

○ 鶴井 鞠奈 つるい まりな

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。不良ぶっているが実は堅実な性格。人から指示されると無視する事は出来ず、言われたとおりにきちんとする。

○ 松村 由梨 まつむら ゆり

斎木高等学校吹奏楽部員3年生。バストロンボーンを専属担当。肺活量が半端なく、腹筋は常に鍛えられており、6つに割れているほど。

【Horn】ホルン 常套中学校のホルン奏者は該当者無し。

○ 山内 明日香 やまうち あすか

斎木高等学校吹奏楽部員3年生。ユーモラス溢れる性格で、周りにいる人全てを笑顔にする。実は成績最優秀生徒。

○ 和田 睦 わだ むつみ

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。前記で紹介した和巳と姉妹。性格が真反対で、見比べていると結構面白い部分が見つかったりする。

○ 持田 はるか もちだ はるか

斎木高等学校吹奏楽部員3年生。去年までアルトサックスをしていたが、諸事情によりホルンへ。初めてまだ数ヶ月しか経っていないが、芯の通った音を出す。

○ 岡田 一哉 おかだ かずや

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。小学校時代はサッカー部に所属

しており、体力には自信がある。変な絡み方でその場を和ます。

○井上 いのうえ 雄貴 ゆうき

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。大のゲーム好きで、ヲタクといわれるほどの知識量を誇る。そのわりに音楽に関しては知らないことだらけ。

○内田 うちだ 馨 かおり

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。いつも眠そうな顔をして合奏に臨む。夜型らしく、18:00ごろになると活発に行動を始める。

ユーフォニアム
【Euphonium】

○外田 そとだ 美鈴 みすず

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。母校はなんと常套中学校で、泰徳達が小学6年の頃に卒業した。伝説のユーフォ吹きとして常套中学校では名が売れている。

○谷 たに 未来 みき

常套中学校吹奏楽部員。金属アレルギーが今年になって発覚し、演奏の際は常に手袋を使用するようになった。マウスピースは鍍金塗装。

○北原 きたはら めぐみ

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。非常に頭が冴え、アナリーゼに關しては誰一人文句は言わない。しかし怠け癖があり、すぐ飽きる事もしばしば。

テューバ
【Tuba】

たけはやし やすのり
○ 竹林 泰徳

常套中学校吹奏楽部員。去年の末からぐんぐん力をつけてきている実力派。今では未来でさえも追い抜き、プロからオファーがくるほどの腕前を持つ。

きくち たくや
○ 菊池 拓也

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。落ち着いた表情と冷静な性格で、女子の間でひそかに話題になりつつある人物。演奏の方も半端ではない。

みつだ はるか
○ 西山 晴香

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。一昨年の事故により下半身が不自由になる。ただ吹奏楽だけは続けたいという本人の希望で、車椅子に乗ったままチューバの演奏を行う。

コントラバス
【Contrabass】 予定

おがさわら みさ
○ 小笠原 美佐

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。かなりのジブリ好きで、特に『千と千尋の神隠し（スタジオジブリ；宮崎 駿監督）』がお気に入りだという。

なかい みな
○ 中井 美奈

常套中学校吹奏楽部員。入部当時から続く“言葉のトゲ”は、今現在でも健全。逆にそれが人を元氣付けたりするのだが、大体の場合 は心に深い傷を負わせてしまう。

【Percussion】 予定

○中尾 真実 なかお まみ

常套中学校吹奏楽部員。ティンパニを担当し、両親の言いつけでメンバーになった。結構なマザコンで、今では誰からも相手にされていない。

○中屋 恵 なかや めぐみ

斎木高等学校吹奏楽部員3年生。ピアノを習っている為鍵盤楽器を担当すると勝手に決められた。しかし本人はあまり気にしていないらしい。

○沖西 学 おきにし まなぶ

斎木高等学校吹奏楽部員2年生。かなり人懐っこく、不審者に遭遇したにせよ付いていきそうな、色んな意味で危ない人物。常識はある。

○山崎 衿 やまさき えり

北佐屋中学校吹奏楽部員3年生。歌う事が大好きで、イメージトレーニングは全て歌で行う。音程のよさを活かし、ティンパニの調律と鍵盤楽器類の音程のずれを修正する。彼女は小物楽器担当。

○蓬田 桜 よもぎだ さくら

北佐屋中学校吹奏楽部員2年生。母子家庭で、アルバイトをしている為帰りは結構早い。合奏があるときも出られる限り出て帰ることが多いが、事情が事情な為、皆黙って見守っている。

以上が管、弦、打楽器の選抜メンバーです。少しでも頭のスミに
おいていただければ、これからの活動内容が面白いほど分かってい
ただける事と思います♪

第11楽章 「軽くストーカー」

選抜メンバーによる初合奏から1週間ちよつとが経過した。今回は2年生になった泰徳達のプライベートを覗くべく、部活が終わつてからの泰徳達を見てみよう。時刻は14:30。

「ピンポン」

インターホンが鳴る。

「はい、今すぐ!」

ただでさえ太っているという倫子の巨漢体が、家の中を動き回る。今にも床が抜けるのではないかと、内心泰徳はヒヤヒヤしていた。

「泰徳、美奈ちゃんたちよ」

「ああ! 今行く」

ポテトチップスを貪り、玄関へと足を運ぶ泰徳。部活の時とは打つて変わつて、ぐーたらな態度である。

「何だ? 2人とも」

玄関に立っていたのは美奈と未来。泰徳には2人の服装が、何となく微妙におしゃれだなと思った。

「あのね、ちよつと相談があつて」

「ふーん。まあ、上げれよ」

「ありがと……」

泰徳は美奈たちを、自分の部屋ではなくレッスン室に通した。だが、泰徳はいつも目にするはずのアップライトピアノとグランドピアノが、嫌に黒光りして見えた。

「座れつて」

「うん……」

「で、どうしたんだよ?」

泰徳は相談主だという未来に聞いてみたが、本人は一向に口を開かない。

「なあ、谷どうしたんだよ?」

すると美奈が答えた。

「トロンボーン先輩に、宇和川先輩つていたじゃない」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「ちよつとこれ見て」

美奈は未来の携帯を開くと、泰徳に見せた。

「うわ、何だよこれ……」

メール受信トレイのディスプレイに表示されたのは、宇和川の名前ばかり。美奈は泰徳に、こうなった経緯を語った。

「宇和川先輩から年賀状来た？」

「ああ。来たけど」

「メルアド書いてた？」

泰徳は記憶の引き出しを開き乱す。すると薄っすら、今年貰った宇和川の年賀状の左下に@マークの影が映りこんだ。

「ああ。あつた」

「未来ね、それに送信したの。そしたらこんな状態で、家にまで来るんだつて」

「それって一種のストーカーじゃないか？」

「そうなのよ。だから困ってるつて」

「アド変えてみたら？」

「変えても来るらしいわよ。でしょ？ 未来」

未来は小さく首を縦に振った。これには流石の泰徳も鳥肌が立つ。

ここまでしつこい男は初めてであり、しかも未来の携帯のディスプレイを見てみると1分刻みどころか秒刻みにメールが受信されている。了解を得て中を見てみると、そこには絵文字の嵐。泰徳は急いで携帯を綴じた。

「これはヤバイだろ……」

「だよな、私もそう思う」

「未来、なんでメールなんかしたんだよ」

泰徳に問いかけられた未来は、静かに答えた。

「宇和川先輩が、好きだったから……」

「え……………」

「でもねっ！ あんなにしつこいとは思わなかったの。ちょっと変なところはあるけど基本的には優しくて、楽器も上手くて、だから…」

「でもお前、飯に好きだったとしてもここまではやんねえだろ、普通」

「だから困ってんでしょ」

「そうだよなあ……………」

泰徳はそう言って暫く考え込んだ後、未来の携帯を徐に取り上げた。
「すまねえな。ちよつとイジるぜ」

「う…うん…………」。別に良いけど

システムニア
父親がSEである泰徳は、機械のことは並外れに詳しい。無論携帯など持たされたことはないが、操作方法なら分かる。

「よし、これで大丈夫だろう」

「何したの？」

「受信拒否だ」

「受信拒否？」

「ああ。メールを受信したくない相手を、ブロックかけてメールが届かないようにするのさ」

「へえ…………。でも、どうやって？」

「『メール設定』からここの迷惑メールのところクリックして…………。パス入れて」

泰徳に言われ、パスワードを入力する未来。

「そしたら、ここに宇和川先輩のアドを入れる」

「…………よし、できた」

「これは40件くらいまでなら登録できるから。ま、これで大丈夫なんじゃね？」

泰徳がそう言うものの、不安の表情をとかない未来。

「どうしたんだよ？ まだ心配事があるのか？」

「ううん、そうじゃないんだけど、受信拒否してもメールが着たら

「どうしようかなって」

「そんなんねえよ!」

といった矢先、未来の携帯にバイブリーダーがかかった。未来は恐る恐る携帯を開いてみる。そこには『非通知設定』の文字。どうやらメールのようである。

「まさか……………」

血の気がさつと引く未来。メールを開こうとする。すると、ディスプレイに『相手のメールアドレス uwagawa.brass@——が削除されました。直ちにあなたのメールアドレスを変更してください』とのメッセージが表れた。

「え? 今から……………」

「ほら!! 今からやり方見せるから、覚えとけよ!」

泰徳がメニューを開く。未来の携帯電話の機種はDocomoなので、iメニューだ。

「で、こう、こうつと……………」

『お客様サポートページ』から『各種設定』、『メール設定』へと飛ぶ。その動きが早すぎて、メモする未来側からしても必死である。『書けたか?』

「う…うん……………」

泰徳はその言葉を聞くと同時に、

「じゃ、ここに新しいアドレスを入れて、終わったらパスを入力するんだ」

「分かった……………」

順調に作業は進み、暫くして確認のメールが送られてきた。

「ま、これで何とかなるだろ」

「ほんとに?」

「それまでは分かんねえ」

「じゃあ意味ないじゃん!!」

「まあまあ。来たら俺が電話で対処してやる」

泰徳は軽くそう済ませた。とにかく一件落着ととると、安心できる

のではないだろうか。

「未来は衝動が激しいのよ」

「あ、それ思う。アド変更しすぎだよ」

「たぶん恋愛でなんかあったんでしょね、今回みたいに」

プププと含み笑いをする泰徳と美奈。それを聞いて、未来の顔は真っ赤になっていた。

ジョイントコンサート本番まで、あと 31 日。

第11楽章 「軽くストーカー」（後書き）

この話に書かれてあるメールアドレス変更手続きや、受信拒否に対する携帯電話からの対応コメント表示は全て想像のものです。

第12楽章 「美奈の再オーディション」

翌日。今日でジョイントコンサート本番まで、ちょうど1ヶ月を切った。なおかつ泰徳達は卒業式に演奏する曲を練習しているのだが、美奈だけは違った。そう、今日はコントラバスとパーカッションの再オーディションの日なのである。

「熱入ってるなあ」

「そりゃあね。一度選抜に選ばれて、落ちちゃったら顔が立たないもん」

「だよな」

と練習に打ち込む美奈を温かく見守る未来と泰徳。オーディション方法は、今まで合奏で触れてきたアルメニアンダンス、をどり唄、ヘンリーマンシーニ・メドレーの中から、ランダムで練習番号が選ばれ、その部分を演奏するというきわめて緊張する方法だ。

「声かけたくなっちまうよな」

「でもあれじゃあねえ」

横から見ても、楽器を弾く美奈の横顔からは近寄りがたいオーラが発せられていた。

「ピリピリしてるな……」

「うん……」

泰徳はおもむろに時計を見た。時刻は10:00。

「おっと。美奈！ 時間だぜ」

「あ、ありがとう」

美奈の口調にも緊張が現れていた。いつもぶっきらぼうで無表情な言葉を発する美奈だが、今日はその言葉により一層トゲが刺さっているように聞こえた。

「緊張してるな」

「ま、何はともあれ頑張っただけいいわね」

「そうだな」

泰徳と未来は練習を再開した。

今泰徳達が練習しているのは、吹奏楽の為の『風之舞』。詳しくは初代『プラス魂』の楽曲データを参考にしてもらいたい。

「それにしても、泰徳上手くなっただね」

「そうか？」

「うん。だって、わたしその跳躍できないもん」

風之舞には、多々跳躍進行が登場する。マウスピースが大きく、肺活量がいるチューバでの跳躍進行は中々難しい。

「ユーフォで跳躍ってムズイのか？」

「高橋先輩はそんな事ないって言ってたけど、私には難しいみたい」「そうだよなあ、アンブツシュアあるし……」

「なんかこのマツピ、私に合っていないような気がして……」

「今頃になってか？」

「うん……」

未来の使っているマウスピースは、YAMAHAの3C型。ユーフォニアムのマウスピースとしては少し小さめの設計になっているが、その分低音域の裕福感と、高音域の透き通った音色が特徴に現れる理想のマウスピースである。

「でも、そのマツピ高音域出しやすいって言ってたじゃん」

「そうなんだけど……」

口を噤む未来。

「何だよ？」

「その高音域が最近でなくなっちゃったの」

「何時からだよ？」

「わかんないけど、風之舞の最初の8分音符吹いてるときに高音域がかすれてるのが聞こえて」

風之舞の最初は、静かなメロディーと伴奏の裏で、ユーフォニアムを始めとする中音楽器が8分音符を刻んでいる。

「そりやお前、この楽譜で高いもクソもないだろっ」

泰徳は未来の楽譜を見て言った。通常のユーフォの音域は、へ音記号第2線のシから、第5線のシまでである。ここから個人差はあるが、音域を広げる練習を続けた結果、ハイB やペダルB までの音域が出るようになる。

「これ全然高くないじゃん。むしろ基本の音だよ」

「うん……」

と、ここで泰徳はあることに気付いた。

「お前、唇乾燥してねえか？」

「え!？」

未来はギクツとした。無論、唇が乾き気味だったことは未来自身も分かっていた。が、それを泰徳に気付かれては何を言われるか分からない。

「リップクリームは？」

「持ってる」

「付けてんのか？」

「……ううん」

「どうして」

「リップクリーム付けたら、楽器吹くときに変な感じがするから……」

未来曰く、リップクリームをつけた状態で楽器を吹くと、唇が滑^{ぬめ}つてなんとも言いがたい感触が未来を襲うのだという。

「でも、そんなパリッパリの唇じゃいつ裂けたっておかしくないぜ」
普通管楽器は演奏中に、唇の乾燥により唇が割れ、出血する事が少なからずある。そうなると楽器の演奏をすぐさま中止し、止血に専念する。これは出血したまま楽器を演奏すると血液が管の中を巡り、楽器を錆びさせてしまう恐れがあるからである。

「ただでさえ貧血もちなんだから、これ以上血を減したらどうなるか」

「分かってるけど、気持ち悪くて……」

「気持ちちは分かるけどさあ………」

暫く考え込む泰徳。そして、泰徳はこう助言した。

「分かったよ。そんなに塗るのが嫌なら、対策法を教えてやる」

「ほんと?!」

「ああ。まず、楽器を演奏する前にうがいをしろ。そしたら、唇を水にぬらした指で軽くなぞるんだ。そしたら乾燥は少したが防げる」

「ありがとう。今度からやってみるね」

笑顔を取り戻した未来の下へ、オーディションを終えた美奈が帰ってきた。

「お、美奈。どうだった？」

泰徳にそう聞かれると、美奈は目に涙を一杯溜めて

「合格だって……。合格だって!!!」

と歓喜の声を上げた。

「良かったじゃないか！ 打楽器はもう決まったのか？」

「ううん。これから審査が入って決まるところ。はあ……、良かった」

美奈は涙を拭いながら椅子に腰をかけた。

「マジ緊張した……」

あまりの安堵感に言葉が出ない。

「まあ、中井が受かったからいいんじゃない？」

1年生最後の本番はジョイントコンサートと卒業式のみ。さらなる本腰をかけ、練習に励む泰徳達であった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 30 日。

卒業式演奏本番まで、あと 45 日。

第13楽章 「泰徳、奏者としての変遷」

翌週の11:55。Bassパートは昼食をとろうと第2音楽準備室に足を運んだ。すると、そこには立石先生が椅子に座ってなにやら考え事をしている。

「先生、どうしたんですか？」

「お、中井と谷。竹林はどうした？」

「今トイレですけど」

「そうか……」

「どうかしたんですか？」

「いや、ちよつと相談があつてなあ」

泰徳に立石先生が相談するというと、大体内容は絞られる。まず1つは、美並に對すること。2つ目は立石先生自身に関わる事、そして最後に、セントラルウインドの入団に關することである。

「ふう、すつきりした」

「お、竹林。戻ってきたか」

「あ、先生。どうかしました？」

「いや、ちよつと折り入つて相談があつて」

「はあ……」

「ちよつとこつちに来てくれるか？」

泰徳は立石先生に言われるまま、第2音楽準備室の隣
—— 年1組の教室 —— に誘導された。

3

「あ、悪いけど、お前ら先に食つてくれ」

「うん、分かった……」

未来と美奈は、泰徳より先に昼食をとることになった。

場所は変わつて3年1組の教室。立石先生と泰徳は、向かい合うようにして椅子に座っていた。

「で、相談つて何ですか？」

「ああ。実はジョイントコンサートの事でな」

「ジョイント？」

「ああ。今回初のジョイントコンサートになるわけだが、ソロのある曲が多いだろ？」

確かに、今回やる曲には殆どにソロがある。風之舞は課題曲といえども目立つところはあるし、アルメニアダンスに至ってはソロの塊とっていいほど出てくる。立石先生はこれについて言っていた。「まあありますけど、それがどうかしたんですか？」

「うん。実はな、先方からさっき電話がかかってきて、ソロ担当者の実力がそこまで来てないから、こっちの方で何とかしてくれって言ってきたんだ」

県内屈指の実力を誇る斎木高校では、大学入試を控えている為練習に出づらく、確かに実力はあるがこのまま行けば衰えは避けられないことを恐れていた。一方北佐屋中学校の顧問は、冬休みの宿題を未だに出していない部員がいることに憤慨し、部活停止中だという。「じゃあ決めればいいじゃないですか」

「けど、それに相当するやつがいるかって話なんだよ」

「いるじゃないですか。白石とか浜口とか」

「それじゃあ、オーボエソロとかどうするんだよ」

泰徳は口を噤んでしまった。確かに当てはまる部員もない事はないが、第一ダブルリードが常套中学校にはない。

「じゃあ、どうするんですか？」

「俺が考えた限り、お前に吹いてもらうしかない」

「え?!」

「俺はお前が引退後、セントラルウインドに入団する事を知っている。あの天下のセントラルウインドに入団するなら、オールマイティーに出来るはずだ。実際それで入団するそうじゃないか」

「ええ、確かにそうですけど、そのソロ担当者が戻ってきたらどうするんですか？」

「ソロを辞めさせて、他の奴と同じことをさせる」

「メロディーのみて事ですか？」

「そういうことだ」

泰徳は考え込んでしまった。いくらセントラルウインドに入団が決定し、オールマイティー奏者として迎えられたとしても、チューバ以外の楽器の運指は興味本位でしか探った事が無い。楽器は知り合いの楽器店から借りる事は出来るが、まだはつきりとはしていない。「何時までにさらえばいいんですか……？」

「来週だ」

泰徳の腰抜けな質問に即答する立石先生。覚悟は堅いようだ。

「僕が……やるんですか……？」

「ああ……。頼む！ 引き受けてくれ！！」

立石先生が泰徳の手を必死で掴む。ギリギリと、その力が増していくのが泰徳には分かった。

「……分かりました。やってみましょう」

暫く沈黙し、泰徳はそう答えた。

「そうか、やってくれるか！ ありがとう……、ありがとう！」

「あ、先生！ これはB a s s パートのみんなに明かすべきでしょうか？」

「……いや、黙っとけ」

そう言つて、嬉しそうに立石先生は職員室へもどつて言った。

再び場所は変わつて第2音楽準備室。

「あれ、弁当食つてないの？」

「だって泰徳だけじゃ可哀想じゃん」

「そうだよ。折角3人揃つて食べるチャンスだったのに」

と、未来と美奈は泰徳を迎え入れた。それぞれの膝の上には、弁当が用意されている。

「で、立石先生の相談つて何だったの？」

「あ、それ私も気になる！」

「え？ 相談??」

「うん。だって立石先生『相談がある』って言ってたじゃん」
「ああ！」

泰徳は相槌をつくつと、蓋を開けて弁当を食べ始めた。

「え、ちよつと！ 泰徳、無視?!」

「話してくれたっていいじゃない!!」

「そうよ、私たち同じパートよ!!」

「まあまあ。そんなに慌てるなよ。じきに分かるって」

泰徳はそういつて、未来と美奈をなだめた。軽く本番が少し楽しみになった泰徳が、ここにいた。

ジョイントコンサート本番まで、あと 23 日。
卒業式演奏本番まで、あと 38 日。

第14楽章 「弱み」

翌日の放課後。泰徳は1人、第2音楽準備室で練習していた。美奈は委員会の話し合い、未来は学校欠席でいない。

「暇だ……」

ロングトーンをしっぱなしでバテ気味の唇を、ハンドタオルで優しく抑える。背もたれに凭れ掛かり、ふうつと軽い溜息をついた。泰徳自身、オールマイティー奏者としての出場依頼が立石先生から受けたのがどうも引つ掛かる。

「楽器どうしよう……。一応借りれるけど」

テューバとトロンボーン以外の楽器は、興味本位でしか障ったことがない。特にオーボエとファゴットは、小さいころに楽器演奏体験というイベントを通して触ったことしか記憶にない。運指は薄っすらと脳裏に焼きついていてからどうにかなる。しかし問題はここからだ。

「何で明かしちゃダメなのかな……？」

前話で、立石先生は『B a s s パートのメンバーにこのことは明かすな』と言っていた。泰徳には、その理由が全く分からない。

「別に明かしてもいいと思うんだけど……」

と、泰徳は今朝立石先生から渡された楽譜を手にした。要所要所で、楽器名が記載されてある。持ち替えによる演奏らしい。

「それにしても多いよなあ……」

ジョイントコンサートで泰徳が扱う楽器は、楽譜に記載されてあるものだけで計5種類を超える。

「そういえば、先生に席を聞いてないな」

持ち換えということだが、席が替わるのか、はたまた1つの席で複数の楽器を扱う事になるのか、条件によっては無理なものがある。

「ま、気楽に行こうつと」

楽器を構える泰徳。するとそばから、

「何1人で悩んでんの？」

と、女子の声。美奈であった。

「あ、中井」

「随分深刻な顔してたじゃない」

「え？ そうか？」

「うん。この私が近寄りがたかったものと、美奈は笑った。

「で、何悩んでたの？」

「他愛もない事だよ」

「もしかして、先生の相談の事とか？」

これを聞いたとき、美奈は泰徳の体が一瞬固まったのを見放さなかった。

「あ、やっぱりそうなんだ！」

「あ、ああ……」

美奈のいつものオーラに気おされたのか、泰徳は仕方なく返事をした。

「それよりか、立石先生の相談って何だったの？」

「う……。それは……」

口を閉ざす泰徳。

「先生に口止めされたの？」

美奈の問いかけに、泰徳は静かに首を縦に振った。

「あ、じゃあ大丈夫。私絶対に言わないから！ 未来もないんだし」

泰徳は打ち明かすか躊躇した。美奈とは小学校からの付き合いのため、口が堅い事は十分承知だ。ただ、泰徳が不安なのは明かしたところで美奈がそれを受け入れてくれるかどうかだった。

「言ってもいいのか？」

「うん。どんとこい！」

結局、泰徳は美奈に全てを明かした。今の北佐屋中学と斎木高校の現状、そこからきた、自分がオールマイティー奏者として、そして

ソリストとして出場する事、この間までソロを担当していたメンバーは、ソロの座から外れ、みんなと同じ演奏をすること。

「ふうん、そんなことが……」

「ああ。勿論今の俺にはそんな実力は無いと思ってる。初心者だしな」

「そんなことないよ。十分上手いじゃん」

「そうか？」

「そうよ。現にこの前、熊蜂の飛行吹いてたじゃない」

実はこの日から3日ほど前、泰徳は来た校舎と本館を結ぶ3階の渡り廊下で、サクスパートの許可を得て練習していた。そのとき泰徳は、難曲中の難曲といわれる熊蜂の飛行をスラスラと吹きこなしたのである。これには流石の愛も驚き、急いで美奈の下へ報告に行った。

「去年なんか、あつさりと無理って言ってたのに」

「まあ、そりゃそうだけど……」

「でもこの年で熊蜂がふけるのは、アンタだけよ」

「そうかなあ……」

「そうよ。現に熊蜂の飛行演奏してる人なんてみたことないもん」

美奈はピアノを習っており、ピティナ・ピアノ国際コンクールで入賞を何度も果たしたツワモノであったが、熊蜂の飛行はその美奈さえも弾きこなす事の出来なかった唯一の曲であった。

「だからもつと自身持ちなさいって!」

「うん……」

美奈が励ますが、泰徳の表情は冴えない。

「まあ、不安になるのも普通かもね」

「……………」

「私は、泰徳はこの部活で一番上手いと思うよ。入部当時はボロボロだったのに、今じゃプロからオフアーがくるんだもんね。私もだけど」

好きでプロになろうと思ったんじゃない。泰徳は心の中でそう叫ん

だ。未だ大編成が苦手というコンプレックスを抱える泰徳は、やはり人ごみを恐れた。吹奏楽や音楽は好きなのに、どうしても大編成が好きになれない。泰徳は悩みに悩んだ。

「ま、じきに克服できるわよ。泰徳のコンプレックス」

その心情を読み取ったように、美奈が付け加えた。

「じゃ、私練習してくるから。頑張ってね!!」

そう言うと、美奈は楽器と譜面台を持って姿を消してしまった。

泰徳は持っていたハンドタオルで、静かに頬を伝う涙を拭った。

ジョイントコンサート本番まで、あと 22 日。
卒業式演奏本番まで、あと 37 日。

第15楽章 「アルメニアンダンス Real 前編」

一週間後、再び選抜チームとの合奏の日がやってきた。この日から、泰徳はオールマイティー奏者として活動する事になる。時刻は午後1:30。曲目はアルメニアンダンスPart1。大曲という事で、少しずつ休憩を交えながら緻密な合奏をしていく予定だ。本日の指揮者は、北佐屋中学校吹奏楽顧問の大西^{おおにし} 智彦^{ともひこ}である。

「はい、じゃあ始めよかあ」

「はい！」

今回の指揮者である大西先生は、兵庫県出身の24歳。新米らしく指揮法もぎこちないところがあるが、立石先生の目から見ると、将来見込みのある教師だという。

「じゃ、杏の木から」

勇ましいシンバルのクラッシュと共に、直管楽器のファンファールが雄叫びを上げる。この時点で泰徳は、まだチューバである。実際、この杏の木は泰徳が最も苦労したところである。いくら齋木高校の先輩が演奏しているからといって、手は抜けない。^{フオルティッシモ} f fの指示が多いこの楽章では、酸欠さえ起こすことがある。

オーボエのソロ部分。ここで泰徳はホルンに持ち替える。度重なる議論の結果、泰徳はチューバの席で、なるべくステージの真ん中に位置するところに座ることになった。つまり、客席から見て泰徳はチューバ席の一番左端である。

そして再び勇敢な直管のファンファール。実はこの部分で、ホルンが自殺行為と思えるほどバンバン吹いている。ただでさえマウスピースが小さいホルンが、ここまで演奏すると唇も裂け兼ねない。そのホルンの対旋律を途中まで演奏すると、今度はオーボエに持ち替える。『杏の木』と『ヤマウズラの歌』をつなぐソロ部分を、泰徳は担当する事になったのだ。しかし驚く事に、泰徳はそのソロを

高校生より上手く吹きこなした。

続いてヤマウズラの歌。泰徳は再びチューバに持ち替えて、刻みを演奏する。この際、泰徳は口が壊れないよう、ヴァジングをしてから楽器を演奏しなければならぬ。ヴァジングというのは、簡単に言うとは唇の振動の事である。間もなくトランペットソロ。選抜チームでは、ここを『コルネット』という楽器を用いてソロをする。トランペットより一回りほど大きな楽器で、ふくやかな音色を出す事が出来る。ここを担当するのは、健吾だ。

このソロが終わった瞬間、泰徳はチューバからユーフォニアムへと楽器を変える。オーボエソロから受け継ぐユーフォのソロは、なかなか難しい。未来の目で見ている前で、泰徳がソロを奏でる。鳥肌が立つほど上手かった。ここからは泰徳の出番はない。ホルンのソロが終わって、大西先生はタクトを止めた。

「よっしゃ、中々ええやろう。今から15分の休憩や。今度はナゼンから最後までやるで」

「はい！」

こうして休憩に入ったわけなのだが、一番先に泰徳の下に駆けつけたのは未来だった。

「ちよっと、どうしたの？ あれ！！」

「どうしたのって何が？」

「ソロよ、ソロ！ メツチャ上手かったじゃない」

「そうかなあ？」

照れ隠しする泰徳だが、まだぎこちなさが残る。

「もしかして、この後もソロ有ったりする？」

「あ、ああ……」

「うわあ、すごいすごい！ でも、何で泰徳が？」

未来がそう尋ねると、答えたのは美奈だった。

「それはね、泰徳がやりたいって言ったからよ」

「……?!」

思わぬ言い訳に、泰徳は大爆笑しそうになった。

「そうなの？」

「え？ あ、うん……」

目に涙を溜めて答える泰徳。それを見た美奈は、

「なに笑ってんのよ！」

と泰徳の背中をド突いた。

「いつて！ 何すんだよお」

「別に。泰徳が変な反応するからでしょ！」

この2人と一緒になって1年がたつが、この2人の会話の方がよっぽど変だと感じたのは未来だけだったのだろうか。

「ま、とにかくそういうわけだから」

「ふうーん。納得行かないけど」

「だから俺がやりたいって言ったんだって！」

「ま、そういうことにしとくわ」

と未来。実はあそこのユーフォソロ、未来の担当だったのである。

「でも、私よりあんなに上手いソロ吹くなんて、ビックリしたわよ。まあ、自分で自分のことは絶対に上手いとか言わないけどね」

と笑う未来。とはいっても、顔は相当ショックな表情をしている。それもそのはず、未来は小学3年生の時から金管バンドでユーフォニアムを演奏していたのに対し、泰徳は根っからの初心者。それなのに自分の実力を初心者に抜かれるというのは、よっぽどショックだろう。

「そんなに暗い顔すんなよ」

「しょうがないじゃない、ショックなんだから」

「お前も上手いつて」

「うっん。泰徳が上手くなりすぎてるのよ。ま、頑張つてね」

未来はそういうと、ちよつとトイレ、といって席を外した。泰徳は、絶対トイレではないと確信した。

「未来、相当ショックだったのね」

「俺、やつぱ悪い事したかな」

「そんなことないわよ！ 先生から頼まれるなんてよっぱどの事なんだから」

「そうだけど……」

泰徳は、折角の未来のソロを奪ってしまった罪悪感と、自分が本当にオールマイティー奏者でいいのかという不安で胸が一杯になった。そういう泰徳の心情を察したのか、美奈はこう言葉をかけた。

「そんなに神経質にならなくてもいいじゃない」

何気ない一言だったが、今の泰徳には相当心に響いたに違いない。吹奏楽とは、助け合って始めて成立する部活なのだという事を、改めて実感した。

「でも、谷がめっちゃ楽しみにしてたソロだったのに」

「そろならいくらでも出てくるでしょ。チューバじゃないんだから」
「出るかな？」

「でるわよ。自身持ちなさいって！」

美奈はまた、泰徳の肩を叩いた。泰徳は心の中で、母方のおばあちゃんを思い出していた。

泰徳がまだ小さいころ、いやな事があって泣いたときには、いつの祖母の家に通っていた。そこにいたおばあちゃんは、泣いている泰徳を見ると必ず、

「何泣いとんねん。元気だしやー！」

といって泰徳を励ましてくれた。

「ああ。俺、頑張るよ」

「そう、その意気その意気！」

本番は約2週間後。練習にもえる選抜メンバーの姿が、ここにあった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 15 日と 3 時間。
卒業式演奏本番まで、あと 26 日と 3 時間。

第16楽章 「アルメニアンダンス Real 後編」

休憩が終了し、再び席に着くメンバー。泰徳の席の位置が変わったので、なんだか新鮮さを覚えていた。ちなみに、泰徳の左に座っているのは拓也である。

「みんな揃ったかいな？ そろそろ始めるで」

「はい！」

「よっしゃ。みんなおるな。じゃあ、ナザンから」

「はい！」

第3楽章、『ホイ、私のナザン』。この曲中でも最も難しいところで、拍子が5/8と6/3の混合拍子であることにまず驚かされる。泰徳は初っ端からオーボエを担当している。ちなみにそれと掛け合うサクソフォンソロは、佐藤 和昌であった。次いでクラリネットがメロディーに加わる。この時、泰徳はトランペットに持ち替えている。そしてクラリネットのメロディーが終わると、トランペットの盛り上がりが炸裂する。それと追いかけてあうようにホルンが複雑なリズムを刻み、再びトランペット。ここは泰徳が一番練習したところであり、一番苦労したところであった。前記『杏の木』も体力を消耗するが、変拍子の演奏に対する凄まじい精神力と体力の使用でフラフラになる。

中間部分。ここは最もテンポが安定しており、比較的演奏しやすい。実は泰徳はここでの出番はなく、最後のオーボエソロだけを残し、じっと座っているだけである。じきにここも持ち替えが入るだろうと立石先生は言っていたが、まだ決定していない。そのオーボエソロは、難なく吹きこなしたのだが。

第4楽章、『アラギアス山』。ここは作者である私が2番目に好きなどころである。というのも、低音パートとユーフォニアムの絶

妙な掛け合いが、なんともスピリチュアル的に安らぎを持たらせてくれる。鳥肌が立つほどである。そんな楽章で泰徳が担当するのは、言うまでもなくユーフォニアムだ。

実際、ここは現在の奏者3人のみで演奏する事になっていたのだが、泰徳がオールマイティー奏者として舞台に乗ることが決定すると、4本での演奏が決まった。つまり、未来と肩を並べて演奏する事になる。

クラリネットの柔らかなメロディーと低音群の深みのある支えに導かれて、ユーフォニアムの対旋律が静かに歌い始める。ここは音程がきっちり合っていないと不快に聞こえるため、合奏の時は常に譜面台にチューナーを設置している。今のところ、針のぶれは1mmもない。未来自身、ユーフォを吹き始めて5年目。泰徳の急速な上達に、悪寒さえ覚えていた。もちろん、いい意味でのことだが。少しリタルダンドをかけたところで、いよいよフィナーレに差し掛かる。

最終楽章、『Gona Gona』。200小説以上に及ぶ壮大なフィナーレで、作者である私が一番好きなどころである。超絶技巧とも言える木管のパッセージがホルンにも所々現れることや、低音楽器にも容赦ないタツカの連続などから、常套中学校では『死の曲』としてある意味恐れられていた。しかし選抜メンバーとなれば、この死の曲も何のその。余裕な顔でぶっ走る。

泰徳が最初に構える楽器はトロンボーン。このところ4発しか吹くところはないが、そこは泰徳の底力。見事に4つの音のみで、全体のテンションを最高潮まで達せた。シロフォンとユーフォの掛け合いから、トランペットとトロンボーンのユニゾン。泰徳は滑らかに吹きこなした。その動きに、ひそかに樹里は嫉妬していた。これが2回繰り返され、ホルンと泰徳のミュートリートランペットが景気付けに演奏したところで中間部分へと移り変わる。

中間部分。ちょっと静かになり、オーボエソロを泰徳が演奏する。

その後同じ形が再び続き、泰徳は急いでトロンボーンへ。低音楽器の最大の見せ場、連続8分と跳躍進行のメロディーを難なくこなすと、チューバとユニゾンであるバストロンボーンの刻みを余裕で演奏し、再現部へと変わる。

再び前半のメロディーがトランペットで演奏されている。実はここに、泰徳も加わっている。木管のスケールと同時に、トロンボーンに持ち替える泰徳。そして再び連続8分のメロディーを演奏した後、そのままトランペットとユニゾンの四分音符を吹きこなす。ここはトロンボーンとはいえ、音域が高いところ。オールマイティー奏者の泰徳なら、いつ唇が切れてもおかしくはない。そんな心配をする間もなく、4つの8分音符で合奏は終了した。

「あー、しんどかった」

と汗を拭う大西先生。このアルメニアンダンスPart1は、いくら指揮を振ってもしんどい部分がかなりある。立石先生も泰徳が小学5年生の時に振ったことがあるというが、あれほど体力を消耗するしんどい曲は無かったと言う。

「皆よく出来とったな。文句なし！」

大西先生が褒めるものの、反応がない。それもそのはず、メンバーたちは肩を揺らして意気を荒げているのである。これだけの名演奏をしたのなら無理もない。

「本番はまだまだ先やねんど！　こんな演奏で肩揺らしとったら、本番どないなんねん」

「それって先生が言う立場なんですか……」

とメンバーのクラリネット奏者、1人が言う。恐らく北佐屋中学校の生徒だろう。

「あ、そっか」

この大西先生の一言で、合奏場である第2音楽室は爆笑の嵐に包まれた。横に座っていた拓也が、泰徳に耳打ちをした。

「安心して。うちの学校はいつもあんなだから」

「それって、顧問の先生が兵庫出身だから？」

「うん……、それもあるけど、やっぱり僕達かな」

「……？　どういう意味？」

「先生も生徒も和やかだつてことさ」

拓也のこの一言に、泰徳は強く胸を打たれた気がした。何故が分からないが。

「じゃあ、北佐屋中学校が強いのもこれだからかな？」

「分かんない。けど、楽しくやってるよ」

「僕もこんな風にできたらなあ……」

「十分出来てるじゃないか」

「え？」

「立石先生も、結構いいキャラしてると思うけどな」

「そう……？」

「うん！」

立石先生も面白いとは思っていた。いい先生だとも思っていた。しかし立石先生がこれだけ他の学校から信頼されているという事は、やっぱり立石先生は凄い人なのかもしれないと、改めて泰徳は思った。

「よし。じゃあ、今日の合奏ここまで！」

「起立！　気をつけ！　礼！！」

「ありがとうございました！！」

合奏が終わり、メンバーたちが第2音楽室から去る。その一人一人の表情は、実に爽やかなものであった事は、泰徳の記憶に新しい。

ジョイントコンサート本番まで、あと　15　日。

卒業式演奏本番まで、あと　26　日。

第17楽章 「初ホール練習 前編」

1週間後。最初で最後のホール練習の日である。実はアルメニアダンスを演奏した先週の合奏終了後に、来週はホール練習をする。と立石先生から連絡があつたのであつた。

会場となるのは、松山市民会館メインホール。5階席まで存在し、満席状態で約3,500人の徴収を収容できる。そのメインホールの上に、毎年吹奏楽コンクールの会場となる大ホールがあり、地下階に小規模のコンサートを行うための中ホールがある。

今回の物語は、メンバーたちがメインホールに到着したところから始まる。

「おろすぞお！」

トラックの一番奥に入れられたティンパニが、4人がかりで運び出される。Lサイズの超どデカ級の大きさを誇るこのティンパニは、4つセッティングする中でも一番大きいもの。男衆を4人集めても中々スムーズには動いてくれない。

「あ、もうちょつと右！ 落ちる落ちる！！」

「んなこと言つたつて、ペダルにぶつかるし……」
「いててて！ 食い込むつてマジで！！」

絶え間なく叫び声がこだまする。その中には泰徳も勿論いたのだが、半ば他の3人に埋もれる形となつて運んでいる。チューバは一番先にロビーへ降ろした。

「やっと終わった……」

「重過ぎるだろ、これ……」

肩を揺らして息を切らす4人。泰徳は尚の事、しんどかつたである。

「よし、じゃあ楽器出して合奏の準備してくれ」

「はい」

こうしてメンバーたちは、いよいよホールでの合奏に挑んだ。

楽器を出すスペースは、学校によって決められている。斎木高等学校の木管組は楽屋の1、2番。金管組は楽屋3、4番。北佐屋中学校と常套中学校はそれぞれパートごとに固まって、ロビーで楽器を出す。

「わあ、泰徳君の楽器、綺麗だねえ」

「いや、そんな事ないですよ」

晴香に言われた泰徳が、少々照れる。

「そういう西島先輩の楽器だって、貫禄あるじゃないですか」

「私のはさびてるだけよ」

「そうでしょうかねえ？」

「そうよ」

晴香の楽器はベルからテールの部分まで錆び、鍍金もはげている。

しかし泰徳からにとっては、新しい楽器が必ずしもいい音を出すとは言えない事が分かっていたので、錆びているからと言って別に变な気はしなかった。

「高校って無駄に楽器綺麗ですよ。買ってるんですか？」

「私の学校では分からないけど、多分そうだと思う」

「へえ……」

「あ、でも全員ってわけじゃないみたいですよ」

ここで口を挟んできたのが、拓也であった。

「え？ どうしてですか？」

「だって、ほら」

拓也はホルンパートのほうを見た。そこには、一本のダブルホルン。

「あれがどうかしたの？」

「見てたら分かります」

拓也に言われて、そのホルンを凝視する晴香と泰徳。しかし、別段何も起こらない。

「どうもならないじゃない」

「ほんとですよ」

「見てて下さいってば」

仕方なくまた凝視する。暫くして、ドライバーを持った持田 是るかが目の前に現れた。

「あ、あれは……」

「うん。うちの所のはるかちゃんだ」

そのまま見続けていると、ドライバーで部品を分解し始めた。

「え?! あんな事やって大丈夫なんですか?」

不安そうに尋ねる泰徳。

「わかんないけど……。ホルンを修理しながら吹いてるって聞いた事はあったけど、まさか本当のことだとは思わなかったわ……」

「でも、あのホルン何年使ってるんですか? 見かけからして新品みたいですけど」

拓也が尋ねる。

「確か、30年位前かな。吹奏楽部が出来た時から使ってるらしいって、はるかちゃん言ってたし」

「マジっすか?!」

泰徳は驚愕した。というのも、外見はどこからどう見ても新品。黄銅は輝いているし、ロータリーの動きも問題なさそうだ。チューニング管に至っては、スルツと気持ちよく抜けている。普通30年も経てば、チューニング管は踏ん張らなければ抜けない。

「よっぽど手入れの仕方がいいんですね」

「そうみたいねえ……」

晴香は、関心のあまり言葉が出ない。

「僕の楽器、去年借りてきたばかりですけど……」

泰徳は自分の楽器を見つめた。なんとなく黄銅がくすんでいる。

「そんなに気にする事ないでしょ」

「そうですねえ」

「大事なものは中身よ。外はいくら汚くても、中が綺麗ならいい音は出せるもん」

「そうですね!」

泰徳はチューバを始めて丁度1年が経ったが、チューバに嫌味など思ったことは無い。愛のような口達者な女子部員には幾つか言われた事もあったが、今は気にしていない。チューバと言う楽器が好きだから。

「どんな楽器にも、魅力ってありますかね……」

「あるに決まってるじゃない」

「そうですよ。僕なんてユーフォと一緒にされましたから」

と拓也。拓也の楽器はピストン仕様。ユーフォニアムもピストンのため、同級生からユーフォとチューバを同じにされたことがあった。

「やっぱ、これってチューバ奏者の宿命ですかね」

「ま、そう考えるしかないでしょう」

「よね！」

拓也と晴香は、そう言っただけで笑いあった。何故か分からないが、この時泰徳はどうしても笑えなかった。

「そろそろ合奏始めるぞ！ アップしとけよ」

「はあーい！」

立石先生の掛け声で、皆一斉にステージに集合を開始した。アップはステージ上で、個人個人で行われる。

「開始は30分後。アルメニからやるぞ」

「はい！」

立石先生はそう言うと、舞台裏に戻っていった。初めてのホール練習は上手くいくのだろうか。

ジョイントコンサート本番まで、あと 8 日と 3 時間。
卒業式演奏本番まで、あと 19 日と 3 時間。

第18楽章 「初ホール練習 中編・上」

30分後、大西先生が指揮台に上がった。

「みんな準備はできとるか？」

「はい！」

「じゃ、いきなり行くけど大丈夫？」

「はい！」

北佐屋中学校の部員曰く、大西先生のあのマイペースさが、のびのびと演奏するコツなのとか。大西先生は北佐屋中学校に赴任してきてから、1回も生徒を怒った事がない。それほどマイペースなのだ。

泰徳の右側にもう一脚の椅子。そこには、オーボエ、ホルン、フリューゲルホルンが所狭しと置かれてある。そして譜面台の手前にトロンボーンとユーフォニアムが泰徳を跨ぐようにして置かれ、左側にチューバが仁王立ちする。大西先生一点に集中する泰徳。そしてタクトが振られると、泰徳の顔は一変して般若に変わった。

杏の木は、泰徳が概ね苦手としてきたところ。直管楽器のファンファーレに次ぐ大々的な低音の支えの為、決して妥協は許されない。このしばらく後に続くペダルトーンのスラーは、ブレスの位置を何回もみんなで決めなおした。そのスラーを吹いた後にホルンに持ち替えるが、ホルンの対旋律が出てくるまで、泰徳は深呼吸を続ける。そうしないと酸欠状態になり兼ねないからである。

ホルンの対旋律。ホルンパートからしてみれば高音域のメロディを、泰徳は顔を真っ赤にしながら演奏していた。途中でホルンからオーボエに持ち替え、ヤマウズラの歌のソロに備える。このとき、泰徳は一生懸命リードを湿らせていた。隣では、拓也が頬を膨らませながら必死に他の音の動きを支えている。

そしてソロの部分。哀愁溢れるこの部分を、どう演奏するかが必

死に問われた。泰徳はサンプル演奏を何度も聞き返し、練習した。その成果あつてのことか、あの大西先生からのVサイン。泰徳はありがたくそれを受け取った。

その泰徳のソロを受け継ぎ、ヤマウズラの歌。グロッケンの可愛らしいメロディーが印象的なこの楽章は、あえてチューバの刻みが指摘された。優しい表情で、でも籠らずに。チューバ奏者にとつては難しい注文であつたが、拓也や晴香はそれを何とか形にしようと、タンギングの練習をここ3日間やっていたそうだ。勿論この刻みグループに泰徳も入っていたが、泰徳の練習方法は少し奇抜なものだった。ピンポン球を用意し、目の前で落としてもらう。撥ねる瞬間にボンッと発音する練習だ。練習を行うのは教室ではなく、運動場であえて響かないところで響かそうとする反復練習が、いつしか重厚な響きを作り出すのだという。

トランペットソロを健吾が吹く。それを合図に、泰徳はユーフォに持ち替える。最初にオーボエソロがあり、それから泰徳の出番だ。市民会館と言うだけあつて、響き心地が相当いい。泰徳のソロがこだまし続けた。

タンバリンとスネアの変拍子のリズムに乗せられて、アルトサクスが出る。間を空けず泰徳のオーボエが入るが、ずれが全くない和昌との掛け合いも完璧である。クラリネットのメロディーが登場したところで、泰徳はトランペットに持ち替える。

第1主題、トランペットは変拍子が進む中、抜群の発音で盛り上げを最高潮にすると、それに流されるように木管群がスケールを吹きこなす。これを2回繰り返し、リズムの安定した第2主題へと移る。

そして変わって第2主題。ここは5/8拍子のみ出てくる、第1主題に比べると遙かに吹きやすいところだ。大西先生は、『ちよつと変わった2拍子やと思って吹け!』と言っていた。しかしここは

泰徳の出番がないので、ちょっと退屈なところ。

泰徳のオーボエソロのつなぎで、後半『アラギアス山』に移る。ここでの泰徳の担当は、ユーフォニアムのみ。未来に悪い気もするが、指示された以上、吹かないわけにはいかない。元々歌心のある泰徳は、こういうバラードやレガート系の曲を作るのが好きだった。もちろん演奏するのも好きだが、こういう簡単などころになるほど表現が難しくなる。しかし泰徳はそれを完璧としかいえないほどの技術と表現力で見事こなしている。未来はそんな泰徳を見て、少し悔しくなった。

いよいよフィナーレ、『Go Go』。200小節以上を演奏するこの楽章は、テンポが速い上に技術が必要とされる。とくにメロディーラインはタンギングの切れの良さが要求される事が多い。ことのほかチューバは、目立たないわりに注文が多いところとして有名であった。

しかしそんなチューバ担当のはずの泰徳は、トロンボーンを構えている。たった4つの音だけのために、本気を入れて練習する。横にいる樹里には、ばかばかしく思えた。いつものように、ユーフォとシロフォンのユニゾンからトロンボーンとトランペットが景気付けに気持ちよく音を飛ばす。すぐさまミュートトランペットに持ち替え、炸裂するホルンと共に8分音符を静かに連発する。

そして中間部分。ここからのオーボエは斎木高校の早苗に任せ、チューバを担当する。実はこの前の合奏の時、大西先生から『後半部分は盛り上がり欲しいから、チューバを担当して欲しい』という指示があった。勇ましくトランペットが叫んだところで、中低音の見せ場。上昇から下降へのメロディーが地を響かす。それにかぶさるようにして高音楽器が乗っかり、いよいよフィナーレに突入する。

再現部。泰徳は未だチューバを担当する。8分音符で書かれたこ

の楽章の刻みは、少し短めに演奏する。かといって4分音符はというと、テヌートが付いているので長めに吹かなければ成らない。極端に言えば、8分音符は短く、4分音符は長く吹くといったところだ。再び上昇下降のメロディーが炸裂し、トランペットの高音域が泰徳の頭上を貫く。そして最後は低音の8分音符のインターバルとトゥッティの和音4つで終了だ。

「よし、15分休憩！」

大西先生の合図で、メンバーの口々から溜息が漏れる。

「やっぱり市民会館っていいですね」

「ほんと。県大会の会場に選ばれるだけあるわ」

「これが県民文化会館だったらどうなってたのかしら？」

「それはヤバイでしょう……」

珍しく、弦バスとユーフォ、そしてチューバパートが固まっている。計8人で何を盛り上がっているかと思えば、先ほどのアルメニアンのことだった。

「アルメニアンって、結構簡単だよ」

「それは慣れたからですよ……」

余裕をかます美佐に、美奈が苦笑した。

「それにしても、泰徳君のアラギアス山は痺れたわ！」

「いや、それ程でもないですよ」

「それ程でもある！ ジェラシーだわ」

そう言っただけ、美鈴はハンカチをかんだ。まるで何処かのヨーロッパでありそうな、貴族の物語に出てきそうなシーンだ。

「大げさですよ、外田先輩……」

それを見た未来が頭を抱える。

「だけど、泰徳君がオールマイティー奏者になろうとは」

「思っても見なかったですか？」

「もちろん！」

サッパリした美鈴の反応を目の当たりにして、ガクツとなる泰徳。

「でも、どうしてオールマイティー奏者なんかになったの？」

「あ、それは話が長くなるので控えます」

「どうして？」

「どうしてもです！」

「先輩を押しつけてソロやるとか、凄い事なのに」

「でも、ちょっと悪い気がするんですよね、先輩たちに」

「どうして？」

そう聞かれて、泰徳は渋々と自分の過去を話し始めた。

ジョイントコンサート本番まで、あと 8 日と 1 時間 30 分。
卒業式演奏本番まで、あと 19 日と 1 時間 30 分。

第19楽章 「初ホール練習 中編・下」

「実は、自信がないんですよ……」

この言葉で、泰徳の話が始まった。発端は先ほどの話にも出てきた『泰徳がオールマイティー奏者になった理由』であった。

「自信がなかったって、何が？」

「自分の技術力に対する自信ですよ。勿論自分の技術を過剰評価したり、自惚れたりした事はありません。ただ、立石先生からこの話を持ち出されたとき、戸惑いは隠せませんでした」

泰徳の周りにいる全ての人が、黙って話を聞いている。

「もし自惚れるような事があれば、部活は辞めてもいいと思っただけです。だけどそんなある日、うちの学校の吹奏楽部に所属する、浜口 愛っていう厄介なサックス奏者がいましたね」

「厄介なつて、どのくらい？」

めぐみが興味津々に尋ねる。

「まあ、話をきいてればわかります」

泰徳はそう流し、話を続けた。よっぽど愛に対するトラウマがあるのだろう。

「ある時、僕を呼び出してこう言っただけです」

固唾を呑んで発言を待つ Bass パートメンバー。そして泰徳の口から発せられた言葉は、想像を絶するものだった。

「“低音なんていても居なくても一緒なんだから、存在感なんか最初っからないのよ”と……」

それを話し終えた後、泰徳は堪えきれない涙をタオルで拭った。

「あれから毎日考えました。辞めた方が良いのかどうか。実際、どんなに練習を頑張っても怒られるだけです、それを相談したところで話になりません。『怒られるってことは、まだ練習が足りないんだ』の一言で終了です」

初めて聞かされる泰徳の嘆き。あの明るい笑顔の裏にこんなに暗い

気持ちがあつたとは、誰が想像できただろうか。

「そして浜口さんの発言から丁度1ヶ月が経った頃です」

「オファーが来たのね」

美奈の言葉に、静かに泰徳が頷く。

「その通り。でも、その日までのこともあつて、答えるのはちょっと戸惑いました」

これが丁度、泰徳が最初に発した言葉の理由付けだ。確かに、これほど複雑な環境で揉まれていると、戸惑うのも無理はない。

「じゃあ、決定した理由は何？」

よく考えてみれば、本題はそこである。泰徳はすこし言葉を詰まらせたが、少し考えて校答えた。

「音楽が好きだったからです」

この一言で、みんなが考えさせられた。果たして自分は、何の目的でこの吹奏楽部という文化部に所属しているのか、意識したこともなかったからである。

「音楽は、音を楽しむと書きます。まさにその通りですが、今の吹奏楽は同だろうと考えた時に、それは絶対に当てはまらないと思いました。何故なら、今の吹奏楽部はコンクールやそういう本番だけよければいいと思ってるからです」

この言葉は、絶対に今いるメンバー全員の胸を貫いたに違いない。

泰徳でさえ、自分で言った事が予想以上に胸を貫いた。

「入部当時、先輩たちが曲練習を頑張っている姿を見て、なぜコンクール如きにこんな事が出来るのか、と思ったことがあります。でももうすぐで後輩が出来る今、その意味は少しだけ判ったような気がします。でも……」

泰徳は再び声を詰まらせた。言いにくいことなのだろうか、中々口を開かない。

「泰徳君……」

晴香が心配そうに顔を覗きこむ。そしてやっと口を開いた。

「コンクールだけでいいんですか？ 熱中するのは。定期演奏会だ

けですか？ 楽しめるのは。僕は、吹いて奏でて楽しむから吹奏楽だと思っています。でもさっきまでの合奏を見ている限り、楽しんでいるとはとてもじゃないけど言えない。何だか吹きにくいです。今までちょうど1年間チューバをやってきて、マンネリ化してしまっただけか、とうとう承諾してしまいました。でも、色々な楽器に触ることで、役割、音色、存在感がそれぞれ違うんです。音楽を楽しむって言うのは、そういうことじゃないんですか？」

沈黙が続く。何を理由に自分がこの楽器を担当しているのか、分からなくなってしまった。勿論、やりたいと言ってチューバやコントラバスをやる人間は数少ない。だからと言って、それらの楽器を嫌う人も数少ない。

泰徳自信、チューバと言う楽器には目も触れたことが無い。しかし、あの論争があったからこそ、今の自分があるのだと思える。チューバがどんなに目立たなかつたと、どんなに馬鹿にされようと、泰徳は構わなかった。楽器を愛する気持ちは変わらないが、周りの状況でやる気というものは変わってくる。そういうものを、泰徳は伝えたかったのではないかと、心底メンバーたちはそう思った。

「……泰徳君の気持ちは分かったよ」

「うん。ちよつと生半可だったのかもね。考えが」

「上手いと思っちゃそれでお終いなのにね……………」

皆難しい顔をしている。泰徳はえらそうなことを言い過ぎたかと、後悔した。するとそこに美奈がやってきて、

「泰徳の言ってる事は間違いじゃないと思う」

「中井……………」

「私も考えちゃった。何のために弦バスしてるんだろって。でも、結論はやっぱり、楽器と音楽が好きだからなんだよね！」

「……………」

「私も言い過ぎたと思う。泰徳があそこまで頑張ってるって知ってたら、あそこまで言う事も無かったのにね……。ごめんね、泰徳。ごめんね……………」

美奈の目から、次々と涙が溢れてくる。それは、泰徳に対する罪悪感と責任感、そして自分の無力からくるものだった。

「うっん、大丈夫だよ。俺の実力は所詮そんなもんだっただってことさ。中井には何の罪も無いよ」

そう言つて、泰徳は楽屋へ去つていった。

「泰徳君つて、意外と堅実なのね」

「硬派だから。仕方ないよ」

「でも、確かにそうなのかも」

「うん。泰徳君の言つてたことに、間違いは無かったですよね」

口々に自分を省みる B a s s パート。未来や美奈は、泰徳の精神的な面での成長をまた1つ見届ける事となった。

今日もまた、泰徳は少し上達し、成長する。

ジョイントコンサート本番まで、あと 8 日と 1 時間。

卒業式演奏本番まで、あと 19 日と 1 時間。

第20楽章 「初ホール練習 後編」

休憩終了で、合奏の後半が開始する。といっても、あと1時間しかないのでポップスをやることになった。それはいいが、泰徳のあの話の後でポップスは少しやりにくい。話し合いの末、野球件ファンタジーをすることになった。

野球ファンタジーは、この物語の舞台にもなっている愛媛県松山市では有名な定期演奏会『アイレックス ILEX コンサート CONCERT』の十八番の一曲である。この定演をしているのは、県内でも随一の実力を誇る、県立伊予高等学校。作曲は別の学校の音楽教諭が担当し（プライバシー権より、名前は載せない）、初演はこのアイレックスで伊予高校が行った。メロディーは、ご存知の「野球するなら こういう具合にしゃさんせ」というリズムと、現代の野球拳のメロディーを組み合わせたもの。いわゆるメドレー形式なのだが、これはオリジナルパートがしんどい。トランペットの最高音はハイCということや、チューバも殆ど休みがない。パーカッションに至っては、ずっと叩きっぱなしである。

「じゃあいくぞ、踊りつきで」

そう、この曲には踊りがあるのだ。楽器の大小を問わず飛び跳ねたり、動き回ったり。曲の描写を入れると混乱する人もいると思われるので、あえて描写は入れない。ここからは、低音パートや全体の踊りに関する苦勞をお届けする。

「あ、美奈ちゃん、もうちよつと右。ああ、そうそう」

場所は第4楽屋。低音パートのみが集まり、踊りのチェックの真っ最中だ。とは言っても、楽器のサイズが並外れに大きいので、ぶつける危険も大きい。

「ああ、危ない！ 全く、こっちがハラハラする……」

晴香は額に流れる嫌な汗を拭いながら、手拍子と共に熱血指導を繰り返す。幸いチューバ奏者が扱っている楽器が全てロータリー仕様だったので、持ち上げる事に支障はなかった。とはいっても、10kgを越す鉄の塊。中学1年生の泰徳にとっては、少し重い荷物だ。「頑張つて！ 折角選抜に選ばれたんだから」

「はいっつ！」

手拍子をしながら、エールを送り続ける晴香。泰徳もそれに答えようと、必死になる。が、中々上手くいかない。泰徳はもどかしさを感じていた。

「ああ……、もうちよつとなのにね」

「すみません……」

「謝ることはないのよ。まだ1年生なんだから」

『まだ1年生なんだから』。この一言が、泰徳にとってどれだけ辛いかは分からないだろう。責任感を人一倍強く持つている泰徳からすれば、この一言はとても情けなく聞こえるのである。自分はもう中学2年生に進級し、後輩も出来る。そんな人が、『まだ1年生なんだから』と同情の言葉を掛けられては、泰徳のプライドが許さない。

「ん？ どうしたの？」

「あ、いえ、なんでもないです」

「あ、そう……。じゃ、続けるわよ」

「はい……」

泰徳の返事を聞いて、晴香が再び振り付け確認を開始する。未熟児で生まれてきた泰徳は、周りとは比べると筋肉や骨の発達は少し遅い。精神年齢や脳の機能に障害はないのだが、やはり予定日より2ヶ月

も早く生まれてしまうと、身体的な成長の遅れが出るようである。

泰徳は悔しかった。

「ここ！ 体重持っていられないのよ！」

そう言った矢先、泰徳の体が後ろへ傾いた。

「あつとお！！」

それに早めに気付いた晴香が、支えに入る。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「そう、良かった。ここは私たちでももって行かれそうになるところだから、気をつけてね」

「はい」

泰徳は溜息をついた。何て自分は頼りないのだろうか。いや、なんて自分は精神的にも肉体的にも弱いのだろうか。こうして泰徳は徐々に自分を責めていった。その時だった。

「そんな事言わないのよ！」

さつきまで穏やかだった晴香の口から、罵声が聞こえてきた。

「そんな事言つてたら、他のメンバーに申し訳ないと思わないの？」

晴香の怒りの矛先は、拓也に向けられていた。

「大体、なんで楽器がもてないっただけで自信なくすのよ?!」

「でも、僕には力がないし、上手くもないし、何の取り柄も無いから……」

「じゃあ聞くけど、何で選抜に選ばれたの？」

「え？」

「『え?』じゃ無いわよ。何で選抜に選ばれたのかって言うてるの」

「それは…先生が……」

「先生が何よ？」

「先生が選抜に入れるって……」

「じゃあ、それは先生が貴方の実力を認めて言ってる事じゃない」
泰徳はドキツとした。実際拓也と同じ考えを持っていたし、自分が選抜に入って何か得する事や、役立てる事はあるのかといつも疑問

に思っていた。しかしそれが今、晴香から拓也に対する説教でようやく紐が解けたような気がした。

（そうか、先生が僕を認めたから……）

「う……。それは……」

「じゃないと、選抜になんか絶対入れないわよ！」

「……はい……」

「もう！ しっかりしてよ！！」

晴香がその場を離れる。

「はあ……。僕ってダメだなあ」

溜息をつく拓也に、泰徳はこう言葉をかけた。

「そんな事無いですよ。あなたは先生に認められて、選ばれた人材なんですから」

この言葉で、拓也や泰徳自身、どれだけ励まされたかは想像に難くない。

この練習のおかげで、今はこうして楽しみながら演奏し、踊る事が出来る。泰徳はそれを気付かせてくれた晴香に、心のそこから感謝するのであった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 8 日。
卒業式演奏本番まで、あと 19 日。

第21楽章 「プライベートな泰徳」

翌日。今日は珍しくオフ日だ。その代わり、明日からは物凄く厳しい練習が待っている。泰徳は机の上に置かれたコンボにiPodを設置し、美奈相手に曲を聴きながらメールをしていた。無論、泰徳のiPodにはオーケストラか吹奏楽、または合唱の曲しか入っていない。根っからのクラシックオタクだ。今日はメールと言う視点で、泰徳と美奈のやり取りを感じてもらいたい。

―明日から練習厳しいらしいぜ―

―当たり前よ！ 本番まであと1週間しかないんだから―

そうだった。泰徳はふと思い返してみた。ホール練習が始まったのは、つい昨日のこと。それまでは週に一回合わせるだけで、ろくな練習はしていない。だが曲にはなっている。

「不思議だよなあ……」

そう呟いて、返信メールを打った。

―俺ら、全部で何日くらい練習した？―

返信がそこで止まった。恐らく、美奈もその日数を数えているのだろう。待つこと10分。ようやく返信が返って来た。

―3週間ちょっと―

「ってことは21日か……」

泰徳は『海へ……吹奏楽の為に』に酔いしれながら、メールを打つ。

―でも曲になってるよね―

―そりゃ、選抜チームだから―

―だよなwww―

―でも泰徳って、とことんオタクよね―

―何の?―

―クラシック―

「ふっ……、そうだなあ」

思わず噴出す泰徳。とはいいつつも、自分でもつくづくバカが付くほどクラシックオタクだと思うときがある。J・POPには悉く興味が無いし、知っている曲もはるかにクラシック部門の方が上だ。実際問題、泰徳のiPod容量の8割近くがクラシックを占める。

―自分でも思い返すときがあるよ―

―どうして?―

―だって、J・POPの話になったら全然付いていけないし―

―確かに、(。ω。)/―

「確かにって何だよ!」
思わず突っ込んでしまった。よく考えれば、最近泰徳は大口を開けて笑うことをしなくなった。何故だか自分でも分からないが、精神

的に不安定なのは分かっていた。その理由はただ1つ。『選抜メンバーである事のプレッシャー』だ。

—でも今ずっぱープレッシャー感じててさ—

—どうして？—

—選抜メンバーじゃないやつのこと考えたら、ちょっと……—

—そんな事気にしてたの？—

—気にするよ！—

—どうして？—

泰徳は返信に困った。どうしてだろうか、選抜メンバーではないチームのみんなのことが気にかかってしまうのは。心配ではあるけれど、そこまで意識したことは正直言って無かったような気がしないでもない。

—分かんない……—

—分かんない？—

返信が来たのは、泰徳がメールを送ってから約30秒後。この速さでこの文体が送られてきたと言う事は、美奈は携帯電話の向こうでじれったそうにしている証拠である。泰徳は携帯を持っていないので、パソコンだ。

—うん……—

—まあ泰徳のことだから想像はしてたけど—

—ごめん……—

—別にいいよ。もう慣れたし。それより本番頑張つてよ—

—ああ—

—絶対だよ？　メンバーの大黒柱なんだから—

—分かったよ—

—うん。ちょっと安心した。じゃ、レッスンだからバイバイ(\$・・

)/ —

—うん。じゃ—

「ふう……」

泰徳は溜息をついて背もたれにもたれた。

「なんか、すっきりしたな」

美奈は泰徳にとって、吐き出し口のような存在であり、親友である。持つべきは親友だなと、このとき改めて感じさせられた泰徳であった。

ジョイントコンサート本番まで、あと 7 日。

第22楽章 「プライベートな美奈」

同日、コントラバス弾きの美奈は家でCDを聞きまくっていた。というのも、クラシックに限る。今に分かった事ではないが、バスパートのメンバーは相当なクラシックオタクばかりである。

「はぁ……。このCDも飽きてきたなぁ」

THE 課題曲（東京佼成ウインドオーケストラ演奏、山下 一史指揮：佼成出版社）を手に取り、はぁと溜息をつく美奈。

「仕方ない。メールでもすつか」

そう言つて、携帯電話を取り出す。

「つまらないです、先輩――」

返信を待つこと約310秒。返事が帰ってくる。

「どうしたの？ 美奈ちゃん――」

相手は美奈に面識があるようだ。

「なんかだるくって……」

「あれ？ 美奈ちゃんらしくない――」

「そんなこと言わないで下さいよ、秦野先輩――」

そう、メールの相手とは、言うまでも無くパーカッショニストの秦野 恵梨であった。

――どうして？ いつもの美奈ちゃんだったら元気がいっぱいなのに――

—つまらないんです……。音楽聴くのに飽きちゃったし—

—へえ、美奈ちゃんでもそんな事あるんだ。じゃあこの曲あげる！—

5分ほど経って送られてきた添付ファイル。美奈はそれを胸を躍らせながら開いてみた。音楽ファイルなので、開くのに時間がかかるが、美奈はそんな事は気にも留めていなかった。早く刺激のある曲が聞きたい。この一心だ。そしてダウンロードされた曲を聴いてみる。

「うわぁ……」

絶句した。恵梨から送られてきた曲は、『スカイ・ハイ』だった。
(曲目解説などには「つくん」さん著：奏「Kanade」参照のこと)

—聞いてみた？—

—はい！ いい曲ですね（・・）—

—でしょ、でしょ？！ いつか分からないけどやるかもって佐野先輩が言ってた—

—へえ……。上手く行くといいですね—

—もちろん！—

恵梨と出会って何年になるだろうか。美奈はアイスココアを啜った。
「私がピティナに初出場した時だから、小5か……。ということは」
そう。出会ってから今年で丁度4年目だ。

「もう4年も経ったのか……。早いなあ」

— そうですね、美奈ちゃんたちって今年のコンクール何するの？ —

— 自由曲はまだ決まっていなくていいんですけど、課題曲が4番になりそうです —

— …… ってことは、海へ？ 私たちと一緒にじゃん —

— え、そうなんですか？ —

— うん。3番じゃなくてよかったあ…。あれって弦バス難しくない？ —

— 難しいですよ……。スピツカート（1stシーズンコラム『Contra Bass』参照）が出てくるんですから（TQT） —

— スピツカートねえ……。今年はレベル高いなあ —

— 海へって事は、サックスソロは…？ —

— うん。もちろん佐野先輩だけ —

恵梨曰く課題曲の中で一番好きなのは4番だというが、美奈からしてみると個人的には1番『架空の伝説のための前奏曲』の方が好きだ。

「あのトランペットはもはや神よね」
そう呟きながら返信する美奈。

— オーボエメロディーとかはどうするんですか？ 最初の方の —

―フルートで賄うの。と言っても最初から原譜はフルートで書かれてるんだけど―

―じゃあオーボエはオプシヨンって事ですか？―

―うん。要するに入っても入らなくてもいいって事―

―何かかわいいそうですね……―

―そうだよね（・・・） あ、佐野先輩が呼んでる！　じゃあね！
！―

そこでメールは切れた。

「相変わらず忙しい人……」

クスツと笑って、コップを机の上に置く。その目線の先には、初めて公の舞台に立ったときの自分の幼い写真が飾られてある。美奈自身、顔が赤くなるのが分かった。

「今となっちゃ、やっぱり恥ずかしい……」

照れ隠しが上手く出来ない美奈は、そのままベッドに横になった。そのまま何時しか、美奈は眠りの波に飲まれていった。

第23楽章 「プライベートな未来 sub・兎と亀」

同日、ユーフォニアム奏者谷 未来の自宅では、楽器の音が鳴り響いていた。未来の家は泰徳の家の如く防音室は無く、一戸建てだが敷地面積がそれ程広くないので、楽器を吹く時間が限られる。

しかしこの日、未来が楽器を吹いているのは他でもなく泰徳のせいだった。というのも、未来は目立ちたがり屋なので、今回の初ジョイントコンサートは自分がソロを吹けるととても楽しみに期待し、そしてにわかに緊張していた。未来はそのソロ奪還を目標に、毎日唇が裂けるほど練習していた。だが突然、それを泰徳に奪われたのである。未来から見れば泰徳は初心者のチューバ吹き。それなのに一気にプロの座に着き、オールマイティー奏者と改称してさらには全ての楽器のソロを受け持つほどの実力者になっていた。未来はBassパート唯一の金管バンド所属者。そのことを棚にかけて高慢ちきなところがあつたのかもしれない。

「くそう……」

中々成功しない跳躍進行。泰徳のソロ部分である『ヘンリーマンシ―ニメドレー』の一節である。“酒とバラの日々”。これは最初、ホルンのソロで始まるが、途中からユーフォとの掛け合いになる。その役割を泰徳が果たすのだ。

しかしこれには跳躍進行が頻出し、あの泰徳でさえも吹きこなすのに2週間もかかったというから驚きである。

「まだ吹いてんの？ 唇切れるわよ」

「分かってる！」

「じゃあさっさと止めなさい」

「それは嫌だ！」

「じゃあどうすんのよ……」

呆れた声を出しているのは谷 雅子。^{まゆこ}未来のお母さんだ。

「成功したら止める！」

「絶対よ」

「うん」

そう返事し、再び吹き始める。

「あ、そくだ未来」

雅子が未来を止める。

「何？」

「何で今更そんなに練習してんの？」

いきなり核心を突かれ、戸惑いを隠しきれない未来。

「え……えつと……それは……」

「いやな事でもあったの？」

「ううん……別に無いけど……」

「じゃあ何で？」

答えたいが、なかなか言葉が出てこない。

「何か……泰徳に負けた気がして……」

「どうして？」

そう雅子に聞かれ、仕方なく未来は全てを話した。楽しみにしていたソロを、急遽泰徳に奪還された事、どこか劣っていないか心配な事、ユーフォ奏者としてのプライドがそれを許せないこと。

「ふーん。確かに泰徳君上手くなったもんね」

「そうだけど、めっちゃ楽しみにしてたのに……ソロ……」

「でもそれは確かに未来の方が何か足りなかったってのもあるかもね」

「……え……？」

「未来は金管バンドに入ってたから分かんないかもしれないけど、泰徳君は初心者。何もかも1から始めた子よ。それに比べて未来はどう？」

「……分かんない」

「そう。じゃあ聞くけど、未来は毎日欠かさず練習した？」

「うん」

即答である。

「休憩抜きで？」

「それは無理よ！」

正論である。どんなに鋼鉄級の唇を持っていたとしても、いつかは限界に達する。休憩は入れなければ一種の自殺行為と結びつく。

「休憩は何分くらい？」

「15分」

「何時間の練習に対して？」

「1時間……」

「泰徳君の練習時間は？」

「……2時間半……」

未来の言葉から段々と勢威が抜けていくのが感じられる。

「休憩は？」

「……5分……」

ここようやく未来は気がついた。なぜ泰徳がこんな短期間で急成長したのか。まず、練習時間もそうだが、休憩時間の比率が違う事である。

未来は1時間の練習に対し15分の休憩。即ち、1・25の比率になる。それに対して泰徳は2時間半に対して5分の休憩。即ち約2・083の比率になる。数字だけになって分かりにくい、要するに泰徳は未来の2倍練習していた事になる。

「やっと分かった？ ウサギと亀なのよ」

「ウサギと亀？」

「ほら、童話にあるじゃない。ウサギと亀が競争するやつ」

「あ……うん……」

「あれは結局どっちが勝った？」

「亀」

「でしょ？ 今の未来と比べてみなさい」

今の未来の状況は走るのが遅く、なおかつ休憩の多い最悪のパターンだ。それに比較して泰徳は、ハイスピードでなおかつ休憩も少ない。

「どう？」

「泰徳の方が優れてる……」

「でしょ。だから要は毎日の積み重ねよ」

「積み重ね……」

「そうよ。ちりも積もれば山となる！」

そう言々と雅子は買物に出かけた。

「ちりも積もれば山となる……」

未来は再び楽器を手に取り、演奏を再開した。

――泰徳！ アンタになんか絶対負けないから！――

泰徳に対する楽器吹きとしてのライバル心が芽生えたのは、いうまでも無い。

第24楽章 「ちよつとヤバくな? 発音編」

翌日。この日から、本番となる会場での練習が始まる。前回ホール練習をしたのは市民会館のメインホールであり、その後3人の先生が話し合った結果、『思ったよりホールが狭い』という理由から会場が変更された。そして新しく指定された会場が、ひめぎんホール（旧：愛媛県民文化会館）の大ホールであった。

県民文化会館大ホールは市民会館と同様、5階席まで存在する。しかし、幅が市民会館よりも広い為、聴衆及び演奏者もより広く収容できる。実際、県民文化会館大ホールが抱えられる聴衆は、最大で4,500人である。

「うわぁ……」

「無駄に広い感じ」

「確かに、これは緊張するかもな」

天井を見上げ、絶句する泰徳達3人。今日の合奏メニューは、風之舞とをどり唄のみ。どちらも課題曲であることから、指揮者を務める立石先生は相当な練習を重ねると思われる。

「ていうか、サービス良すぎじゃない？」

「そうよね。椅子だって全部並べてくれてるし」

「しかも数に狂いが無いって言う……」

泰徳は苦笑した。

「よし、皆一旦楽器を持って、席に座ってくれ」

そう叫ぶのは立石先生。全てが準備されているので、生徒は全くやる事が無い。ただ、先生の指示に従うだけになる。

「今日の合奏は風之舞とをどり唄だ。どっちも課題曲だから、コンクール練習だと思って臨むように」

「はい」

「それから、今日は1日練習だ。口がバテないよう、各自で管理しておく事」

「はい」

「じゃ、30分後に合奏を始める」

と、立石先生の合図でみんなが散る。そんな中、B a s s パートはアナリーゼに早速集中していた。

「じゃ、この小節のブレスはバラバラにとるってこと？」

「ええ。そうした方がバラけずにすむと思いますし」

晴香を中心として、風之舞のアナリーゼが着々と進む。一方その輪から外れているコントラバスチームは、ボウイングのタイミングを決めていた。

「じゃあここはアップね」

「でも先輩、そしたら音の頭がぼやけないですか？」

「そっか、ここ強拍だからね……。じゃあどうしようか」

「そこですよ。前の小節には休みないし……」

「じゃあこのアウフタクトでアップにして、それからダウンは？」

「そうですね、一回やってみましょうか」

こちらも着々と準備が進んでいるようである。アウフタクトに関しては、プラス魂のコラムを参照していただきたい。

「ねえねえ、1回パートであわせてみない？」

「あ、いいね。そうしょ」

晴香の提案で、風之舞のパート練習を行うことになった。

風之舞については以前説明したとおりであるが、低音パートは特に魅力的な動きをする曲でもある。作者である私自身、この曲は大好きである。

最初4小節のDの伸ばしは、晴香も美佐も細心の注意を払っていた。このセクションをまとめる最高学年として、それぞれのプライドが妥協を許さない。

「そのブレスって、ユーフォどうしてる？」

「ちゃんとバラバラにしてるよ」

「何か吸った時に妙な間ができるんだよねえ……。どうしてかな」

「もしかして、吸いすぎ？」

「うん、そうだと思う」

「じゃあカンプレでもう一回いい？」

「分かった」

実は、初っ端の出だしがこの低音のDから始まる。メロディーラインは8分休符を挟んでから出てくるので、聴衆がこの曲で一番最初に耳にする音がこのDと言える。あらゆる管楽器にも止められる『発音』の技術が、この曲の最初の一瞬で試される、とても恐ろしい曲だ。パート練習をしていると、後ろから樹里がやってきた。風之舞では、バストロンボーンを担当すると言う。

「最初の音がどうしてもコブ付くんだけど、どうやったら直る？」と半泣き状態でやってきた。

音のコブと言うのは、簡単に言うと業界用語である。通常の発音テクニクでは、整った状態で綺麗な音を出すのだが、コブが付いた状態では、その発音部分に雑音、もしくは爆音が入ることを言う。いわゆる『ボフツ』というやつだ。

「それってアンブッシュアが問題じゃないの？」

「私もそう思ったの。でも治らなくて……」

未来がまず、樹里の使っているマウスピースを調べる。

「YAMAH Aの5GS……。あんまよくないね。高音とか出にくいんじゃない？」

図星だった。樹里は元々高音域は苦手だったが、それ以上に高音域が出にくかった。

「他にマッピは無いの？」

「ううん、使っていないやつがケースに2個あるけど……」

「じゃあそれ持ってきて」

「分かった」

初代プラス魂でも触れたが、本来マウスピースと楽器、それと唇の相性は密接に関係してくる。泰徳も敏に適当に選定されていたために、苦手を中々克服できなかった。

「持ってきたよ」

「YAMAHAの3CとMiraphone soloか。泰徳、どっちがいいと思う？」

「え、俺?!」

「そうよ。どっちが向いてると思う？」

「チューバ吹き俺にトロンボーンの事言われても……」

「だってあんたオールマイティー奏者でしょ？」

「そうだけどさ……」

「だったら答えなさいよ」

未来にそういわれ、しげしげとマツピを見て泰徳は答えた。

「トロンボーンのマツピでMiraphoneを使うやつはそうはいねえな。何しろリムが丸すぎてファンファーレ向きの直管楽器には向いてないから……」

「でもチューバでMiraphoneって多くない？」

「ああ。でもそれは伴奏だからであって、ソロ向けじゃない。soloとは書いてあるが、これはジャズとかそっち系だろう。最も、俺の使ってるマツピはVINCENT Bach 24 AWだけだな」

「じゃあどうするの？」

「トロンボーン奏者は、YAMAHAが妥当じゃないか？ 高畑はどうなんだよ」

「私もYAMAHAの方が吹きやすい」

「だったら今度は5GSか3Cかってとこだよな。それは自分が決める事だ。あとお前に要求されるのは、^{テクニック}技術だけだよ」

泰徳はそう言っ、樹里にマウスピースを返した。マウスピースの詳しい説明は、後日執筆予定のコラムにて記載予定なので、それまでお待ちいただきたい。

「どうやったら上手くなるの？ 発音」

「練習あるのみじゃねえの？」

泰徳がそう言うと、樹里は黙り込んでしまった。

「ちょっと泰徳！ キツイわよ！！」

美奈が耳打ちした。

「何だよ、普通に言っただけじゃん」

「何言ってるの！ 樹里にはグサツと来たわよ、今の」

「そうなのか？」

「多分だけどね」

コソコソつとやり取りをして、泰徳がその場を立った。

「いい練習方法あるから、付いて来い。時間ないケド」

合奏までの時間が少ない中、泰徳は樹里を楽屋へと連れて行った。

第24楽章 「ちょっとヤバくね? 発音編」(後書き)

久々の更新です。

ちよつとスケジュールがぎゅうぎゅうなので、時間が空き次第更新いたします。気長にお待ちくださいm(´`)(´`)m

第25楽章 「ちよつとヤバくね? 追い討ち」

迫りくるGPを控えた中、泰徳と樹里は楽屋にいた。というのも、事の発端は『風之舞』におけるタンギングができないと、樹里が泰徳に泣きついてきたのだった。

「GPまであと何分だ?」

「30分よ。ごめんね、私なんかの為に」

「いいんだよ。困った時はお互い様さ」

と話しつつ、泰徳は1つの教則本を取り出した。

「何それ?」

「コープラッシュだよ」

黄色の表紙に、赤の文字で“Choppasch”と書かれてある。泰徳はそれをパラパラと捲り、一部を演奏するように指示した。全部で60曲ある中の、泰徳が選択したのは3番だ。

「sempre stacc.^{センプレ}だ。やってみて」

して』という意味であるが、特に“音を切り離す”という表現に関しては、人によって感じ方が様々なようである。

「中々難しいね……。泰徳は、これを毎日やってんの?」

「ああ。去年のアンコンの時に、変な爺さんに勧められてさ」

「ふうん……」

相槌を打ちながら、樹里は演奏を続ける。だが、これが中々上手くいかない。

「何でだろう……」

困惑する樹里に、泰徳が助言する。

「タンギングの基本は、腹とアンブッシュアだ。腹の支えと、アンブッシュアの正確さ。この2つのどちらかが欠けていれば、タンギングは上手く出来ない」

そついうと、泰徳は樹里にマウスピースだけをはずすように指示し

た。

「これでどうするの?」

「決まってるじゃないか。タンギングの練習だよ」

「え、どうやって……」

樹里は小学校の頃金管バンドに所属していたが、実はマウスピースのみでタンギングをしたことは生まれてこの方、やったことが無い。「まずこうやってマウスピースを当てて、四分音符でやる」

「うん」

「次に八分音符」

「次は3連符ってこと?」

「ああ。最終的に16分音符が目標だ」

「分かった、やってみる」

と言って挑戦してみる樹里だったが、出来ない。

「うん。基礎がこうやってあいまいだから、楽器つけても出来ないわけだよ」

「そうなんだ……。ありがとね」

「いいってことよ。さ、ホールに急ごう」

「うん」

約20分の指導を終え、2人はホールに向かった。

「あ、泰徳。上手くいった?」

松脂を念入りに塗りながら、美奈が話しかけた。

「何とかね」

「ふうん。ま、樹里は飲み込み早いから大丈夫やろ」

「だといいんだけど……」

「大丈夫だって」

「そうだな。そういうことにしておこう」

少し納得がいかないものの、樹里自体に備わる実力を完全否定するわけにも行かず、美奈の発言に対して肯定した。

「あ、そうそう。聞いた?」

「何を？」

「佐野先輩たちが来るって」

「また?!」

「うん。でも仕掛けたのは未来だよ」

「何で？」

「未来って、佐野先輩の事が好きらしいから」

と、含み笑いしながら言う美奈。しかし、翔には既に朝倉 陽乃という立派な彼女ガールフレンドが存在している。

「でも、翔って彼女いるよな」

「そこなのよ」

「と言いますと？」

「未来って沈みやすいでしょ？ だからむやみやたらに『佐野先輩には彼女いるんだよ』って言ったら、立ち直れなさそうな気がして」

「あ、それもそうかも」

そう言って、泰徳は未来のほうをチラツと見てみた。なんとも幸せそうな顔をしている。これもまた、翔という存在が及ぼす影響なのだろうか。

「それともう1つ」

「まだなんかあるの？」

「桜田中央高校の吹部が来るらしいよ」

「桜田中央っていったら、S県の？」

「うん」

「何の為に？」

「それがまだハッキリしないのよ。ま、愛の情報だから鵜呑みには出来ないけど」

「そうなんだ……。でも気になるなあ……」

「あまり気にしない方がいいんじゃない？」

「でも、S県って言ったら結構遠いよな」

「あ、言われてみれば」

「そんなところから地域のジョイントコンサート見に来るって、何で

だろ」

「そこまで言われたら気になっちゃうじゃない」

「だから気にしてるんじゃないか」

S県所在の桜田中央高等学校は、最近常套中学校でも話題の高校であった。まだ設立されてはいないが、後に完成すると言っ新設の学校で、こちらがジョイントコンサートをやるように、向こうでは地元和学校とチャリティーコンサートなるものを2007年に開催決定しているという噂が立ち、まだ双方練習を始めていないにも関わらず、大騒ぎになった事があった。何しろ今は2005年。2年先の話を次々と噂を立てて話しているのだから、事実無根にも極みがかつていた。しかしこれは、全て愛の情報である。

「私たちも結構バカな真似したわよね」

「ま、俺は興味なかったけどな」

「何だよ」

「まあ、桜田中央っていったら、建つてもないのに向こうじゃ少し名が売れてるじゃないか。でも、そんなことに気をとられてちゃこっちが間に合わないだろ」

「ふーん。泰徳って結構シニールなのね」

その美奈の問いかけに対し、泰徳は静かに鼻で笑った。

GPまであと5分を過ぎた。みんなの緊張感もだんだんと上がってきているのを、泰徳は身をもって感じているところだった。

第25楽章 「ちよつとヤバくね? 追い討ち」(後書き)

コラボ企画第2弾!

Askerrさんの小説 『SAKURA WINDS』とのコラボが決定いたしました。誰が出てくるかは、2つの小説を読み比べて楽しんでください。

これからは定期的に更新するつもりなので、よろしくです。あ、あと2作品の方もご贖い(・・・)

第26楽章 「日本人 和風 出来て当然？」

先ほどの騒動から落ち着きを取り戻し、遂にゲネプロを迎える選抜メンバーたち。本番さながらのリハーサルということもあって、ジョイントコンサートが行われる愛媛県民文化会館でのゲネプロとなる。最初の演目は風之舞なのであるが、静かに始まる曲の為、奏者に対するプレッシャーが計り知れない。今までグングンと力を付けてきた泰徳でさえも、この緊張感には耐え難いものがあつた。

「お、みんな言い顔つきしてるな」

指揮は立石先生。今までの合奏の時とは違い、表情は柔らかいが、オーラが違う。妥協を許さぬといったところか。これは完全に本気モードの立石先生だ。

「風之舞、最初から」

「はい」

立石先生の合図で、合奏が始まった。

冒頭。ここは中低音のD、つまりレの音で始まるユニゾンに飾りが付くわけであるが、このバランスがどうもこうも難しい。またこれに続く8分音符と飾りの変奏による掛け合いも、これもまた技術を要するものである。課題曲としては、珍しい和風の音楽である傍ら、日本人であるからこそ試されるであろう“和の心”がふんだんに盛り込まれた、きわめて日本人を試すほかに無い課題曲である。

豪快なサスペンドシンバルの1打と共に、本格的な楽曲の開始を告げる。先ほどの掛け合いを保ったまま、響き線スナッピーをロックしているスネアドラムと金管楽器が、絶妙にマッチしている。実はここ、立石先生とメンバーとの間である提案があつた。その提案と言うのが、スネアドラムの代わりに水軍太鼓で使用する『締太鼓』を使つてはどうかというものだった。この曲は上記に記したとおり、和風のものである。そのイメージに極限まで近づけようと、立石先生は

考えての事だった。今回の合奏は、その締太鼓との相性の聞き分けも兼ねて行っているのである。さらにユーフォニアムが比較的目立つこの曲では、周りとのバランスやホール内における響き方、最終的にはベルの向きまで徹底的に研究を重ねられている。この曲の核と言っていい打楽器に対しては、頻繁に使用する『クラベス』という楽器の変わりに、今回は拍子木を使用している。メロディーを担当するフルートやピッコロにいたっても、『篠笛の感覚で』という指示が出された。下から上まで、隅の隅まで和風にこだわった風之舞になるに違いない。

さて場面は変わって中間部分。低音のシンコペーションリズムと裏で奏でられるトロンボーンの微妙なグリッサンドが、曲の雰囲気をはがらりと変える。ここからは金管楽器が主体となり、メロディーを奏でる。ミニートトランペットから出る素朴な音色と、それに時々交わる中音域楽器の柔らかな響き、そして曲の壮大さを十分に引き出す低音の支えと対旋律。楽譜は単純なのだが、このように簡単な楽譜ほど中に奥深いものが秘められている。立石先生は以前そう言った。

そしてフィナーレだが、ここで再び冒頭のメロディーが颯爽と駆け抜ける。風之舞はA↓B↓Aのメロディー方式で、最初と最後が同じメロディー構成になっており、さらに後者はちよつとアレンジされた形になっている。これを俗に“ロンド形式”というが、これにおいて再び出現した同じ場面の事を『再現部』という。立石先生曰く、この再現部が冒頭よりどのようにランクアップしているかが演奏の鍵なのだそうだ。聞いてみると確かに、メロディーの役割をしているのが、金管と木管、交互になっているところが多い。低音部の支えの動きも激しくなっており、息継ぎすら無理矢理にしなければならぬようになっていく。そして油断をしてはいけないのが、曲の終わりに向かう中低音のシンコペーションである。ここは楽譜

上タイ（同じ音の高さを結ぶ記号）で表記されている為、テンポのとり方が非常に難しい。ましてや低音楽器は物理学的にどうしても音が遅れて聞こえる楽器なので、早めに発音しなければならぬ。管楽器奏者にとっても、打楽器奏者にとっても、この曲は地獄としか言い表せないような和風の課題曲なのである。

「太鼓、どうしようか」

通しが終わり、立石先生が考え込む。

「もう一回冒頭。スネアで」

立石先生の指示で、部員たちはAから4小節間、冒頭部分を演奏する。

「次、締太鼓」

続いて締太鼓での演奏。ホールが県民文化会館だけに、響きが全然聞こえない。これは困ったもんだと、立石先生は大西先生を呼び出した。

「1階の一番奥の真ん中の席に座ってもらって、聞き比べしてもらえませんか？」

大西先生はもちろんと、快諾してくれた。そしてさつきと同様、2種類の演奏を大西先生に聞かせた。

「どうですか？」

「せやな……。どっちもええ味出しとんねんけど、いまいちこう、お互いに足りん部分がある気がするな。いつその事、両方叩いてみれば？」

それは思いつかなかったと、立石先生は手の開いている打楽器奏者に締太鼓の演奏を命じた。そして両方叩いて、大西先生の感想を再び伺うと、

「うん、なかなかええんとちゃうの？ 双方が個々の弱点を上手くカバーしてる」

「そうですか、ありがとうございます。じゃ、これでいこう」

「はい！」

立石先生は、ちらつと腕時計を見た。

「10分休憩！ 後、をどり唄」

「はい！」

1曲目のゲネプロが終了した。2曲目のをどり唄は、これまた和風の課題曲である。同ジャンルの風之舞にどのように対抗して違いを生み出すのか、これから楽しみである。

第26楽章 「繊細さ＋大胆さ」個性」

休憩を挟み、をどり唄に移る。指揮は大西 智彦先生。ここで、メンバー全員が目を点にする発言を、大西先生はスラッと言い流した。

「今からをどり唄の合奏を始める！」

「はい！」

「……とその前に、みんなに話しておかなければいけないことがある」

不思議そうにメンバーたちは首をかしげる。

「本当は本番が一週間後のはずだったんだが、急遽、明日行われることになった」

ホールがざわめきに包まれる。それも当然の事、このまま順調に行っていたれば本番は1週間後と余裕を持って練習できるはずが、急に6日も縮んで翌日が本番になるとは誰も予想しなかった。あまりに唐突過ぎる話のほか無い。

「その理由だが……」

騒ぎ続けるメンバーたちを抑えようと、大西先生は急いで弁解に入った。

「チューバを担当する西山さんの祖母さんが急逝した。葬式とかお通夜とかの関係で、このままの予定の1週間後ではステージに乗れない。そこで西山さん本人に聞いたところ、どうしても今回の演奏会には出席したいそうだ」

少しずつ騒ぎが静まっていくのを、大西先生は感じた。大西先生は続ける。

「そして急ではあるが、このホールを使える休日进行调查したところ、明日しかなかった。と言うわけで、明日が本番になる。みんな、すまないがついてきてくれ」

こう弁明する大西先生の顔は、とても切ない表情をしていた。大西

先生は当然、許してくれないだろうと思っていた。だが、メンバーたちはすぐさま楽器を構えた。

「先生、大丈夫ですよ。私たちはどこでもついていきますから」
そう言うのはトロンボーンの卯月 美佳。

「私も同感です。急ぎのようなら、さっさと始めてさっさと終わって、明日の本番に備えて早く休みましょう」

続く井伊元 梨花に押され、大西先生は勢いよく指揮棒タクトを振り上げた。

「よし！ をどり唄、行くぜ！！」

「はい！！」

をどり唄。これは前話で題材に取った風之舞と同種の、『和風課題曲』である。だが、風之舞と違うのは、曲の雰囲気だけでなく、それに含まれる曲の背景だ。静かなミュータントランペットから始まるこの曲は、打楽器とメロディー、そして対旋律を除くと、他の楽器は全て同じリズムを刻んでいると言う、隠れた面白さのある課題曲である。そして何より『をどり』と言うからには、夏祭りの雰囲気演奏する事を大西先生は何よりこだわっていた。この曲における重要ポイントはただ2つのみ。楽しさと豪快な演奏である。だが、この2つの割合が、曲の出来を左右するのは言うまでも無い。

曲の冒頭。前記で述べたように、ミュータントランペットから始まる。しかしこれは、順々に音が重なっていくように仕組まれているので、音程のずれは許されない。あの優しい大西先生が怒鳴ったのもこれが原因だった。クレッシェンドを経てサスペンドシンバルを合図に曲が盛り上がるのだが、ここはまだベースが伸ばしなので、目立った動きは無い。しかしこの課題は、多くのパートに記載された“装飾音符”である。これがなかなか厄介なもので、リップスラーをある程度極めておかなければ、たとえ装飾音符といえど音を外す危険性が極めて高い。常套中学校で一躍話題となったトランペ

ツト奏者、峰 昭二でさえも、装飾音符については相当な苦勞を重ねてきた。

第2主題。始まりを告げるのは、締太鼓を表現した無響き線（ソ・スナッピー）のスネアドラムだ。ここは純和風にはこだわらず、ちよつと輕めの和を表現したいがための策略であつた。そのスネアを基準として様々な打楽器が上に重なる。そして壮大な『祭り』が始まるのだが、このベースはなんとも楽しいものである。この曲において、『ハモリ』というのは非常に重要な役割になう。この曲は分かる人には分かるが、殆ど気付く人はいないだろう。メロディーを除く伴奏系のリズムは、全て一緒なのである。疑う方は、原曲を聞いていただきたい。

そしてさらに珍しい事に、この曲は低音が目立つ事が多い。この第2主題からでも、メロディーを奏でる部分がある。しかしこのメロディーの奏で方が問題で、低音楽器に珍しいメロディーだからと言つてはじけ過ぎると和風のイロが台無しになるし、かといって配慮しすぎるとこれもなんだかしっくり来ない。泰徳は今回の合奏を通してチューバと言う楽器を出来るだけ究めようとしていた。異動した当初はチューバはあまり好きではなかった。だが、敏や成長した翔、そしてその仲間たちに出会つたことにより、今はチューバが大好きであり、伴奏楽器としての役割をきちんと果たすべき、重要な人間に成長しつつある泰徳には、自分自身に不満を抱くということが自然に出来ていた。もっと上に行きたい、上手になりたい、そう思うようになった。

中間部分。ホルンのソロから始まるこの部分は、最も繊細な神経を要される。特に注目すべき点は、ホルンと言う楽器自体が物凄く技術的にハイレベルな事である。ホルンは、『世界一難しい金管楽器』としてギネス・ワールド・レコーズに認定されている。そのような楽器を使いこなすだけでも素晴らしいと言わざるを得ないホル

ン奏者だが、それをここで試そうかと言わんばかりにソロが立ちはだかる。ホルンは楽器の特性やマウスピースの構造上、音を外しやすい。にもかかわらず、このをどり唄におけるホルンソロはタツカによる跳躍進行が含まれる。1音失敗するだけでも命取りの、この曲最大最悪の罠である。^{トラップ}

再現部。再び『祭り』を表現した部分だが、ここは以前に出ているテーマの変奏曲に過ぎない為、やはり何か違いを見せなければ面白くない。そこで大胆にも大西先生は、ここでスネアドラムを締太鼓に交代させ、スティックではなくゴム製のマレットを使用させた。するとなんと、和風の楽器からにわかに洋風の響きがするのである。この面白さを活用し、中低音の重厚なメロディーは3rdトロンボーンとバストロンボーンに重ねるだけにし、ユーフォニアムとそれ以外のトロンボーン奏者は休みに切り替えた。本来のコンクールなれば許されざる編曲行為だが、これらはコンサートだから許されることである。

こうして2曲目、『をどり唄』のゲネプロも終了し、次に控えるのは泰徳の持ち替えが待ち受ける大曲中の大曲、『アルメニアダンス』だ。

「はい」

「いい持ち替えタイミングだ。本番もそれで頼むよ」

「了解しました」

そう口で入ったものの、自分がどういうタイミングで持ち替えをしていたのか覚えているはずがない。泰徳は不覚にも、別のことを考えながら演奏をしてしまっていた。一生に一度の大きな間違いを犯してしまったと、泰徳は思った。だが、泰徳ほどの人物がこれまで思いつめられると言う事は、それほど《黒田 匠》という人物の存在が大きかったからかもしれない。

「どうしたの？ 泰徳」

ゲネプロを終え、泰徳の変な様子を目にした美奈が声をかけた。

「ん？ ああ……。黒田のことでちよつとな」

「黒田って、匠君のこと？」

「あいつのことをそんなに馴れ馴れしく呼ぶんじゃない！」

「あ……ごめん……」

泰徳が急に叫ぶ事は今までなかった事だ。そのおらび声を聞いて、未来が飛んできた。

「どうしたの？！」

「泰徳がね、匠君のことで相当来てるらしいの」

「松方中の黒田君？」

「そう。天才肌の……」

「でも泰徳がここまで追い詰められるなんてね」

「珍しいよね、何事にも動じなかったのに」

「うん……」

匠という存在に対する苛立ちを隠しきれない泰徳に、未来と美奈は不安感さえ覚えていた。今後泰徳が匠に対しどう立ち向かっていくのか、それも不安だったが一番の不安はやはり、あの泰徳が敵対心を燃やし、苛々の頂点に立っていることだった。

「泰徳大丈夫かな……」

「分かんない。こんな事初めてだもん……」

「だよな」

「うん。暴れたのは大阪出身ってことがばれた時だけよ」

「あれも結構意外だったけど、今回ののはねえ……」

「追い詰められちゃってるから、下手に絡むと大変よね」

「こついつとき陰ながらにしか応援できないから」

「よっぽど悔しい気持ちになるのよね、分かる」

今回、黒田 匠という1人の先輩の存在が泰徳の硬派な心を揺り動かした。天才肌と噂される匠に対し、県内屈指のセミプロプレイヤーである泰徳がどう立ち向かうのか、翌日に開かれる本番で火花が散る事は間違いない。泰徳のイライラは、練習が終わってなお、収まる事はなかった。会場の県民文化会館には既に、入り口の真上に垂れ幕がかかっていた。

《県内最強の3校が夢の共演！ 今世紀最高のジョイントコンサート！！》

第28楽章 「見えない圧力」

翌日13:00。1時間30分後に本番を控えた選抜チームのメンバーは、それぞれ楽屋入りしていた。常套中学校のBassパートは、第3楽屋にいた。

「いよいよ今日ね」

「そうだな。何だか実感がわかないけど」

「だってホントはあと1週間先でしょ？」

そう、これは本当ならあと1週間本番が伸びていたのだが、晴香の祖母が急逝したことにより、急遽この日に変更になったのだった。

「翔もくるんだろ？」

「言うまでもないでしょ」

「やつぱりか……」

美奈に当たり前のような返答をされた泰徳は、当然のこと頭を抱えた。今となっては翔のハイテンションにはついていけない。最も、小さいころだったらついていけたろうが、今では性格も正反対になつてしまい、何もかもが昔の頃とは異なっていた。

「あ、そろそろ開場よ」

未来の一声で、3人はロビーへと足を急がせた。何しろ今回のジョイントコンサートは県内屈指の3校が合同で行う。となると、客足も途絶える事を知らないはずである。それを予想し、3人は壁の影からロビーを覗く。案の定、既に長蛇の列が出来上がっていた。泰徳はその中の中学生1人に目をつけた。

「おい、あいつ只ならぬオーラだな」

「どの子？」

「ほら、今ドアをくぐった奴だよ」

「あ……！」

美奈が思い出したように声を上げた。

「どしたの？」

「あの子だわ……」

「あの子って？」

「もしかして、黒田 匠か？」

「うん……」

美奈は恐る恐る頷いた。泰徳の言うとおり、中学生とは思えぬオーラを放っている。それはまさに、天才肌としか言わざるを得ない鋭い眼光と感性を備えていそうな聴力。これは見ただけで分かる。それは、泰徳の少なからずの経験からいえることでもあった。

「あいつが黒田か……」

「確かに天才肌って感じね」

「近づけねえな」

そうこう話しているうちに、匠はホールの中へと足を踏み入れた。

「あ、行っちゃった……」

「俺らもそろそろ本番だ」

「うん。行こうか」

こうしてメンバーたちも、本番に向けて準備を始めた。音出しはこの日の午前中に既に行っている。後は個人でマウスピースを適当に吹き鳴らす程度、口は慣らしてあるので心配要らない。メンバーたちが定位置に付く。ブザーがなる。

『間もなく開演です。ロビーにお越しのお客様は、なるべく早めにお席にご着席ください』

アナウンスが閑散とした客席に響き渡る。これだけの人数が集まっていると言いつのに、ざわめき1つ聞こえない。これは県内屈指と噂される3つの学校の演奏がもたらすプレッシャーなのだろうか。暫くして、幕が上がる。それと同時に、風之舞が始まった。

静かに始められた風之舞。それは奏者と聴衆共々の緊張感を一点に張りつめさせる。つばを飲み込むことさえ不可能にさせる60人近くのプレッシャーは、間違いなく聴衆に届いていた。

冒頭。サスペンドシンバルが曲の始まりを告げるが、その壮大さに誰もが言葉を失った。高音域の突き抜けるような気持ちの良い音色と、中音域の優しい対旋律。そして何より、低音域の床を震わすような重厚な響き。このバランスが一定に保たれた時、最高の音楽は奏でられる。泰徳や未来、そして美奈も、それぞれの響きが共鳴している事を感じていた。

第2主題。ここはいわば気休めの場所であるが、奏者は気を抜けない。留まる事の無いメロディーと、それに合わせた伴奏の絶妙なバランスは、一瞬たりとも油断の念を抱いてしまうとバラバラと崩れ兼ねない。奏者にとって気休めの場所が、一瞬の油断によって窮地の場になってしまふのである。客席に座っている匠は、ずっと泰徳のほうを見つめていた。いや、睨んでいたと言う方が正しいかもしれない。ただでさえおつかない眼光の鋭さが、泰徳を見つめるその目はさらに鋭い目つきをしていた。

第3主題に入ってから時間は、泰徳には途轍もなく短く感じられた。皆普通に演奏しているのに、なぜか時間を早く感じた。それは匠のプレッシャーからなのか、自分自身が楽しく演奏していたからなのかは分からない。ただ、時間が早く過ぎた感じがした。泰徳は敏達が引退してから、プレッシャーと言うものを感じたことがなかった。しかし、今回に限って何かしら不安になることが多かったような気がしてならなかった。実際美奈が黒田 匠の話を持ちかけたときもいきなり叫んだりイライラしたりと、明らかに黒田 匠と言う人物が原因である出来事が多い。これはやはり、黒田 匠という先輩が泰徳に何かしらの圧力をかけているに違いない。美奈や未来もそう感じていたが、やはり一番にそれを察知していたのは、泰徳本人かもしれない。

風之舞の演奏が終了し、立石先生が指揮台から降りて礼をした。

チューバを構えて立つ泰徳。横目で匠と思われる人物を見ると、やはりその中学生の視線は泰徳の方に向いていた。泰徳も負けず、その中学生に向けて火花を散らした。

第29楽章 「天才肌中学生、降臨！」

風之舞が終了し、順調に演奏も進み、休憩を経てフィナーレ『アルメニアダンス Part1』を迎えた。美奈の話では、匠の本当の目的は『泰徳の持ち替えをみることに』であつた。それが本当であるならば、天才肌：黒田 匠の見る目、聴く耳はさらに冴えているに違いない。最後の指揮を取る大西先生は、深呼吸をして指揮台を上がり、タクトを下ろした。

勇ましいシンバルのクラッシュと共に、直管楽器のファンファーレが雄叫びを上げる。この時点で泰徳は、まだチューバである。実際、この杏の木は泰徳が最も苦労したところである。いくら斎木高校の先輩が演奏しているからといって、手は抜けない。フォルティッシモ f f の指示が多いこの楽章では、酸欠さえ起こすことがある。

オーボエのソロ部分。ここで泰徳はホルンに持ち替える。度重なる議論の結果、泰徳はチューバの席で、なるべくステージの真ん中に位置するところに座ることになった。つまり、客席から見て泰徳はチューバ席の一番左端である。

そして再び勇敢な直管のファンファーレ。実はこの部分で、ホルンが自殺行為と思えるほどバンバン吹いている。ただでさえマウスピースが小さいホルンが、ここまで演奏すると唇も裂け兼ねない。そのホルンの対旋律を途中まで演奏すると、今度はオーボエに持ち替える。『杏の木』と『ヤマウズラの歌』をつなぐソロ部分を、泰徳は担当する事になったのだ。しかし驚く事に、泰徳はそのソロを高校生より上手く吹きこなした。

続いてヤマウズラの歌。泰徳は再びチューバに持ち替えて、刻みを演奏する。この際、泰徳は口が壊れないよう、ヴァジングをしてから楽器を演奏しなければならない。ヴァジングというのは、簡単

に言つと唇の振動の事である。間もなくトランペットソロ。選抜チームでは、ここを『コルネット』という楽器を用いてソロをする。トランペットより一回りほど大きな楽器で、ふくよかな音色を出す事が出来る。ここを担当するのは、健吾だ。

このソロが終わつた瞬間、泰徳はチューバからユーフォニアムへと楽器を変える。オーボエソロから受け継ぐユーフォのソロは、なかなか難しい。未来の見ている目の前で、泰徳がソロを奏でる。鳥肌が立つほど上手かった。ここからは泰徳の出番はない。ホルンのソロが終わつて、第3楽章『ホイ、私のナザン』に移ろうとしたとき、泰徳はただならぬ気配を感じた。やはり黒田 匠が放っているに違いない。直感でそう思った。

第3楽章、『ホイ、私のナザン』。この曲中でも最も難しいところで、拍子が5/8と6/3の混合拍子であることにまず驚かされる。泰徳は初っ端からオーボエを担当している。ちなみにそれと掛け合うサクソフォンソロは、佐藤 和昌であつた。次いでクラリネットがメロディーに加わる。この時、泰徳はトランペットに持ち替えている。そしてクラリネットのメロディーが終わると、トランペットの盛り上がりが炸裂する。それと追いかけあうようにホルンが複雑なリズムを刻み、再びトランペット。ここは泰徳が一番練習したところであり、一番苦労したところであつた。前記『杏の木』も体力を消耗するが、変拍子の演奏に対する凄まじい精神力と体力の使用でフラフラになる。

中間部分。ここは最もテンポが安定しており、比較的演奏しやすい。実は泰徳はここでの出番はなく、最後のオーボエソロだけを残し、じつと座っているだけである。じきにここも持ち替えが入るだろうと立石先生は言っていたが、まだ決定していない。そのオーボエソロは、難なく吹きこなしたのだが。

第4楽章、『アラギアス山』。ここは作者である私が2番目に好

きなどところである。というのも、低音パートとユーフォニアムの絶妙な掛け合いが、なんともスピリチュアル的に安らぎを持たらせてくれる。鳥肌が立つほどである。そんな楽章で泰徳が担当するのは、言うまでもなくユーフォニアムだ。

実際、ここは現在の奏者3人のみで演奏する事になっていたのだが、泰徳がオルマイティイ奏者として舞台に乗ることが決定すると、4本での演奏が決まった。つまり、未来と肩を並べて演奏する事になる。クラリネットの柔らかなメロディーと低音群の深みのある支えに導かれて、ユーフォニアムの対旋律が静かに歌い始める。ここは音程がきっちり合っていないと不快に聞こえるため、合奏の時は常に譜面台にチューナーを設置していた。今までのところ、針のぶれは1mmもない。未来自身、ユーフォを吹き始めて5年目。オルマイティイ奏者としての泰徳の急速な上達に、悪寒さえ覚えていた。もちろん、いい意味でのことだが。少しリタルダンドをかけたところで、いよいよフィナーレに差し掛かる。

最終楽章、『Gona Gona』。200小説以上に及ぶ壮大なフィナーレで、作者である私が一番好きなどころである。超絶技巧とも言える木管のパッセージがホルンにも所々現れることや、低音楽器にも容赦ないタツカの連続などから、常套中学校では『死の曲』としてある意味恐れられていた。しかし選抜メンバーとなれば、この死の曲も何のその。余裕な顔でぶっ走る。吹きなれている為か、笑顔さえ感じ取れる。

泰徳が最初に構える楽器はトロンボーン。このところ4発しか吹くところはないが、そこは泰徳の底力。見事に4つの音のみで、全体のテンションを最高潮まで達せた。シロフォンとユーフォの掛け合いから、トランペットとトロンボーンのユニゾン。泰徳は滑らかに吹きこなした。その動きに、ひそかに樹里は嫉妬していた。これが2回繰り返され、ホルンと泰徳のミュートリートランペットが景気付けに演奏したところで中間部分へと移り変わる。

中間部分。ちょっと静かになり、オーボエソロを泰徳が演奏する。その後同じ形が再び続き、泰徳は急いでトロンボーンへ。低音楽器の最大の見せ場、連続8分と跳躍進行のメロディーを難なくこなすと、チューバとユニゾンであるバストロンボーンの刻みを余裕で演奏し、再現部へと変わる。

再び前半のメロディーがトランペットで演奏されている。実はここに、泰徳も加わっている。木管のスケールと同時に、トロンボーンに持ち替える泰徳。そして再び連続8分のメロディーを演奏した後、そのままトランペットとユニゾンの四分音符を吹きこなす。ここはトロンボーンとはいえ、音域が高いところ。オールマイティー奏者の泰徳なら、いつ唇が切れてもおかしくはない。そんな心配をする間もなく、4つの8分音符で合奏は終了した。演奏を終了したメンバーたちの顔は、なんとも爽やかで余裕を感じる。しかし泰徳は、険しい顔つきでステージを降りた。

無事に本番は終了し、楽屋に戻るメンバーたち。楽器の片付けも終わり、帰ろうとしていたところ、泰徳達の控える第3楽屋に2人の中学生が顔を出した。1人は男子で、1人は女子。今日の演奏を聴きに來ていた人らしい。

「あの、竹林 泰徳さんっていらっしゃいますか？」

女子が尋ねる。

「ああ、俺だけだ」

泰徳が名乗り出ると、今度は男子が口を開いた。

「あ、あなたなんですネ、持ち替えしてた人」

「……？ 誰？ あんた」

泰徳が聞くと、その男子中学生は答えた。

「松方中学校2年、黒田 匠です」

「お前が……」

匠の出現によって、楽屋の雰囲気は一気に暗黒色に染まった。

第29楽章 「天才肌中学生、降臨！」（後書き）

ここに書き記したアルメニアンダンスの曲描写は、個人で感じたことをそのまま記しています。曲の感じ方には個人差がありますので、多少のずれはご了承ください。尚、これらの描写は既出の曲描写から引用いたしました。

そして今楽章から、Askerさん著「SAKURA WINDS」のクラブが実現いたします。既にAskerさんからは許可を頂いており、実質「奏くKanade」をあわせた3作品とのクラブレーションになっています。ますます面白い作品にしていこうと思いますので、何卒よろしく願います。

第30楽章 「音楽的大論争 前半戦」

「お前が黒田 匠……」

楽屋に暗雲が立ち込める。あの泰徳が一番恐れていた存在が、まさか楽屋まで現れるとは思っても見なかったことである。

「……？ どうかしました？」

「あ、いや、何でもねえ」

泰徳にずっと見られていた匠は不審感を覚えたのか、泰徳に尋ねた。

「あんたの横の女、名前は？」

「あ、私ですか？」

「てめえ以外に誰がいる」

泰徳は冷たく言い放った。

「あ、すみません……。私、倉橋 加奈子くらはし かなこって言います」

「ふーん。で、お前ら何しに来た？」

「僕らですか？ いや、あなたの『アルメニアンダンス』での持ち替えに感動して、この楽屋を訪れた次第です」

「愉快じゃねえな」

泰徳の態度は相変わらず冷たい。本来なら匠が先輩なので、泰徳が匠に敬語を使わなければならぬのだが、何故か立場が逆転している。

「何か、僕の事誤解してませんか？」

「何だつて？」

「だって、さつきからめっちゃ態度冷たいじゃないっすか」

「気に食わねえことでもあんのかよ」

「いや、それは……」

匠は言葉を詰まらせた。それを見て、泰徳はこう言った。

「まあいいや。今日は演奏を聴きに来てくれた客だしな。まあ座れや」

泰徳は椅子を引いて、匠と加奈子に座るよう指示した。

「何か言いたそうだなあ。言ってみ」

泰徳がそういうと、匠は

「あ、分かっちゃいました？ さすがですね。僕の見る目に間違いは無かったですよ」

と一言付け加えた。泰徳は匠自身の才能を自画自賛しているようにで
気に食わなかった。

「へえ。あんた、音楽には十分自信ありそうだな」

「冗談言わないで下さい。貴方ほどではありませんよ」

「それは俺に対する皮肉か？」

泰徳は普段、自分に備わる才能に対しては卑下し続けてきた。自分の
力に満足すると、それ以上成長しないと考えての事だったが、今
の匠の言葉には、確かに皮肉が混じっていた。周りで聞いていた美
奈や未来も、そう感じた。

「とんでもありません。あのアルメニアンダンスは、誰が聞いても
凄いですよ」

「じゃあ聞くが、どこが凄いんだ？」

この泰徳の一言をきっかけに、音楽論争が勃発する事となった。

「まずはあの杏の樹。トランペットであそこまでのハイトーンを出
すのは至難の業ですが、それを一発で当てるなんてやっぱ凄いです
よ」

「トランペットに上限の音など無い。ユーフォニウムやホルンなど
の音域が限られる楽器では仕方ないが、トランペットに関しては下
限の音はあるものの、上限の音は出そうと思えばいくらでも出せる。
要はアンブッシュアの問題だ」

「でもそうになると、唇切れたりとかしません？」

「しねえよ」

「何ですか？」

「んなことも分かんねえの？」

泰徳の言葉に、妙に苛立ちが見え始めた。未来と美奈は、泰徳がキ
レた時に備えて身構えた。

「分かんなくて何が悪いんですか？」

「いや、わかつて当然だし。さてはお前、ユーフォ奏者だな？」

「何で分かったんです？」

匠は何の躊躇いもなく、泰徳に聞き返した。

「何故なら！ お前上唇が妙に引き攣つてるからだ。こういう癖は、中途半端な奏者では身に付かないものだ。到底経験の積んだ奴じゃないと、現れない。それとあともう一つ」

ここで泰徳は、一旦話すのをやめた。

「どうしたんですか？ 早く話してくださいよ」

匠が泰徳を急かす。そして泰徳は静かに答えた。

「お前の右手親指に、楽器を構えた時に出来る胼胝たこと、緑色の錆が付いている。チューバでもこういうことはあり得るが、それに比べるとお前のは小さい」

泰徳はそういうと、便所に行つてくると少し席を離れた。

「竹林つて人、やつぱ凄かったな」

泰徳が恐れているはずの匠が、泰徳を絶賛した。

「そうね。こんな短時間で貴方をユーフォ吹きだつて見破るなんてと美奈。」

「貴方つて、ユーフォ吹きなんですか？」

と未来が尋ねると、

「その通りです。全くしてやられましたよ、竹林君には」と深々と頭を下げた。

「実は、僕は泰徳君の音楽分析力を試したくて来たんです」

「でも、泰徳も負けませんよ」

「それはさっきの会話をしていれば分かります。彼、相当な実力者ですね」

「ええ。実はあの人、初心者なんですよ」

美奈がそういうと、匠と加奈子は口をそろえて驚いた。

「いやあ、びっくりしたな。初心者であれほどとは」

「でも、まだ試す気なんですよ？」

「当然です。最強中学生と言われた竹林君の、化けの皮を剥いてみたい」

「あなたも相当な力を持つてゐるって有名ですよ」

「そんな滅相も無い。分析力に長けているのは自分も自信がもてますが、流石に楽器の技術に関しては自身などもてませんよ」

「どうしてです？」

「自分が満足したらそれで終わりだからです」

未来と美奈は重大な事を見落としていた事に気付いた。今の匠の言う事が本当ならば、考え方は泰徳と全く一緒である。分析力だけに自信が持てると言う匠。それに対し、技術は天下一品でアナリ―ゼをやらせたら誰も文句が付けられない泰徳の力。それを試そうと言うからには、裏に何らかの理由があるに違いない。そう思ったのである。

「後半戦も見ものですね」

「期待してください」

匠が笑いながらブイサインをしたところで、泰徳がトイレから帰ってきた。

第31楽章 「音楽的大論争 後半戦」

便所に行っていた泰徳が戻ってきた。

「どこまでやったっけ？」

「僕がユーフォ吹きであることを見破ったところです」

「トランペットでハイトーンを吹いても、唇が切れない理由を説明したか？」

「まだです」

泰徳はそう確認して椅子に座ると、真剣な顔をして話し始めた。

「まず、アンブッシュアの基本形から行くと、まず『い』の口をして、『う』の口をする。このとき、上唇が下に引っ張られる感覚があるはずだ」

「ええ。僕も最初のころは結構きつかったです」

「そこでその辛さを解消する為に、リップスラーという基礎練習を行う」

経験者の方ならば、この練習法は3Dバンドブックやコープラッシュ、ファーストデヴィジョンなどの教則本必ずやったはずである。リップスラーは唇の柔軟性を鍛える練習で、音と音との間をスラーで進行し、雑音が全く入らないようにする基礎の基礎である。金管奏者であれば、誰しもが修得している技である。

「このとき、インターヴァルと言う練習をする」

インターヴァル（インターバル）とは、1オクターヴ以上の音程差、またはそれに向かって次第に音程差を広げてリップスラーを続ける練習法で、普通は上記の基礎的なリップスラーに慣れてきたところで取り入れる練習法である。

「僕も何回かやったことがあります。1オクターブ半が限界でした」

「そのところを、普通は2オクターブやる」

「ええ?! 2オクターブも」

「ああ。この技術を応用したのが、第2楽章『ヤマウズラの歌』だ」

「あ、あのコルネットソロがあるやつですね」

「そうだ。実際のコルネットソロにはアーティレーションがあって、スラーとタンギングをうまく使いこなせなければできない」

「でもそれって、練習したら出来るんじゃないんですか？」

匠の発言に対し、泰徳はチツチツチと指を振った。

「甘いな。もしリップスラーが出来ない状態でこの曲を吹けば、災難だぜ」

「それはどうしてですか？」

「スラーの基本がなってないからだ」

「どういうことですか？」

泰徳ははあつと溜息をついて、説明した。

「スラーと言う言葉から始まり、意味を知らなければ、スラーは出来ない。そうだろう？」

「そりゃあ、まあ……」

「それと同じで、スラーの基本を修得していなければリップスラーも出来ず、その上のレベルのインターヴァルさえままならない状態になる」

「なるほど！　そういうことですか。でも、3楽章の『ホイ！　私のナザン』って、変拍子ですよね」

「ああ。それがどうかしたか？」

「いえ、どうやってとってるのかなと思って」

「あそこは5/8と6/8の複合変拍子だ。ここはメロディーの流れを聞いて分けるわけだが、この作業が中々大変なんだ」

「要は勘ってことですか？」

「楽器を演奏する立場にある奴に、勘を頼りにする人間はいねえさ」
「本当ですか？」

「ああ、本当だとも。よく考えてみる。譜読みの時だってお前はいつも勘でやってんのか？　そりゃあおかしい話だぜ、お前。楽譜を適当に演奏する奴が、一流の演奏家になれるっちゃあ、そうはいけねえよ」

「誰もそんなこと言ってますんよ！」

「言ったも同じじゃねえか。今の発言、松方中学校の生徒にしちゃあ、爆弾発言だぜ」

そういつて泰徳は鼻で笑った。

「じゃあ4楽章の『アラギアス山』の対旋律も適当じゃないってことですか？」

「当然だ」

「例えばどんな事を思っであんな吹き方したんですか？」

実は泰徳、このアラギアス山の対旋律を担当していたのだが、美しい音の動きにも拘らずビヴラートをかけず、そのまま流したのだった。

「あれはあくまでも対旋律だ。メロディーがあるのに、それよりも目立ってしまったては仕方が無い。俺は自己主張が苦手だな」

「最終楽章もですか？」

「何の事だ？」

「後半のトランペットです。あれはどう聞いても小さすぎやしませんか？ 音量」

「別に」

泰徳は即答した。

「何でなんですか？」

「何故大きな音をあそこで出す必要があつた？ あそこはフィナーレに向けてホルテージを上げる為にわざわざ木管と金管を被せて、さらに打楽器まで足している。そういう複雑な関係を保たず、意のままに行ってしまうと折角の演奏が台無しじゃないか。それに、今のアンタの曲分析はすべて技術面から来るものだ。そんなんでは、いい演奏家にはなれない」

泰徳はここまで言った。すると匠が急に立ち上がり、

「負けたよ、泰徳君。君の勝ちだ」

「勝てて光栄です。黒田先輩」

泰徳が匠の事を先輩と呼んでいる。

「僕は貴方の事を誤解していたようですね」

「僕こそ、試してしまつてすまない。良ければ、メールアドレスを教えてください」

「もちろんです」

そう言つて泰徳は紙にメールアドレスを書いて、匠に手渡した。

「ありがとう。帰ったらメールするよ」

「待つてますよ」

「じゃあ」

「さようなら」

2人は握手をし、別れた。

「どうしたの？ 急に態度変わっちゃつて」

美奈がつまらなさそうに言う。

「先輩だつてことは気付いていた。ただ、僕もあの人を確かめてみたかつたんだ。さっきのアルメニアダンスを聞いて、どう思ったか率直な感想を聞いてみたかつた」

思いがけない答えに、あいた口が塞がらない美奈と未来。だが泰徳は、こう呟いた。

「いいライバルができたよ……」

ジョイントコンサートも成功を収め、ほっと一息つける常套中学校吹奏楽部。次は、入学式と新入生歓迎会に向けて練習に励むのだつた。

コラム No.3 「吹奏楽の起源と魅力」

こんにちは。GT・spiralです。

ジョイントコンサートも終わり、次の演奏する機会は入学式と新入生歓迎会になりました。進行上ひと段落しましたので、ここでコラムとして、『吹奏楽の醍醐味』についてお話させていただきます。

吹奏楽の始まりは、アメリカ合衆国です。マーチで有名なアメリカですが、あのマーチ王、スーザもアメリカに長年滞在していました。詳しいことはよく知らないのですが、当時吹奏楽というならば、軍隊の音楽隊のことを指していたそうです。今のクラシカルな音楽ではなく、マーチ行進曲という意味合いからくるように、軍隊の行進としてマーチを作曲することがしばしばだったのだそうです。そしてかの有名なスーザ作曲の『星条旗よ永遠なれ』は、戦争で明日命が無いかもしれない兵隊に送られた委託作品なんだそう。マーチとは言うと明るい感じに聞こえますが、実は暗い過去があったんですね。

今の形式のようなクラシカルな様式は、ドイツやフランスなどクラシック音楽を専門的に扱うヨーロッパ諸国から伝わったもの。初期は金管楽器はまったく入っておらず、『オーケストラ』ではなく『室内楽』として貴族にたしなまれてきました。室内楽というだけ会って、クラシック音楽というと、当時は舞踏会専用の曲。神童といわれたモーツァルトも、得意のチェンバロで皇帝に即興曲を聞かせたといえます。室内楽で有名な曲といえば、ヴィヴァルディの『四季』。チェンバロが目立つ曲でもあります。作曲された当時は、指揮者はそのチェンバロを弾きながら四季をするという卓越した方法で演奏会を行っていたようです。マエストロ、カラヤンもそうしています。

時代は変わり古典音楽。このころから金管楽器が使われるようになります。最初に現れた金管楽器は、金管楽器の帝王、Trumpet^{トット}でした。しかしその頃はトランペットも木製で、なんともろくみすばらしい楽器でした。しかしそれが改良されたのは歌劇『アイダ』が作曲されてから。この曲のためだけに、業者に『アイダトランペット』の作成を依頼。皆さんがよく知っている今のトランペットとは違い、直線でベルが小さく、ピストンはひとつもついていなかったのです。そして驚くことに、そのアイダトランペットが改良されて現在の楽器になってから、トロンボーンやホルンといったより複雑な楽器が使われるようになったのです。

準備も整い、吹奏楽の起源と行きたいところですが、日本に伝わったのは、吹奏楽よりオーケストラのほうが先でした。伝わったのは明治維新の時代、オーケストラの起源である室内楽はすでに日本にもあったため、（というのは、尺八や三味線などのこと。また、雅楽も含む）ヴァイオリンやチェロなどの西洋楽器には興味がありました。室内楽自体にはまるで絶縁状態だったのです。そこで明治天皇は異文化をもつと取り込むために室内楽では飽き足らず、ヴァージョンアップした『フルオーケストラ』を最初に取り入れたのです。そこで初演が行われ、その影響を受けて設立されたのが、日本最古のオーケストラ『東京フィルハーモニー交響楽団』でした。

オーケストラを通して西洋文化を次々と取り入れた明治天皇。しかしその明治天皇が逝去し、大正時代に移り変わると、西洋文化の取り入れは急激に低下していきます。これは大正時代の中盤まで続き、これをがらりと変えたのが、アドルフ・サックスによる、多種多様なSaxophone^{サクソフォン}の発明です。いわずと知れたサックスは、金管楽器のような広い音域と、木管楽器のような優しい音色を兼ね備えた唯一のハーフ楽器です。そこでこのサックスと従来の楽器を

使ってオーケストラには無いクラシックを楽しんでもらおうと、吹奏樂が発足します。

そこで考えたのは、まずオーケストラの主力が弦樂器であること。吹奏樂という異種音樂分野に弦樂器を入れると、オーケストラと変わらなくなってしまう。そう思った国民たちは、まず弦樂器を退けます。そして残ったのは、金管と木管と打樂器。でもよく考えるとオーケストラに木管樂器は、せいぜい2本ずつくらいしか入っていない。それじゃあ足りないから、取り除いた弦樂器分木管樂器を加えようじゃないかと入れるんですが、あまりにも多すぎたのです。ここで人々はあることに気がつきます。『そうだ！ サックスがあるじゃないか』と。これに気づいた人々は、サックスを取り入れ、人数調整をします。ですが次にも問題が。オーケストラに存在するチェロの音域があまりにも広すぎて、サックスだけでは賄えなかったのです。そこで、比較的新しい西洋樂器“ユーフォニアム”を導入します。すると音も整い、なんともいえぬ美しい音色が響き渡ったのです。これが吹奏樂の起源といわれています。

吹奏樂で唯一オーケストラから生き残った樂器がコントラバスですが、どうしてこの樂器だけが残ったのかは、いまだに分かりません。ですが、そういう人々の発想があつたからこそ吹奏樂は存在するのです。

もうちょっと違った視点で吹奏樂を聴いてみると、なかなか面白いですよ。

第32楽章 「慰問演奏会 - 依頼 -」

ジョイントコンサートも大成功を収め、最強中学生と呼ばれる泰徳自身にも『黒田 匠』という、良き先輩でありライバルである天才肌中学生が仲間になった。3学期も始まり、心機一転がんばりたいところだが、残念ながら常套中学校は中間試験のため部活停止中であつた。今回は、試験1日目を終えた泰徳たちの行動から始まる。

「ねえねえ」

「何だよ」

いつもの3人組、泰徳、未来、そして美奈は下駄箱で話し込んでいた。その話を吹っかけてきたのは、美奈であつた。

「今日小学校行かない？」

「えらい急だな」

「ほんと。何かあつたの？」

「うっん、別に。行きたくなっただけ」

そついう美奈の顔は、ものすごく幸せそつである。

「うそ。何かあつたんでしょ」

それを察した未来は、容赦なく美奈のハッピースマイルをぶつ潰す。

「んもう！ 分かった。話すわよ」

観念した美奈は、すべてを白状した。

「実はね、ジョイントコンサートに宮内先生が来てて……」

宮内先生というのは、泰徳たち3人が小学生だった頃の音楽の恩師である。

「宮内先生が？ なんで」

「聞きに来てたらしいの」

「中井は宮内先生と話したのか？」

「うん。そしたら先生が急に私を呼び出してね、『竹林を呼んでくれないか』って言い出したのよ」

「俺を！？」

話の急な展開に驚きを隠せない泰徳。しかしその真髄は理由を聞いてみないことには分からない。とりあえず、美奈に理由を聞いてみることにした。

「いきなりだな。何で？」

「ほら、アルメニアダンスの泰徳の持ち替えに感動したらしくつて、竹林があそこまで成長するとは思ってなかった。今度うちの金管バンド部に呼んでくれって……」

「ふーん。で、俺何すればいいの？」

泰徳がそう聞くと、美奈の顔が固まった。

「もしかして……」

「聞いて……なかった……？」

2人が恐る恐る聞いてみると、美奈は静かに首を縦に振った。2人は両手で頭を抱えた。

「あ、でもねでもね！ チューバは持ってきてって言うてたよ」

弁解するように叫ぶ美奈。実は泰徳は、この時点でチューバ一本で進学を決めていたために、すでにM.Y.チューバを購入していた。しめて380万円である。

「まさか、ソロコンさせる気じゃないだろうな……」

泰徳の額を、いやな汗が流れる。いろいろ持ち替えて、それでもなおかつチューバを持つてくることを指示したのには、何か裏があるとそう確信していた。次いで泰徳が美奈のほうを向いてみると、やはり凶星だったようだ。笑顔が引きつっている。

やはりソロコンサートだったことに肩を落とす泰徳だったが、宮内先生は泰徳が持参したM.Y.チューバのみならず、ほかの楽器も用意していた。金管バンド部だからという理由で、トランペット、トロンボーン、アルトホルン、ユーフォニアム、打楽器はマリンバを用意してくれていた。チューバは言うまでもなく泰徳の楽器を使用する。

「で、何の曲やればいいの？」

不機嫌そうに尋ねる泰徳。宮内先生はそれでも笑いながら、

「今から渡すよ。子供たちには午後集まってもらうように言ってるから。譜読みの時間は十分にあるだろ？」

と言う。

「あのねえ、先生。俺はプロじゃないんだから、そんなにすぐの譜読みは無理だよ」

「そんな馬鹿なことがあるかい！　だつて竹林はあれだろ？　中学卒業したらセントラルに入団してプロ転向するんだろ？」

「誰に聞いたんだよ……」

「決まってるじゃないか。中井だよ」

さすが話を持ちかけただけある。泰徳には、今回起こっている出来事がすべて美奈によつて起こっていることがはっきりと分かった。

「中井……」

冷やかな目で美奈を睨む泰徳。

「ご……ごめん！　でも泰徳の演奏聴かせてあげたくて……」

「ん？　つてことは、宮内先生と会場で会ったつてのは嘘なのか？」

「違う！　それは本当よ。ただ、その演奏をどう聴かすかったのが題材になって、じゃあソロコンサートでいいじゃんってなったの」

「全く、宮内先生も先生だよな」

泰徳は大きいため息をついた。

「まあまあ、そんなに気を落とさずに。じゃあ、これが楽譜ね」

と渡されたのは、用意された楽器に該当するソロコンサートの曲だった。伴奏はすべて宮内先生がするようである。曲は以下のとおり。

- トランペット ハトと少年
- トロンボーン ダッタン人の踊り
- アルトホルン ふたたび
- ユーフォニアム 大きな古時計変奏曲
- チューバ ヴェニスの謝肉祭
- マリンバ 熊蜂の飛行

「ちよつと待つてよ、先生。全部超絶技巧じゃないか!!」

「ああ。プロ転向するなら、こういう曲は吹けて当然だろ」

「それはちよつと誤解だろ、先生」

「いや。音大受験なんかじゃ、初見試奏なんてのもあるからな」

「何？ 所見試奏って？」

「その場で渡された楽譜を2分ほど譜読みして、その場でその楽譜を演奏することさ。失敗した時点で試験終了って言う、過酷な実技テストだよ」

「へえ……。分かった。やってみるよ」

「お、やる気になったか！」

「ああ。将来音大受けてみたいし、専門分野に進みたいから、練習にもなるだろうし」

未来と美奈は、『よく言うわよ』と言いたいのをぐつと堪えて、2人のやり取りを見ていた。実は、ジョイントコンサートで配られたアルメニアンダンスの楽譜を、泰徳はこれとなしに所見で吹き上げた人物である。無論、持ち替えのオーボエやユーフォニアムも3分で譜読みを終えた。

「じゃ、これ楽譜ね。楽器は音楽室においてあるから」

「分かった」

こうして泰徳たちは第1音楽室へと足を運んだ。

第33楽章 「慰問演奏会 - 準備 -」

冬とあつて、カーペットを敷いている音楽室でも肌寒さを感じる。が、そこは宮内先生が気を利かせて暖房を入れてくれていた。そしてピアノのそばには、トランペットやらマリimbaやらの楽器が並べられており、丁寧に譜面台までセットされてある。

「何でここまで丁寧なんだ？」

「もしかしたら、ここでソロコンサートやるとかじゃないの？」

「あ、有り得る……」

今の時刻は13:30。先ほど昼食を済ませ、宮内先生が第2音楽室からの帰り際に、小学生たちが集合するのは15:00だと言っていた。

「まあいいや。どこでやつてもソロコンはソロコンだしな」

と言つて、泰徳はもらった楽譜を早速譜読みするのだった。

トランペットで演奏する『ハトと少年』というのは、宮崎駿監督率いるスタジオジブリの映画『天空の城 ラピュタ』に登場する主人公：パズーが、空から降ってきた少女：シータヒロインを助けた翌朝に屋外でトランペットで吹いていた曲である。トランペット吹きなら、一度は吹きたい曲だと言つても過言ではない、久石 譲さんの作曲した曲である。

変わつてトロンボーンで演奏する『ダッタン人の踊り』は、バレエ音楽『イーゴリ公』の途中に出てくるメロデーの一節。コンクールで演奏したことがある人もいれば、かの有名なクラシック音楽を題材にした物語『のだめカンタービレ』を通してこの曲を知った人も多いかもれない。本当であればオーボエで奏でたいところなのだが、金管バンド部ゆえにトロンボーンで演奏することに決定した。

そしてアルトホルンで演奏する『ふたたび』は、これまたスタジオジブリの名作『千と千尋の神隠し』に登場する主人公：千尋と、彼女を幾多も手助けした魔法使い：ニギハヤミ コハクヌシとが銭婆の家から湯屋へ帰るときに流れる、壮大な曲である。これを作曲したのも、久石 譲さんである。

ユーフォニアムで演奏する『大きな古時計変奏曲』だが、これは知らない人が多いであろう。近年亡くなった有名なチューバ奏者、ローランド・センド・パリ氏が演奏している音源があるが、これはニコニコ動画より視聴が可能である。

この曲は童謡『大きな古時計』のメロディーをモチーフにした4つの変奏曲からなり、曲が終わるにつれて、この変奏曲のレベルが尋常でなく上がっていく。聞いていて楽しいが、奏者側からすると人殺しのような曲である。

そして専門分野、チューバで演奏するのは『ヴェニスの謝肉祭』。音源としてはYou Tubeより流通するオイスティン・バーズヴィック氏の演奏が有名であるが、ロジャー・ボボ氏がF管のチューバでも演奏しているため、聴き比べても面白いかもしれない。

聞いてもらえれば分かるが、これはダブルタンギングが必須の曲で、さらにフィンガリングのテクニクも問われると言う、究極の奏者試しの曲である。

最後、マリンバで演奏する『熊蜂の飛行』は、もとより色々な楽器によってカバーされている。しかしこの曲、実はヴァイオリンのために書かれた曲で、作曲者のリムスキー・コルサコフの父がヴァイオリニストだったために作曲されたなどと色々な諸説があるが、本当のことはまだはつきりと分かっていない。近年ではピアノカバ―にとどまらず、トロンボーンやクラリネット、さらにはファゴッ

トなどの難易度の高い楽器でも演奏されるようになった。今回はマリンバで演奏することになるが、難易度的にはそれほど変わりはない。強いてあげるとすれば、両腕が尋常ではないほど疲れることであらう。

「よし、譜読み終了!」

「え、もう?!」

「早すぎでしょ……」

楽譜を見て未だ10分も経っていない。不安そうに話す未来と美奈だが、泰徳はできたの一点張りである。そこで2人は、泰徳に実際に演奏してもらうことにした。小学生たちが集合する時間まではまだ余裕がある。

「じゃあ吹いてみてよ」

「何から?」

この受け答えからして、泰徳は既に自信満々である。

「うーんと、じゃあ大きな古時計から」

「分かった」

こうして泰徳はユーフォニアムを構えると、なだらかに演奏を始めた。

第1主題は皆さんがよく知っているであらう、テーマを演奏する。未来たちもつられて、「おじいーさんのおーとけいいー」と口ずさんでいる。チューバ吹きの泰徳にとって、ユーフォニアムを操ること自体が難しいのだが、アンブツシユアの作りといい、楽器を構えたときの視線といい、完璧である。良きライバル、黒田 匠に一步も引かせない演奏を続ける。

第2主題。先ほどのメロディーを変奏させた、6/8拍子での演奏となる。泰徳が手にしている楽譜の調合は何もついていない八長

調であるため、サイドアクション型（4番ピストンが右手人差し指にあるもの）を使っている泰徳は、4番を酷使している。が、本人の表情には未だに“余裕”が残っている。いや、余裕しかない。第3主題へ移るときのアルペジオも見事に当てた。最高音はハイCである。

第3主題。これはもはや楽譜自体が芸術の、16分音符がほとんどを占める楽譜だが、メロディーの主体は失われておらず、辛うじて第1主題のメロディーが聞き取れる程度のハイテクニクな部分である。驚くことに、泰徳はその部分も颯爽と終わらせて、最終主題に入った。

その問題の最終主題だが、メロディー部分がアクセント指示になっており、それ以外は飾りとして16分音符で記譜されている。つまり、客が聞こえるのは16分音符のみだが、よく耳を澄ますと、アクセントで奏でられている音形を繋げば第1主題と全く同じメロディーになっていると言う、文字通り超絶技巧な場所である。このように音が連鎖する中でメロディーを際立たせるといのはなかなか難しい作業であり、ハイテクニクを要する。しかし最強中学生の異名を持つようになった今の泰徳には、それほどのことは朝飯前になってしまった。

「どう？ 信じてくれた？」

「信じるも何も……」

「凄すぎるわよ……」

もはやあいた口がふさがらない状態の未来と美奈。泰徳の凄さは先日ジョイントコンサートの持ち替えや、その後の音楽的大論争で分かってはいたが、ここまでとはさすがの2人も思わなかったのである。

「もう一個他のやろうか？」

余裕をぶちかましてタオルで口を拭いながらそう話す泰徳。未来と美奈は猛反発した。

「いや、いい！」

「それ以上やったら、私たちの楽しみが無くなっちゃうから」

「あ、そう……。まあいいや。あとは小学生を待つだけだな」

あれだけ吹いておいてこれだけ余裕というのも驚くが、それ以前にこの短時間でこれだけの難曲の山の譜読みを終わらせてしまう泰徳に、2人は感服していた。できれば翔や陽乃、そしてよきライバルである匠も呼んでおきたいと思った。

今の時刻は14:45。そろそろ小学生がちらほら現れてもおかしくない時間だが、やはり15分と言うのは長いもので、なかなか時間が経つのが遅く感じられる。泰徳たち3人は開演までの15分間を、楽譜の芸術というものに見とれるために費やした。

第34楽章 「慰問演奏会 - 本番 -」

14:55。開演まであと5分と迫ったところで、やっとこさ小
学生が姿を見せ始めた。泰徳は「全く最近の小学生は、のんびり屋
さんが多いな」とほえましく笑っていた。しかも集合場所は第1
音楽室だと聞いているはずなのに、部員たちは第2音楽室へと奪わ
れていつている。泰徳の言うとおり、全く最近の小学生は、のんび
り屋さんが多い。

「あれ？ 子供たちは？」

第1音楽室をのぞきにきたのか、宮内先生が訪ねた。

「多分みんな、第2音楽室にいるぜ」

「マジで？！ あれだけ第1音楽室って言ったのに」

宮内先生は、泰徳たちが小学校5年生のときに赴任してきた、比較
的新任の先生である。年も若く、子供目線で接してくれるところか
ら、宮内先生は全校児童から人気を集めていた。

「やっぱ先生、言ってたんだね」

「何を？」

「第1音楽室にこいつて」

「みたいだね」

3人は、こういう光景を目にするたびに心が和まされるような気が
した。これも、中学生になって精神的に成長したからかもしれない。
「ほら、時間に遅れるぞ！」

宮内先生が金管バンド部を引き連れて、第1音楽室にやってきた。
その人数が尋常ではない。

「増えたね、部員」

唯一の金管バンド部卒業生である未来が、感嘆とした声で言う。

「そうなんだよ。お前らが中学校行つたとたんブアッと増えてね。
今じゃ部員は45人くらいだよ」

そう笑いながら話す宮内先生。これだけでも金管バンド部としては

大所帯なのだが、松山市内で見れば、70人ほど所属する吹奏楽部級のものもあつたり、金管楽器だけでなく木管楽器も取り入れ、もはや金管バンドではなく吹奏楽のレベルに達している学校もある。年々、愛媛県のバンド水準は上昇傾向にある。が、それほどよい成績を残したことは未だないのが痛みである。

「そろそろ始めていい？」

泰徳がトランペットを構えて宮内先生に尋ねた。それもそのはず、今の時刻は15:05。予定時間を5分オーバーしている。

「お、すまんすまん。構わんよ」

「分かった。じゃあ始めるぜ」

「了解」

宮内先生は伴奏をするため、グランドピアノの前に座る。そして司会は、今回の出来事の発端を作った美奈だ。

「皆さん、始めまして。ここにいる私たち3人は、常套中学校吹奏楽部のBassパートです。皆さんも中学生になったら、常套中学校に入学する人も多いと思います」

美奈は、なるべく小学生に分かりやすいように司会を進めた。それでも、Bassパートと言うのは小学生に理解してもらえたのか不安だった。例えBassパートというものを理解できていたとしても、そのBassパートの一人である目の前にいる男の先輩はトランペットを構えている。小学生から見れば、それはそれは不思議な光景であつたに違いない。

「今日皆さんにここに集まってもらったのは、その常套中学校吹奏楽部に所属する“最強中学生”、竹林 泰徳君の演奏を聴いてもらうためです。1つ聞きますが、この間のジョイントコンサート、見に行ったことがある人手を挙げてください」

美奈がそう尋ねると、全員がばつと挙手した。

「なるほど。みんな行つたんですね。では、この男の人を見たことがある人は？」

それはさすがにいないようである。遠くの席から見ているか、また

は演奏のほうに集中してメンバーは見えていないか、多くは後者のほうであるに違いない。だが、2人の男女が手を挙げていた。

「あれ？ いたんだ……。どっかで見たことあるような……。ねえ、泰徳」

美奈が泰徳のほうを振り向くと、泰徳はそっぽを向いている。

「……？ 泰徳？」

どうしても泰徳が白状しようとしないので、宮内先生が明かした。

「その男の子と女の子は、泰徳の兄弟なんだよ」

「え？！ 泰徳に兄弟なんていたの？！」

驚きを隠せない美奈。未来は泰徳の家にピアノレッスンに通っているため、事前から知っている。むしろ泰徳の反応に吹き出しそうになったくらいだ。

「まあいいや……。じゃあ、これからソロコンサートを開催します。最初は、『天空の城 ラピュタ』で主人公のパズーがトランペットで吹いている曲です。どうぞ！」

こうして、最強中学生、竹林 泰徳によるソロコンサートが始まった。

第35楽章 「慰問演奏会」

ついにソロコンサートが始まった。泰徳は構えているトランペットに息を通して唾が溜まつていないことを確認すると、宮内先生に合図を送った。

前奏のピアノは軽やかな6/8拍子で奏でられる。4小節弾かれた後に、泰徳の演奏が開始される。

それは映画のイメージがそのまま映ったような演奏である。気持ちよく拭きぬける泰徳のトランペットの音だが、嫌味を感じず、さらに朝の日差しを今にも迎えてくれそうなさわやかな音色である。跳躍進行が目立つこの『ハトと少年』。だが、最強中学生と言われるからにはそのようなことで躓いていては話にならない。さすが泰徳、軽々と跳躍進行をこなす。曲自体が短いので、あつという間の時間だった。

「ハトと少年、いいですねえ。トランペットを経験している人なら、一度は吹いてみたい曲でしょうね」

司会初挑戦の美奈も、慣れてきたのか上手く繋いでくれている。

「さて、次にトロンボーンで演奏する曲は、『ダッタン人の踊り』です。これはバレエ音楽の『イーゴリ公』という中の曲なんです、これは知らない人が多いかな？ ま、とりあえず聞いてみることにしましょう。トロンボーンで演奏する、『ダッタン人の踊り』、どうぞー！」

4拍子で演奏されるこの曲は、比較的伴奏も弾きやすく、演奏者本人にも優しい曲である。しかしこの曲、装飾音符と言う曲者が要所所に出てくる、きわめてたちの悪い邪魔者なのである。

泰徳本人はどうかと言うと、全く気にしていない。装飾音符がな

んだと言うような手つきでスライドを動かしている。ポジションにきちつとはまるスライドの動きからは想像も出来ないほどの、極めて滑らかな曲想が楽器から出ている。宮内先生を含むこの場にいる人全員が、トロンボーンと言うものに聞き惚れた。

「はい、ダッタン人の踊りでした。さて次はアルトホルンですが、この曲は皆さんご存知のはず。『千と千尋の神隠し』より、『ふたたび』です。どんな曲かは、聴いてのお楽しみ！」

『ふたたび』は、3拍子で演奏される。冒頭部のト長調から口長調に転調する部分が厄介だが、それ以降は運指を間違えない限り、なめらかに流れることの出来る曲である。

ピアノの2小節の前奏の後、泰徳のアルトホルンがメロディーを奏でる。全体的にスラーの多いこの曲は、膨大な肺活量が必要とする。またリップスラーも必須のことから、記譜上は簡単でも中身は難しい、“外柔内剛”な曲として知られている。途中にピアノの間奏をはさむものの、泰徳の音が余韻として頭にこびりついている。ファイナーレを迎えてもなお、その音色は頭から離れない。

「ふたたび、やっぱりいい曲ですね。皆さんも聞いたことがあったはずですよ。さて、次はユーフォニアムでの演奏です。これも皆さんご存知の、『大きな古時計』による変奏曲なんですが、この『大きな古時計』っていう曲を知ってる人？」

無論、全員が手を挙げる。

「やっぱり知ってますよねえ。次に演奏する曲は、その『大きな古時計』による変奏曲です。どうぞ！」

この『大きな古時計変奏曲』は、バンド編成のために書かれた曲で、今回のソロコンサートのただけに宮内先生がピアノ伴奏に書き換えた。そのため調も八長調と、比較的簡単なものに書き変えて

ある。

第1主題は皆さんご存知の元のメロディー。ユーフォニアムのやわらかい音色と妙に混じって、心地よい演奏である。

第2主題。ここは6/8拍子に変わり、第1主題のメロディーを元に演奏される。第3主題に移るための渡り橋であるハイCも見事に当てた。

第3主題、ここからの譜面は芸術作品となる。16分音符のみで書かれた楽譜であるが、ここまで来るともはや第1主題のメロディー形は原型を留めていない。泰徳のピストンを抑える手さばきがありにも華麗で早すぎるためか、小学生たちはずっと口が半開きの状態で演奏を聴いている。

第4主題は、旗が下向きの16分音符に加え、第1主題のメロディーが旗上向きの4分音符として加わり、さらにクオリティとテクニクが上昇した楽譜となる。しかも4分音符にはアクセントもつけられており、非常にハイレベルである。しかし泰徳は、朝飯前のように吹きこなし、曲を終えた。もはや人間離れた人物である。

「大きな古時計変奏曲でした。指の動きに見とれてしまった人も多いのではないのでしょうか？ 実際、私も見とれてしまいました」

先ほどの演奏の余韻がまだ抜けていないのか、美奈の司会にも時折ため息が混じる。

「さて、次はマリンバの演奏なんですが、今度は曲が終わるのも手の動きもめっちゃ早くちゃ早いんです。リムスキー・コルサコフ作曲『熊蜂の飛行』です」

泰徳自身、マリンバで熊蜂の飛行を演奏するのは初の試みである。曲想はもちろん、音符の並びやオーケストレーションまで何もかもを完璧にこなす泰徳は、マレット選びから精を出していた。

16分音符のみのこの熊蜂の飛行、管楽器でやるならば並外れの肺活量とブレステクニク、そしてフィンガリングテクニクを必

要とする。しかしマリンバと言う打楽器、そして鍵盤楽器に属する南米楽器で熊蜂の飛行をやるとなると、腕の力が相当必要になる。泰徳は未熟児で生まれ、肉体的な発達が身の回りとは少し遅れているために、体力的には自信がない。実際未来や美奈が心配していたのもあり、出来るかどうか不安であった。しかし2人は今までの泰徳の凄さを目にしているため、出来ることを信じていた。

当の本人はというと、まさにその期待に応えるかのように8分音符で刻まれるピアノ伴奏とばっちリシンクロして16分音符を叩いている。泰徳いわく、叩いて音が出るから打楽器ではないと言っていた。叩いた後に響かせるかが打楽器の技術が問われると、この本番前にチラツと言っていた。

「熊蜂の飛行でした。あつという間でしたね。さて、いよいよ最後の曲、『ヴェニスの謝肉祭』に移ります」

美奈の司会に従い、泰徳は黒いソフトケースからC管チューバの準備に取り掛かった。

第36楽章 「慰問演奏会 - 大トリ -」

急に頼まれた慰問演奏会もいよいよ大詰め、専門分野であるチューバでの『ヴェニスの謝肉祭』が今始まるうとしていた。

ヴェニスの謝肉祭は、チューバ奏者のみならず様々な楽器を担当する奏者に有名な“ダブルタンギング必須”の曲である。途中でコーラル風のテーマも出てくるのだが、それもつかの間、ほとんどがダブルタンギングで占められる恐るべし曲であり、曲の形式も先ほど演奏した『大きな古時計変奏曲』と大きく似ている。

「それでは最後の曲、『ヴェニスの謝肉祭』をお聞きいただきましよう」

元々6/8拍子のこの曲は、いかに伴奏と演奏者の息が合って演奏しなければならぬ曲かが問われる。簡単に言えばワルツ形式だが、それとは感じ方が微妙に違うため、非常に微妙なニュアンスの違いであっても、曲全体で聴くと大きな違いになる。泰徳はこの事を恐れ、日々拍子のとり方について勤勉してきた。

いつの間にかダブルタンギングを習得していた泰徳は、なぜ出来るようになったかが分からない。そのため、『ダブルタンギングってどうやってするの?』と聞かれると、さすがの泰徳も口をつぐんでしまうことが多々あった。しかし最近は色々な本に目を通すことで、説明のしかたやダブルタンギングの仕方が分かるようになってきた。最も、泰徳は知らぬ間に習得した技術なので、説明する余地もないが。そうこうしている間にも、人間離れた人間、泰徳の演奏は続く。そして壮大なフィナーレでソロコンサートは終わりを告げた。

割れんばかりの拍手が、第1音楽室という狭い会場をホール並みに盛り上げている。泰徳もまた、やりきった気持ちでいっぱいであり、

またその拍手が心地よかった。

「はい。以上でソロコンサートは終わりです。ありがとうございました」

こうして泰徳のソロコンサートは終わったが、小学生は口々に感想を言いながら第1音楽室を後にした。

「いやあ、竹林。よかったよ」

「宮内先生こそ」

そう言つて2人は硬い握手を交わした。

「だけど、あの竹林がなあ」

「何だよ」

「いや、ここまで成長するとは……」

「何だそれ！」

泰徳が否定的な答え方をする。

「でも本当よ、泰徳」

そう言つたのは未来だ。

「どういうことだよ？」

「だって泰徳、中学校はいるまでは吹奏楽にてんで興味がなかったじゃない。音楽は好きみたいだったけど」

そう、実は泰徳は、ピアノ講師の母を持っているため音楽には好意を示していたが、吹奏楽と言うものに対しては目線すら向けない不思議な人物だったのである。

「ああ……。そうだけど、やってるうちにはまっちゃってさ」

「じゃあ、泰徳が吹奏楽に入った理由って何？」

そう尋ねたのは美奈。思いのほか単刀直入だったので、泰徳も少し戸惑ったが、公応えた。

「やっぱり音楽が好きだったからかな。運動部はまあ、運動が苦手だったから最初からやるつもりはなくて、でも帰宅部は嫌だったんだよ。それで音楽の部活って言ったら水軍太鼓と吹奏楽しかないじゃん。水軍太鼓は小学校のときにやったことあったから、吹奏楽にしたってわけ」

「ふーん。大編成が大嫌いだったのにね」

「俺も最初は抵抗あったさ。合奏のたびに倒れそうになったよ」

泰徳はチューバの手入れをしながら話す。

「それは肺活量のためかい？」

宮内先生がおもむろに話しかけた。

「いや、違うよ」

「泰徳はね、最初トロンボーン担当だったのよ」

未来が補足する。

「え、じゃあ何で竹林はチューバやってるんだ？」

「ああ……。部内で色々ごたごたがあつて、結局泰徳がチューバ担当になったのよ。今じゃ第一線に言ってもおかしくないほど上手いけどね」

「そりゃ言いすぎだぜ、谷口」

泰徳が照れ笑いをする。しかし、周りから聞くと本当にそうである。

「俺も最初はチューバなんて嫌いだったんだ。メロディーないし、影薄いしな」

泰徳は笑いながら話す。

「でも、こいつと一緒にいればいるほど思っんだよな。“楽器ひとつひとつ、違う魅力があるんだ”って。俺はチューバの魅力にやられた男だから、こうして自分の楽器だって買ってやってんだよ」

季節は冬。日が短くなったため、早くから夕日が差す。その夕日が泰徳のチューバを照らし、その光がまた、泰徳を一層輝かせていた。

第37楽章 「嫌な予感……（・・・・・）」

3月。もうすぐ入学式が控えていると言うのに、冬の寒さは一向に去る気配を見せない。そんな中、泰徳たちは新しい楽譜の譜読みに追われていた。

「何だ、この変拍子！ 訳分かんねえし」

「しょうがないじゃない！ リードなんだから」

「リードだからって、この連符は無いでしょ」

あの泰徳がじたばたするほど大変な曲というのは言い過ぎかもしれないが、レベルは高いほうである。今泰徳たちが譜読みしているのは、新入生歓迎会のラストで演奏する曲、『エル・カミーノ・レアル』である。

この曲は、アルメニアダンスを作曲したことでお馴染みのアルフレッド・リード氏が作曲した曲で、題中の『レアル』は『王』、『カミーノ』は『道』を表し、直訳すれば『王の道』となる。細かい設定は省いて説明させていただくが、これはリードお得意の変拍子と、A - B - Aのロンド形式を組み合わせた、極めてグレードの高い（難曲とまでは行かないが）大曲である。

「ん？ ここオーボエソロじゃん」

スコアを渡されているため、一目で分かる。しかし、常套中学校には^{ダブルリード}はLWwが無い^{ダブルリード}ため、オーボエやファゴットのソロがあるだけで大事になることが多い。

「あ、ホント。どうするんだろ？」

「立石先生って、オーボエ無いのにこの曲やるつもりなんだ」

「バカ。ソプラノサクソがあるだろ」

「でも誰が吹くの？」

「浜口に決まってんじゃないか」

「ええ?! 愛があ?!」

常套中学校には、浜口 愛というクセモノサクソフオーン奏者がいる。かつて泰徳をトロンボーンからチューバへ異動させた女子生徒であり、今日に至るまで幾多も悩まされてきた原因の一人物である。

「? 浜口が吹くことにそんなに異議申し立てか?」

「当然よ! 何であいつがソロ吹くのよ! 吹けるはずが無いわ」
美奈が猛反論する。未来もうなずいている。

「あのなあ、浜口は確かにクセモンだけど、確実に上手くなってるぜ。ジョイコンの前のあいつのエアーズ、ソロ聞いただろ?」

「だけど、あの譜読みに相当時間がかかったって先輩言ってたもん!

「あのな、中井。人の力を見くびっちゃ駄目だぜ。のし上がるうと思えばいくらでもあがれる。たとえお前を蹴り落としてもな」

美奈は反論する気でいたが、よく考えると泰徳がそうであった。初心者でロングトーンすらまともに出来なかった泰徳が、今はこうしてプロのオフアーを受け、さらには慰問演奏会まで行い、極め付けにはジョイコンで持ち換えをし、大成功を収めた人間である。そんな過去もあって、泰徳の言うことに妙な説得力を感じた美奈は、素直に受け入れざるを得なかった。

「ううう……。分かったわよ。我慢するわ……」

「それでこそ中井。成長したな」

と、鼻で笑いながら言う泰徳。『あんたに言われたくないわよ!』
と言いたいのをぐつと抑えて、譜読みを進めた。

「でも確かに、愛って上手くなってるよね」

未来がさらに話を続けようとする。

「だろ? だからソロ吹いても問題ないんだって」
「だといいいんだけどね……」

泰徳は、この一言が妙に引っかかった。気にすまいと変拍子の譜読みを続けていたが、どうにも気になるので部活の帰り道、未来に尋ねることにした。

第38楽章 「クセモノ、究極の選択」

その日の部活の帰り道、泰徳は先ほど未来が口に使っていたことに
ついて、質問することにした。

「なあ、未来」

「ん？」

「さっき譜読みのおきにさあ」

「うん」

「言つてた『そうだといんだけど』ってどういう意味？」

さばさばした性格の泰徳は、単刀直入に未来に尋ねた。未来は少し
口ごもり、答えにくそうにしぶしぶと会話を進めた。

「それって、愛ちゃんのことでしょ？」

「ああ」

泰徳がそう返事をする、未来は軽くため息をついて、何か決心し
たかのようにこう切り出した。

「実はね、愛ちゃんの家は母子家庭なの」

「え……？」

母子家庭。そう、それは父親のいない家庭。そのようなことなど経
験したことのない泰徳は、思わず言葉を失った。さらに未来は追
い討ちをかけるようにこう付け足す。

「でね、愛ちゃんのお母さんは、いま入院中なの」

もう何も言えなかった。合奏の後、当たり前のように泰徳と美奈、
そして未来の3人で、愛の悪口を言っていた。それは愛の言動が理
不尽であり、また自己中心だったからなのだが、やはり泰徳たち
にも落ち度があったことを、今改めて気づかされた。

「で、お母さんは大丈夫なのか……？」

「うん。もうちょっとで退院できそうなんだけどね。愛も、喜んで
た」

いつも理不尽で自己中心的な愛だったが、そんな現状が裏にあった

とは、泰徳もてんで創造できなかった。しかし、未来の口調や表情からして、嘘は見受けられない。本当のことなんだと受け止めながら、泰徳は未来の話を聞き続けた。

「で、愛がどうしたんだ？」

「実は最近、私のところに頻繁に相談に来るの」

「何のこと？」

泰徳がそう聞くと、未来は黙りこくってしまった。

「…そんなに話しぶらいことなのか？」

「う、ううん。そんなことは無いんだけど、話していいのかどうか

……」

未来は少々迷っているようだ。なかなか話を始めようとしめない。

「安心しろ。このことは、俺と未来、そして浜口の間だけで留めとくから」

この言葉を聞いて安心したのか、未来はようやく話す決心をした。

「実は愛、My楽器を買いだてたんだって」

「それがどうかしたのか？ まあ、楽器を買うには値段が張るけど

……」

「愛の家、母子家庭でしょ？ だからお母さんしか収入源が無いんだけど、今そのお母さんが入院中で、愛は一人暮らし状態なの。食事もうくに取ってないらしくて、顔もだんだんやつれてきちゃって

……」

そういえば最近の愛は、どうしたのか元気が無かった。あの嫌味な口調が特徴だったにも拘らず、最近ではでんで泰徳たちに絡まなくなった。そのとき3人は、楽になったと喜んでいたのだが、そこにはそういう理由があったのかと、泰徳は驚きを隠しきれなかった。

「そうだったのか……。だから浜口は最近元気が無かったんだな」

「そういうこと。で、楽器が買いだてたんだけど、今そういう状況だからどうしようかって悩んでるらしいの」

「谷口は、浜口の選択肢がどのくらいあると思ってるんだ？」

「選択肢って？」

「My楽器を買ってわが道に進むのか、それ以外かってことだよ」

「うーん……。私的には、泰徳が今言ってみたに自分の楽器を買って、将来のためにがんばるのか、今は控えとお母さんの退院を待って、経済的に安定してから楽器を買うのかってとこかな」

「なるほどなあ……。これはやっぱり、浜口自身に決めてもらったほうがいいよな」

「そうね」

「私は、今すぐにでも楽器を買いたいわ」

突然後ろから聞こえた声に、2人は驚いて振り返ると、そこには愛がいた。

「浜口！」

「今の、聞いてたの？」

「うん。私の悪口言ってたなんて……。許したくないことだけど、原因は私自身にあるからお互い様だと思う。だけど、自分の夢だけは何かあっても貫き通したいの」

「浜口の将来の夢って何だ？」

「音大に進んで、サクソ奏者になることよ」

「サクソってことは、アルトか？」

「ううん。アルトだけに限らず、いろんなサクソに挑戦してみたいと思ってる。でも、正直まだ迷うことがあるのよね……」

「というと？」

「さっき未来ちゃんが言ったように、お母さんがまだ退院してないから、ローン払うのにも時間が要るでしょ。金銭的にも今は不自由だし、それをお母さんが許してくれるかどうか……」

この愛の言葉を聞いて、自分の両親は理解があつてよかったと思つた。母が音大出身であるために、そこまでの道のりを歩む大変さを知っている。だからこそ自分の楽器を買ってくれたのであつて、愛とはまた家庭の事情が違う。愛が悩んでいることはそれだった。

「それじゃあ、お母さんにそのこと相談すればいいじゃん」

「でも……」

「大丈夫だつて。お母さんもそこまできつい人じゃないだろ？ それに、早めに踏み切りつけないと後から苦しくなるだけだぜ？ 選択には痛みが生じるけど、その痛みを受けないと膿は出ない」

泰徳は愛の母親を知らないが、愛の今までの反応を見てきた限りでは、愛の母親が悪い人だとは思えなかった。そして泰徳の最後の言葉が、愛の迷いの心を揺り動かした。

「わかんないけど……。うん、一応そうしてみる」

「ああ。がんばれよ」

「うん、ありがとう。じゃあ、今からお見舞い行かなきゃいけないから。じゃあね」

「ああ」

「バイバイ！」

愛は肩の荷が下りたのか、足取り軽く、母親の見舞いに行った。

「でも、浜口があそこまで悩むとはな」

「私も最初はびっくりした。でも、愛だつてそういう時期はあるのよ」

「そうだな。それほど悪いやつでもないし。ただ口が過ぎるだけだな、あいつの場合」

「うん。私も愛を見る目が変わった気がする。自分でも」

2人は笑いながら、家路を急いだ。今回の出来事で、愛の演奏がどれだけ変わるのか、2人とも楽しみでならなかった。

第39楽章 「初見合奏 - 奏者の実力 - 序曲」

3月に入って、1週間が過ぎようとしている。この日、常套中学校吹奏楽部は卒業式の合奏を控えていた。この日の練習日までに配られた楽譜は、エアーズをはじめとする比較的しつとりした曲だ。泰徳たちはすでに基礎練習やセクシヨンアップなどのメニューを終え、合奏待機しているところだった。

「卒業式にやる曲って、意外と多いんだな」

「そうね。今もらってるだけでも3曲あるもん」

「でも先生、今日も配るって言ってたよ」

「まだ配るのかよ……」

「いいじゃない、できる曲が増えて。あ！先生来た」

未来の言葉で姿勢を正す泰徳と美奈。立石先生の手には、未来が言ったとおり楽譜があった。

「練習量を増やして悪いんだが、今日、また新たな曲を2つ配る。

パートリーダー取りに来てくれ」

立石先生の指示で、各パートのリーダーが楽譜を取りに行く。Ba

ssパートリーダーは美奈だ。

「はい、チューバとユーフォ」

「ありがとう」

「何々？『大地讃頌』と『旅立ちの日に』だって？」

「今回、卒業式で歌う旅立ちの日にを、吹奏楽で演奏することになった。大地讃頌は、退場曲だ。これらを今回、初見演奏してみたいと思う。あと、入学式のものも用意しておいてくれ。5分の譜読み時間の後、合奏を始める」

そう言って、立石先生は去った。

「うわあ、大地讃頌のこの調号、なかなかきついな」

5つの口長調である。加えて、臨時記号なども多い。ユーフォニウムを担当する未来に至っては、ダブルシャープもある。

「でも、この旅立ちの日には面白そうよね」

「あ、同感」

「この2曲と、入学式の曲って何するんだ？」

「えっとね、コンサートマーチ『テイク・オフ』と、エルカミだったかな？」

「エルカミって新入生歓迎会でしょ」

「あ、そっか。じゃあマーチ『春風』と、ディスコ・キッドかな？」

「多分そうだったと思う」

「ふーん。じゃあ譜読みはそこそこできるってどこか？」

「泰徳にはそうかもしれないけど、私たちは必死よ……」

と、おたまじゃくしがいっぱい並んだ楽譜の芸術を必死に解読しようとする未来が半泣きの状態で呟いた。今回合奏する曲は、

○コンサートマーチ『テイク・オフ』

○マーチ『春風』

○ディスコ・キッド

○旅立ちの日に

○大地讃頌

○エアーズ

の計6曲となる。常套吹奏楽部始まって以来の長時間の合奏になるが、この日は1日練習で合奏がお昼をまたぐ。苦痛にはならないはずだ。

「ねえねえ、泰徳」

「何だよ」

「ここの小節にあるG・Pって何？」

「ああ、これは『ゲネラルパウゼ』って言って、奏者全員の休みのことさ。だからここは指揮者を見ていないと、みんな吹いてないのに1人だけ吹いてるってこともありえる」

「えー、嫌だあ！」

「だからここは指揮を見るんだよ」

「うん、分かった」

未来や美奈は、少なくとも泰徳を頼りにしている。ここまで知識のある中学生はいないし、ましてや技術面においては足元にも及ばない。しかし奢り高ぶることは無く、いつも自分のことを下に下に見ようとして、それでも成長を続ける。泰徳の素直さが、信頼を呼んでいるのだ。

「じゃあ、このギザギザは？」

「あー、これ確か正式名称があっただけど、忘れたなあ。でも、ここはトレモロで演奏するんだ。ミの上にギザギザがあるから、これは『ミファミレ』って演奏しなきゃだめだな。調号はちゃんとつけるよ」

「うん」

主に伴奏やリズムを担当する泰徳や美奈と比べて、対旋律やメロディー、和音構成などさまざまな役割を担うユーフォニアムは、超絶技巧を求められる場合が多い。そのため、記譜上でも泰徳や美奈とは比べ物にならないくらいの細かく詳しい指示や、難しい用語が載っていたりする。

「ユーフォって大変だな、本当に」

「うん。だけど、音色が好きだから、私はユーフォが好きだな」

「そうか」

「うん！」

自分のやっている楽器が好きになれる。またそれに対して誇りを持てるということは、すばらしいことだというのを、泰徳は改めて感じたような気がした。

「あ、先生来た」

「よし、ではこれから、初見合奏を始める。まずは、経験済みのエアーズから」

「はい」

スコアがセットされ、指揮棒が握られる。頭に出るグロッケンとフ

ルートは、この上なく先生をにらむようにして見ている。そしてついに、先生のタクトが下ろされた。

第40楽章 「初見合奏 - 過去のエアーズと現在のエアーズ -」

グロッケン³の3連符にはじまり、それに静かなフルートの2連符が加わる。ピッコロの佳代いわく、この2連符の音はフルートからしてみれば高く、音程を取るのも難しいという。その難課題を残したまま合奏に挑んだため、エアーズが始まってすぐに合奏がとまった。

「おいおい、そのフルートの音程は嫌がらせだぞ」

立石先生はしかめ面をして、ハーモニディレクターを鳴らす。それに重なるフルートの音程といたら、愛以上にひどいものだった。“ウワン ウワン”という音の歪が、はつきりと聞いて取れる。

「冬だから音程が低くなるのは仕方ないかもしれないが、できる限りあわせてるのがお前たちのやるべきことだぞ」

立石先生はそういうと、合奏を再開した。

エアーズは、卒業式の入場曲として演奏予定である。以前この曲を題材にあげて書いたときに説明したとおり、エアーズという曲自体が卒業式向けに書かれた曲であるため、常套中学校の生徒はこのエアーズを聴くと、「あ、卒業式なんだ」と自覚することが多い。このエアーズを演奏するに当たって、以前泰徳は、翔からこんなエピソードを聞いていた。

「久しぶりやな」

「ああ。ちよつと聞きたいことがあつてな」

「へえ、珍しいやんか。泰徳から電話かかってくるとは思いもせえへんかったで」

「まあ、暇だったからな」

今も親友として認め合っている泰徳と翔だが、翔からしてみれば泰徳は程遠い存在の人物になっていた。小さいころは一緒に遊び、趣味も一緒、しかも幼馴染だった泰徳が、今は愛媛で県内最強の中学

生として番を張っている。翔には手の届かない存在になっていた。

「ふうん。ところで、聞きたいことって何や？」

「あ、すまん。あのな、今年の卒業式にエアーズ吹くねんけど、中間にサックスのソロがあるやろ？」

「うん」

「あそこがどうも心配やねん」

「ちよっと待って」

「何？」

「何でチューバ吹きのお前が、サックスの心配せなあかんねん」

確かにそうだ。翔はいつもテンションが高いだけではない。推理力と洞察力は抜群に優れているのだ。この2点については、泰徳に劣らずとも優れていることを泰徳は忘れていた。

「実はな、そのサックスソロ、浜口がやるねん……」

洪々と答える泰徳。

「浜口って、愛さんのことか？」

「ああ。あいつ、今までやってきた事がコトだから、どという演奏するのか心配やねん」

「クセモンだったもんな」

翔はそう言って、懐かしそうに笑った。

「今はそうでもないけどね」

「でも、心配なんだろ？」

泰徳の発言に、翔は付け足した。

「……ああ……」

少し間をおいて聞こえる、泰徳の返事。なんだかんだ辛口評価の泰徳だが、根っから優しいやつなんだと翔は思い返した。

「実はな、俺がまだ中学生のころ、そのエアーズで屈辱を味わってん」

「ああ、お前ならやりそうだな」

受話器の向こうで、深く相槌を打つ泰徳。そしてさっきの仕返しといわんばかりに、こう付け足した。

「翔のことだから、また音楽性とかなんとかガキっぽいこと言つて、修平君にソロ奪われたりと貸したんじゃないの？」

突っ込みどころが無い。泰徳が言つたとおり、翔の失敗はそういうことだったのだ。

「よく分かつたな……」

「だてに長年親友やつてるんじゃないんだぜ？」

中学生のころの翔は、ソロばかりに目が行き、周りとあわせるということをあまり知らなかった。技術よりも音楽性という彼の主義が、それを許さなかったのだ。結果、当時のコンクール課題曲であったエアーズのソロは修平に任され、翔はそのショックから退部届けを出したということもあつた。しかしこれらの話は、翔の第2の親友である、佐野 修平から伺つた話である。

「ま、浜口さんなら大丈夫だと思うけどね」

「どうしてだ？」

「だって、泰徳たちには本当の理由を話したわけだし、淀南中時代の俺とは違って、少しは聞き分けもあるやろうし。『溶け合う』大切さが分かつたのは、高校入ってからだったからな」

「ふーん。翔もやっぱ人間なんだな」

「何やそれ！」

恥ずかしそうに笑う翔。

「別に。じゃ、俺同級と約束があるから」

「分かつた。ほなな」

こうして2人は別れた。

愛も少しずつだが成長してきているのは分かる。これは、愛と自称犬猿の仲の美奈も認めていたことだった。しかし泰徳が心配なのは、愛の技術や譜読みレベルではない。愛がどのようににサクソソロで表現し、卒業式という場で吹きこなせるかだった。練習の今ではうまくできているように聞こえるが、本番ではどうなるかわからない。そう考えて翔に電話したのだが、期待した答えは返ってこな

かったのだ。

「浜口」

エアーズを終え、最後の指示が立石先生から出される。

「はい」

「サックスソロだが、今はなかなかいい出来だ。だが、本番ではどうなるか分からない」

愛は立石先生の話を黙って聞いている。

「本番で間違えれば、お前は忘れられない屈辱を味わうだろう。だが、世の中のプロ奏者の人たちは、そうならないように1つの意識を必ず持っている。『練習は本番のように、本番は練習のように』だ」

泰徳ははっとした。これだ！と思った。立石先生はやはり自分の尊敬する先生だと思った。ただ、立石先生側からしてみれば、「これは俺の知り合いのサックス奏者、佐野君の受け売りなんだけどな」と付け足したいところだった。しかしこれを言くと、泰徳がどんな反応をするか分からなかったので、あえて言わないで置いた。

「よし、次はディスコ・キッドだ。10分休憩！」

先生は席を立ち、パーカッションはドラムの準備に追われた。

第40楽章 「初見合奏 - 過去のエアーズと現在のエアーズ-」 (後書き)

エピソードの詳しい内容は、につくん[♪]さん著：「奏くKana de」 第177話『エアーズ』をご覧ください。

第41楽章 「デイスコ・キッド」モヤモヤと危険予知」

10分の休憩を挟み、続いての合奏はデイスコ・キッドである。

この曲は、新人生歓迎会において演奏する曲で、この曲に関しては部員全員が立奏を行う。

デイスコ・キッドは、デイスコ・キッド愛好会やデイスコ・キッドフェスティバルが行われるほどの超有名課題曲の1つである。1977年のコンクール課題曲であり、同年代の課題曲に『高度な技術への指標（河辺 公一）』や『ポップス描写曲 《メイン・ストリートで》（岩井 直博）』などがある。これらの曲に共通するのは、ドラムが編成に加わっているということと、曲調がポップスであることだ。

このような背景には、1970年代の流行が影響していた。このとき、日本は各地で空前のデイスコブームであった。同時に若者への悪影響なども考えられ、規制も入ったといわれる。そのため、この『デイスコ・キッド』を発表した当時、世間には大きな衝撃が走った。全日本吹奏楽連盟も、この作品に目を通したときは自分たちの目を疑った。また、このデイスコ・キッドはそれなりのリスクを背負っており、

1．ドラムセットがある。

2．ソロが吹ける人材を確保する。

これら2点をおさえていなければ、デイスコ・キッドの演奏は不可能に近かった。

さて、このデイスコ・キッドは、東海林 修^{しゅうおむ}作曲のポップス課題曲である。皆さんがよくご存知であろう、『デイスコ！』という掛け声は、当時は無かった。それは楽譜にも指示が無く、スコアにも何もかかれてなかったためであるが、某団体がこれを演奏会で起用

したため、現在のような形になった。また、本来のソロはクラリネットのみであるが、最近公表されたモダンバージョン（当時の楽譜を作・編曲し直したもの）ではa d d ^{アド} l i b i t u m ^{リフ}として、様々な楽器が組み込まれるようになっていく。今回常套中学校が用意したのは、モダンバージョンだ。そのソロを担当するのは、無論泰徳である。

「よし、じゃあディスコ・キッド始めようか」

「はい！」

軽やかなドラムに乗せて奏でられる、ピッコロとクラリネットのソリ。実は、個々の音域はクラリネットからすればハイトーンの音域になり、お世辞にも楽に出せる音域というわけではない。だんだんと重なる楽器の中で、ひと際輝いているのが金管楽器軍であった。トウツティで奏でられる和音に浸りながら、音楽は進んでいく。中低音楽器は、この先下降系の音があるのだが、それを一発で当てるのはなかなかの技術を必要とされていた。特にチューバは、楽譜を見る限り、チューバとは思えない音域で音が書かれてあることが多い。この楽譜を見たとき、未来と泰徳は一緒になって発狂したのは個々だけの話である。

♪ チャッチャッ！ チャーチャ！ 『ディスコ！！』

ディスコ系の曲だけあって、サックスや直管楽器が目立つが、低音軍も負けてはいない。特に今回は、美奈がE・B a s s ^{エレクトリック・ベース}なので、低音も充実している。現在ではこの掛け声もメジャーになっているが、これが課題曲として発表された当時は、このような指示は書かれていなかった。誰が始めたのやら、今では頭にこびりついて離れない。

そして一番の見せ場は、多種多様な楽器によるソロ。本来一（コンクール課題曲ver.）はクラリネットのソロしかないのだが、

[illegible]

「時に泰徳、今回のディスコ・キッドの件、どう思う？」

「じゃあ、問題はバスクラとトロンボーンですか？」

「それなら、いつそのことソロ任してみたらどうですか？」

「それは考えすぎでしょう」

泰徳はしばらく考えたが、今回は承ることにした。だが、どうして

も納得はできなかった。

- . - . - . - . - . - . - . - . - .
- . - . - . - . - . - . - . - . - .

トロンボーンソロを吹ききる泰徳。そして立石先生からのVサイン。泰徳は胸の中のモヤモヤがすっきりせず、複雑な心境に置かれていた。立石先生はそんな泰徳には気づかず、部員たちに言う。

「よし、昼飯の時間だ。14:00には合奏が始められるようにしておけよ」

「はい!!」

そして立石先生は去った。

「ふう…。なんだかなあ……」

その場を立ち上がり、呼吸を整える泰徳。するとおもむろに、咳が出た。

「風邪でも引いたのかな……」

そのときはあまり気にせず、美奈と未来で、3人と昼食を取りに向かった。

第42楽章 「（短編） スカウト」

それから合奏は順調に進んだものの、泰徳の咳は一向におさまる
気配を見せなかった。だが、今日の音楽室は妙に誇りっぽかったの
で、みんなも咳をしていたし、特別心配する様子は無かった。泰徳
自身は異変を感じていたが、疲れが出たのだろうと気にしなかった。
「あ、竹林、ちょっときてくれ」
「はい」

立石先生に呼ばれ、音楽室の隣（いわゆる準備室）に駆け寄る泰徳。
立石先生がドアを締め切り、ポケットから一枚の紙を取り出した。
「何ですか？ それ」

「ああ。先日FAXで送られてきたものでな。読んでみる」
「は…はあ……」

言われるがまま、立石先生に渡された紙切れに目を通す。

- - - - -
- - - - -

竹林 泰徳様及び保護者様

セントラル・ウィンドフィルハーモニー入団についてのお誘い

まず、このような急なお便りをお許しください。この度は貴殿の
お子様、竹林 泰徳様について、オーケストラ兼吹奏楽団体『セン
トラル・ウィンドフィルハーモニー』にお誘いしたいと考え、この
お便りをさせていただいております。

さて、ふっつかながら昨年のアンサンブルコンテスト 愛媛地区
大会を傍聴し、結果発表後に泰徳君と面会いたしました。本人は卒
業すれば入団するとの事でしたが、当楽団の現状といたしましては、

ことを調べてみたんだが、こういう書類が来るのはきわめて稀だそう
うだ。それに平均年齢は15歳。今のお前ならやっていけると思っ
んだがなあ……」

「でも先生、学校とかはどうすれば……」

「大丈夫だ。校長先生は、すでにこの事は知っておられる。寧ろ、
高校入学が容易になると喜んでおられた」

「じゃあ、やつても問題ないって事ですか？」

「ああ、そういうことだ」

「だったら、僕テューバ1本に絞ろうと思っんですけど」

「いいんじゃないか？ そこは竹林に任せるよ」

泰徳はしばらく考え込み、用紙をずっと見つめていたが、意を決し
たように泰徳はまっすぐ前を向いて言った。

「先生、僕やりたいです」

「よし、よく言った。頑張るんだぞ」

先生は泰徳のこの答えを待っていたかのように、暖かく祝福してく
れた。あとは親と相談して、最終判断は泰徳に仰ぐとした。1枚の
紙切れだが、紛れも無い契約用紙に違いは無い。これにサインと印
鑑を押した瞬間に、泰徳はアマチュアからプロに転向することにな
るのは、泰徳自身も分かっていた。だが、やりがいはあると思っ
ていた。

「プロかぁ……。何か実感わかないな」

泰徳はポツリと呟いた。その日の夜、親の承諾を得て契約用紙をポ
ストに投函した。

第43楽章 「卒業式前日 2 - 1」

泰徳がスカウトを受けた次の日、常套中学校は日曜日にもかかわらず、卒業式の準備に追われていた。その中にはもちろん吹奏楽部もいるし、その他多くの部活生が椅子並べやテーブルクロス引き、造花のセッティングなどを行っていた。卒業式の予行練習は金曜日に済ませたが、これまた例年のごとく起立や着席、礼のタイミングなどの練習を重ねた結果、貧血でぶっ倒れる生徒が続出したのはここだけの話である。

さて、吹奏楽部は演奏体系を整えている途中のようだ。

「ねえ、未来」

「ん？」

「何で今日泰徳いないの？」

「わかんない。でも立石先生は、家の用事って言ってたよ」

「ふーん」

未来と美奈が不思議がるのも無理は無い。欠席や遅刻する場合は必ず連絡を入れるのが泰徳であつたが、今回は2人に連絡が無いまま今に至っているのである。

「でも珍しいよね、泰徳が連絡しないなんて」

「確かに。今までは連絡があつたもんね」

「でも、家の用事とは限らないんじゃない？」

2人の会話に首を突っ込んできたのは、愛だった。

「何でそう思うの？」

「私、引つかかっていることが1つあって……」

「だからなんなのよ！ ジラさないでってえ」

「あ、ごめん。泰徳って、中学校卒業したらセントラル・ウィンド？ ってところに入団するんでしょ？」

「うん、そうだけど、卒業まであと1年だよ」

「もしも入団が早まったらどうする？」

最初は、妙な質問を投げかけられたものだとも思っていた。だが考えてみればあり得ないことではない。あの泰徳のことであるし、セントラル・ウインドフィルハーモニーに同級がいると言っていた。もしそれが絡んでくるのならば、入団は早まってもおかしくないと思ったのだ。

「泰徳だったら……」

「あり得ることよね……」

「でしょ？ だから、もしかしたら今日はって思っちゃって……」

今までさんざん泰徳たちに迷惑をかけてきた愛だが、実は成績優秀者でこういうことには頭がさえる。そういう愛のことであるから、信じずにはいられないのだ。

「ちよつと立石先生に聞いてみる」

未来と美奈は、立石先生の元に向かった。

一方その頃、泰徳はM Y楽器を持って東京都杉並区の、とある倉庫に来ていた。外見はボロボロで、トタンが錆びているところもある、いわば廃墟といっても過言ではない倉庫。表の標識には「長谷川製鉄」の文字がある。しかし個々には誰も折らず、ただ車や自転車の走る音が聞こえるばかりである。

「本当にここで合ってんのかなあ……」

不安が泰徳の脳裏をよぎる。いくら首都圏とはいえ、静か過ぎる。しばらくして、1台の車が泰徳の前に止まった。

「あれ？ 泰徳、ここでお前やってんだ？」

中から出てきたのは、泰徳の幼馴染であり、入団予定のセントラル・ウインドフィルハーモニーのコンサートマスターである要^{かなめ}毅^{つよし}だった。同じくテューバ担当である。

「あ、毅^{つよし}。うん、実は昨日スカウトされて、返事を速達郵便で送ったら今朝電話がきてさ、東京に来てって。記憶に薄いけど、俺の記憶が正しければお前んとこのシモ指揮者だ」

「シモ指揮者とか言うな！ あれでも結構まともなところあるんだ

ぜ」

泰徳のたった2人のライバルのうちの1人、毅があのおっさんを認めている。やはりただ者ではないのかという考えしていると、

「あ、噂をすれば。来たぜ、シモ指揮者が」

「え、どこに？」

「目の前にいるじゃんか」

目の前といわれて、周りを見渡す。しかしそこにあるのは、大きな4トントラックとその横に立つ、青い作業服を着た老人1人。なんだ、やっぱりいいじゃないかと言いかけて毅を凝視した。そして小声で囁く。

「もしかして、あのトラックの横に立つてるおじいさんが指揮者？」

「ああ」

即答され、啞然とする。毅はそういう泰徳の反応を見て、目が点になるとはまさにこのことかと、心の中で爆笑した。

「あ…あの……始めまして。竹林 泰徳です」

しばらく見つめる老人。そして、

「んあ？ あんた誰や」

「え…」

しばらく流れる沈黙の時間。そしてそれを破ったのが、老人の

「ああ！ あのチューバ奏者の竹林君か！ てつきり高校生かと思つたら、中学生だったんじゃない！」

がつはつはと豪快に笑い、右手を差し出す。

「わしがセントラル・ウィンドフィルハーモニーの常任指揮者、長谷川 虎彦せがわ こひこじゃ。よろしく頼むぞ」

訳が分からなかったが、毅の言うとおり、なぜか分からないが『この人はまっとうな音楽家だ』と思えたので握手をした。

「これから練習があるのだが、どうじゃ？ 参加していかんか？」

「はあ、それはありがたいんですが、練習場所は……？」

「は？ 練習場所？ そんな無いわい」

「え？ でも練習場所が無いと…」

戸惑う泰徳に助け舟を出したのが、毅だ。

「ごめんな、泰徳。期待を殺ぐ^そようでなんだが、俺らの練習場所はここなんだ……」

「え、ここ?!」

「いかにも!　そしてここがわしの家じゃ」

信じられない。音楽をかじった者なら誰でも知っている超一流の楽^バ団であるセントラル・ウィンドフィルハーモニーが、外見はボロボロで、トタンが錆びているところもあって、表の標識には「長谷川製鉄」の文字があつて、最終的に廃墟というにふさわしいこの建物で練習しているとは。泰徳はちらつと中をのぞいたが、一応反響板はあるし、防音加工も施されているようである。が、現状を受け入れられない。一番は、超一流がこのような廃墟で練習することのギヤップだった。文句を言つても始まらないので、とりあえず合奏に参加させてもらうことにした。

その後、泰徳は経験したことの無い刺激と楽しさ、そしてプロという世界の真の姿を目の当たりにしたのは、いうまでも無い事実である。

第44楽章 「卒業式前日 2・2 近づいて、遠のいて」

卒業式の準備を終え、みんなが解散しようとしている。しかし美奈と未来だけは違い、立石先生を探すのに必死であった。無論、今日に限ってなぜ泰徳が連絡もなしに部活を欠席したのか、真意を問うためであった。

「先生どこにいるのかなあ……」

「あの人って、本当に肝心なときにいないんだから……」
と、美奈は軽いため息をつく。

「仕方ないでしょ。あれで生徒指導教員なんだから」

未来がなだめる。生徒指導とは、常套中学校に通う生徒の髪形や服装をチェックし、上役に報告する職務である。

「でも、見つかってくれないとこれも困るのよねえ」

「うん。早く知りたいもんね、ホントのこと」

しばらく歩いていると、未来がステージの横にある控え室から、マイクを持った立石先生が出てくるのを目にした。

「あ、先生……!!」

美奈が叫ぶと、なんだと忙しそうにマイクのコードを巻き取りながら答えた。

「泰徳って何で今日休んだんですか？」

「だから言っただろう、家の用事だと……」

「私、そうじゃない気がするんです!」

美奈が叫ぶと、立石先生はキョトン顔になった。

「何でだ？」

「いや、もしかしたらですけど、泰徳が入団予定の楽団の入団式の日がどうも気になって……」

「……………」

立石先生は何も話そうとしない。ただただ黙りこくっているだけだ。
「先生!」

「私たちも同じパートなんだから、知りたいです！」

2人がそう言うと、立石先生は

「ついてこい」

と言つて、2人を放送室に読んだ。そして

「これを見る」

そう言つて取り出したのは1枚の紙。先日泰徳がサインした、セントラル・ウィンドフィルハーモニーの入団契約書のコピーであつた。

「これは…」

「入団契約書……」

2人はそれ以上話そうとはしなかつた。すべてを悟つたようだつた。「その通りだ。つい先日のこと、竹林はこれにサインをして速達輸送した。翌日、セントラル・ウィンドフィルハーモニー事務局から連絡があつたそうだ」

「てことは、今は泰徳はセントラル・ウィンドのところに行つてるつてことですか？」

「そついうことだ」

「でも、東京ですよな？ 明日の卒業式には間に合うんですか？」

「そこは心配ない。松山空港から羽田国際空港までは約1時間30分だ。竹林が7：00の飛行機に乗れば、何とか間に合うだろう。」

しかし、竹林がプロか……

「なんか遠くなっちゃいますね」

「入部したての頃は何かと大変だつたのに……」

愛の予想は当たつていた。そう、泰徳も元はと言えば初心者である。それがプロになるまでに成長し、さらには契約も済ませてきたと言ふから驚きである。かつての経験者である未来だが、泰徳に抜かされた感じがしてたまらなかつた。思わず『始めは私のほうが上だつたのに』という思いがよぎつた。

「まあ、これもあいつが決めた道だから、俺たちは何も言う権利は無い。今の俺たちにできることは、竹林自身がセントラル・ウィンドフィルハーモニーという国内屈指の団体の中でうまくやっていけ

るように、見守ることだけだ」

実際は未来と美奈の2人も誘われている身だが、予定より1年も早い泰徳の入団に、なんともいえない複雑な気持ちが湧き出てくる。悔しさなのか、嫉妬なのか、はたまた祝福したい気持ちなのか、それすらも分からなかった。1つだけ言えることは、その複雑な気持ちに彼女たちのやる気を掻き立てたことであつた。

「私たちも…負けてられない……！」

「でも美奈、急いでも駄目だよ。泰徳にはかなわない」

「だからこそ頑張るんじゃない」

「どういうこと？」

「他の人よりも頑張つて、その頑張りを、今はプロになった泰徳に認めてもらうのよ。そしたら、少しは自信つくでしょ？」

美奈と未来のやりとりを、立石先生は静かに聞いている。

「泰徳が、私たちを認めてくれるかなあ」

「きつと認めてくれるわよ。いくら硬派な泰徳でも、音楽には理解があるはず。私たちの頑張りを泰徳の目に分かるようにすれば、褒めてくれなくても決して貶したりはしないはずよ」

「うん……」

納得いかない点もあつたが、自分も泰徳に少しでも近づきたかつた。その気持ちが後押ししてか、肯定せざるを得なかった。むしろ、肯定したほうが自分のみのためになると思つた。

「よし。今日は合奏が近い。音鳴らしをして合奏に臨め」

「はい」

立石先生は去つた。しかし未来と美奈の2人は10分ほどその場に残っていた。同級生の泰徳。同じパートの泰徳。幼馴染の泰徳。今まで関わりやすかつた泰徳の存在が、急に遠く、そして威厳に感じられた。これから泰徳のことをどう呼ぶべきか、迷つた。普通どおり泰徳でいいのか、それともプロになつたのだから竹林先生が妥当なのか。ほんの些細なことであるが、当時中学生の彼女ら2人にとつては計り知れないほどの葛藤が続いた。

「ねえ、美奈…」

「ん？」

「泰徳、今何してるかな？」

「さあ…」

美奈はしばらく黙ってから、うつむいて答えた。

第45楽章 「泰徳のプロ目線」

翌日。この日は卒業式当日である。吹奏楽部は、朝の8：00から体育館に待機し、ちょうど先ほど軽いアップを済ませたところであつた。未来と美奈は、どこかしら浮かない表情を浮かべている。その横にいるのは、泰徳。

「ねえ、泰徳」

「ん？」

話しかけたのは美奈であつた。

「入団…したの？」

「何の話だ？」

「え、えと…その……」

美奈にしては珍しく、言動に覇気が無い。泰徳自身も不審に思っていた。

「何だよ」

じれったそうに問う泰徳。中途半端が嫌いな泰徳のことなので、こは言うしかないと思つた。そして意を決しように、美奈は口を開いた。

「セントラル・ウィンドフィルハーモニーに入団したの？」

「え……？」

泰徳の動きが止まる。そして、

「あ、ああ……」

という返事が返ってきた。

「やっぱり……」

「……………」

「昨日いなかったのは、入団の契約を済ませるためだったんだ……」

「ああ……。それに、練習に参加させてもらった……」

「そう……」

「いい……刺激になったよ……」

2人の間に気まずい空気が流れる。連絡すればよかったかと後悔する泰徳に対し、泰徳という存在が急に遠く感じられ、もう気軽に話しかけられない気がするという美奈。2人の考えからは明らかに「お互いに遠ざかる」とする意識」が感じられた。未来はこういったシチュエーションが苦手なので、ずっと傍で話を聞いておくことにした。

「いつから…向こうに行くの？」

「え？」

予想外の質問に、思わず黙ってしまう泰徳。

「入団したんだったら、向こうに行っちゃうんでしょ？」

美奈は明らかに誤解している。そう思った。

「中井、それは違うぞ」

「え？」

「俺は入団はしたが、向こうで生活する気は無い」

静かだが、明らかに決意を固めた泰徳の声。

「俺は、ここを卒業するまでは常套吹奏楽部員でいたいし、ずっとみんなと音楽をやっていきたい。そりゃ壁は感じるかもしれないけど、俺まだ中学生だぜ？　そんなやりにくそうな顔されたら、こっちがたまらない」

「でも、泰徳はプロになったんでしょ？」

「確かにそうだ。けど、俺レベルのチューバが吹けるやつなんて、世の中にごまんといえるんだからな。妥協はしてられないと思ってる。それに、プロになったって言っただけ、まだ1年目の新米だ。そこまで高く見られちゃこっちも困る」

と、優しい笑顔で泰徳は返した。何かと音楽に関しては手厳しい泰徳であるが、その泰徳のここまで優しい笑顔は美奈も、そして未来も始めてみた気がした。

「あいつ…匠のこと覚えてるか？」

泰徳が口調を変えて話し出す。

「匠って、あの天才肌の？」

「ああ。俺もあいつには天才肌気質があると思ってる。1コ上だし、そこんところはよく分かるんだよな。ただ、あいつは結構幼いところがあつてさ、意外と……目立ちたがり屋なんだよ」

「うん……」

「それが仇となつて、この前勃発した大論争に発展したんだけど、やっぱり吹奏楽はソロとかじゃなくて、合わせることだと思うんだよな。低音は大事とか言われてるけど、実際何がどう大事なのか分かってなかったりさ、意外とあるんだよ」

美奈はドキツとした。美奈自身も、低音は大事だと言い聞かされてきたが、実際低音の何が大事なのかがいまいち分かっていなかったからだ。

「今は、それを確かめる時間なんじゃないか？」

「確かめる時間……？」

「ああ。プロとはいえ、俺もまだ中学2年生。知らないことはたくさんあるし、むしろ教えられるほうが多いと思う。よく考えてみれば、谷も中井もいずれは入団するんだよな」

「……………」

「それなら尚のこと、低音の重要性は勉強しておかなければならない。改めてそのことが分かったんだよ。コンマスの毅もチューバ吹きだが、あいつは高1。今は到底足元にも及ばない存在なんだよな。でも、いつか追いついてやるって思うんだよ、自然に」

「……………」

「だから、今は精一杯頑張るべきだろ。がむしゃらでもなんでもいいんだって。とにかく、今はこの流れに乗っていくしかないんだって」

「私たちが……」

「え？」

「私たちが入団してきたときには、もう近づけないの？ 泰徳に近づこうとするのは無理なの？」

静かに問う美奈。

「無理だな」

「やっぱり……」

がつくりをかたを落とし、ため息をつこうとしたそのときだった。

「だって俺はチューバでお前は弦バス。楽器が違うんだから、仕方ないことだろ」

と泰徳が付け加えた。

「どんな楽器でも頑張れば上にいける。重要なのはやる気でも技術でもない。いかに、今自分が与えられている音楽に真剣に向き合ったかだ。ま、これはセントラル・ウインドの指揮者の受け売りなんだけどな」

と、泰徳は笑った。美奈はありがとうと言おうとしたが、泰徳が立石先生に呼ばれたので結局いえなかった。しかし、今の言葉が美奈、そして未来の心の支えになったのは間違いなかった。

「私も、上手くなれるかな?！」

泰徳の背中に向かって美奈がそう聞くと、泰徳は大きくVサインをして見せた。その後の卒業式本番での演奏がとても充実したものになったのは、言うまでも無い。

第46楽章 「旅立ち」

3月20日、卒業式当日。泰徳たち常套吹奏楽部は、全校生徒が入場する体育館のステージから見て、真正面の入り口の左側に既に待機していた。卒業式開始は9：00。一般生徒が入場を開始するのは、8：45である。

「先輩たちもいよいよ卒業だな」

「短かったわね…」

「ああ……」

「でも、いろいろ勉強になったよね」

泰徳と未来、そして美奈は、これまでの思い出にふけていた。この卒業式という日が、短く感じられるのは泰徳たちだけではないはずである。今までの出来事が、それこそ走馬灯のようによみがえる。

「私たちが入部したときも、明るく迎えてくれたわよね」

「俺が楽器変わった時だって、同じだった」

「ちよつと怖いときもあったけどね」

「あれは俺らに非があったから…」

照れくさそうに話す泰徳。実は彼自身は、こういう思い出にふけることがあまり無かった。

「泰徳事件はヤバかったというか、なんというか……」

「単なるお家騒動って感じ」

「あれは…本当にすまなかったよ」

泰徳が恥ずかしそうに下を向く。そうこうしている間に、一般生徒がちらほらと入場を始めた。

「おい、吹奏楽部。そろそろ卒業生の入場が始まる。各自、音だしをしなさい」

立石先生の指示で、音だしが開始された。特に泰徳の横にいる未来と美奈は、彼の音色の違いに気づいていた。マウスピースを変えているわけでもないのに、音色がとても暖かく感じられたのだ。

一般生徒の入場が終了してまもなく、放送が流れる。

『お時間となりました。保護者の皆様は、携帯電話の電源をOFFにし、卒業生の入場まで今しばらく、お待ちください』

泰徳は、いよいよだなと思った。立石先生も指揮台でスタンバイしている。そして今、その瞬間がきた。

『卒業生、入場』

この合図で、立石先生がタクトを降り始める。

——エアーズ。何代にも渡って演奏してきた、常套中学校の卒業式における定番の曲である。何気なく吹いてきたこの曲でも、本番となつては、この時から会場全体の涙を誘う。

静かに奏でられるグロッケングロッケンの3連符と、フルートのソリ。ここの音程は、立石先生の特訓によって完璧に鍛えられている。徐々に音が重なり、第1主題。低音担当の泰徳がとても暖かい音で吹いてくれているので、未来や美奈を始め、吹奏楽部全員が1つにまとまりつつあった。

第2主題、アルトサックスのソロ。担当は愛である。1年前の愛からは想像もできないような、綺麗で優麗な、そして優美なソロ。彼女自身もこの曲を相当研究したに違いない。楽器も変わっていないし、いつもの愛の姿。だが、いつもの彼女からは見ることでできない何かを、泰徳は見ている気がした。同じく、金管軍がそのソロに覆いかぶさる。そして勇敢な行進曲風のトリオ。ここで卒業生の入場が終了したので、音量を萎める。

卒業生が着席し、教頭の一言が響く。

『卒業証書、授与』

1人1人、卒業証書が渡されていく。敏や尚美、千尋の受け取る姿は、いずれも胸を張っていた。しかしその顔は、泣いていた。そして在校生代表の送辞も終了し、

『卒業生代表答辞。代表、石河 尚美』

はい、と返事をし、ステージに上がる尚美。泣き崩れ、とてもではないが話せる状態ではない。が、力を振り絞って答辞を送る。

「私は、この常套中学校の生徒として生活できて、とても幸せでした。テキストに入部した吹奏楽部も、気づけば部長、そして、気づけば引退。長いようで短い、3年間でした。お父さん、お母さん、私をここまで育ててくれて、ありがとうございます」

ここまで言う、尚美は溜まったものをすべて吐き出した。泣きに泣いた。そして少し落ち着きを取り戻し、

「私の所属した吹奏楽部には、途中から入ってきた男の子がいました」

無論、泰徳のことだ。

「その子は楽器が初心者なのに、日にちを重ねるに連れてどんどん上手くなっていました。私のほうが2年も先輩なのに、教えられることもたくさんありました。でも、それは何かの縁があって起こったことで、とてもうれしく思います。また、今の後輩たちがいるからこそ、今の私がいて、もしあの男の子が来てくれなかったら、私は部長としてやっていけなかったと思います。あの子が来たからこそ、作るべき思い出も増えだし、ふれあいも増えた。私はその男の子を通じて判ったような気がします。これから、人とのつながりを大切にしていきたいと思います」

尚美はここまで言う、原稿用紙をクシャと強く握った。

「在校生の皆さん、今回は、私たち卒業生のためにこのような式を

開いていただき、本当にありがとうございました。ここに感謝の意を表し、ここににいるすべての人に対する答辞とさせていただきます。平成18年 3月20日。卒業生代表、石河 尚美」

尚美は言い切ったかのように、泣きながら席へ戻っていった。あれから順調に式は進み、いよいよ卒業生退場の時間になる。

『卒業生、退場』

——大地讃頌。カンタータの一種で、大地に対する感謝を歌に込めた作品。演奏は吹奏楽部、合唱は在校生全員である。この壮大な曲に身を包み、卒業生はこの常套中学校を巣立ってゆくのだ。卒業生は皆涙、涙。泰徳たちが上手く大地讃頌を演奏できたかどうかは目の前の景色がかすんだため定かではない。しかし、卒業生にとって大きな後押しとなったことは、断言してもよいだろう。その後のミーティングで、美奈は泰徳に、「鼻撮ってる。花粉症？」と聞くと、泰徳は「あえてそういうことにしとくわ」と、目を真っ赤にして答えた。

こうして、吹奏楽部と常套中学校の歴史は、在校生と新入生に引き継がれるのであった。

第47楽章 「次なる課題、配布」

卒業式も終わり、次は入学式と新入生歓迎会が控えることとなった。合奏も順調に進んでいき、もはや立石先生の指摘する点はなくなってきた。しかしこれは、卒業式と平行して合奏してきたためにそれなりの時間を費やしてきたからであるが。

今回の舞台は、その入学式と新入生歓迎会で演奏する曲の合奏が終了した直後の音楽室の様子である。この時点ではまだ、ミーティングの途中だ。

「さて、あと4ヶ月でコンクールが開催される。昨日、そのコンクール課題曲が届いたので一応配布しておく」

立石先生の右手には、大量の楽譜。フルスコアとコンデンススコアを含む、計30以上ものパート譜が抱えられていた。この年の課題曲は、

- 1． 架空の伝説のための前奏曲
- 2． 吹奏樂の為の一章
- 3． パルセイション
- 4． 海へ．．． 吹奏樂の為に
- 5． 風の密度（大学、一般のみ）

の5曲。立石先生はこれらの楽譜（5を除く）を、パート順に配布していく。

「Bass」

「はい」

美奈が手に取った楽譜の厚さは、ポケットサイズの国語の辞書にも負けない勢いだ。

「これがチューバで、ユーフォ、弦バスと……」

「うわ、何これ…。変拍子ばっかじゃない……」

「これなんか臨時記号の嵐よ」

「これも8分音符ばかりだし……」

「あ！ これソロある……。はあ……」

楽譜を見るなり騒ぐ、未来と美奈の2人。比べて泰徳は、黙ったまま涼しい顔をしていた。

「泰徳なんか超余裕じゃない」

「でもまあ、泰徳だから……」

未来は半ば諦めモードであった。

「ではこれから、この課題曲の参考演奏を流す。各自、楽譜を目で追っていくように」

そう立石先生からの指示があった後、しばらくして課題曲1番『架空の伝説のための前奏曲』が始まった。演奏は、すべて東京佼成ウインドオーケストラが行っている。

架空の伝説のための前奏曲は、山内^{やまうち} 雅弘^{まさひろ}さんが作曲した200

6年度の課題曲1番。朝日作品賞を受賞した作品で、変拍子が特徴的な曲である。トランペットのソロや木管楽器の16分音符の挙列、打楽器の忙しさは近年の課題曲で5番類を除き、トッピクラスではないかと思われるほどである。対照的に中間部のコーラル部では、各楽器の長所を生かした編成となっており、メロディー楽器の滑らかな音楽に乗る中音楽器のオブリガート（：注）、そしてホルンの勇敢かつ荘厳な対旋律やオーボエのソロが不思議と心を癒してくれる。変わって再現部は、先ほどの忙しさが戻ってくるわけであるが、最後に待ち構える最難関が『6連符の嵐』である。参考演奏ではテンポを変わずして演奏されているが、コンクールではそのまま演奏するところは少なく、むしろ遅く設定されている。そして中低音の重厚なソリによって、曲が閉じられるのだ。

「私、ふけるかな……」

「課題曲とあって、難しいわね……」

聞くなり、顔が青くなる未来と美奈。泰徳は相変わらず余裕だ。

2曲目の『吹奏楽の為の一章』は、堀内^{ほりうち}俊男^{としお}さん作曲の課題曲である。2拍子を基調とし、テンポの変更設定は1回のみである。楽譜自体は簡単なのであるが、前述の通り臨時記号の量が半端ではない。また、中低音のメロディーにおける留意点として臨時記号のほかに、跳躍進行があげられる。この2点が大きな壁となり、この年のコンクール全国大会でこれを演奏したチームは極めて少ない。

3曲目、『パルセイション』は、近年の課題曲には珍しい、無機質で機械的な課題曲であり、よく聴いてみると、8分音符がどこかで必ず刻まれているという単純であるようで実は複雑な曲である。このような曲は、『パルスモーション』以来の作品であった。当時この曲を聞いた人々にとつては、意味不明に感じられたはずである。このような体験は、後にも先にもこのときだけであろう（2010年の課題曲である『迷走するサラバンド：広瀬^{ひろせ}正憲^{まさかず}』も含まれるだろう）。

4曲目の『海へ・・・吹奏楽の為に』は、三澤^{みさわ}慶作曲^{けい}の8分の6拍子を元とする課題曲である。ティンパニの重みのある音から始まり、それぞれのメロディーが海を連想させる。立石先生いわく、「8分の6拍子を理解していない者は、どれだけ吹きこなしても下手なまま」だという。中間部にはユーフォニアムとホルンのソロがあり、ホルンに至っては最高音がハイBに近い。忙しいのはこれら2パートだけでなく、打楽器も含まれる。再現部最後のシロフォンのおたまじゃくしの大群には、さぞ演奏される方々、目を疑ったことと思う。それにくわえ、同じ場所の低音軍もブレスの場所に困ったはずである。当然のことながら、タンギングの練習もこの年まで一番やられたのではないだろうか。

課題曲が聞き終わり、楽譜をぱたりと閉じる。

「大丈夫かな」

美奈の顔は半ば引きつっている。それは未来も同じであった。

「まあ、先生がやる曲によるんじゃないの…？」

正気をなくした2人に対して、泰徳が言及した。

「課題曲でそんなにやられてたら、自由曲どうするんだよ」

「でも、ソロとかあるし…」

「この変拍子だって、ただ者じゃないわよ」

2人はまったく言っていないほど演奏する気がないようであった。そこで泰徳は、あえて挑発してみた。

「ま、やるかやらないかはお前ら次第だ。最初から無理って言ったら、それこそ無理だしな」

そう言つて泰徳は、鼻で笑った。しかし、あくまで“あえて”である。これを2人は『嘲笑された』と思い込み（無理も無いが）、泰徳に食つて掛かった。

「や…やってやるわよ！」

「そうよ。今に見てなさいよ、その高い鼻へし折つてやるんだから…！」

「ま、どうぞお好きに……」

そう言つて泰徳は音楽室を去った。その後、未来と美奈の2人が課題曲の譜読みに尽力したのはいうまでも無い事実である。

第47楽章 「次なる課題、配布」(後書き)

(注)

オブリガートは『対旋律』や『裏メロディー』と間違われがちですが、実はそうではありません。そのフレーズに必要な不可欠なメロディーとして、扱われます。またスラーがついている対旋律についてもオブリガートと混合されがちですが、オブリガートはすべての曲調、すべてのアレンジに適応されますので、誤解されないようにお願いいたします。

第48楽章 「裏稼業と泰徳の宣誓」

課題曲が配られて、2週間がたった。入学式関連の曲も順調に合奏が進んでいたし、なんら問題となるところは無かった。強いてあげるとすれば、課題曲の譜読みが予想以上に難航していることであつた。この日は泰徳がセントラル・ウインドフィルハーモニーの仕事のため、部活は欠席している。今回は、そのセントラル・ウインドフィルハーモニーの仕事を覗いてみることにしよう。

場所は、東京都杉並区にある、専用練習所（とはいっても、元は鉄工所だが）。すでに団員は集合しており、あとは指揮者である長谷川 虎彦を待つのみとなつた。

「何やってんだ、あのジジイ。合奏開始の時間はとくに過ぎてるぞ」

「まあまあ、そんなにカリカリすんなって」

「でも、指揮者が遅刻するなんてあり得なくね？」

「色々あんだよ、あのおっさんにも」

「おっさんじゃない！ ジジイだ！！」

セントラルウインド・フィルハーモニーのコンサートマスターを務めるテューバ奏者の要 毅と、ソリスト兼団員として迎えられた新入団員である泰徳。2人とも会話がはずんでいる。

「それにしてもよお、毅。あのお…いや、ジジイはすげえ実力だな」

「だろ？ シモいんだが、音楽の実力は確かなんだよ」

「そついえば今日の仕事内容って何なんだ？」

「確か、2006年の課題曲のクリニツクDVDの収録だ」

「え…。そんな仕事ここでやっていいのか……？」

確かに、ここは元鉄工所であり、ここに存在する反響板やステージ、指揮台などは、ここにある資料を使用してリサイクルと言う形で設置された、いわば『使いまわし』である。そのため、見た目も実際

に演奏した感じも最悪なのは言うまでも無い。ただし、セントラル・ウインドフィルハーモニーの奏でる音楽は、極上に違いなかった。「いいんじゃないの？ 特設会場があるって、この間言ってたし」「え、そうなの？」

毅から口にされる言葉に、驚きを隠せない泰徳。この汚い練習会場のどこに、DVD収録にふさわしいスタジオがあるのか、それすら疑問に感じられた。

「ああ。実は俺もその存在を、今日始めて知ったんだが」
お前もかよ、と言いたいのをぐつとこらえ、泰徳は長谷川が来るのを待った。

あれから待つこと15分。やつとのこと長谷川が姿を見せた。ちよつと濃い目の水色作業着を着て、その下にきていたと思われる白のTシャツは、重油でまみれていた。

「おせーよ！」

毅が迫る。

「すまん、すまん。ちよつと楽器の修理に行ってたな」

わっはっはと、軽く返す長谷川。毅は呆れてもう何も言えなかった。「分かったよ。で？ その特設会場つてのはどこにあるんだよ？」

「ああ、そのことが。こつちじゃよ」

そう言われて案内されたのは、練習場の地下だった。

「ここに地下室なんてあったのかよ……」

「あのじいさん、なかなかやるじゃん」

「ああ……。さすがに侮れねえな」

毅たちの目の前に広がったのは、壁が真っ白にコーティングされ、指揮台や譜面台、さらには団員分の椅子まで綺麗に設置された、“録音会場”そのものであった。ライブ録音を再現するためだと説明しながら、長谷川はステージ前の客席に座った。軽く1,500人は入ろうかと言う大ホールである。

「じゃ、早速1番からやってもらおう」

長谷川の指示で、楽譜が開かれる。実は、団員たちが課題曲の楽譜に目を通すのは、このときが初めてだった。

「一通り拾ったか？　ほんなら始めるで」

長谷川の指示で、皆学期を構える。長谷川は、客席から指揮を振る。

シロフォン

木琴とウッドブロックが、見事にシンクロしている。初見でここまでとは、さすがセントラル・ウィンドだ。それに続く木管のバランスも完璧である。長谷川はじつと上を見ながら指揮を振っている。そしてトランペットソロ、中間部、オブリガート、対旋律、再現部、そして6連符……。何から何までがすごすぎる。常人レベルではないことを、泰徳は改めて知ったような気がした。

「よっしゃ。次はパート別クリニクや。2番は明日な。竹林君は新入団員やから、今回は毅にしてみらおう」

長谷川からこの言葉を聞いたとき、なぜか知らないが、泰徳の心がモヤモヤした。パート別クリニクとは、その年の課題曲を演奏する団体に向けてセントラル・ウィンドフィルハーモニーが独自に行う、各セクションごとのクリニクDVDのことである。クリニク出演者は、そのパートの首席奏者のみだ。

「じゃ、始めよか。1人ずつ、ここ入って」

長谷川が通したのは、アニメのアフレコ会場のようなスタジオ。ここで録音・録画するようだ。

「なあ、泰徳」

不意に、毅が話しかけた。

「ん？」

「お前、結構やるじゃん」

「な…なんだよ、いきなり」

急な話の展開に、思わず感情が表に出てしまった。

「照れんなって。あの課題曲、初見で吹くなんてなかなかだぜ」

「でも、あれはあれで必死だった」

泰徳がクスリと笑った。

「だらうな。見てて分かったよ。楽譜凝視だったもんな」

「普通だろ」

「いや、それが普通じゃねえんだ。プロは初見でも、指揮見ながら楽譜見ながら、周りの音聞きながらやってんだぜ」

「俺そんな余裕無かったよ…」

「大丈夫。じきに慣れるって」

「毅も最初は……？」

「ああ。全然だった」

「そっか。何か安心した」

「何でだよ」

「いや、毅もそういう時代があつたんだなあって思つてさ」

「当たり前だろ。人間最初っから完璧な奴はいねえのさ」

照れくさそうに笑いながら話す毅。泰徳は、毅のこういう顔を見ると心が和む。泰徳にとって、唯一泰徳の上に行く毅の存在が泰徳を成長させてくれる。もちろん泰徳並みに吹ける人間は、世界中にゴマンといることは分かっている。だが、伝説の楽団と呼ばれたこのセントラル・ウィンドフィルハーモニーで活動する毅の音が完璧すぎて、泰徳からは遠い存在だった。そんな毅がたまに感情を表に出すと、こいつも人間なんだと思える。

「そうだよな」

「ああ」

そこまで話すと、長谷川が

「おい、次！ テューバ！！」

「分かったー！ 泰徳、呼ばれたから俺ちと行ってくるわ」

「ああ。頑張れよ」

「当然だ」

笑顔でそう言つと、毅は大きめのC管を抱えて、録音スタジオへと姿を消した。泰徳は、その後姿を見て、いつしか本物のプレーヤーになることを誓った。

第49楽章 「入学式」

入学式当日。泰徳たちのクラス発表も行われたが、教室が替わるのは入学式が終わってからと言うことだった。なので実質、泰徳たちが2年生になるのは、入学式兼始業式が行われてからになる。

体育館では、泰徳たち常套中学校吹奏楽部が入場と退場の演奏に備えて準備をしていた。この入学式の3日後に新入生歓迎会、そして部活動紹介が同時に行われ、吹奏楽部に入部を希望する新入生は、この日から1週間後に楽器決めを行う予定である。もうまもなく、新入生の入場が開始される。

「俺らも2年生か。早いな」

「そうねえ。もう後輩できるんだから」

「ねえ、2人はクラス見てきたの？」

「ああ。俺は2組だった」

「私4組」

「へえ…。じゃあみんな違うんだ」

「美奈は何組だったの？」

「5組」

「つてことは、本館2階の1番端の教室か？」

「そ」

泰徳の通う常套中学校は、5組編成である。

「俺は4階だな…」

「私は3階。やつぱりばらばらね」

と、諦め口調の未来。やはり3人一緒のクラスが、彼女の理想だった。

「吹奏楽部、そろそろ始まるから音だししとけよ」

立石先生が指揮台に上がり、指示をする。それなりに音出しはするつもりだが、2年生になったと言う自覚は、正直なところほとんど無かった。だが、これから新入生が入場してくることを考えると、

『新入生、入場』

年度の課題曲3番、『憧れの街』が挙げられる。

だ
っ
た。

[illegible]

「なんか、緊張するな……」

このときの泰徳は、今と打って変わって幼い。

「うん…」

「ここに来てる時点で中学生でしょ」

緊張のあまり、2人はそれ以上会話が進まなかった。

よしみで楽に話すことができていたようだった。前述の秀樹と泰徳

も同じ小学校だったのだが、同じクラスになったのは6年のうちで2回だけ。かわった時間は未来と美奈に比べると、格段に少ない。未来と美奈は、小学校時代に4回一緒のクラスになった。

「中学生なのね」

「何か実感わかない…」

「あーそれ分かる。何かいつの間にかって感じだよね」

「でもよく考えたら、義務教育なのね、中学校って」

「だからかな？ こんなに普通なのは…」

「どういう意味？」

「入学式って、もつと緊張するもんじゃないのかなって思っただけ」

「ふーん。美奈もたまにはまともな考え方するのね」

「ちよつと！ どういう意味よ！！」

前述の2人とは打って変わって、こちらは会話が絶えることが無かった。

- . - . - . - . - . - . - . - . - .
- . - . - . - . - . - . - . - . - .

泰徳たち3人が思い出に浸っている間に、新入生は入場を完了したようであった。しかし、やはり新入生が入ってくると、思いたくなくても2年生なんだと思わされる。なんだか急に緊張してきたような、してないような、不思議な感覚に包まれる新2年生たちであった。

第49楽章 「入学式」(後書き)

ついに泰徳も2年生に進級。次の更新の場面は、新入生歓迎会でもなく、楽器決めでもなく、新入部員が入ってきたときです。前述2つは、回想シーンとして入れる予定ですので、あしからず。

第50楽章 「新入部員だ！ 新Bassパート」

時は4月30日（日）。音楽室に出張していた香織と美並が、3人の1年生を引き連れてBassパートの練習する教室に戻ってきた。

「やつぽー」

「今年は3人か。上出来、上出来！」

香織は泰徳たちを第2音楽準備室に呼び、ミーティングを開いた。

「もしかして、新入部員ですか？」

「あつたりー！」

「3人つて、多いですね」

「うん、例年より1人多いんだ」

「これから自己紹介してもらいまーす」

「いーい！と盛り上がる教室。泰徳はこういうノリが苦手だ。しかし、仕方なく付き合うしか方法はない。

「じゃあ、右端の人からどうぞ」

美並の合図により、新1年生は自己紹介を始める。

「えっと、常套小学校から来ました、永岡ながおか 沙希さきです。えっと…Tubaやります。よろしく願います」

「いーい！とまた盛り上がる教室。余韻もそこそこに、2人目。

「みどり小学校から来ました、小島こじま かおりです。コントラバスします。よろしく願います」

小柄な体にコントラバス。なかなか不釣り合いであるが、やりたいと言う本人の希望ゆえ、無視するわけにもいかない。今後の成長に期待するメンバー。続いて3人目。

「常套小学校から来ました、前田まえだ 瑠璃加るりかです。ユーフォニアム担当します。よろしく願います」

色白で物静かな少女と言うのが、泰徳たちの第1印象であった。茶髪（どちらかと言うと栗色に近い）であるが、地毛なのだという。

「よろしくー！　じゃ、未来ちゃんたち、後は頼んだよ」

そう、未来に限らず、新2年生は、この瞬間から先輩なのである。

「あ、はい。じゃあ、これが5月の中旬にある、部活動参観日で吹く曲ね」

「ありがとうございます」

「海兵隊と…ロッキーのテーマと、THE Longest Day？」

「うん。海兵隊は1年生だけで吹くんだよ」

「なんか、緊張しますね……」

未来は衿たちの反応を見ながら、去年の自分たちもこうだったと思いい出に浸っていた。先輩になると、今までの何もかもが自分の見返りのようで、懐かしい。

「あ、そうそう。来週になるんだが、どっかの中学校がうちに来るらしいぞ」

泰徳が話題を変えた。

「そうだった。見学練習会だったね。忘れてた」

「え？　私たち初耳なんだけど」

「先輩聞いてないんですか？」

「うん。立石先生からは何も…」

「僕ら、その立石先生から聞いたんですけど」

「え、そうなの？！　何も聞いてないよねえ？」

「うん」

すぐにうなずく香織。しかし見学練習会があることは事実なので、詳細は泰徳が話すことになった。

「同じ松山市立の中学校なんだが、来週常套^{うち}中学校に練習に来るらしい。練習方法を見学とか何とか…。どこの学校だっけな？」

「名前いつてたっけ？」

「言つてたような気がするんだが……。悪い、忘れた。とにかく、その時はちゃんと返事すること。じゃないと、向こうから^な嘗めた目で見られる」

あの硬派な泰徳のこと。分からなくてもオーラだけは感じることできる泰徳の存在感は、新入部員に『はい』と言わせざるを得ないオーラを発する。そして、威厳がある。

「ま、そういうことだから。頑張つてね」

「あれ？ 私たちは自己紹介しないの？」

「あ、そうだった…。私は高橋 美並。瑠璃加ちゃんを教えることになるわね。同じく、私の後輩の谷 未来先輩」

未来は、よろしくねと頭を下げた。

「私は中井 美奈。先輩は去年卒業しちゃったけど、頑張ろうね！」
美奈はかおりの手をぎゅっと握った。

「私は佐々木 香織。衿ちゃんを担当するのね。で、こっちが私の後輩でああなたの先輩の、竹林 泰徳君よ。知識は私よりあるから、分からないことがあったら聞いてね」

にこやかな香織とは対照的に、少し仏頂面の泰徳。警戒しているのか、恥ずかしいのか、なかなか衿と目をあわそうとしない。こういつた場面での対応は、泰徳にもまだ幼い部分があった。とりあえず、泰徳がプロだと言うことを知っているのは、泰徳、未来、美奈、そして立石先生の4人しかない。今は画している状態だ。

「新Bassパート、始動だね」

「私は不安ですけど」

と苦笑する未来。

「大丈夫だって。未来ならいける」

励ます美奈。

「……………」

そして珍しく黙ったままの泰徳。1週間もあれば溶け合うだろうが、今はまだぎこちない。とりあえず、みんながBassパートに馴染むまで、こちらはゆっくりと見守ることにしよう。

第50楽章 「新入部員だ！ 新Bassパート」（後書き）

またまた話は飛びまして、他の中学校が常套中学校に訪問する場面から書きたいと思います。あしからず。

第51楽章 「師匠と弟子」

翌週日曜日。この5月7日は、GW最後の日であるが、常套中学校吹奏楽部に他の学校が見学練習会に来る日でもある。

「しかし、学校の名前なんだっけな……？」

「予定表見れば分かるんじゃない？」

「書いてないんだよ……」

「えー、そんなー……！？」

四苦八苦する泰徳と美奈。すると横から未来が

「明台^{めいだい}中学校じゃなかった？」

と首を突っ込んだ。

「それだ！」

2人同時に発せられたこの言葉。あろうことか、隣の校舎まで聞こえていたらしく、隣の校舎（本館）の4階で練習していたトランペットパートがひょっこりと顔を出した。美奈は適当に手を振って返した。

「明台っていつたら、同じ松山市内の中学校だよな」

「うん。確か未来の知り合いがいるところだよな。男の子」

「悠輔のこと？」

「あーあいつかあ」

相槌を打つ泰徳。なにやら心当たりがありそうである。とその時、

「よっ」

1人の男子が顔を出した。

「先輩！ 何しにきたんだよ……」

「部活休みだし、暇だったから最強中学生を訪れてみたのさ」

「そらまたえらい急だな……」

「良いじゃないか。友達のよしみで」

「こういうときだけ友達扱いかよ……。普段は先輩だからって何かにつけ言い訳してんのに」

「あ、ばか！ それを言うなって」

匠と泰徳とは、ジョイントコンサートでの大論争以来、先輩と後輩、そして友人関係にある。もちろんメールアドレスも交換している。

「まあまあ。で？ ホントは何しにきたんだよ」

「やっぱ泰徳には分かっちゃうか。常套を^{スパイ}観察しに来たんだよ」

「何だつて？ 何のために」

「顧問の命令なんだ。全国大会行くくらいの団体なら、何かしら特別な練習をしてるに違いないってね。俺はあまり気が進まなかったんだが……」

「ふーん。実はな、今日明台中学校つてところが見学練習会に来るんだよ」

「マジかよ?! それちょっとやばくね?」

「いや、先輩はこのこの部員つてことにしとけば何とかいけるんじゃない?」

「そ…そんな無茶な……うわ!」

泰徳は匠の肩をわしづかみすると、

「大丈夫だつて。相手はそんなに洞察力に優れたやつじゃねえよ」

「え、知ってる奴いるのか?」

「まあ…いろいろとな。詳しいことは後で話す」

と言い、明台中学生が来るまで待った。

しばらくして、香織が

「明台中の人、来たよ」

と言ったので、B a s s パートメンバー全員で出迎えることにした。

「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

と双方挨拶を交わした直後、テューバケースを持った男子が泰徳の下に駆け寄り、

「師匠!」

と叫んだ。

「師匠うゝ!?!」

「泰徳、師匠ってどういうことよ？」

「え……あ……それは……」

言葉にならない。泰徳はとりあえず、その男子に

「おい、師匠って呼ぶのはやめろって、あれほど言っただろ」と念を押した。

「じ、じゃあ……こちらにどうぞ」

流れ出る冷や汗を押さえながら、泰徳は明台中学校吹奏楽部のBassパートを案内した。そして話題は自己紹介よりもまず、先ほどの『師匠』のことになった。

「泰徳、あれはどういうことなの？」

「話せば長くなるんだが……」

「それにしても師匠なんて、すごいわね」

「あ……あれは好きで呼ばれてるんじゃないんだよ……！」

「またまたあゝ。泰徳のことだから、チューバのことかなんかだろ？」

「せ、先輩まで……」

「当然じゃないか。大論争で俺を負かした男だ。それぐらいはやるさ」

という匠の発言に、

「あ、確かにそれは言えてる」

「あー、一理ある」

と大きくうなづく美奈と未来。泰徳は堪えきれず、

「あーもう！ 分かったよ。話す、話すってば！」

と、半ば投げやりな様子で2校のBassパートを集め、輪にさせた。

「俺とこいつ……悠輔^{ゆうすけ}が出会ったのは、ちょうど去年の夏休みの頃だった」

そう、師匠と呼んでいたこの男子の名は鈴木^{すずき} 悠輔^{ゆうすけ}。明台中学校のチューバ吹きであり、泰徳と師弟関係を結んだ張本人だ。話は、前述の通り、泰徳が1年生のときの夏休みまでさかのぼる。

もんな」

独り言に笑いながら登校する。そしてまたもや何者かの気配。

「やっぱり誰か……ついてきてるよな」

それが確信に変わったのは、学校に向かう道の途中に横たわる、『開かずの踏み切り』と呼ばれる踏切に差し掛かったところだ。ここは電車が連続で5本通らないとあかない踏切である。しかし、踏切が鳴り出してから電車が遮断機を横断するまでに相当な時間を要するので、ここで引つかかると遅刻は必至だ。泰徳はこれを考慮し、いつも早めに家を出る。

さて、先ほどから感じる何者かの気配だが、未だに感じる。泰徳はこれが男によるものであることまで分かっていた。どうせ暇なので話しかけてみることにした。

「お前、さっきから何やってんだよ？」

「……………」

「俺をストーカーしてんの？」

「……………」

「何か喋ったらどうなんだよ？」

一本目の電車が通る。特急列車なので、なかなかの長さだ。これからあと4本待たなければならぬ。ストーカーをしていたと思われる男は、いまだ何も話そうとしなかった。

「何の目的で俺をストーカーしてんだ？」

その特急列車が通過した直後だろうか、泰徳をストーカーしていた男が口を開いた。

「あなたに……」

「え？」

「あなたに、ずっと憧れてたから！」

「はあ？　俺に、憧れてたあ？」

あははと、大爆笑する泰徳。この間、2本目と3本目が交互に遮断機を横断した。

「俺に憧れても何もいいことねえぜ？」

「でも、僕はあなたが羨ましいんです！」

何か理由がありそうだったので、泰徳は話を聞いてみることにした。
「分かったよ。でも、一体何で俺を……」

「ひと目で分かったんです。あなたが、あなたがデキる人間だってことが」

「デキる人間？」

4本目の電車が通り、遮断機が上がる。そして2人は歩き始めた。

「はい。初心者ながら、その奥に眠る才能と言うか、そういうのに心惹かれたんです」

「何か不思議なこと言うな、あんた」

「本気ですよ！ 県大会のコンクールのときから思ってたんです。

あ、僕鈴木 悠輔って言います」

「鈴木……。もしかして、明台の人間か？」

「あ、はい。でも、どうして……？」

「俺の知り合いに神奈川でサックス吹いてる先輩がいてな。まあ俺の幼馴染なんだが、最近の話題と言ったらそいつのことばかりなんだよ。あいつは見込みがあるってさ。何を演奏しているかまでは言わなかったけど。でも、噂とは裏腹に、律儀な奴だな」

「どんな噂流したんですか……」

「俺の聞いた話じゃ、冷酷でヤバイ人間だって」

「そんな！ そんな訳ないじゃないですか……！」

必死に噂を否定する悠輔。泰徳は笑いながら返した。

「ああ、そうだな。今はつきり分かったよ」

学校前の歩道橋に差し掛かる。ここまでくれば、常套中学校は目の前だ。

「あ、そういえば、あなたの名前は……？」

「俺は名乗るほどでもないさ。あんたもチューバ吹きなんだろ？」

「え？ ええ。でも、どうしてそれを？」

「簡単なことだ。左よりも、右腕の筋肉が発達しているし、指もごつい。腹筋も随分鍛えられてるみたいだが、鎖骨は浮いている。相

「あ、ちよつと……」

「松山市立常套中学校……」

[illegible]

「へえ、アレ、ねえ」

匠が妙にいやらしい目で悠輔を見る。

「そ…そんな目で見てくださいよ！」

「だってストーカーしてたんでしょ？」

と未来。

「信じられないわよねえ」

と美奈も悠輔を避ける。

「おいおい、ちょっと待てよ。悠輔は中井たちよりも1個上。つまり、匠先輩の同年代なんだぜ」

泰徳がそういった瞬間、未来と美奈の2人が固まった。先輩にどんな目線を送ってしまったのか。そして、すぐに顔が赤くなる。

「私だったらなんて...」

「ひどいことしちゃったかな」

「それだけじゃない。悠輔が来たのは、ジョイントのときもだ」

「ジョイント？」

「いつきたんだよ？」

「先輩が大論争した後だよ。みんな帰っちゃったけどね」

「げっ！ マジかよ。じゃあアレ聞かれてたのか？」

「まあまあ。じゃ、話そうか」

泰徳が語る、ジヨイントコンサートのもう一つの裏。悠輔は、ジヨイントコンサートにまで顔を出していたのだった。

「でも普段から観察には慣れてるから……」

「私にはそうは思わないけどなあ……」

泰徳と未来との会話に、弓の手入れをしながら美奈が割り込んできた。

「どういうこと？」

「確かに泰徳は初心者だけど、お母さんが音大出てるんでしょ？」

「そうだけど……」

「だったらその才能を受け継いでなきゃおかしいじゃない」

「なるほどねえ……。美奈の言うことも一理あるかも」

と頷杖をつく未来。泰徳はそれに、「おいおい、そんな流れに持っていくなよ」と苦笑した。話が一区切りし、少し沈黙が流れる。それを破ったのが、ノックだった。

「誰かな？」

「また先輩かな」

「そんなまさか！」

「とりあえず入れてあげたら？」

「そうだな」

泰徳はドアを開ける。そこには、悠輔の姿があった。

「お前、あの時の……」

「泰徳、知ってる人？」

「あ？ ああ。この前ってかこの間だけど、学校に行く途中にストーカーされたって話しただろ？」

「あ、聞いた。うん」

「そいつだよ」

泰徳が言うと、2人の声が急に小さくなった。

「え、あの人のなの？」

「ああ。そんな時に名乗られたんだ」

「で、名前は？」

「鈴木 悠輔。明台中学校の1つ先輩だ」

「明台？ 聞いたこと無い学校ね」

「まあな。新しいらしいから」

「ふーん」

「あ…あの……」

悠輔のあたふたぶりを見て、3人は急に現実引き戻された。

「で、今日はどうしたんだよ、ストーカーさん」

「ちょ、その呼び方やめてくださいよお…」

「でも事実じゃんか」

「そうですけど…。うう……」

以外に気弱な正確だったので、泰徳はなんだか手ごたえが無かった。だが、ここまで来たからには何らかの理由があるはず。泰徳はとりあえず、問いただしてみることにした。

「まあそれはともかく、何しにここへ？」

「実は、折り入って話があつて……」

そう言う悠輔の顔が妙に深刻だったので、話を聞くことにした。

「アルメニアンダンスの持ち替えを見て、あなたがただ者でないことは確信しました。チューバも明らかに僕のほうがキャリア長いのに上手いし…。ピッチにも寸分の狂いが無く、まさに僕の理想とする音だったんです」

「へえ…。で、何しに来たんだよ？」

泰徳がそう問うと、悠輔はその場に土下座し、

「お願いします！ 僕にチューバを教えてください！！」

と叫んだ。泰徳よりもはるかに背が高く、がっしり体型の悠輔が泰徳に土下座しているのだ。これには泰徳も、目が点にならざるを得ない。

「唐突だな……」

まったくである。楽屋に入ってこられ、その上チューバを教えてくださいと頼み込まれるのは、こっちとしても良い迷惑である。だが、泰徳はいずれプロとなる。指導者としての立場も分かっておかなければならなかったし、これは好都合だと思った。

「分かった。でも、本当に大丈夫なのか？」

「もちろんです！ そんな無理だなんて、そんなのありえませんか！」
悠輔は立ち上がり、泰徳の両手をがっしりと握った。そして上下に振る。これがなかなか痛い。外人の握手のようだ。もつとも、悠輔の握力の影響もあるのだが。

「よかった。じゃあ、これであなたは僕の師匠、僕はあなたの弟子
ってことですね」

「え？ あ、おい……」

「あ、忘れてました。名前なんでしたっけ？」

「え？ 名前？ 俺の？」

「もちろんです！」

「竹林 泰徳だ」

「竹林 泰徳……。ありがとうございます！ では、僕はこれで失礼します、師匠！」

「あ……ちよ、おい！！」

呼び止めたが、もう遅かった。ドアは勢いよく閉められ、軽快に走る悠輔の足音だけが聞こえるだけになっていた。

[illegible]

「へえ、そんなことが」

「あれは本当に参ったよ。いきなりだったしな」

「僕もあの時はやりすぎたと思います……」

思わず照れ笑いをする悠輔。

「まあいいじゃん、仲間が増えて」

「そうだな。先輩も含めて」

これを聞いた匠は、泰徳に「冗談抜かせ！」とド突いた。この後の練習は、悠輔と泰徳の話題で持ちきりだった。

第54楽章 「舞台裏」コラボオールスター座談会 1」

みなさん、シーズン2にも続くプラス魂シリーズ、楽しんでいただけているであろうか。少しでもそういう人が増えてくれれば、作者である私自身もうれしい限りである。

さて、今回は息抜きとして、主要登場人物＋コラボレーション企画キャラクターを含んだ座談会をお送りしようと思う。本作も綾野琴子様の『ブルーの低音』を含めると、合計3作品とのコラボレーションとなり、本作は3つの作品を同時進行で読み進めながら、3人の作者様と連絡を取り合ってコラボの企画を考え、決定次第更新しているという、きわめて大変な作業を行っている。しかし、他3作品にプラス魂のキャラクターが出てくると、やはりコラボは楽しいと思える。今回はそのようなコラボの場面を振り返る意味でも、座談会を開くことを決定した。読者の皆様も、キャラクターの意外な一面を見ることができるかもしれない。

GT：「はい！ というわけでやってきました、第1回プラス魂」
コラボオールスター座談会！ 今回は主要登場人物である常套中学校吹奏楽部、B a s s パートの3人と、『奏』K a n a d eから翔くんと陽乃さん、『S A K U R A W I N D S』から匠君と倉橋さん、そして、『ブルーの低音』から悠輔君をお迎えしております」

泰徳：「呼ばれたのは嬉しいけどよ、その『第1回プラス魂』コラボオールスター座談会』って誰が決めたんだ？」

GT：「もちろん僕に決まってるじゃん（笑）」

泰徳：「何勝手に決めてんだよ」

美奈：「いいじゃない。この小説の作者さんなんだから」

GT：「そうそう！ 悪いけど、今回だけは勘弁して…」

泰徳：「……。ま、しょうがないか」

GT：「さすが泰徳君！ では早速ですが、コラボの話題のほうに移らしていただきます。記念すべき第1回はつくん、さん著の『奏くKanade』となりましたが、どうですか？」

泰徳：「まあ、あれはあれで楽しかったよな」

翔：「ちょ、何で過去形やねん！！ そこ現在形やろ」

泰徳：「だって最近出番少ないじゃん」

未来：「あちゃー、それ言う？」

匠：「ま、泰徳は毒舌だからな（笑）」

翔：「確かにそうやけど、これからバンバン出してくれるはずやで！
なあ、作者さん？！」

GT：「……………」

翔：「ちょっと！ 何黙ってんの？！」

GT：「えっと…その、あの……。残念ながら出す枠が……」

翔：「え…？ まさか無いとか？」

GT：「はあ……。残念ながら…」

翔：「うわ、酷い！ 酷い！！ なあ、陽乃、お前から何か言うたってよ！」

陽乃：「え、あたし？ あたしに振られてもそんな…。あたしだってサブキャラだし……」

翔：「なに言うてんの！ お前ヒロインやんか！ そして俺の彼女やろ！」

泰徳：「ブツ！！！！」

美奈：「どあー！ 泰徳！！ お茶こぼさないのよ！」

未来：「これまた派手にやったわね…」

匠：「恋愛話に弱いんだから仕方ないだろ」

泰徳：「あ！ 先輩それは無えよ」

匠：「なんだ？ 文句あんのかよ？」

泰徳：「別に弱いわけじゃないさ。苦手なだけだ」

美奈：「一緒じゃん……」

GT：「あ…あの？ 話しずれてませんか？」

未来：「あ、奏とのコラボの話だったわね」

美奈：「私が一番印象に残ってるのは、サマコンの時かな」

翔：「あー、泰徳が俺の胸にうずくまって泣いたやつか！」

匠：「え？ お前泣いたの？ マジで？！ ハッハ！ 超ウケるゝ
！！」

泰徳：「翔…後で殺す……。先輩も十分いじってやるからな（ニヤ）」

翔：「匠君気をつけてね」

匠：「何ですか？」

翔：「泰徳があ顔したら、本気な証拠やねん。何されるかわから
へん」

匠：「え…マジっすか……？ やつべえ…」

泰徳：「2人、何こそこそ喋ってんの？」

翔：「あ…いや……」

匠：「ほらほら！ 作者さん続けて！！」

GT：「え、こういうときだけ無茶振りですか？ …まあいいか。
2回目は『SAKURA WINDS』とのコラボでしたが、サブ
キャラだったはずの匠君が随分目立ってますね」

泰徳：「まあ、先輩がアレだけの論争巻き起こしたらな」

匠：「バカ言え！ お前も乗ってきただろうが」

泰徳：「その割にはあの時代の演奏、随分浮いてたじゃん」

匠：「ぐ……」

泰徳：「それに、あの時勝手に喧嘩売ってきたのは先輩だろ？
猫
被ってばいし」

匠：「泰徳：お前それなんで分かった？」

泰徳：「え？ 倉橋から聞いたんだよ」

匠：「加奈子お」

倉橋：「ちよつと待つてよ！ 何で私？！ 何も喋ってないよ！」

泰徳：「てか、先輩って女の人の名前下で呼ぶんだな。もしかして
付き合ってたとか？」

匠：「バ…バカ！ そんなことがあるか！」

泰徳：「にしては随分動揺してるじゃん。それも猫かぶりか？」

匠：「ち、違う！ ああーくそ……。泰徳だけには勝てねえ…」

美奈：「大論争のときもタジタジでしたもんね」

泰徳：「そうなのか？」

美奈：「うん。化けの皮をはがすとか言いながら、思った以上にレベルが高いって言ってた」

匠：「……………（汗）」

泰徳：「じゃああの妙な自信は幼さから来るもんだっただんな」

匠：「こ、こら！ 笑うな！！」

未来：「ああゝあ、匠先輩ボロボロ…」

美奈：「毒舌で泰徳に勝てる人なんていないんじゃないの？」

未来：「そういえば、匠先輩が泰徳に電話したときも一蹴されてましたよね」

匠：「アンサンプルのことか？」

GT：「え？ でもまだコラボはしてないですよね？」

匠：「ああ。うちんとこの作者が勝手に進めやがっから、バランスがちよつとな」

泰徳：「おいおい、いくらなんでも『進めやがる』はないだろ（汗）」

匠：「だってうちんとこの作者、時々脈絡が全然わかんねえし。そ

れに比べて朝倉さんとか翔先輩は良いよな」

泰徳：「同意」

美奈：「キャラ設定もしっかりしてるしね」

未来：「でも、SAKURA WINDSもなかなか面白いんじゃない？」

翔：「アレも結構、小編集ながら頑張ってるねんけどなあ」

陽乃：「うちとこなんて元はサークルだからね」

泰徳：「でも翔にしちゃあ、そっちのほうが面白いんじゃないの？」

翔：「まあな」 ところで、さっきから隅でじっとしてるあの背の高い子、誰？」

泰徳：「ああ、『ブルーの低音』の悠輔だな。俺を……」

悠輔：「また言ってますか?! あ、またそんな白々しい目で……」

美奈：「だって……」

未来：「ねえ（笑）」

匠：「いくらなんでも、アレはなかったよな」

翔：「?????」

泰徳：「悠輔、言っていいか？」

悠輔：「うぐ……。はい……」

泰徳：「あのな、こいつ、俺をストーカーしてたんだよ」

翔：「……どえ——？！　すとかー？！？！」

泰徳：「あー！！　声でけえよ！！」

匠：「でも、さすがにアレはひいたよな」

未来：「ですよねえ。だって、ストーカーですよ？」

悠輔：「あーもうそれ以上言わないでください……」

泰徳：「やめるもんかよ。こうなってきたからが面白いんじゃないか」

匠：「うわー、なんちゅうサディスト……」

翔：「仕方ないやろ、昔からあいつはそうや」

GT：「確かに……。さて、座談会もそろそろお開きにしたんですけど、グダグダでしたね（笑）」

翔：「でもまあ、それがこのコラボ組のいいところだし」

陽乃：「サブキャラでも出すところは出してくれるしね」

匠：「俺は完全にイジられキャラだ（泣）」

美奈：「大丈夫です。あそこにまだいじめられてる人いますから……」

泰徳：（お前あん時も確か……）

悠輔：（もう嫌だー！！）

匠：「あの悠輔ってやつ、災難だな……」

GT：「作者としても頑張ってますんで、よろしく願いします。くれぐれも弄られないように」

泰徳：「そんなにいじられたいのか？」

GT：「うわっ！ いつの間に……。でも、グダグダながら楽しい座談会になったと思います。では、皆さん、また会う日まで！！」

第54楽章 「舞台裏」コラボオールスター座談会 1」(後書き)

活動報告にも書きましたとおり、このたび綾野 琴子さまのお誘いを受けまして、コラボ企画第3弾となる、『ブルーの低音』のメインキャラクターである鈴木 悠輔君とのコラボレーションをするこ
とになりました(現時点において、悠輔君はまだ『ブルーの低音』
には登場していません)。これからよろしくお願いします。

第55楽章 「頼って欲しい、頼りたい」

「しかし悠輔も、なかなか音がサマになってきたじゃないか」

泰徳が新譜・『海へ．．．吹奏樂の為に』『パルセイション』を片手に、ちょびつとばやいた。この楽譜は、後に行われる合同練習会で演奏予定だ。演奏する確率が高いのは、『海へ（以下略）』である。この曲は木管楽器が予想以上に目立つため、あの愛も一生懸命練習していた。未来はというと、中間部のソロを腐るほど練習中である。

「そんなに酷かったの？」

松脂を塗りながら、美奈が聞く。

「ああ。最初はチューニングB も出なかったからな」

「初心者なんだ」

「いや、そういう訳でもないんだよ」

「じゃあ、何で出なかったの？」

美奈が楽器を構える。

「あいつ、楽器始めた頃は今みたいにガツシリ体系じゃなくてさ、細身だったのよ」

「その時からチューバだったの？」

「ああ。本人いわく、金管バンド用の楽器構えるのも苦労したって」
吹奏樂やオーケストラに使われるチューバと、金管バンドで使用する小学生用のチューバとは、当然のことながら大きさが全然違う。それを悠輔はもてなかったと言うのだ。

「でもあの人、負けず嫌いっぽくない？」

「まさにそうなんだ。だからあいつ、持てないって分かった瞬間からジムに通い始めてさ。筋トレしてたわけ」

「それであんなにマッチョだったのね」

「そういうこと」

泰徳はお茶をひと口飲むと、『海へ．．．吹奏樂の為に』を吹き

始めた。8分の6拍子で数えられるこの曲は、タツカのタイミングと技術、そして歌い方が難しい。かつてこの曲を先取りして吹いてきている泰徳にとっては、たやすいことだった。もちろん、そこまでの苦労は計り知れないものがあつたのだが。

「先輩」

泰徳に声をかけたのは、沙希だった。

「ここが分からないんですけど……」

「どれどれ。見せてみな」

渡された楽譜は、『海兵隊』。泰徳も1年生の部活動参観日で演奏した行進曲である。あの時の泰徳は柔らかく、誰もが接しやすかつたに違いない。それが今は……。

「いいなー、泰徳は頼られて」

「俺は基本放し飼い主義だからな。できるところは自力でやらせて、やるべきことができていなかったら叱る。それが俺のやり方だ」

「まあやり方はいろいろあるだろうけど、私はちつとも聞かれないからねえ」

「ま、気長に待つしかないでしょ」

「そうなのかなあ……」

不安の色を隠しきれない美奈をよそに、泰徳は一通り説明を終えて衿を納得させると、練習に戻った。練習場所の前の廊下は、意外と響く。泰徳は、響かない場所で音を響かす練習よりも、響くところでどれだけ十分に響かすことができるか、というものを大事にしている。実際、泰徳の音は1階まで届く。ここは4階だ。

「先輩……」

恐る恐る近づいてきたのは、次は瑠璃加だった。

「どうした？ 谷に聞かないのか？」

「あんなに熱心に練習してると、なかなか近づけなくて……」

なるほど、とため息をつき、未来のところへ行く泰徳。

「谷」

「何？」

首筋に汗をびっしょりとかいて、同じところばかりを練習している。

「前田が用事だってよ」

「私、今それどころじゃないのよ」

「熱心に練習してるのはわかるけどさあ……」

「私だってここ完璧にしたいの」

「たまには後輩の面倒も見てやったら？」

「見てるわよ。瑠璃加ちゃん是可以る子なんだから、大丈夫でしょ？」

未来のあまりに幼い対応に、泰徳はだんだんと苛立ちを覚えていった。

「気軽に頼れるのが本当の先輩の姿じゃないのか？」

「私に頼られても、良いこと無いわよ。ただでさえ下手なのに」

この一言で、泰徳がキレた。といっても、手は出してないが。

「自分を卑下するのもいいかげんにしろ！」

未来の練習が止まる。美奈はこちらをのぞくように見ている。

「俺だって自分が上手いと思ったら終わりだと思ってる。でもな、

“この練習だけは絶対負けない” ってのは、あるぞ」

厳しいオーラの泰徳の口調がきつい。さらに近寄りがたい空気を出している。

「卑下するだけが成長に繋がるんじゃないんだ。たまには自分を褒めて、自身を持てるようにならないと、いくらそんなとこ練習したって上手くなりやしねえよ」

「……………」

「去年は成長意欲で一杯だったのに、2年になってから引つ込み思案だな。あれか？俺がソロを全部奪っちゃったからか？」

「別にそんなわけじゃ……！」

「だったらなぜ後輩を育てようとしんない？自分のことだけに精一杯な谷は、俺は見てられねえな。中井はただでさえ、後輩に頼って欲しいと思ってるのに」

泰徳はそれ以上、何も言わなかった。いや、言おうとしなかった。

それは、泰徳が谷を応援したかったのもあつたし、何よりも谷が迷っていることが表情から読み取れたからである。

「未来、分かんないのね」

「ああ……」

美奈が静かに呟く。泰徳も、先ほどの口調とは打って変わって、哀しかった。

「谷は小学校の金管バンドで、なにかあつたんだろうな。あれだけ拒絶反応を見せるのは初めてだ」

「かもね。未来は教えるの楽しみにしてたし、何よりも後輩ができることを喜んでいたわ。それなのになぜ……」

「まあ、今は頭を冷やしといてもらおう。今はあいつに何を言おうと、無駄だからな」

「泰徳がそう言うんなら、そうするわ。未来には頑張っ^て欲しいもん」

「そうか……。頼むよ」

泰徳と美奈は、未来が自分たちを頼るときを待った。未来が冷静になり、本来の先輩の姿に近づこうとしない限りは無理だと思つたからだ。廊下には、いつまでも『海へ……』のソロが悲しそうに鳴り響いていた。

第56楽章 「不安なんです」

泰徳が未来に櫛を飛ばして数分、休憩をしていた泰徳と美奈のもとに、未来がやってきた。

「未来……」

「どうだ、少しは分かったか？」

泰徳がそう言って振り向くと、未来は両目に涙を溢れんばかりにためて、こつちを見ていた。

「どうしたのよ、未来。らしくない」

「入ってきたらどうなんだよ。話してみろって」

2人がそう言うものだから、未来は泣き崩れながら教室に入ってきた。

「やっぱりトラウマがあつたのね？」

静かにうなずく未来。

「言ってみろよ」

涙を一生懸命こらえ、鼻を吸いながら未来は話し始めた。

「私、5年生のときに後輩を泣かしちゃったことがあって……。それで、顧問の音楽の先生にしまったま怒られてからは、後輩を泣かすのが怖くなっちゃって、それから……その、敬遠って言うか、そんな感じになつてたの」

「ふうん。で？ 前田の件は？」

「瑠璃加ちゃんは小学校の頃からできる子だったし、もちろん教えてあげてたけど、顔はいつも分かっている感じだったから……」

「それで教えなかったんだ」

「うん……」

「でもな、未来。どんなにできる奴だって、頼りたいときは頼りたいぜ」

「そうなのかなあ……？」

「ああ。いくらできるっていつても、その時その時で限界がある。」

それを広げてやるのが先輩の役目だと思わないか？」

「限界を、広げる……」

「そうよ、未来。私なんて頼って欲しいのに全然来ないし。聞きに来ない割りに全然できてないから、見てるこっちが苛立つちゃうのよね」

と、美奈は笑って飛ばす。

「だけど、瑠璃加ちゃんだって未来を頼りにしてるってことは、未来がそれだけ信頼されてるってことなんじゃないの？」

「まさに美奈の言うとおりだよな。俺なんてスパルタだから、永岡がどう思ってるかは分からないけど、大体想像つくし。俺はお前を見本としたい」

「わたしだって。だって唯一の経験者でしょ？ 未来は」

一時噤まれていた未来の口が、再び開かれた。

「でも、分からないの」

「え？」

「分からないのよ、どうやってたら理解してくれるのか」

意外な未来の質問に対し、黙りこくってしまう2人。しかし黙ったままでは話が前に進まないの、泰徳は経験談を持ち出した。

「悠輔って知ってるよな？ ほら、この前練習に来た学校の」

「うん……」

「中井にも話したんだが、あいつは最初、チューニングB が出るかどうかの瀬戸際だったんだよ。それが、今は明台中学校のテューバ吹きだ。結構偉くなったよな」

含み笑いで話を続ける。

「俺がその時の悠輔を相手にしていたときは、ストレスが溜まらない訳がない。でも、ホントにこいつは1から教えなきゃ駄目なんだって思ってたんだよ。まずは、教えようということより、相手を理解してやることじゃないのか？」

「私が、瑠璃加ちゃんを……？」

「ああ。前田の練習方法を分析して、何が苦手かということが分か

れば、おまえ自身も何を教えれば良いのか分かるだろ？」

「そうだけど、どうやって……」

「それは当たって砕けるだよ」

「え？」

「そんな、最初から上手くいく人間なんてこの世に存在しないんだ。そんな完璧な人間がいたら、あつてみたいね。一応俺もプロやるけど、なるまでには本当に並々ならぬ努力がいったぜ」

ここまで言つと、今度は美奈が話し始めた。

「私は……瑠璃加ちゃんはやつと苦手なタイプだけど、良い子だと思う。さつきも泰徳が言つたように、私も最初は後輩を見つめることから始めてるわ。どんなことを教えても、瑠璃加ちゃんが分からないことを理解しないことには無理だもんね」

「要するに、今までの谷は後輩に対して、1から10までを全部教えちまつてたつてことだ」

「全部教える必要は無いんじゃない？ 中学生なんだし」

なんとという大人目線。一緒にいつも笑つてすごしてきたBassパートのメンバーが、ここまで成長しているとは。未来は自分だけが子供のまま成長が止まっている気がして、悔しく、そして悲しくなった。今までこらえていた涙も、もう抑えきれなくなっていた。

「谷は頑張りすぎなんだよ。もうちょっと楽に行こうぜ。放し飼いだよ」

「私も……それで、いけるかな……？」

「ああ、きつと大丈夫だ。谷くらの実力があれば、誰でもできるんじゃないか？ だつて、初心者俺ができてるんだから、谷だつたら絶対にできるよ」

泰徳は後押しのつもりで言つたのだが、未来があまりにも号泣するので少し焦つた。横から美奈が「気にしなくて良いの。好きなだけ泣かせてあげて」と言つたので、泰徳は教室を出て練習に戻つた。

「未来は私と違って完ぺき主義だからね。頑張りすぎてたの。泰徳は見たとおりの能天気でマイペースな奴だけど、音楽のことになる

と無敵よね。あれだけの知識があればプロにでもなれたと思う。でも、やっぱり努力は必要なのよ。未来はその『頑張り』と『努力』の意味を履き違えてるだけだと思うわ」

泣き声が少々収まってきた。落ち着いてきたようだ。

「『頑張り』って言うのは、目標を決めてそこまで上り詰めること。『努力する』っていうのは、ゴールなんてないのよ。どんどん上を目指すことなの。今は、これを半分ずつやっていかなきゃ。じゃないと、後輩が置いてきぼりになっちゃうでしょ」

美奈は未来の方をボンと叩くと、最後にひと言、

「あなたはできる。だって泰徳が認めた、唯一の部内の人だもん」と言った。あの厳しい泰徳が認めてくれた。それだけで嬉しかった。今日未来が流した涙は、人生で一番複雑なものであった。しかし、人生で一番意味のあるものでもあったのだった。

第57楽章 「無茶なお願い」

部活動参観日を再来週に控えた泰徳。実はこの日、翔が愛媛に来ると言うので、JRの松山市駅で待ち合わせをしているのだ。翔はこの次の便。『しおかぜ』に乗って来ると連絡があった。

「翔のやつ…何しに来るんだろ…」

翔は優しい性格であるが、結構面倒臭がり屋なところもあるので、自分から行動を起こすとなると、問題が起こらないことがないのだ。良い奴だと思うが、泰徳はそういう意味で不安を感じていた。

「よっ」

焦りを感じていたので、この後ろからの掛け声はものすごくびっくりした。

「せ…先輩……」

「珍しいじゃないか、お前が駅にいるなんて。待ち合わせか？」

「ああ。知り合いなんだけどな。次の便で来るんだって」

「ふーん。誰？」

「俺の幼馴染だよ。大阪のときの」

「へえ。会ってみたいな。一緒にいていい？」

「良いけど、あの時みたいな大論争するんじゃないぞ」

「分かってるって。お前に適う奴はいないよ」

ぽりぽりと頭をかきながら話す匠。

「そういえば、今日部活は？」

「休みなんだ。なんか合同講習会みたいなやるんだろ？」

「みたいだなあ。立石先生によれば、俺たちの学年は『海へ』らしいが」

「へえ、そうなんだ。俺らはアルヴアマー序曲なんだよな」

「アルヴアマー序曲って、バーンズのか？」

「ああ。あれ何かとユーフォの扱いが酷くてな」

楽譜を見せながら意気揚々と話す匠。対して泰徳は、翔のことで頭

が一杯だった。幼馴染のときからのトラブルメーカー。何をしでかすか分からない。

「どうした？ 泰徳」

「あ、いや、ちょっと幼馴染のことで……」

「何か心配事でもあるのか？」

「いや、別にそういうわけじゃないんだが……」

「ふーん。なら良いけど……」

そうこうしているうちに、特急列車『しおかぜ』が到着した。予定通りならば、この中から翔が出てくるはずなのだが。

「……こねえな」

「え、今までの中にいなかったのか？」

「ああ。そいつは俺を見た瞬間騒ぎ出す奴だから……」

泰徳の言葉を聞き、それを想像する匠。なんとなく、キャラがつかめた感じがした。と、改札口で荷物を引っ掛けている男の人がいた。

「あ、大丈夫ですか？」

おもむろに泰徳が声をかける。

「あ、はい。大丈夫なんですけど、この荷物がどうしても通りまへんねん」

「通りまへん？ 何で関西弁なんだ？」

「え？ ってことは……翔？」

泰徳は恐る恐る、男の人の顔を確認する。それは紛れもなく、幼馴染・翔であった。

「うおお、泰徳！！ 久しぶりやなあ！！！！！！」

ものすごいハイテンションだ。匠もある程度ハイテンションの部員とかかわってきたつもりだったが、ここまでレベルが高い人物は見たことがなかった。泰徳は迷惑そうに翔を見ているが、まんざらでもないようだ。

「出会い頭からうるせえなあ、お前は。で？ 今日は何の用だよ？」

「あ、そうやった。実は、常套中学校のB a s s パートの皆さんに会いたくてきたんよ」

「はあ？ 何のために」

「ええやんか。泰徳にだつて友達はおるやろ？」

「そりやまあ、そうだけど……」

「あ、そうそう。横の人誰？」

出た。翔の得意技、話題変換。こうなると翔のペースに吞まれざるを得ない。

「あ、こいつ？ 松方中学っていうところの、黒田 匠。俺の1個先輩だよ」

「ふーん。あ、でさあ、今日部活あんなやろ？」

「それがあいにく午前練習でさ。もう終わっちゃった」

「ええ？！ じゃあ皆帰ったん？」

「ああ、残念ながら」

「えー……………」

がくつと肩を落とす翔。いつもは騒がしい奴だが、やはり幼馴染。泰徳にも同情と言うものは備わっている。

「分かったよ。俺の家に来な。中井や谷にはすまないが、呼び出すから」

「え？！ 別にそこまでせえへんくても……」

「いいつて。どうせ暇そうにしてるだろうから。翔も会いたいだろう？」

「だけど……」

「気にすんなつて。ここの匠先輩も面識あるし」

匠は少し照れながら、翔に会釈をした。泰徳も歩き出す。

「そついえばさ、泰徳」

「何？ 先輩」

「お前プロになったんだつて？」

「うん。どこから入ってきた噂かは知らないけど、そうだよ」

「やつぱ、吹き甲斐ある？」

「もちろん。仕事先は日本最高峰の楽団だしな」

「ふうん……」

「泰徳普通に上手いもんな」

「バカ言えよ。まだまだだって」

「そんなことないって。なあ、黒田君」

「そうですね。僕と泰徳こいつが今こんな関係になってるのも、泰徳の知識量と技術に負けたからです。本当に最強中学生ですよ」

正直、泰徳は買いかぶりすぎだと思った。仮に自分が高い実力を誇っていたとしても、そこまでのレベルには達していないはずだと思っただ。

「泰徳の家って防音室あんの？」

「ああ」

「すげーなあ。俺なんか電子ピアノでヘッドフォンつけて弾いてるつてのに」

「そうかあ、泰徳は防音室なら、ピアノがあってもチューバ吹くにしても、やりまくりってわけか」

自然と会話が弾む2人。翔持ち前の絡みやすさで匠も馴染んできたようで、気軽に話することができているようだ。楽しい時間は過ぎるのが早く、泰徳の家がもうすぐそこにあった。

第58楽章 「談話」

「うつわぁー……」

匠と翔、2人そろって感嘆の声を上げた。案内されたのは泰徳の部屋。防音室加工で、中にグランドピアノが1台、アンプライトピアノが1台、マンガ本や雑誌を並べてある棚の上にシンセサイザーが3台、さらに、グランドピアノの下にエレクトーンが1台収納されている。そして極め付けが、正面の壁一面にセッティングされたCDラックに収まりきるかきらないかの大量のCD。とても普通の家だとは思えない。ただ、この部屋を使用している人間が普通じゃないだけだ。

「すごいな……」

「これが泰徳の部屋かよ」

「何か文句でもあんのかよ」

「いや、別にないけど……。凄すぎひんか？ この部屋」

「そうか？ 俺にしちゃ普通なんだが」

そういつて、泰徳は机の上に置かれたノートパソコンと、デスクトップパソコンを起動した。泰徳の寝室は、2階にあるとのことだ。

静かな防音室に、パソコンのモーター音だけが空しく耳に届いている。ふと、匠が口を開いた。

「なぁ、泰徳」

「何だよ」

「今度俺ら、合同練習するじゃん」

「あぁ」

「あれっていつだった？」

「来週だよ」

「合同練習？」

翔がバッグをごそごそしながら、おもむろに尋ねる。

「あぁ。常套中学校で近郊の中学生と高校生が集まってさ、クリニ

ツクみたいなおことするんだよ」

「曲って決まってるの？」

「一応な」

そう言って、泰徳は1枚の紙切れを出した。

《合同練習会 クリニック曲一覧》

中1：ロマネスク

中2：海へ・・・ 吹奏楽の為に

中3：アルヴァマー序曲

高1：エアーズ

高2：アルメニアダンス Part 1

高3：K点を越えて

「泰徳、またアルメニアンだって」

匠がどこか嫌味の混じった声で言う。これはある意味、毒舌キャラである泰徳への挑戦だった。しかし泰徳もそれを悟ったのか、こう返した。

「先輩もアルヴァマーだって。中高生に優しい曲だっていう考え方が一番主流だけど、コンクールとかで聞いても、まともな演奏は1つたりともないらしいな。頼むよ、先輩」

やはり毒舌には変わりなく、軍配は泰徳に上がった。

「海へやん。これサックスソロ誰がするん？」

「常套は、浜口だな」

「え？ 浜口って、愛さん？」

「ああ。最近あいつ、死に物狂いで練習してる」

「ふーん。で、匠君のほうは？」

「正二って言う子が。結構やり手なんですよ」

「ふーん、その子の音、一回聞いてみたいな」

翔もサックス奏者。同じ楽器をしている人物の音色は、どうしても気になる。

「そういえば翔」

「ん？」

「いつまでいるつもりなんだ？ 愛媛に」

「今日中には帰るけど、また来週あたりには来るつもりやねん。顧問も許してくれてるし」

「ふーん。じゃあさ」

泰徳はレポートらしきものをタイピングしながら、呟いた。

「今日会わなくても、来週会ったら？ どうせ来週合同練習会なんだしさ」

「それええな……！」

鼓膜に響く、キーンという耳鳴り。とにかく翔は声がでかい。

「じゃあ、そうするわ！ 泰徳の演奏も楽しみやし」

「おいおい、匠先輩のもだろ」

「何で俺が入るんだよ！」

「だってアルヴァマーじゃん。結構ユーフォめだつぜ、あれ。聞いてあげろつて、翔」

「分かってるつて……！」

そう言つと、特急列車の時間もあるからと、翔は三津駅に向かった。泰徳が送ろうかと提案すると、愛媛の町をもう少し見たい、とそれを断つた。

「もう、泰徳つてほんと腹黒いと言うか、なんというか……」

「でもさあ、アルヴァマーつてベタじゃね？」

「それ思つたんだよなあ。でも、よく考えたら泰徳の先輩も吹くじゃん」

「ああ。あまり期待できないけどな」

「おいおい、先輩だぜ？ 仮にも」

「そうだな。一応……な」

泰徳の今のポジションは、もはや学生ではない。悲しいのか嬉しいのか、泰徳自信もみんなから遠ざかっているのを感じた。今こうやつて向かい合っている匠でさえも、ごく普通の中学生だと言つのに。

「しかし、あの愛が死に物狂いで練習とは……」

「そんなに問題児なのか？」

「前はな。今はどうってことないんだが」

「ふーん」

会話が途切れる。こうなると、互いに『何か話題を……！』という意識から、頭の中のトピックセンテンスの検索がめまぐるしく行われるのだ。

「あのさ……」

2人同時に声を発する。

「あ、いや。先輩から話してよ」

「いや、ここは泰徳からだろ」

「先輩だって」

「泰徳からでいいって！」

またしばらくの沈黙が流れる。そして2人同時に、

「あーもう！ 先輩からでいいって言ってるだろ！」

「あーもう！ 泰徳からでいいって言ってるだろ！」

という。自然に笑いが起こった。

「何か変だな、2人とも」

「そうだな」

匠は明日朝練習もあるし、ということとで席を外した。泰徳は玄関先まで見送りに行くと、匠は「アルヴァマー、期待はずれにならないように頑張るよ」と言っ、泰徳の家を去った。だが、2人がどうしても気にしていることが1つ。それは、お互いに何を言おうとしていたのかと言うことだった。何を言おうとしたのかはこの後メールで確認しあったのだが、2人とも何を言おうとしたかったのかは、読者の皆様のご想像に任せることにしたい。

第59楽章 「共通の趣味だからこそ」

新譜は突然、やってきた。

「マーチ 『春風』？」

未来が楽譜を眺めながら顔をこわばらせながら答える。実は未来、マーチにはほとんど存在している『オブリガート』の演奏が大の苦手なのだ。

「うん。部活動参観日にやるみたいだよ」

松脂を塗りなおしながら話す美奈。

「でも、立石先生は部活動参観日と合同練習会がかぶるって……」

「かぶるからなんだって」

「どういうこと？」

「だから、今年の部活動参観は合同練習会に参加してる学校の人にも聞いてもらおうってわけ」

「ええ〜?! どうすんのよぉ!」

「そんな私の知ったこっちゃ無いわよ。先生が決めたんだからバシバシと未来の肩を叩く美奈。

実は先日、ようやく部活動参観日で演奏する曲目が決定したのである。新1年生は例年のごとく『海兵隊』、そして美奈たち2年生は『マーチ “春風”』、香織たち3年生は『バラの謝肉祭』となっている。泰徳はそれらの楽譜を職員室でコピーしている最中だ。

「でも何でよりによって春風なのよぉ……」

「愛の希望なんだって」

「愛の?!」

未来が「またあいつか」というような口調で話す。

「うん。何でも、周りとおわせる勉強したいんだって」

「?」

「つまり、愛の音色を周りと溶け合わせて曲を作りたいってことよ」「ふうん……」

確かに、今までの愛であれば自分が目立ちたいあまりに、サックス主流の曲を選択したであろうが、今回愛の希望で選ばれたのは、オリジナルでもポップスでもなく、2005年の課題曲だった。

「でも、春風って入学式のときも吹いたよね」

「うん。それがどうかした？」

「私たちだけで吹けるのかなあ？」

「大丈夫でしょ、愛だけでもあれだけ成長すれば」

「うーん……」

愛の今までやってきた事がコトだけに、不安の色は消え去れない。しかし、その後に続けられた美奈の「愛が先生に懇願したみたいよ」という言葉を聞いて、愛を信じてみようかという気になった。

「おーい、楽譜上がったぞー」

そう叫びながら、泰徳は廊下を歩いてくる。3学年分の楽譜を抱え、足取り軽く歩いてくる様子は、いかにもチューバで鍛えられた腕力を物語っている。

「これが海兵隊。新譜を先生が渡してくれたから、結構見やすいと思うぞ」

その言葉どおり、今までの手書きの楽譜とは違い、今回はきちんと打ち直されたものがコピーされてあった。

「で、これがマーチ『春風』。谷、オブリガート頑張れよ」

泰徳は励ましのつもりで言ったのだが、未来が今オブリガートを相当気にしていたことも重なって、逆にプレッシャーとなってしまうた。

「そして、これが先輩たちの『バラの謝肉祭』。それにしても、今年の3年は楽譜のレベルが低いな。音楽性は上のほうなんだろうけど」

こうして渡された3年生の楽譜は、未来や美奈でも速読譜できるレベルの楽譜であった。低音族の楽譜ということもあって簡単なものかもしれないが、こういう曲に限ってバランスが桁外れに難しい場合が多い。

「俺らの演奏する春風は、入学式でやったから大丈夫だよな」

「うん、私は大丈夫よ」

と何やら弦をいじりながら答える美奈。未来は、オブリガートと戦っていた。

「よっぽど苦手なんだな、オブリガート」

「未来は小学校のときにトラウマがあるからね」

「ふーん……。そうなんだ」

「うん。オブリガートの中に出てきた1オクターヴのスラーを外しちゃって、それ以来苦手みたいよ」

「ふーん……」

泰徳は何か考え事をしているようだった。未来にオブリガートを吹ききるコツを教えるつもりなのか、はたまた、リップスラーを伝授させるつもりなのか。美奈には泰徳の考えはさっぱり分からなかった。

「ま、谷ならやってのけるだろ」

「だといいんだけどねえ……」

「できるって、あいつなら」

そう言って泰徳は教室に戻った。泰徳が小学生の頃は金管バンドになどまったく興味がなかったので知らないのかもしれないが、美奈は昔から楽器を演奏してみたいという思いが強かったので、結局入部はしなかったものの、金管バンドには興味があり、当時アルトホルン奏者だった未来の失敗を、美奈は知っていた。それゆえに、未来の思いは痛いほど伝わってくるのが自分自身でも分かる。

「ホントに大丈夫なのかなあ、未来」

さっきからため息ばかりが出ている。横を通りかかった樹里に、「そんなにため息ばかりしていると、幸せが逃げちゃうよ」と言われるほどだったが、その幸せが自分のではなく、未来の幸せが逃げていきそうな気がして、美奈はとっさに口を押さえた。

泰徳はそんな美奈の様子を見逃さないわけも無く、声をかけようとしたが、今はやめておくことにした。

「心配性なのは谷だけじゃない……か……」

「？先輩、何か言いました？」

衿が不審がつて、泰徳に尋ねる。

「ん？あ、いや、なんでもない」

泰徳は気になる気持ちを抑え、衿に海兵隊の指導を続けた。しかしやはり、その後は2人のことが気になって仕方が無かった。

第60楽章 「どこなんだ…？」

部活動参観日と、共同練習会の本番が刻々と近づく中、常套中学校吹奏楽部のBassパートは、それぞれの練習に精を出していた。1、3年生は個人練習および、廊下や玄関での練習（俗に『旅に出る』という）をしており、泰徳たち3人はパート練習をしていた。

「春風って、何かと面倒よねえ…」

弦バスにもたれながら、美奈が呟く。

「どうして？」

「だって、マーチの癖に全然休み無いんだもん。トランペットとかクラリネットのメロディーパートは休みあるのにさ…」

「仕方ないさ。それが俺たち低音パートの宿命なんだよ」

「でも、私なんてほとんどオプション扱いよ！」

美奈が憤慨している。オプションオプションと言うのは、そのパートを編入しても、しなくてもよい楽譜のことをいい、美奈の担当するコントラバスや常套中学校には無いオーボエ、そしてアルトクラリネットなどは、コンクール課題曲のほとんどがオプション扱いなのである。

「でも、楽譜が出版されてるだけいいじゃない」

「そうだよ。ポップスとかじゃエレキベースで活躍できるし」

未来と泰徳が説得するものの、美奈はなかなか納得しない。どうも楽譜がオプション扱いということが、美奈のネックになっているようである。

「でも、オプション扱いって結構むごいかもな」

「どうして？」

「だって、やってもやらなくてもいいんだぜ？ サバサバした性格の美奈にそういった中途半端さは通用しねえんじゃないの？」

「あー…言われてみれば」

そう、美奈は愛ほどではないものの、口調が鋭い。また、はっきりとした性格なので、中途半端なことが大嫌いなのだ。泰徳は、最近

の自分が美奈や愛に似たような気がしていたので、なんとなく美奈の気持ちが分かる気がしていた。

「でも、弦バスがいるから響きが厚くなるんじゃない？」

「それもそうだな。現バスは唯一のオーケストラ楽器なわけだし」

「……だからなんだって言うのよ……！」

美奈はふぐのように頬を膨らましている。

「要するに、お前はいずれにしても大切な存在だってことだ」

「……どうということ？」

「だから、いくら楽譜がオプション扱いでも、それに精一杯向き合えば、それなりに楽しさが見つかるってことだ」

美奈は難しいことは分からなかったが、ついこの間行われた『春風』の合奏で、立石先生が言っていたことを思い出した。

（曲を吹く上で大事なものは、技術の上手い下手ではない。その曲をどれだけ熱心に研究し、どれだけ真剣に向き合ったかなんだ）

そつだ、これだ。美奈はそう思った。

「……うん、なんとなく分かった気がする」

「そう。よかった、分かってくれて」

「でもまあ、中井は物分りがいいからな。浜口と比べれば」

「あいつと比べないでよ！」

美奈が即答する。それを見て、泰徳は微笑した。

「ま、本番は3日後なんだし。頑張ろうぜ」

「あ、そういえば」

未来が思い出したように言った。

「どうした？ 谷」

「合同講習会ってどこことやの？」

「中学校は松方で、高校は……あれ？ どこだっけ？」

「私も知らない」

3人ともファイルをめくりながら確認するが、中学校名は載ってい

ても、高校名は乗っていない。しかし、演奏曲目には高1から高3まで、いかにも高校が参加するように記載がある。

「立石先生から何か聞いた？」

「いや、聞いてねえな」

「私もよ」

「ただ、紙にこうやって書いてるってことは、松方中学が来るんだろうな、と思つて、放っておいたんだが」

「高校のことは何も無いよね？」

「うん。私も何も知らないよ」

沈黙が走る。話が続かないのではない。一体どこの高校が合同講習会に参加するのが不思議に思われて、参加しそうな高校を3人も片っ端から探っているのだ。

「…分かんないなあ……」

未来が挫折。

「うーん、私も…」

美奈が粘るも、挫折。

「んー…。あ」

「どうしたの？ 泰徳。何か思い当たる節でもあるの？」

「うん…。無いとは言い切れない」

自信なさ気に、泰徳が呟いた。

「どこなの？」

美奈が問いただす。

「自信ないけど… 斎木高校じゃねえか？」

「斎木高校？」

「あの、ジョイントした高校？」

「ああ。来年もジョイントするらしいじゃん」

「え、またやるの？！」

驚きを隠せない未来。

「あれ、聞いてなかったのか？」

「うん。美奈は、聞いてたの？」

「私も知らなかった…。なんか、知らない事だらけだね」

そう言つて、美奈は照れに近い笑いを見せた。

「なんか、5月のゴールデンウィーク中に演奏会やるって。4日間ぶつ続けでやるらしいよ、学校別に。んで、4日目が合同ステージとか何とか。この前先生から聞いたんだ」

「私たち、そんな事聞いてないわよ」

「うん。全然」

「あれ？ 変だなあ。じゃあ俺だけかな、知ってんの」

「そうかもね。でもまあ、ばらしたらヤバそうだから今のところは黙っとく」

美奈が察したようで、少し表情が険しくなった。泰徳にも先生の本意は分からなかったのだが、「一応そうしといてくれ」と頼んでおいた。

それからのパート練習は、合同講習会の参加高校が気になってばかりで、なかなかはかどらなかった。

第61楽章 「それが長所なんだよ」

「全く…。立石先生も人が悪いわよねえ……」

美奈がやれやれと言った感じで両手を広げる。そして差し出されたコーヒーを啜った。美奈は苦いのが苦手なので、砂糖は他の3人より大目になっている。

場所は泰徳の家のレスン室・翔と匠を上げた部屋に、美奈と未来、そして愛が座っている。そう、アルトサックス奏者の浜口 愛だ。これは美奈や未来が愛を呼び出したのではなく、また逆に愛が来たいと言ったわけでもなく、前々から泰徳に誘われていた美奈と未来が家に行く途中に、偶然愛と出会い、成り行きなのである。「ホント。泰徳にだけは情報が早いんだから…」

呆れ顔で話す未来。

「やっぱり泰徳は信用できるもんね、演奏家として」

「そうよねえ…。立石先生も頼りにしてるし」

そう言って、愛は洋菓子をつまんだ。

「で、結局するんだ。ジョイント」

「らしいよ。美奈も賛成でしょ？」

「うん。やるんならとことんやりたいし」

「だけど、来年は大変そうね…。4日ぶっ続けでしょ？」

「出場しない日は裏方って言ってたしね」

美奈と未来の間で話が盛り上がる。そのとき、泰徳がレスン室の奥に設置されてあるグランドピアノの下から顔を出した。

「あつたー!!」

「やっと見つけたの？ それにしてもすごいね、CDの量」

あの愛が感服している。そう、泰徳の所持するCDはすべてこのレスン室の壁一面に設置された、CDラックに収めこまれているのだ。それもびっしりと。その中から、泰徳はある貴重な音源を探し当てたのだ。

「じゃ、聞いてみて」

おもむろにスピーカーから出された音は、愛がサックスのソロを担当する『スカイ・ハイ』。来年のジョイントコンサートで演奏予定だ。しかし、サックスソロは本物らしいが、周りの音は電子だ。

「どうしたの？ これ」

愛が尋ねる。

「幼馴染から借りたんだよ。河原で1人で吹いたって言ってたから、伴奏を耳コピして、電子音でくつつけた」

「ふーん…。上手いね」

「そりゃあ。高校生だし」

泰徳の言う幼馴染とは、もちろん彼・翔のことであつた。実際は翔が河原でスカイ・ハイを演奏した時には、幼馴染としての関係は復旧していなかった（後に掛かってきた電話で、翔のことを思い出す）。

「でも、よくそんな時期の音源あつたわね」

「そうよ。まだ泰徳は佐野先輩の存在忘れてたんだから」
さすが美奈。ひと言ひと言がキツイ。

「翔がさ、『荷物整理してたらこんなん出てきたんやけど、もういらんし、やるわ』って言うてくれた。まあ断つただけど、友達だしと思つて一応」

「ふーん…」

ソロを奏でるだけの短い時間だが、それでも十分、スカイ・ハイとしての魅力が感じられるように思われた。

「私も、こんなソロが吹けるようになったらなあ…」

「吹けるよ、今の浜口なら」

「そうよ。明日の部活動参観日で、春風が上手くいったらね！」

未来が愛の肩をパシッと叩いた。

「そんな…プレッシャーかけないでよあ…」

愛が半泣きになる。そういえば、今の愛は入部当時と全然違うな、と泰徳は考えていた。誰でもそうなのだろうか、不思議に思う。

「でもま、いけるって」

「私もそう思う」

「うん、信じよう」

泰徳3人たちが後押しする。

「でも…海もあるじゃない」

「合同講習会のこと？」

「うん……」

不安げな愛の返事を聞いて、泰徳が言った。

「大丈夫だよ。匠のいる松方中学校だろ？ 小編集部門で銀賞じゃないか。どうってことねえよ」

聞けば松方中学校をバカにしているようであるが、実はそうではない。泰徳自信は松方中学校はとも力のある学校だと思うし、大編集部門に上がってきてても不思議ではないと思っていた。ただ、今の愛の心理状態から読み取ると、この表現が一番適しているかと思われたのだ。

「ちよつと、そんなこと公言していいの？」

美奈が泰徳に耳打ちする。

「大丈夫だって。愛は実力はあるが軽いナルシストだろ？ ここで松方中学が上手いとか言ったら、『私のほうが…！』ってなって、無駄な努力になる気がしてさ」

「なるほどね…」

美奈がふふつと笑う。

「ま、浜口は浜口なりに頑張ればいいんだって」

「明日の部活動参観、うまくいくといいね！」

「当たり前だろ。永岡らに恥ずかしいところは見せねえよ。そうだろ？ 浜口」

「うん……。うん！」

やはり先輩としての気質が働いたのか、後輩に恥ずかしいところは見せられないと思ったようで、「私、頑張る！！」と意気込んで、先に泰徳の家を後にした。

「愛も、あれくらいいつも素直ならいいのにね」
再びコーヒーを啜る美奈。

「でも逆に、素直すぎて気持ち悪くないか？」

「どうして？」

未来が聞く。

「だって、俺らは無駄な辛口で人を困らせてばかりの浜口になれてきてるから、やっぱり素直だと拍子抜けしちゃうんだよね」

2人は最初、何言ってるんだ、と言いつうになっただが、泰徳が「それも、浜口の魅力の1つなんだよね」と呟いたときには、その顔が妙に優しく感じられ、何も言えなかった。

部活動参観日の本番を明日に控えた泰徳たち。また、合同講習会も行われるとあって少々ばたつき気味であるが、果たして上手いくのだろうか。

第62楽章 「小編成だつて…！」

さて、いよいよ部活動参観、そして松方中学校と謎の高校（立石先生からは、未だに何も聞いていない）との合同講習会本番を迎えた。前半の部活動参観は、親はもちろんのこと、松方中学校や謎の高校生も閲覧可能となっている。

例年この時期になると開かれる部活動参観は、本館4階にある第1音楽室の隣・マルチ・パーパス・ルームと呼ばれる小さめのコンサートホールで開催されている。ここに通う中学生からは、『マルチ』という俗称で親しまれている、意外と人気のあるホールだ。

「いよいよだね」

「ああ。楽しみだ」

「いつ始まるか分からないのがいいわよね」

アナザー・キャパシティー

舞台裏に役員として控えている泰徳たち2、3年生。Bassパー
ト2年生組みは、舞台裏上手のそばで、入部した手の1年生を見守
っている。

「それにしても可愛いじゃないか」

「そうね」

美奈が微笑ましく笑った。

この部活動参観の開演は、午前9：30と少々早めであるが、さすがわが子が出る初舞台とあって、会場は嬉しいことに超満員だった。

ブザーがなると同時に、海兵隊の演奏が開始される。

海兵隊は、決まって新入部員が演奏する、『常套中学校吹奏楽部入部後、初の楽譜』として配られる。無論泰徳たちもこの海兵隊から吹奏楽ライフが始まったわけなのだが、この部活動参観の海兵隊と言ったら、いい意味で酷かった。

「やっぱり開いてるな、音」

「楽しいじゃん。今度小編成でやるんだぜ？」

休憩中、美奈が春風に対して意味も無い怒りをぶつけていた。未来は旅に出ている。

「小編成だったらなおさら、つまらなくなっちゃうじゃん」

「なんで？」

「だって、今の編成であれだけの演奏したんなら、2年生だけとか、スケール絶対音量落ちるじゃん」

「そんなことないって」

「ある！」

「……………」

泰徳は若干頭にきていたが、美奈がそう思うのも無理は無いと思った。そこで、泰徳はセカンドバックから1枚のCDを取り出した。ジャケットには、『2005年度 全日本吹奏楽コンクール 金賞 スペシャル Vol.3』の文字。

「どうしたの？ これ」

「匠から借りたんだ。松方B部門で出場したから、その関係で」

「ふーん…。でも、珍しいね」

「まあな」

そう言つて、泰徳はCDをラジカセにセットした。泰徳は音楽に関しては妥協しないはずなのに、なぜかコンクールの演奏は嫌っている。というより、コンクールのCDを集めるのを嫌っている。その真相は明らかになっていないのだが。

「先に言つとくぜ、中井。今から聞くのは言うまでも無く春風だ。ただし、メンバーは24人。俺らの学年とほとんど変わらない」

泰徳は口調キツめにそう言つと、CDを再生した。曲の冒頭を聴いた瞬間、美奈の頭にはたったひと言しか浮かばなかった。

——上手い。

「…どこが演奏してるの？」

「分かんね。匠からは何も聞いてないから」

┌
└───┘
|
h
⋮
└───┘

美奈は軽く流した。ただ、泰徳が流している春風を演奏しているのが、松方中学校だということは、まだ誰にも明かしていない。

[illegible]

この時から美奈は、異常なほど熱心に曲に取り組むようになった。曲の冒頭から神経を研ぎ澄まし、速めに演奏を始めることで、低音独特の音の遅れやこもりを解消する。四分音符の刻み方からトリオのピッツィカートでの指のはじき方まで、資料を読み漁って研究していた。

春風が終了する。いかにもホールの中に風が吹いたような、さわやかな吹奏感。美奈もまた、立石先生の格言を振り返っていた。

“演奏で大事なものは、技術があるとか無いとかではない。今与えられている音楽にいかにも真面目に取り組み、真剣に向き合ったかが力ギなのだ”

第63楽章 「舞台裏」コラボオールスター座談会 2」

とにかく久しぶりである。様々な事情が重なり、更新もなかなかできなかった今日この頃。アクセス数は2桁死守と、ある程度の良好な結果を得られていることに、心から、読者の皆様に感謝の意を表したいと思う。まあ、こういうことはわざわざここでやらなくてもよいのだが。

さて、更新に取り掛かってみたものの、ストーリーが思い浮かばず、結局このような本末転倒な結果に終わってしまったのだが、少しでも楽しんでいただけるようなら、作者として嬉しい限りである。

GT：「またやつちやつたねえ」（笑）」

泰徳：「つたく！ ストーリーが浮かばねえからって、いちいち呼ぶんじゃないよ」

未来：「まあまあ、そう言わないの。作者さんだって横で頑張ってるストーリー脚本考えてるんだから」

泰徳：「だからってなあ、こんなもん渡されても ウグッ……」

翔：「こらこら。それは言ったらあかんやろお」

綾音：「…兄ちゃん、苦しそудだよ？」

翔：「大丈夫やってえ！ 泰徳はそんなやわな男じゃ…」

GT：「あの…やばそудですよ？ 泰徳」

翔：「だからあ、大丈夫…夫じゃなかったあ！！　大丈夫か？！」

泰徳：「ゲホゲホッ…。うつせーよ！！　大体お前の腕力はハンパじゃねえんだからな！！」

翔：「…そうか？」

GT：「翔さあ…見て、周り」

翔：「ん？」

GT：「皆つなずいてるよ」

翔：「あ…あ、でも！　ホントはこう…なんて言つか……」

泰徳：「言い訳はいいから」

翔：「……すまん……」

GT：「ああ、今回はもうちょっとまともに始められると思うたのに……」

匠：「またグダグダだな（笑）」

美奈：「グダグダって言うか、壊滅ね」

未来：「ほらまたそうやって…。美奈はそのひと言ひと言がキツイのよ」

美奈：「仕方ないじゃない。これが私よ」

GT：「あはは……（汗）でもま、始められたんでいいでしょ」

翔：「まあな！」

GT：「今日のトーキングテーマは、第2回ジョイントコンサートと、来る合同講習会について！」

泰徳：「そういえばさあ……」

GT：「???」

泰徳：「まだもらってないんだけど」

美奈：「何を？」

泰徳：「次話の台本」

全員：「!!!!!!!!!!!!!!」

匠：「ちよっ…泰徳？」

泰徳：「たいがいさあ、もらわないと台詞覚えられないし、役作りだって結構大変なんだぜ？特に翔が絡んでくるところとか……」

匠：「どあー！泰徳！それ以上言っな。素性がばれる」

泰徳：「別にばれたっていいじゃん。この前も60楽章の収録なんか、中井の演技に熱が入りすぎて、そりやもう大変だったんだから」

未来：「あー、確かにあれはねえ（微笑）」

美奈：「な…何よ！ 脚本にはそうやって書いてたんだから仕方ないでしょ？！ そう言う泰徳や未来だって、NG出しまくってたじゃない！」

泰徳：「あ、いや、俺は演技が苦手で…」

美奈：「言い訳はいいから！ 作者さん！」

GT：「は…はい？」

美奈：「あの時のVTR残ってる？」

GT：「つて、いつのですか…？」

美奈：「51楽章！」

泰徳：「！！！！ ちょ、美奈…。それだけは……」

美奈：「だあゝめ！ さ、再生するわよ！」

翔：「泰徳でもNG出すねんな」

GT：「どんなNGだったわけ？」

匠：「あ、思い出した…。あれって確か……」

悠輔：「遅くなりましたあゝ！！」


~~~~~

## Take 2

「明台中の人、来たよ」

と言ったので、Bassパートメンバー全員で出迎えることにした。

「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

と双方挨拶を交わした直後、チューバケースを持った男子が泰徳の下に駆け寄り、

「師匠！」

と叫んだ。

「師匠うゝ!？」

「泰徳、師匠ってどういうことよ？」

「え…あ…それは…」

言葉にならない。泰徳はとりあえず、その男子に

「おい、師匠って呼ぶのはやめろって、あれほど言っただろ」と念を押した。

「じ、じゃあ…こちらにどうぞ」

流れ出る冷や汗を押さえながら、泰徳は明台中学校吹奏楽部のBassパートを案内した。そして話題は自己紹介よりもまず、先ほどの『師匠』のことになった。

「泰徳、あれはどういうことなの？」

「話せば長くなるんだが…」

「それにしても師匠なんて、すごいわね」

「あ…あれは好きで呼ばれてるんじゃないんだよ!!」

「またまたあゝ。泰徳のことだから、チューバのことかなんかだろ?」

「せ、先輩まで……」

「当然じゃないか。大論争で俺を負かした男だ。それぐらいはやるさ」

という匠の発言に、

「あ、確かにそれは言えてる」

「あー……」

「谷？」

「……台詞忘れちゃった……（汗）」

[illegible]

美奈：「2人とも酷くない?!」

悠輔：「僕のこと忘れてたんですかあ（泣）！」

泰徳＆未来：「……確かに酷い……」

GT:「よし、できた!」

翔：「お、できたんか。どれどれ…。おお！」

匠：「俺、出番無い……（泣）」

悠輔：「あ、師匠。すごい役割ですね、今回」

泰徳：「なんて？（台本見る）……俺には無理だ……」

GT:「ま、頑張つてちょうだい」

未来：「えー、次こんなことしなきゃいけないのお?！」

美奈：「次は愛も大変そうねえ（微笑）」

GT：「ま、次のお話は君の演技力にかかってるよ。次回の座談会は、サブキヤラクターもすべて含むかなと思ってたり」

美奈：「エリ先輩とか?!」

未来：「愛美ちゃんとか?!」

GT：「さあ」(笑)？ それは次回までのお楽しみ。それでは皆さん、また会う日まで!」

## 第64楽章 「あいつはホルンヲタクだ」

3年生の『バラの謝肉祭』も何とか無事終了し、いよいよ中高一貫でのバンドクリニックが始まるうとしていた。まずは中学1年生。松方中学校と常套中学校の1年生が合同で『ロマネスク』を演奏する。2校あわせた人数はのべ60前後といったところか。

ロマネスク  
Romanequeを作曲したのは、スウェアリンゲン。他にも有名な作品と言われれば、センチュリアが上げられる。スウェアリンゲンの曲想の特徴は、とにかく金管楽器の使い方が豪快であること、そしてコーラルの部分が何とも言えぬ美しさを編み出す曲想のことである。金管楽器の使い方が豪快だと言っても、それはファンファーレの話に限る。

木管を主体としたならかなメロディーで始まるこの曲は、中低音の力が必要不可欠となる。この『ロマネスク』は、コーラルというよりも賛歌のようなアンサンブル性を感じさせるような流れる曲であり、テンポがはつきりと変更される部分は無く、おおむね一定のテンポで演奏される。第2主題から金管楽器が入ってくるが、指示はmpもしくはp。あくまでアンサンブルは最小限に収められている。中学校部門の指揮は、立石先生がとり行う。

中学1年生のクリニックでは、楽器の鳴らし方や音のバランス、さらにはハーモニーまで、吹奏楽部員には必要不可欠な“いろは”を隅々まで教えてくれる。そんな様子を見ている泰徳たちは、ほほえましさまで覚えるのであった。

続いて、中学2年生。泰徳たちの出番だ。曲目は、『海へ．．．吹奏楽の為に』。2006年度の課題曲4番であり、作曲者は三澤<sup>さわ</sup>慶<sup>けい</sup>。8分の6拍子で奏でられるこの曲は、見た目、聴くよりも

演奏のほうははるかに難しい。ティンパニを担当する3年の<sup>なかお</sup>中尾<sup>まみ</sup>眞実<sup>まみ</sup>は、出だしの3発でいつも怒られていた。

その問題の3発のティンパニ。うまくいったようで、いつもの立石先生からの眼光がなかった。合いの手もさながらに、フルートとオーボエのメロディー。中間部になると、ユーフォニアムとホルンのソロが待ち受ける。これらの楽器の担当者・特にソロ担当者は、どちらの学校もリップスラーの練習を腐るほどやったと言う。さらにユーフォニアムにはヴィブラートも要求され、未来と松方中のユーフォ吹きはだいぶ苦戦していた。

中学2年生のクリニックは、少々専門的分野の話も入ってきた。導入部・動機（1）・主題・再現部・コーダ（2）で曲が構成される場合が多いと言うこと、メロディーには輪唱<sup>フーガ</sup>によって味を出す効果も見出されると言うこと。とにかく、専門的なことが組み込まれていた。それらはすべて、泰徳に言っているようなものだった。

中学3年生は、『アルヴァマー序曲』である。作曲したのはバーンズであり、吹奏楽界では“ベタな選曲”とされることが多いようである。確かにこれは中高生向きな曲ではあるが、聞くところによると演奏会ではいい演奏がなかなか聴けないという、極めて嫌味な曲なのだ。

軽快なファンファーレから始まり、中音楽器の雄大なメロディーを迎える。この曲において木管楽器はもちろんだが、珍しくトランペットが超絶技巧楽器として扱われている。現に、今演奏されている前半部分のトランペット譜は、16分音符が挙列している。中間部は、トランペットの柔らかなメロディーで始まりを告げる。中低音はそれに呼応する形でアンサンブルを形成しなくてはならない。極が盛り上がったからも、その形を保たなければいけないのだと立

石先生は言う。再現部、前半と同じようなメロディーが繰り返されているが、裏では木管軍が指を走らせていた。

さすがに中学3年生ともなると、指導レベルが違う。アンサンブルの変化のつけ方、曲分析をいち早く行う方法、作曲の背景、作曲者の生涯について。それはもう、クリニックと言えるレベルではなかった。しかし、中学部門のクリニックは無事終了したようだ。

「すごかったなあ、立石先生」

「気合入ってたよねー」

「あそこまで熱くなるとは……」

3年生の演奏が終わってもなお、汗が止まらない泰徳たち3人。今日の立石先生は、本当に気合が入っていた。黄色のポロシャツでも十分まぶしいのに、今日来ていたのは蛍光の黄色だった。

「松方もだいぶレベル上がったよね」

「そうだな。ホルンもそこそこだったし」

「ユーフォなんて桁外れ！」

未来が興奮している。未来の右隣が匠で、ソロを2人で吹いたのだ。相当伸びてるよ、匠先輩」

「そうじゃなかったら困る」

そう言つて、泰徳は鼻で笑った。

「そういえば、次高校だよね」

「ああ。まだどの学校かは分からないが……」

泰徳がそういうと、高校1年生と思われる生徒たちがステージに上がる。3人は、素早く征服で学校を判断する。

「1つは斎木高校だよね……。もう1つは？」

「……分かんない」

「泰徳、何か心当たりある？」

何も答えようとしないうちに泰徳。

「泰徳？」

「北伊予高校だ……」

「北伊予?!」

美奈と未来が声を合わせた。

「ああ。県内でも桁外れの実力を持つ、全国常連校さ。斎木とこの北伊予が、高校部門の全国大会を県内で独占してるんだ。そしてその裏にいるのが……」

「……?」

全員出終わったのか、指揮者らしき男性が指揮壇に登る。ガツシリ体系で、どこか立石先生のような渋さを感じる。

「裏にいるのが、島岡 しまおか 優 ゆう……」

「島岡 優? 誰?」

「立石先生の3つ先輩だ。ホルン専攻だったらしくて、詳しいことは良く知らないんだが、留学とかプロ楽団に入ってたこともあったらしい」

「へえ……すごいね」

「ああ。だが、気に入らないところが一つあるんだ」

「何?」

美奈にそう聞かれて、黙り込む泰徳。しばらく間が空いた後、こう答えた。

「合奏においては、何よりも先にホルンに目をつけていることだ……」

あの眼だ。匠を初めて見たときのあの眼と全く同じだ。また喧嘩をふっかけようとしているのか、はたまた試そうとしているのか。お家騒動があった後から泰徳の性格はすっかり変わり、何を考えているか分からなくなってしまった。しかし、その考えは少なくとも筋が通っているので心配ではない。ただ、2人は今後泰徳が、島岡に對してどのように出るか緊張していたのだった。

## 第64楽章 「あいつはホルンヲタクだ」(後書き)

1…メロディーを構成する設計図のようなものです。たいていはこれが元となって曲になっている場合が多く、国語で言えば文節です。

2…曲の最終部に付け加えられる曲想部分。長さは曲によって異なりますが、曲を終えるに当たって重要な役割を果たします。つづりは『Coda』。

文章中心になってしまいました。次回は会話(ていうか合奏描写)を入れていこうと考えております。

また、この楽章からHarmony Decade Agoより島岡を出しました。これから本格的に進めて行こうと思いますので、なにとぞよろしく願います♪

## 第65楽章 「やっぱりあいつはホルンヲタクだった」

中学校部門が無事終了し、次に斎木高等学校と北伊予高等学校の、いわば『最強タッグ』の演奏が始まるうとしていた。

この高等学校部門の指揮をとり行うのは、泰徳曰く立石先生の3つ先輩だと言う“島岡 優”。泰徳は、島岡の『絶対最初にホルンに目をつける』点は嫌っていたが、実力そのものは泰徳も認めていた。しかし、美奈や未来から見ると、そのような偏見の持ち主とは思えなかった。

「泰徳も頑固よねえ……」

「でも、泰徳の目と耳って相当いいから……」  
「侮れないのよ」

頷きあう2人。確かに、泰徳の人を見る目と分析力、聴力は相当なものがある。

「あ、始まるよ!」

盛大な拍手とともに、高校1年生の演奏が始まる。

高校1年生の演奏する曲は、田嶋 勉さんが作曲した『エアーズ』である。この曲は常套中学校の卒業式で演奏したため、泰徳たちも熟知しているつもりだった。しかし、高等学校ともなれば演奏のレベルも格段に違う。しかも斎木と北伊予とあれば、文句の言う隙間も無い。

「やっぱり上手いね……」

「うん……」

言葉を失う美奈と未来。泰徳はというと、島岡を凝視していた。と、不意に島岡が演奏を止めた。

「おい、伴奏。そこないなっとんねん」

問題は伴奏にあるようである。

「中音の伴奏だけでやってみい」

エアーズで中音域楽器の伴奏を担当するのは、トロンボーンとホルン、そしてテナーサクスのみである。やはり島岡は、ホルンではないが、ホルンを“含む”セクションを指摘した。そして「ホルン！ もっと柔らかい音でーへんか？」と問う。高校生も島岡の問いかけに必死に応えようとするが、なかなか島岡の理想には近づけなかったようで、クリニックは前半のみで終了してしまった。通しは1回も行われていない。

続いて高校2年生。アルメニアンダンス Part 1だ。この曲も常套中学校は演奏したことがあった。しかしこのアルメニアンダンス、しよっぱなからホルンが目立つ。それが仇となった。

「ホルン！ そももつと吼えんかい！！」  
島岡の怒声が飛ぶ。

「音程悪いがな！ どんな吹き方しとんねん！！」  
貶し方と言えば表現は悪くなってしまうが、指摘の仕方が尋常ではない。仮にも県内では『最強タッグ』の全国常連校として名を連ねる齋木高等学校と北伊予高等学校に、とてつもない怒声を次から次へと島岡は投げつける。これもまた、1回も通しが行われることなく終了した。退場していく部員たちの下唇は、噛み締められていた。

最後に残った高校3年生。此处こそは汚名返上と、張り切っている。彼らが演奏するのは、『K点を越えて』。1999年の課題曲4番であり、作曲したのは高橋伸哉<sup>たかはしののぶや</sup>さんだ。形式がマーチと言うこともあって、これまで指摘され続けたホルンは、裏拍に目をつけられた。

「表拍と裏拍だけやってみい」  
そう指示されて、担当する楽器が構えられる。そして指揮を振るところと4小節。

「あかん。話になれへん……」  
そう言って島岡は指揮棒<sup>タクト</sup>を指揮台の上に叩きつけた。

「吹奏楽のレベルが高い愛媛県の全国常連校2校が、一緒になつて演奏する言うから少しは期待したもの、それは間違つてた見たいやな。がっかりやわ！」

そう叫ぶと島岡は舞台を後にした。聴衆も啞然としている。

「…あれ？ 泰徳は？」

「……いない……！」

未来と美奈は、急いで泰徳を探していた。

その頃泰徳はというと、島岡の控え室の前で島岡を待っていた。

「誰や？」

島岡が問う。

「あんたなんかにな乗りたくねえな」

「なんやて?!」

「あんた、なぜホルンしか指摘しない？」

「ホルン専攻やったからや。文句あるか」

「それだけか？」

泰徳にそう聞かれ、島岡は少々戸惑った。少し間を空け、

「そうや」

と答える。そして続けた。

「ホルンがボロな学校は、所詮全国大会行つたつてたいしたこと無い。ホルンが出来てないのに、一流の演奏なんかでけへん。俺のいた楽団は、ホルンがしっかりしてたからあそこまで成長したんや。だからこそプロは凄いや！ホルンは曲が完璧に吹けたらそれでええんや!!」

険しい顔をしてそう言うつと、島岡はその場を去ろうとした。

「ちよつと待て！」

泰徳が止める。

「あんたは、楽団の核がホルンにあるとも言いたいのか？」

「そうや。ホルンが出来るから、楽団は成り立つんや」

「何を根拠に」

「今までの経験や。ホルンがきつちりしてれば、他の楽器はぼろくたつてええ。それがプロの世界や」

「よくそんなんデプロやつて行けたな」

「なんやてえ?!」

険しい島岡の顔が、さらに険しくなる。その様子を、未来と美奈は物陰から見ていた。

「ホルンしか見ようとしなないあんたの姿勢が、俺は気に食わない」

「やからどしたんや」

「合奏はアンサンブルのでっかいバージョンだ。そんなことくらいプロのあんたなら分かるだろ？」

「当然や。アンサンブルの基本はホルン。それがしっかりしてたらええんや」

「違うな」

「何がや!」

「そんなことも分かんねえのか! おっさん!!」

泰徳が攻撃に出た。美奈は止めようとしたが、未来がそれを止めた。「プロだからちつとは期待してたのに。そんな考え方だから、プロをたつた2ヶ月で辞める羽目になるんだよ! あんた、退団した本当の理由をしらねえな。知らぬが仏と言うが、本当にその通りだぜ! 立石先輩からアンサンブルについて学びなおしたほうがいいんじゃないねえのか?!」

島岡の腕に抱えられていたスコアが、バサツと落ちた。

「お前: 何でそのこと知つてんねん……」

島岡の顔が啞然とする。泰徳は言おうか迷つたが、切り出した。

「俺も一応プロの世界を知つてる人間だから……」

そう言つて、泰徳はその場を去つた。島岡は引きとめようとしたが、先ほどの言葉が凶星だったので、動けなかった。

「ちよつと! 立石先輩つてどういうことよ!」

「聞いての通りだ。島岡さんは、立石先生の先輩じゃなくて、後輩なんだよ」

「何で分かったの？」

「簡単さ。立石先生ほどの立派な顧問が、あんな先輩の下で育って  
いけるわけ無いもんな。プロに入ってたって、まだまだ勉強不足だっ  
たってことさ」

泰徳はふうつとため息をついて、未来に買ってもらった桃ジュース  
をひと飲みした。

## コラム No.4 「部員紹介 in 2006」

さあ、波乱の部活動紹介と合同講習会も終わり、正式に2006年度の常套中学校吹奏楽部が発足しました！ 新しい部員も迎え、ここにメンバー紹介したいと思います。

### …コンクールメンバー

♪常套中学校吹奏楽部員♪

コンダクター

### 【Conductor】

たていし

かずのり

○立石 和則

既婚。フルートを常套大学特音科で専門的に学ぶ。いくつもの学校を回ってきたため、教え子が常套中学校に来るのもしばしば。

クラリネット

### 【Clarinet】

しのみや

四之宮 香奈

拳動不審だが、口だけは達者な3年生。集中力が続かずいつもサボってばかり。ポジションは3rd。

ながの

長野 尚輝

なおき

男のくせに威勢が無いためか、周りからバカにされっぱなし。音楽は好きだが周りのレベルについていけず、どうすれば分らず頭を抱えている。3年生の2nd。

ながわ

中川 麻衣

まい

ギャル系の母親を持つ、ギャル系の3年生。自分勝手だが、やることはきちんとやる2nd吹き。

新羅にいらか 薪まき

おつちよこちよいだが、技術は確か。クラリネットパートのムードメーカーとして笑顔を振舞う。3年生のE クラリネット吹き。そしてパートリーダー

濱田はまだ 庄平しょうへい

Bas s Clarinet奏者。冗談が分かる人で、どんなに嫌なことがあっても、何時でも笑顔。コンクールメンバーになると決まってからバスクラを始めた。

重松しげまつ 美咲みさき

前年度のサマコンに刺激を受け、入部した2年生。技術はまだま  
だだが、先生曰く鍛え甲斐のある子らしい。今年から2ndに転向。

芳賀はが 薫子かあるこ

通称、かこ。その練習量はハンパなく、その成果も実り一番大切な3rdに配属された2年生。いかにもクラリネットと言った音色を出す。

大森おおもり 紀子のりこ

ただの憧れで入ったため、今は練習のきつさに耐えがなくなっている2年生。拍子抜けで、何を考えているか分からない。1st。

寺尾てらお 未久みく

今では珍しい、文武両道を目指した2年生。最近入部したばかりなので、ポジションは2nd。

宮川みやがわ 春香はるか

マイクラリネットをこの年で所持しているお嬢様。我儕だが、聞き分けがいいので意外と世話をしやすい。3rd。

原畑 理江 はらはた りえ

殆ど喋らない、寡黙な2年生。帰るときも1人で、いつも寂しうである。だが誰も話しかけることが出来ず、未だそのまんまである。1st。

○田中 利奈 たなか りな

今頃風の活発な女の子。最近では珍しく、第1志望のクラリネットで通過した1年生。1st。

○西垣 あや にしがき あや

小柄でクラリネットは初心者。しかし、3歳から習っていたと言うエレクトーンは、みごとに神の領域に達していると思われる。2nd。

○丹波 しほり たんば しほり

父親が数学教師だが、数学よりも国語が得意な1年生。その影響あつてか、漢字検定は準2級取得。3rd。

○喜安 未知加 きやす みちか

リーダー気質の強い1年生。小学校の頃は金管バンドで打楽器を担当。以前から懂れていたフルートを諦め、第3希望のクラリネットに転向。

フルート  
【Flute】

明神 まき みよつじん まき

どこにでもいる、普通の女の子。綺麗な音色と何か特技を持ちたいと言う好奇心からフルートを始めた。クラシックを始め、多彩なレパートリーを持つ3年生。

久保 彩 くぼ あや

ちよつとぼつちやり体系の、母性本能をくすぐりそうな3年生。  
バラード系の曲なら、ソロは全て彼女が引き受ける。

安田 佳代 やすだ かよ

ずば抜けた実力と技術力で1stにのし上がった2年生。何故か  
みんなから『佳代様』として親しまれているところがある。今年か  
らPiccoloに転向。

赤崎 なつ美 あかさき み

おつちよこちよいで挙動不審。人見知りが激しく、初対面の人と  
はこちらから話しかけないと決して近づこうとしない。音も静かな  
2年生。

東 育美 あづま いくみ

県内の進学高等学校にティンパニ奏者の姉が在籍中。頭がよく、  
定期試験ではいつも1桁台の2年生。頭が冴え、曲の分析力に優れ  
るので吹きこなすのは彼女が一番早い。2nd。

石丸 美優 いしまる みゆう

頭はいいのに結構な天然キャラの1年生。頑張り屋で、先輩にや  
って来いといわれた事は必ずやって来る正統派。しかし、暴力的な  
面も。

岡田 真由紀 おかだ まゆき

美優と幼馴染。この関係性も影響し、一緒にフルートを始めた1  
年生。美優とは正反对で、怠け癖の目立つ1年生。

サクソフォーン  
【Saxophone】

上野 齋  
うえの いづき

アルトサックス奏者の3年生。理江の音に憧れてサックス担当となった。今は理江の音を目標に練習を続ける。

河野 理沙  
こうの りさ

テナーサックス奏者の3年生。性格がハッキリしており、中途半端なものが嫌い。いつも学校から歩いて40分かけて登校する。

二神 桃  
ふたがみ もも

バリトンサックス兼テナーサックス奏者。たまに持ち替えるが主はバリトン。周りに影響されやすく、自分で決断する事が出来ない2年生。

浜口 愛  
はまぐち まな

口達者で自己中心的なアルトサックス奏者の2年生。彼女の我侭にはほとほと呆れるが、最近空気が読めるようになってきた。また、サックスの実力も僅かながらではあるが、伸びている。

津田 歩  
つだ あゆみ

テナーサックス奏者の2年生。世話を焼くのが大好きで、何でも最後まで面倒を見る。そのためか、自分のことはそっちのけ。

福田 倫子  
ふくだ のりこ

常套中学校吹奏楽部フルート吹きである泰子の下の子。姉に影響され、吹奏楽を始めた2年生。第1希望はフルートであったが、定員オーバーの為バリトンサックスを担当。

○越智 秋保  
おち あきは

サマーコンサートを聴いて、吹奏楽に憧れ入部。担当楽器はバリ

トンサックスだが、ソプラノサックスもこなす1年生。音楽センスはかなりのものがある。

○山本 真由 やまもと まゆ

常套中学校の吹奏楽部に入ったら、アルトサックスをやりたいと常に願っていた。今回、立石先生からの依頼でサックスを担当する1年生。愛気質あり。

【Trumpet ア・フレン・ペツェット】

久保 恵理子 くほ えりこ

1st吹きの3年生。見かけによらず大雑把で、他人のことはどうでもいい性格。ただ、困っている人を見かけると慌てふためく。

兵頭 麻耶 ひょうとう まや

小柄な割りにいい音を出す3年生。3rdを受け持ち、その期待に応えるように日々成長している。

小嶋 彩 こじま あや

2nd吹きの3年生。弄られキャラで、標的はいつも彼女に向けられている。が、彼女自身は悪く思っていないようである。

大西 里奈 おおにし りな

1st吹きの2年生。初心者らしく、まだそこまで発達していないヒヨつ子。だが音程感抜群で、特にペダルトーンを得意とする。

三原 静香 みはら しずか

2nd吹きの2年生。好奇心旺盛で、何にでも挑戦する明るい少女。小学校の頃金管バンドクラブに所属していた為か、音は結構いい。

白石 健吾 しらいし けんご

3rd担当の2年生。通称チョコワ。その根拠は未だに謎で、本人もこのあだ名の理由は分らないと言う。端的な性格で、細かいことは気にしない。

○長野 果歩 ながの かほ

クラリネット吹き、長野 尚樹の妹。兄の影響を受け、クラリネットを目指していたが定員オーバーでトランペットに転向した1年生。初心者。

○武田 秋保 たけだ あきほ

新人生歓迎会の演奏に心打たれ、即入部を決意。初心者の割りに芯のある音を出すので、将来有望である。

【Trombone】  
トロンボーン

森田 香夏子 もりた かなこ

1st担当。何でも1人で進めたがる。自己中心的なところがあり、周りからはちょっと嫌われている。

中崎 亜美 なかさき あみ

一時期泰徳の先輩として接してくれた3年生。2nd担当で、何事もポジティブに考える。部内一明るい部員。

新原 美帆 にいはら みほ

3rd担当の3年生。どこにでもいる普通の女子中学生だが、実は英検準1級を持つ超才女。他の教科も抜群に出来る。

高畑 樹里 たかばたけ じゅり

元は泰徳と同じトロンボーンパートで、一緒に活動していた。今年からバストロンボーンに転向。実は彼女から申請があった。

金井 利己 かない りこ

小学校は泰徳と同じで、幼稚園からの腐れ縁。トロンボーンを担当している。あだ名はなぜか「なつこちゃん」。

【ホルン】  
宮本 愛 みやもと あい

ちよつと自己中心的なところが目立つ、3年生。自分の技術を過信しているところがあり、変な自信がついている。そのためか、成長は全く見られない3rd。あろつことか、今年から1stに転向した。

福島 美咲 ふくしま みさき

何を考えているのか全く想像のつかない3年生。マイペースで、つかみ所が無い。初心者のおうで、合奏の時はいつも好奇心旺盛の4th吹き。

宮本 奈美子 みやもと なみこ

両親がコンビニを経営している。明るく素直なので、周りからの評判は結構いい2年生。ただ、高音域が苦手な1st吹き。

福富 茜 ふくとみ あかね

豊かな音色を出す将来見込みのある2年生の3rd吹き。拍子抜けする時も多いが、大事なおところではその役割をきちんと果たす。

○濱田 ちなみ はまだ はまだ

宇和島から転向してきた1年生。以前いた中学でトランペットを

していたこともあり、難なくホルンの音を出すことが出来た。

○山口 麗 やまぐち れい

元はトロンボーン吹きの1年生。低音域を得意とするため、暫定ポジションは4th。

ユーフォニアム  
【Euphonium】

高橋 美並 たかはし みなみ

リズム感覚ゼロから始めた超初心者。段々上手くなって入るが、千尋曰くまだまだだという。将来に期待がかかる3年生。

谷 未来 たに みき

小学校の頃、金管バンドに入っていた。その影響で基礎は出来ており、音色も悪くない。泰徳の家とは結構距離が近い。

○前田 瑠璃加 まえだ るりか

高知県出身。小学校の頃からユーフォニアムを続けているため、実力はそこそこある。たまに土佐弁が出ることがある。物静かな1年生。

【Tuba】 テューバ

佐々木 香織 ささき かおり

性格と同じおしとやかな音を出す、3年生の新星テューバ奏者。物静かで、友達と話すときにだけテンションが跳ね上がる。

竹林 泰徳 たけはやし やすのり

本小説の主人公。テューバを始め、吹奏楽は全くの初心者。入部当初はトロンボーンだったが、諸事情でテューバに異動。今はプロ

楽団に所属し、両立しながら頑張っている。

○永岡 沙希 ながおか さき

小学校時代に金管バンド部に所属していたが、担当した楽器は転々としている。珍しく、テューバを第1志望にしていた。暫定コンクールメンバー。

コントラバス  
【Contrabass】

中井 美奈 なかい みな

弦バス初体験の2年生。気が強く、口調にも少々トゲがある。が、周りからは評判がよく、とても気が利く少女。ピアノ演奏は神級。

○小島 かおり こじま

トランペット吹きである小島 彩の妹。とにかく元気で、肌は小麦色に焼けている。ただ、おながが弱く、冷たいものが苦手な1年生。

パーカッション  
【Percussion】

中尾 真実 なかお まみ

3年生仮部長。スネアドラム担当で、両親がPTA会長、副会長をそれぞれ務める。その為か彼女のやることには一切誰も口出しできず、部内一天狗になっている人物。3年を押しつけ、パートのトップに居座っている。

亀井 亜里沙 かめい ありさ

金属楽器担当の2年生。気が早く、先走って行動する事が多い。天然キャラで、回りを沸かせるムードメーカー的存在。

中島 理佐 なかしま りさ

小物楽器担当の2年生。楽器の扱いが物凄く上手く、体育館の端から端までトライアングルの一打を1分間響かす事が出来る。

○二宮 相見 にのみや あいみ

主に鳴り物を担当する1年生。病弱で、部活は休みがちだが、遅れたぶんは必ず取り戻そうとする努力家。

○松下 裕子 まつした ゆうこ

主に小物楽器を担当。リズム感はあるようで、裏打ちに関しては立石先生から完璧と言われるほどである。

## 第66楽章 「ホルンヲタクのカルチャーショック」

泰徳と島岡の言い合いの後、泰徳はすぐに教室を後にした。気になることがあるから、島岡を追うというのだ。当の泰徳はというと、職員室前で島岡と佇んでいた。

「…なんやねん」

「……いや、あの…さっきは言い過ぎてすみませんでした…」  
素直に謝る泰徳。

「ええねん…。俺も幼稚な対応してしもた」

「ええ……。実はそれなんですが…」

「????」

泰徳の言葉に、思わず疑問を持つ島岡。

「何か理由があるんじゃないんですか？ あの対応には」

さりげなくも意味深げな泰徳の言葉は、島岡をすぐに頷かせた。泰徳は立石先生に許可をもらい、カウンセリングルームに島岡を案内した。

「で…何かあったんですか？」

しばらく島岡は黙っていた。彼のトラウマであるから、なかなか話し出せないのも無理はない。5分くらいの沈黙が続き、島岡が口を開いた。

「実は、日本に帰ってきてからびっくりしたんや……」

泰徳はこの言葉を聞いて、ピンと来た。

「日本国内での、音楽性のレベルが低すぎるからですか？」

島岡は頷く。

「ああ。俺は高校卒業してから、バーゼル音楽院つちゅうところで勉強してたんや。周りは皆上手くて、俺に対してもいい刺激をもらった。せやけど、日本に帰ってきてからは、特に吹奏楽と言うジャンルに対しては愕然としたんや」

「でも、高校時代は吹奏楽部に入ってたんですよ？」

「ああ。けど、あの時代と今の吹奏楽は全く違うんや。なんかこう、まっしぐら過ぎるというか、何かにとらわれてる感があるねん」

「それは多分、コンクールの影響でしょうね」

泰徳がボソツと言った。泰徳は続ける。

「島岡さんの時代のコンクールは、皆音楽を楽しんでいたと思います。デイスコブームの影響もあって、今では『え、これ課題曲?!』みたいなのもありましたし。でも今は違うんです。全国大会に出場する、つまり、普門館の舞台に立つことが今の吹奏楽経験者の目標になってしまっているんです。だから、今の時代に吹奏楽をやっている人は、技術ばかりに目が行って、本質には目が向かない。あなたには、分かりますよね?」

「『音楽を楽しむこと』……」

「そうです。島岡さんは昭和時代を生きた人だからこそ、音楽の本質に見入って、プロにまでなった。天下のベルリンフィルに入ったにもかかわらず、2、3年で姿をくらませてしまったのは、音楽を楽しむことが出来る吹奏楽経験者を増やしたかったから。だからこそ、今回の計画を企画したんですよね。先輩である立石先生と」

「でも、俺は絶対ホルンに逃げてしまう癖があるねん。やから俺は反対したんだけど……」

「だから合奏中、あれだけホルンを指摘してたんですね。それは皆が持っている癖です。専門的にやってる楽器を指摘するのは、別に不思議じゃない。あなたの場合は、それが少しややこしいだけ」

「……………」

島岡が何も答えられないのは、恥ずかしいからでも、悔しいからでもない。泰徳の言っていることが当たりすぎて、怖いのだ。

「何でそこまで…見通せるんや?」

「僕も、同じ体験をしたことがあるからです…」

しばらく間をおいて、泰徳が答えた。

「島岡さんと理由は違いますが、中学1年のときにちょっとしたいざごさを起こしてしましまして……。今となってはもう笑い話です

けどね」

そう言つて、泰徳は軽快に笑つた。

「あなたは、あんな対応をする人ではないはずですよ。もっとすごい力を秘めている。それこそ、本物の『音楽家』。そう、あなたは本物の音楽家の1人なんですよ」

「でも……」

「皆分かつてますよ。あなたがああいう人じゃないってこと。だって、オーラが違いますから。僕も最初見たときにはびっくりしました。『本物だ』と思いましたよ」

島岡は動こうとしない。島岡のプライドが許さないのだ。島岡は、自分にとっても厳しいが、他人にも厳しい一面がある。と言っても、『自分に出来て、あなたにできないはずはない』ということであるのだが、島岡はそれが裏目に出そうで怖いのだ。泰徳もその気持ちには十分分かつていたので、急がすつもりは無かった。

「まだ……」

島岡が口を開く。

「何ですか？」

「まだ生徒の皆は、残ってるかな？」

「どうでしょうねえ。あ、でも高等学校2校の顧問の先生は言つてましたよ。『彼はあんな人間じゃない。もっとすばらしい力を持っているのに。緊張したのかな』って。部員たちも大きく頷いてました」

その後、泰徳はひと言、付け足した。

「今なら、まだ間に合いますよ」

そう言つと、座っていた島岡が急に立ち上がり、

「もう一回、やって貰えないか先輩と高校の人たちに頼んでみる」  
と言つて、カウンセリングルームを後にした。泰徳は部屋を片付けながら、

「これって一種のカルチャーショックかな……」  
とつぶやいた。

## 第67楽章 「名譽挽回！ ホルン奏者・島岡 優」

その後島岡は、立石先生と担当した2校の顧問、部員に謝罪した上で、もう一度クリニックをさせてもらえないかと問うと、2校とも快諾してくれた。都合もあり、時間が少ないので、課題曲をクリニックすることになった。幸いにも、2校はどちらも課題曲1番『架空の伝説のための前奏曲』を演奏予定なので、スコアを立石先生から借りて、クリニックが開始された。客席にはもちろん、中学生がいる。

「それじゃ、始めよか」

島岡が指揮棒を振る。

最初のシロフォンとウッドブロックは、ぴたりと息を合わせなければ大きな原点対象になりかねない。島岡は、まずそこを重点的にクリニックした。

「そのシロフォンとブロックは、互いを見ながらやって。それと俺の棒を見て、休符を感じて」

このひと言だけで、冒頭は随分そろうようになった。泰徳を始め、大多数の人々が、島岡の指導力に感嘆する。

主題のトランペットソロは、斎木高等学校が担当している。跳躍進行が多いゆえに失敗しやすいが、ここでも島岡の指導力がものを言う。

「ここのトランペットソロは、跳躍進行が多い。ここで役に立つのがリップスラーと言う練習だが、ここのソロをスラーで練習したところがあるか？」

この島岡の問いに、ソロを担当した女子生徒は、ノーと答えた。

「一度スラーでやってみて、それからタンギングで。今はもうやらなくていいけど、そういう練習を心がけてみて。これは、ここのラッパと同じメロディーを受け持つほかの楽器にもいえる。特にホル

ンはマウスピースが小さいから、より練習が必要だ」

島岡に言われたことを、スラスラと楽譜にメモしていく後輩たち。島岡も劣らず、自分の注意したところは付箋に書き留め、スコアに貼り付けている。

中間部。木管の美しいメロディーにあわせて、ユーフォニアムが美しいオブリガートを奏でている。しかし、島岡は妥協しなかった。「その木管は、3つ目と6つ目がちょっと短い。休符が入るからと言って気を抜くと、バランスがめちゃくちゃになってしまう。もう一回、音価を意識して」

2回目には、クラリネットの音がとりわけ太く感じられた。島岡に、ユーフォニアムはそのままの音量でいいと指示されたので音量は変わっていないが、曲想ががらりと変わった。それにつづくホルンのオブリガートは、

「タンギングを意識して。タンギングのときに顎が動くと、どうしても音がぼやけるから」

との指示があった。ホルンを専門とする島岡が言うのだから間違いないと、特にホルン奏者は般若の形相で合奏に望んでいる。

再現部では、1回目の主題とはまた違ったテーマを提示するように島岡は指示した。どんな微妙な違いでもいいから聞かせてみると、島岡は棒を振った。それぞれが個性のある音を出して、それを1まとまりにしようとする島岡の姿は、まさに雄姿だった。

「6連符、もっと正確に！！」

ラストスパートに差し掛かり、島岡も汗が絶えなくなっていた。そしてクリニックが終わったと同時に、どこかしら『ブラボー！！』という声が島岡の耳元に届いた。それは紛れも無く、泰徳だった。

クリニック終了後、今度は島岡が泰徳を呼び出した。

「今日は色々が悪かったな」

「いえ。誤解も解けたようですし、何より島岡さんの演奏が聞けて嬉しかったです」

「やめろ、照れるだろ」

そう言つて島岡は、泰徳に1枚のCDを手渡した。

「？ 何ですか、これ」

「俺がウィーンフィルにいた頃の演奏だ」

そう言われて、泰徳はCDのパッケージをくると裏返した。そこには、『L・V・ベートーヴェン：交響曲第9番 「合唱付き」』と書かれていた。

「俺がウィーンフィルにいた頃の演奏であり、これが最後の演奏だ……」

島岡は哀しげにそう呟いた。

「これから…どうするんですか？」

「どっか入れる楽団を探してみるよ。またホルンが吹きたくなつた」  
そう言つて島岡は笑つた。

「きつと、また名演を聞かせてくれるんでしょうね」

「さあ、それは分からへんな。でも、ここにいる皆が音楽を愛している限り、俺はホルンを吹き続けるつもりさ」

「期待してますよ」

「ああ。そろそろ飛行機の時間だから」

「また、いつでも遊びに来てください！」

泰徳がそう叫ぶと、島岡はVサインした。そして、その場を離れた。

「島岡さん、やっぱりいい人だつたね！」

「中井！」

「私も、ああいう人になりたいな」

泰徳と美奈は、立石先生の車に乗り込む島岡の姿を、感謝の面持ちで見つめていた。

## 第68楽章 「不安 < ある意味殺意」

5月末日。合奏を終え、立石先生が指揮台に乗り話している。どうやら2週間後に控えた歓迎セレモニーのことについてのようだ。

歓迎セレモニーとは、この日からちょうど2週間後に『日本丸』

という自衛隊の船（といっても帆船だが）が、三津から少し離れた高浜港に立ち寄ると言う話が持ち上がった。その際、近くに立つ高浜中学校から、『ぜひ、その際の演奏をしていただきたい』と常套中学校に依頼があつたのだ。本来であれば高浜中学校が演奏するべきなのだが、あいにく高浜中学校には吹奏楽部が存在しない。そういう事情もあつて、常套中学校に依頼が来たわけである。

「さて、その際に演奏する曲だが、今からその楽譜を配る」

立石先生はそう言い、部長の中尾<sup>なかお</sup>真実<sup>まみ</sup>に楽譜を配布するように指示をした。それぞれのパートに楽譜が回ってくる。

「え……」

楽譜をもらうなり、泰徳が言葉を失った。

「どうしたの？」

斜め右後ろに座っている未来が問う。

「いや、難しそうだなと思って」

「難しい?! どこが? 楽譜白いじゃない。一部を除いて」

「ああ、楽譜は比較的簡単なんだが、作曲者がな……」

「作曲者……ってスミスさん？」

「ああ」

「どこが難しいのよ」

「ま、まあ、先生がこれから曲流してくれると思うから、聴いてみな」

「え? うん……」

泰徳の言ったとおり、直後に立石先生は、この楽譜の参考音源を流すと言って、曲を流し始めた。

静かな波の音。そこに引き継がれる、ホルンとトランペットの見事なまでの二重奏<sup>デュエット</sup>。低音楽器がそれを支え、いきなりクレシェンドの指示。厳かな八分音符の裏で、ユーフォニアムとホルンが吼えている。なんと鎖も入っているではないか、と始めてこの曲を聴いた人は驚くことが多い。少々<sup>リタルダント</sup>の<sup>ヴェ</sup>riteがかかり、楽譜上は2分の2拍子へと変わる。ここからのメロディーは、木管楽器に託される。ところどころに金管楽器のファンファーレが垣間見え、しばらくの後には低音楽器に対して虐めのような3連符が続く。このフレーズは皮肉にも、木管楽器がメロディーを奏でている裏でフルートとピッコロ、クラリネットが演奏していたパートと全く同じなのである。

第2主題。変わって静かな雰囲気になるこの楽章は、ティンパニの特殊奏法が特徴であり、鯨の鳴き声<sup>モチーフ</sup>を題材にしたとされる。そしてこの一番の聴き所は、なんとと言ってもオーボエのソロである。しかし常套中学校にはダブルリードが無いので、アルトサクソで代用することにした。ソロはもちろん、愛が担当する。

再現部。嫌がらせとも思えるユーフォニアムとホルンの勇ましいファンファーレでこの楽章は開始される。第1フレーズが終了すると、低音楽器が参加する。あろうことか低音楽器は、10、7連符を連続でこなさなければいけない。しかし、楽譜がア・ラ・ブレーヴであるため、テューバ譜に記譜されている16分音符も、ダブルタンギングを使わなければ追いつかない。第1主題の木管のメロディーにトランペット、そしてトロンボーンとユーフォニアムが勇ましくオブリガートを演奏する。巧みなグリッサンド技術が必要とされるほか、ある程度の音域も必要とされるのだ。ホルンに至っては、殺人と言っても過言ではない。テューバ譜の最高音は、ハイAである。さんざん奏者を苦しめた挙句、冒頭と同様のメロディーのコーダ形式で曲を終えるのだ。

「ま、こんな感じだ」

立石先生が何食わぬ顔で涼しく言うものだから、部員たちは僅かな殺意を覚えた。こんな曲を2週間で仕上げると言うのか。無理はない。さつきまで笑っていた未来の顔も、糸で引つ張られたように引きつっている。紹介し遅れたが、今回泰徳たちが2週間で仕上げなければならぬ曲というのは、SONGS OF SAILOR AND SEA。日本語で言う『海の男たちの歌』である。

この曲を作曲したのは、ロバート・W・スミス氏。この曲と同じ鎖を使用する『伝説のアイランド』でも有名な作曲家であり、『大地と火と水と空の歌』や『天空への挑戦』などなど、とにかく彼の作品はホルンが大活躍する。そして曲自体のレベルが高い。しかし、立石先生に言わせれば、この『海の男たちの歌』はスミスの作品の中でも、簡単な方らしい。

「すまないが、この曲を2週間で仕上げてもらいたい。本番の会場は、高浜港。海のまん前で演奏する。潮風に当たるので、十分楽器の手入れはしておくように。」

そう言って立石先生は去った。

「これ、2週間でやるの？」

「みたいだな……」

「泰徳の顔がこわばるなんてなかなか無いわよ」

美奈が言う。その言い方があまりにもぶっきらぼうなので、美奈もよほどの焦りを感じているんだろうと未来は思った。

「楽譜自体はそこまで難しいことは無いが、それほど音作りがなあ

……」

「もろに出ちやうもんね」

「2週間。長いようで短いのよねえ……」

美奈は深いため息をついた。新チーム発足して以来の最大の壁に早くもぶつかってしまった常套中学校吹奏楽部。立石先生は、今年の常套中学校吹奏楽部の力を試そうとしているということとは、ここだ

けの話である。

## 第68楽章 「不安 < ある意味殺意」(後書き)

ここからのお話の題材にもなる『海の男たちの歌』は、『SAKURA WINDS』の著者であるAsker様より提案していただいたもので、これを基礎として話を書くと言うお題小説です。ただし、このブラス魂シリーズにおいては、事実にあつたことを上手く組み替えているだけです。ストーリー上はなんら影響ありません。

また、『海の男たちの歌』をキーワードに、他の作者様数名も作品を書かれているとの事なので、一度探してみることをお勧めします。なお、高浜中学校はこの小説上の架空の設定であり、実在するものとは一切関係ありません。

## 第69楽章 「今度は何だよ！」

5月もあと数えるほどで終わってしまう。日も少しずつ長くなり、春独特の暖かさ夏へと変わりつつあった。

先日新譜をもらったばかりの常套中学校吹奏楽部だったが、あるうことが、今日この日は立石先生がコンクールの自由曲を配ると言い出したのだ。2週間で『海の男たちの歌』を仕上げなければいけない矢先に、コンクール自由曲をお披露目されたのだった。これには部員全員からブーイングが殺到した。立石先生も悪いとは思いつつ、「6月が始まるんだから」と、部員たちを説得した。

「皆にはすまないと思うが、もうこの時期だ。そろそろ自由曲の練習をしないと、まずい。今から楽譜を配り、カットを説明する。後、そのカットと全く同じ演奏を聴くので、よろしく」

立石先生はそう言うのと、楽譜を配り始めた。泰徳たちも楽譜を手にする。

「『Daphnis et Chloé』？ 何よ、これ」

見慣れない外国語に、未来が頭を抱える。

「バレエ音楽である、『ダフニスとクロエ』のことさ。第2組曲だな、これ」

「バレエ音楽するの？ ハープ要るんじゃない？」

「ああ。だと思う」

「でもうちには無いよね」

「ある方が稀さ。ピアノで代用するだろ」

泰徳が淡々と話す。

「楽譜は行き渡ったか？ 今からカットを説明するから、筆記用具を準備して」

カットとは、原曲を違和感無く省き、つなぎ合わせる作業のことで、コンクールの場合は課題曲＋自由曲が12分と設定されているため、課題曲の演奏時間も逆算して、その時間内に収めなければならない。

通常は著作権に引つかかるのだが、楽曲においては、『作曲者が死亡してから30年以内』が著作権の有効期限とされている。これを作曲したM・ラヴェルは1937年に亡くなっているので、没後69年になるため問題は無い。

カットが発表され、部員たちはそれぞれ楽譜にメモ書きする。次々と伝達されるカット法に、逐次ついていく部員たち。書くほうのスピードもハンパではない。

「では、これから演奏を聴いてもらう。過去数年前の演奏だが、なかなかの好演だ。小節番号は後から各自でつけて置くように」  
立石先生はそう言い、DVDを再生した。吹奏楽の演奏のようだ。

今回の全日本吹奏楽コンクールの自由曲に立石先生が選曲した『ダフニスとクロエ 第2組曲』は、フランスの作曲家であるM・ラヴェルによるものである。ムソルグスキー作曲の『展覧会の絵』の編曲に携わった人物としても大変有名であり、実はこのダフニスとクロエの第2組曲は、『バレエ音楽 ダフニスとクロエ』という3部構成の曲からラヴェル自身が抜粋した組曲であり、正規ではない第1組曲も同様である。ダフニスとクロエの全曲演奏時間は、約1時間。今回立石先生が抜粋したのは、第1楽章の『夜明け』、そして最終楽章となる『全員の踊り』であった。

『夜明け』は、ゆっくりとしたテンポ（楽譜表記は4分音符 $\text{♩}$ 40である）の中で曲が進む。テューバにはミュートの指示があり、中低音がメロディーを最初は奏でる。裏では木管楽器が12連符を演奏し、徐々に音楽が盛り上がる。この曲で特徴的なのは、楽器が擬声的な役割をしていることである。途中、ピッコロとフルートがソロを奏でるのだが、それは夜明けに鳴く小鳥を連想させるのだ。そして盛り上がったからはそのままの勢いで進むのではなく、いったん音量がデクレシェンドによって収まる。

『全員の踊り』は一転して、特に木管楽器に超絶技巧が求められる楽章となる。4分の5拍子により進む音楽は、E クラリネットのメロディーが特徴的である。しかもそのメロディーが変奏曲的に他の楽器によって引き継がれていく点も面白い。途中3拍子になるのだが、ここは直管楽器がハイB をかましてくれる。再び5拍子に戻り、フィニッシュは3拍子のaccelerando（1）で終了する。

「とまあ、こんな感じだ」

曲を聴き終え、デツキの電源を切る立石先生。部員たちはずっと俯いている。演奏が感動したのではなく（それも少しはあったが）、立石先生に不満を抱いているわけでもなく、この楽譜を吹きこなせるかが不安だったのだ。特に木管楽器は、生きる屍となっている。

「今は海の男たちの歌を優先的に練習してくれ。このダフニスとクロエに関しては、木管楽器のみオーディションを行う。日程は追って連絡するので、よろしく」

立石先生はその後、部員たちを解散させた。

「結構な大曲じゃねえか」

「そうね…。吹ききれるかしら」

「分かんない。普段は楽譜真っ白な私たちも、これだもんね…」

そう言う美奈の楽譜は、グリッサンドの指示が要所要所にちりばめられていた。

「すごい楽譜…。チューバも最初メロディーでしょ？」

「ああ」

「ミュートだったよね。あるの？」

「いや、無いと思う」

「じゃあどうするの？」

「分かんねえ。チューバのベルはでかいし、ホルンみたいにゲシュトップ（2）出来るわけでも無い…」

「じゃあそのまんまかな、チューバ」

「たぶんな」

「未来はえらく余裕ね」

「そんなこと無いわよ！」

焦る未来。未来は楽譜を美奈に渡した。

「全然余裕じゃないってば！ 全員の踊りなんか吹けるかって話なのよ！！ 大体……」

「分かった！ 言いたいことはよく分かった！！」

未来が暴走気味になりかけたところで、美奈がストップをかけた。未来の楽譜を見て、未来を一瞬でも侮った自分をバカだと思ったのだ。

「ま、頑張るしかないって。焦っても仕方ないだろ」

「そうね、気楽に行こう！」

「賛成！！」

美奈と未来はそう言いつつ、不安はかき消せずにいた。

## 第69楽章 「今度は何だよ！」（後書き）

1…だんだん早く。正規のダフニスとクロエではこんな指示は無かったはずですが、顧問の指示で書き足していました（笑）

2…正式名称Gestopft奏法。<sup>ゲシュトツプ</sup>ホルンの特殊奏法の1つで、ベルの中で楽器を支えている右手を、ベルの排気口に覆いかぶさるようにしてベルを塞ぎ、ミュートと同じ役割をさせる奏法です。奏者の負担を軽減するため、ゲシュトツプミュートによる奏法も可能であり、楽譜にきちんと指示が書いてあります。使い方によってはミュートを忘れたときや、ミュートをはめる時間が稼げないときに有効です。ただし多少とも音色の差は出てしまうので、なるべく本物を使いましょうね」

## 第70楽章 「ニューフェイスの裏」

『海の男たちの歌』の楽譜が配られて、ちょうど一週間経った。本番まであと1週間と迫ったのに、なかなか合奏が形にならない。もどかしさもある反面、こう吹けばいいのか、という発見もありで、合奏をしながらその曲の形は少しずつ定まってきた。実際、一日の合奏が終われば、その日最初の曲と先ほどの曲とでは、全然違うのだ。

実はこの日、松山市立<sup>さんぜんじ</sup>斬善事<sup>たけふじ</sup>中学校という学校が常套中学校に見学に来ていた。顧問の武藤<sup>たけふじ</sup> 美晴<sup>みはる</sup>（男である）先生と、女生徒が5人。それに茶色いメガネをかけた瀬川<sup>せがわ</sup>という男までくっついていて、スタジオジブリの某アニメキャラクター（悪役）にそっくりだ。髪も金色に染めている。

「さて、今日からいよいよ仕上げに入る。自分の苦手とする場所を確認し、確実につぶしていくように」

「はい！」

あれだけ急な願いだったにもかかわらず、部員たちは立石先生についていこうとしている。これこそ本物の『信頼関係』だと思った。

「頭から通すが、打楽器は音量に注意して」

「はい」

冒頭部分の打楽器は、波の音を表現するものと、鐘の2種類があるが、これらの楽器とメロディー側とのバランスの僅かな違いでも、音楽がガラッと変わってしまう。立石先生はまず、此处に注意を置いたのだった。

・  
・

先ほどから合奏を閲覧している斬善事中学校。武藤先生はずっと合奏を聴きながらスコアにメモをし、生徒は椅子に座って聴いてい

るのだが、どうも不満そうな女生徒が1人、真ん中に座っている。そして瀬川という男は、あくびをしながら足を組んでいた。

今は休憩時間。Bassパートは固まって、色々と話していた。

「何で来たのかな？」

「見学だろ？」

「そうかなあ…。そうとは思えないのよねえ」

そう言いながら、美奈は顎をさする。

「何で？」

「だって、あの瀬川先生。どこの誰かも分からないのよ」

「でも、武藤先生の知り合いかもよ」

「うーん…。納得いかないなあ」

「納得いかないといえば」

急に泰徳が、思い出したように言う。

「合奏のときに真ん中に座ってたあの女子生徒。気に食わねえ」

「どうかしたの？」

「見学の態度さ」

「あ、そういうえば、横柄な態度だったわね」

中途半端が嫌いな美奈が、声を荒げた。

「いくら見学に来たからとはいえ、あの見学の仕方は無いと思うわ」と、美奈は鼻腔を膨らませた。

・  
・

合奏終了後、部活が終了するまで、斬善事中学校の見学生徒をこちら側で世話することにした。トランペットに1人、クラリネットに2人、トロンボーンに1人、そして低音に1人。低音パートに来た女生徒は、あるうことかど真ん中でふんずり返っていたあの生徒だった。教室に入っても表情に変わりはない。

「えっと…何からしようか…」

人見知りの未来が、生徒に話しかける。それを見て、美奈も後押し

をした。

「まずは自己紹介じゃないの？ 初対面なんだし」

「あ、そ、そうか」

泰徳はこれを聞き、逃げたくなった。どうも自分の名前を自分で言うのと、照れくさくて仕方がなくなるのであった。

「私は中井 美奈。コントラバス担当です」

「谷 未来。ユーフォだよ」

「竹林 泰徳。チューバだ」

どうしても話し方がぶっきらぼうになる。泰徳の顔が、自然と少し赤くなった。それを聞いて女生徒は、

「相沢 あいざわ 真里菜 まりな。チューバです」

「へえ、君もチューバか」

泰徳が珍しく、自分から話しかけた。だが真里菜は、

「ええ。つてか、今時『チューバ』を『テューバ』って言う人いたんですね。超びっくり」

ご親切に皮肉を泰徳に吹っかけてきたのだ。泰徳がムツとする。

「でも、聴きに來たのが間違いでしたね。常套中学校に行くつて言うから、どんなすばらしい演奏が聴けるのかと思えば、この程度ですか」

真里菜の嘲笑まじりの皮肉は、まだまだ続く。

「去年全国大会に出場したのも、まぐれじゃないんですか？ だいたいあのローマの祭りで全国大会にいけること自体が不思議なんですよ」

ここまで来ると、さすがの未来や美奈も怒りの感情は抑えられない。顔に出てしまう。しかし真里菜は、それを煽り、逆なでするような発言を次々とする。

「あれ、顔が赤いですよ。図星ですか？ あー、そうなんですネ……。実は私、洞察力だけは地震があるんですよ。人の心理とかも読むの得意だし——」

美奈が手を出すかと思われたその時、泰徳が先に真里菜の胸倉をつ

かんだ。

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「ええ、本気ですけど。殴るんですか？」

「俺も出来ればそうしたい。顔の形がなくなるまでな」

「じゃあすれば良いじゃないですか」

「何い?!」

思わず手を出しそうになったが、やめた。この真里菜という少女、いや、斬善事中学校の見学生徒に何かしら一貫の“裏”があるように思えたからである。

「大体胸倉つかんでるんですよ？ 問題行為ですよ、それ」

泰徳は相手にしない。

「私女ですよ？ 女に暴力振るうのは最低だって、それくらい分かりますよね」

「女だから？ 俺は音楽をバカにする奴は、男だろうと女だろうと許さない」

「だったら、馬鹿にしなきゃ良いんですか？」

それを聞いて、泰徳は仕返しのごとく口攻めた。

「そんなことも分かんねえのか。やっぱ斬善事中だな。顧問がそんなに良い先生なのに。お前らみたいなカスにはもったいねえな」

「…顧問の悪口言ってますか」

「あ？ 聞こえねえな」

「顧問の悪口言って、楽しいんですか！」

「だったら今までのお前はどうぞ。俺たちをさんざん持て囃しითて。それはないんでねえの？」

そう言うと、泰徳は真里菜の胸倉からそっと手を離れた。

「何か裏があるんだろ。俺の見たところ、瀬川という男がおう。ま、それはともかくとして、もし今後あんたが音楽を馬鹿にするようなことがあれば、顔の原型は留めないと思っとけ」

泰徳の口調は相変わらず厳しい。

「じゃあ、俺トイレ行って来る」

そう言うと、泰徳はトイレに席をたった。未来と美奈は、まるで匠との大論争の場面が戻ってきたように感じていた。

「あの…」

真里菜が平穏な口調で口を開いた。

「竹林さんが戻ったら、話しても良いですか…？」

さっきまで2人の中に漲っていた怒りが、だんだんと収まっていた。

## 第70楽章 「ニューフェイスの裏」(後書き)

この楽章に登場している人物名・学校名ともに架空の設定です。実在のもの、そして人物とは全く関係はありません。

## 第71楽章 「七光り汚染」

泰徳がトイレから帰ってくると、B a s s パートの練習室が妙にしんみりとした空気だったので、泰徳は少し部屋に入るのをためらった。1年生たちは未来の指導の下練習させている。ちなみに、3年生は学年会議中だ。

「…どうした？」

「真里菜ちゃんが、泰徳に話したいことあるんだって」

「ふーん…」

楽器の手入れをしながら言う美奈の台詞が、何だか意味ありげに聞こえた。泰徳も、そっけない返事しか出来ないことを情けなく思った。

「で、話って何？」

泰徳はゆっくりと椅子に腰掛けた。

「すみませんでした…」

言い難そうに話す真里菜。相手が初対面なのにも関わらず、あれだけの醜態をさらしてしまったのだ。無理も無い。

「あの事はもういいからさ。理由はなしてくれね？」

泰徳は、自分で自身の心が優しくなっているのを感じた。真里菜もそれを察知したのか、ゆっくりと話し始めた。

「実は…瀬川先生は、今年のコンクールの審査員なんです」

「…！」

予想外の発言だった。動揺の気持ちは隠し切れないが、とりあえず話を続けることにした。

「それって、どういうとだよ？」

「審査員の先生が、うちの学校に来てレッスンしてくださってるんです」

「でも、それって瀬川が審査員だってわかってからだろ？」

「はい……」

「だったらそれ、違反行為だよな」

「そうなんです。だから私たちは全員反対したんですけど……」

「誰が提案したんだよ」

「副顧問です」

「副顧問？」

常套中学校の吹奏楽部は、顧問のみが在籍しており、副顧問がいな  
い。泰徳がそう尋ねるのも、無理は無かった。

「はい。私たちの学校には、顧問のほかにもう2人、顧問が出張や  
体調不良などで部活にこれない場合に、私たちを統率する役割を持  
った、いわばクラスの副学級委員長みたいなものです」

「ふーん……。で、何で副顧問が顧問よりしゃばってんの？ 話を  
聞く限りでは、『副』顧問だから発言力は正規の顧問と比べれば無  
いはずだけど」

「そうなんです、その副顧問の1人が理事長の姪っ子で……」

実は見学に来ていた松山市立斬善事中学校は、“学校法人 松山学  
園”が管轄する組織の一部であった。その松山学園を統帥する理事  
長：斬善事ざんぜんじ清孝きよたかは、今までも学校教育レポートの改ざんや、学校  
教育費の隠蔽いんぺいを行ってきたという、悪名高い人物だった。そのこと  
も影響してか、松山学園の入学数は年々減少傾向にあるという。

「入学者確保のために、唯一の実績を誇る吹奏楽部、つまり私たち  
を、どうしても四国大会に行かせて、有名にすると理事長が言い張  
るもので、姪っ子に当たる副顧問も相当やる気を出して、自分の裏  
に理事長がいることを棚に上げて、今に至っているんです。今日竹  
林さんに対して行ったあの醜態も、副顧問に指示されてやったこと  
です……」

「じゃあ、校長に訴えて飛ばして貰えば？」

「駄目です。理事長は校長よりも上のお方。とても逆らえないん  
です」

そう言う真里菜の表情は、まさに苦痛そのものだった。

「あの瀬川とか言う男、どうにかならないのか？」

「その瀬川先生がクセモノで、お金をくれれば何でもやります、みたいな人なんです。だから、四国大会にとりあえず行かせたい理事長側は、毎月振り込まなければならぬ学校費にその賄賂分を上乘せして、全校生徒に払わせてます。斬善事中学校だけでも900人はいますから、松山学園全体から取ったとすればものすごい大金です」

「ビッグ・トラップ  
大した罠じゃねえか……」

「すみません……。なんか陰険な学校ですよ……」

「いや、俺はそうは思わない」

思いがけない泰徳の言葉に、真里菜は泰徳を見つめた。

「生徒自体は言い人材だ。腐ってるのはお上のほうだ。そんなのに従わされている生徒に心から同情するよ……。話してくれてありがとう」

「いえ、こちらこそ……すみませんでした……！」

そう言うと、真里菜はうつすらと目に涙を浮かべて一礼した。そして武藤先生が迎えに来たので、斬善事中学校に帰っていった。

「ねえ、泰徳」

美奈が困惑した表情で問うた。

「どうするの……？ 相手はどんな手段を使っても全国大会に行くつもりよ」

「……………」

「そんな学校に負けたら、悔しいどころか腹が立つわ……！」

「よせ、中井。悪いのはあいつらじゃない」

「それは分かってるけど……！」

「大丈夫。方法はあるさ。1つだけな」

「1つだけ？」

「ああ」

泰徳はそれっきり、黙ってしまった。

「……どんな方法よ？」

なかなか話そうとしない泰徳に嫌気が差し、美奈側から問うた。

「…冷静になれよ。お前だったら分かるだろ？」

「わかんないわよ…」

「いや、分かる」

その静かなひと言には、いつもの泰徳の威厳があった。そして美奈は悟ったように、少しずつ口を開いた。

「もしかして……あいつ斬善事中に負けないようにするの……？」

「ああ」

即答だった。やはり、泰徳の考えていることは私たちとは違う。冗談だろ、と思い、泰徳をからかおうとしたが、その顔が既に真剣だったので、美奈は先ほどの言葉は本気だということを悟った。泰徳からは、いつも以上に近寄りがたいオーラが発せられているように思われた。

## 第72楽章 「情報収集 自身と知人と敵（かたき）と」

翌日、泰徳は部活が終わったあと、早めに帰宅して悠輔に電話した。

「あれ？ どうしたの、泰徳」

「ああ。ちょっと話したいことがあってさ」

「話したいこと？」

悠輔は、今は受験生である。ゆえに勉強の邪魔は出来ないと思っていたが、どうしても昨日の出来事は話しておきたかった。土地勘からしても悠輔の通っている明台中学校は斬善事中学校の近所であるし、真里菜が話していたようなことが事実なら、それはそれで危ない事態になりかねないからである。

「斬善事中学校って知ってるか？」

「斬善事？ ああ、知ってるよ」

悠輔が優しい声で応答する。

「実はそこ、コンクール出るらしいんだ」

実は斬善事中学校、今まで吹奏楽コンクールに出たことが無い。

「え、あそこも出るの？！」

「ああ」

案の定、悠輔は驚嘆の声を上げた。

「でもあそこはやばいよ……。理事長がさあ」

「昨日斬善事中学校の奴から聞いたよ。あくどいんだって？」

「詳しいことは分かんないけど、とにかくやり方がせこいんだ。斬善事中学校が、“学校法人 松山学園”の管轄にあることは、ししよ……泰徳も知ってるでしょ？」

「ああ」

悠輔が、泰徳を『師匠』と呼ばうとして、『泰徳』と言いなおした。悠輔が常套中学校を訪れてからと言うもの、未来や美奈からの質問攻めが尋常ではなかったため、あの時以来『師匠』と呼ばれること

を、泰徳は嫌っている。

「その松山学園のバックについてるのが、瀬川 政道（せがわ まさみち）っていう男なんだ」

「あの茶色いサングラスかけて、金髪のあいつか？」

「そうだよ。噂ではホルン奏者らしいけど、どこの楽団にも所属してないみたいだし、皆疑ってるんだ」

「へえ…。瀬川ってやつは金持ちなのか？」

「うーん…。そこらへんは匂うけど、多分そうじゃないかな」

「分かった、ありがとう」

泰徳は電話を切った。瀬川 政道。それがあの男の本当の名前……。ホルン奏者となれば、あの人に聞いてみるしかない。泰徳は再び受話器を取った。

「あ、もしもし？ 竹林ですけど。島岡さんですか？」

「おう、竹林君か。どないした？」

「いえ、お仕事でお忙しいのは分かってるんですが、どうしても聞きたいことがありますて…」

「別ええよ。ふーん…。竹林君が聞きたいことか」

どこか感慨深そうな島岡の返事は、泰徳を困惑させた。

「え…えーと…。瀬川 政道っていう人知ってますか？ ホルン奏者みたいなんですけど」

「おう、知ってるで」

即答した。

「本当ですか？！」

「ああ。フリーランスで活動してるけど、今どないしてんねやろ？

でもあの人癖あるからなあ。俺苦手やねん」

島岡が受話器の向こうで苦笑している。こう聞くと、同じ関西出身のサククス奏者である佐野 翔の通話とは天地ほどの差があるといったところだ。しかし、翔には翔なりのよさがあることは、泰徳も十分承知している。

「癖、ですか？」

「ああ。実はあの人、俺の3つ上の先輩やねん」

「そうなんですか？」

「うん。ちょうど入れ替わりで入学してんけど、それはもうすごい人やって言いよったわ」

「例えば…どんな？」

「そうやなあ……。自信過剰でナルシスト。とにかく嫌な奴って。すごい人やって言っても、そういう意味でのすごい人なんやけど」  
含み笑いしながら答える島岡。

「そういえば、竹林君でなんで瀬川さんのこと知ってるん？」

「えっと…。実は今、愛媛に来てまして……」

「愛媛に?! あー、そういえば審査員とか書いとったな、ホームページに」

「そうなんですよ」

「何か問題でもあるんか？」

「それが、審査員というのが発覚してから学校に指導しに行ってるんです」

「違法やん」

「はい。とある中学校で指導してるんですが、瀬川さんとその理事長が手を組んじゃったみたいで…」

「理事長? ってことは、どっかの管轄か」

「はい」

「ふーん…。それならちょっと心当たりがあんねんけど」

「心当たり……?」

「もしかしてそれ、斬善事中学校っていうところちゃう? “学校法人 松山学園”の」

ドンピシャだった。全く音楽の出来る人間というのは、洞察力が半端ではない。島岡の場合は体験談の中から出てくるときもあるだろうが、それにしても彼の推理力も秀でている。翔にしても、島岡にしても、驚くべき洞察力だ。もっぱら泰徳は、自分が音楽の出来る人間だとは思っていない。

「そうです」

「俺、あそこに1回仕事で行ったことあんなんだけど、見るからにやばそうな理事長やったで」

「そうなんですか？」

「ああ。賄賂くれるなら、なんでもやったるわーみたいな人やった」  
真里菜が言っていた事と一致している。

「実際俺が仕事で行ったときも、賄賂が働いてたんやけどな」

泰徳は言葉を失った。

「とにかく奴ー瀬川 政道ーは、勝つためなら手段を選ばん男や。

俺もそれを分かってから、あの人を先輩やと認めてない」

「……………」

「ま、とにかく頑張りや。今度はこっちから電話すつから」

そうして電話は切れた。『勝つためには手段を選ばない』。その島岡の言葉が、泰徳の脳裏に焼きついて離れようとしな

「理事長と瀬川、本気だ……」

泰徳は身震いし、iPodを手に取った。

### 第73楽章 「暴かれる裏」1

「いよいよ明日ね」

美奈が弁当を頬張りながら言った。そう、今日は『日本丸歓迎演奏会』の本番前日なのである。そのため1日練習になり、合奏も午前と午後の2部に分かれ、結構なハードスケジュールになっている。以下からは、そんなハードスケジュールの中での、昼休みの会話である。

「それよりも、あの瀬川って男は酷いわね」

「しかたないさ。あいつは指導者の風上にも置けないだろ」

「でも、斬善事の理事長も理事長よね」

未来が言う。

「どっから呼んだんだろうな、瀬川」

「さあ……？」

美奈と未来があわせて首をかしげる。先日、泰徳が悠輔や島岡から聞いた話を未来や美奈に話したところ、「やっぱりね、そんな感じだと思った」と、泰徳の予想に反して相槌を打ったのだった。

自分の学校の事情は、なかなか話せられることではない。それも不正の話となれば、余計に公に出すのは気が引けるだろう。美奈は真里菜の度胸に感心した。

「真里菜ちゃんもよく話したわよね」

「ほんとに。言いくいよね、自分の学校のことって」

「それほど追い詰められてんだろ、生徒は」

「たぶん不正がばれたら袋叩きモノかな？」

「さあ……？ 世間がどう判断するかは人それぞれだし、措置自体は吹奏楽連盟の理事長が決めるんじゃないの？」

「だろうな」

何しろ今回のようなケースは初めてなので、どのような措置が行われるかは、見当もつかなかった。吹奏楽経験が2年の泰徳たちに、

今後斬善事中学校がどうなるなかど、分からないのは当然の結果である。

「でも、斬善事中学校ってコンクール出れんのかな？」

サンドイッチを頬張りながら、未来がおもむろに言う。

「どういうこと？」

「だから、人数が規定なのかってことよ」

「あ、そういえば……」

「どうしたの？」

泰徳が何か有りげに言うので、美奈はお茶を飲もうとしたがペットボトルの飲み口を唇から離した。

「相沢が言ってたんだが、斬善事ってB部門で出てたらしいな」

「そうなの?!」

「ああ。武藤先生も言ってたから間違いねえよ」

「B部門ってことは、黒田先輩と一緒になんだ」

「そうなるな」

出来れば今ここで、匠に連絡を取って確認したい。だが、泰徳は携帯を持っていない上に、学校側が携帯の所持登校を禁止している。公衆電話という手もあるが、今は修理中だ。

「てことは、20人くらいはいるってこと？」

「ああ。だが、A部門で出るとなると、最低25人は必要になる、去年の3年生が引退した数も差し引かなきゃいけない」

「真里菜の話では、3年生は9人みたいよ」

「ってことは、斬善事中学校の今の吹奏楽部員は、少なくとも11人ってコトだ」

「じゃあ、A部門に出るにはあと14人必要ってことね」

「そうなるな。ただ、コンクールの時期から今にかけて、途中入部生もあるかもしれない。怖いのはそこだな」

泰徳が黙る。教室全体がシーンとなった。どんな手を使ってくるかわからない斬善事中学校に対して、常套中学校がどのように立ち向かうのか。これは生徒間だけでの問題では済まなくなってきた。

「そついえば…」

「？」

「松方中って今年からA部門だろ？」

「言ってたね」

「てことは、三つ巴三角関係の関係になるってことだな」

「どういうこと？」

未来が問うた。

「常套は、松方とはどちらかというと友好的関係にある。斬善事と常套は敵対だ。だが、同じB部門に出場していた松方の立場からすれば仲間も同然だ」

「どうして？」

「松方やつらの連中は斬善事中学校の本当の姿を知らない。表面上は仲良くしてるってだけで、斬善事からしてみれば猫だましにすぎないのさ。そういう意味では、常套と松方は敵対関係。つまり三つ巴三角関の関係係ってことだ」

「ふうーん」

あまりに話がややこしくなってきたので、未来は軽く流すことにした。だが、泰徳が言いたいことは少しだが理解できる。

「そうになったら、予選突破の枠が危ないじゃない」

美奈が叫ぶ。

「ああ。そうなるな」

愛媛県大会における吹奏楽コンクール中学校A部門の県大会突破の枠は、全部で6校である。

「斬善事中学校の賄賂が働いたとすれば、斬善事の県抜けは確実だ。そして最有力の北佐屋中学校、そして力をつけてきているであろう松方中学校。これで枠の半分は収まってしまう」

「じゃあ、残りの3つの中に私たちが入らなきゃ駄目ってこと？」

「ああ。県外には他にも強豪がいるから、それにも気をつけなきゃ駄目だしな」

「波乱過ぎない？」

「仕方ないさ。すべては斬善事中学校が仕組んだことだ」

未来と美奈、2人とも表情が冴えない。焦りなのか怒りなのか…。これは本人でも分らないことであつた。

「コンクールまであと約1ヶ月だ。斬善事がどう先手を打ってくるかが鍵じゃないかな」

「斬善事が全国行つたらどうする？」

「その時はその時よ。事実として受け止めるしかないんじゃない？結果は結果なんだから、いくら裏で汚い手を使ってようと私たちの知つたことじゃないわよ」

さすが美奈、大人の受け答えである。しかし美奈本人にも、少なからず動揺があつたのは間違いない。少なくとも、B a s s パートは抱えきれぬ不安を抱いたまま、『日本丸歓迎演奏会』の本番を迎えることになりそうだ。

## 第74楽章 「海の男たちの歌」

「次ティンパニ！ シロフォンは後々！！」

部長・中尾 真実・の声が、慌しく正面玄関に響き渡っている。

今日は、『日本丸歓迎演奏会』の本番である。今はまさしく打楽器と大型楽器をトラックに積み込んでいる最中であつた。それ以外の楽器はタクシーのトラックに積み込み、部員たちはそのタクシーに乗って高浜港まで足を運ぶ。

「バスドラ！ 足（１）先ね、足」

中尾の指示で、バスドラムの足から先に運ばれる。足と楽器を一緒に乗せてしまうと、大きな衝撃に耐え切れないことがあるのだ。問題の本体はと言うと、毛布を3枚敷いた上に横に置き、さらにその上から毛布を重ねる。そして紐で縛る。とても嚴重な装備だ。

「次、チューバ！」

常套中学校のチューバは、全部で3本。うち泰徳のマイ楽器がソフトケースなので、助手席に乗せることになっている。本来はハードケースを持って来るべきなのだが、Bassパートの教室が狭くなる上、4階から1階までハードケースを持って降りるのは徒労なので、泰徳はあえて持ってこなかった。ハードケース1つに2人の人間についてもらうのも、なんとなく迷惑な気がした。

「弦バス！」

2本の巨大なヴァイオリンが、トラックの中に横たわる。バスドラムがトラックの荷台の左側を占領しているため、コントラバスは縦に寝かせるしか方法がないのだ。右側に立てかけると、狭い荷台がさらに狭くなってしまう。

「よし、全部乗せたかな。中尾、あとはタクシーで」

「はい。皆、タクシー乗って！」

「はい！」

中尾の指示に部員たちは従い、立石先生は車に乗り、一足早く高浜

港へと急いだ。

・  
・

場所を高浜港ポートターミナルに移し、常套中学校吹奏楽部はチューニングに移った。この高浜港ポートターミナルで日本丸に対する式典が行われ、常套中学校は歓迎演奏として『海の男たちの歌』を演奏する。床にはレッドカーペットが敷かれ、いかにも式典と言う雰囲気醸している。

「日本丸が高浜港に到着するのは午前10：30だ。船員の人が入ってきて、アナウンスが流れたら演奏を開始する。今日は特別に日本丸の内部を見せてくれるそう。全員見て帰るように」  
「はい！」

今の時刻は9：30。およそ1時間の空きがあるが、部員たちはそれでも必死なので、1時間と言う長い時間をまるで5分を使い果たすかのようにチューニングする。

まもなく式典開催の時間が迫る。客席には予想以上に多くの客が押し寄せ、立ち見まで出ているほどだった。

「泰徳…」

美奈が弓で、泰徳の方をツンツンと突いた。

「何だよ？」

泰徳がそういうと、美奈は「あれ」と言っている方向を指した。

「なんだ、黒田先輩かよ」

「そうじゃなくて！」

改めて弓の指す方向を見る。そこには、瀬川と武藤、斬善事中学校の生徒数名が来ていた。

「また斬善事かよ…」

「真里菜ちゃんも来てるよ」

「どこに？」

「あそこ」

美奈が指した先には、私服姿の真里菜がいた。今日は相沢 真里菜個人として、常套中学校の演奏を聴きに来たようであった。その他には、確かに黒田 匠の姿もあった。そしてその横には、

「悠輔！！」

鈴木 悠輔もいた。泰徳の存在に気付いていたらしく、ずっとこちらを見てにつこり笑っている。

「こういう時って、鈴木先輩の笑顔も毒よね」

美奈が苦笑した。

「船の人が入ってくるって！」

愛がそう言ったので、泰徳たちはチューニングを止めた。愛の「船の人が入ってくるって！」ということに対し、美奈と泰徳が「船の人って…」と笑いあったのは、ここだけの話である。

・  
・

日本丸の船員の入場が終了した。男女合わせて総勢120名。船長服に身をまとった男性が2人と女性が1人。それ以外はすべて、セーラー服を着ている。

「それでは、松山市立常套中学校の皆さんより、歓迎の演奏をしていただきます！」

女性の元氣溢れるアナウンスにより、立石先生は指揮台に上った。演奏会場である高浜港ポートターミナルは無論ひな壇（2）などないので、直管楽器は立奏しなければならない。しかし、反響板は手作りではあるがきちんと主催側の好意で用意されていた。静かに立石先生のタクトが下ろされる。

静かな波の音。それに重なる、ホルンとトランペットのソリ。ホルンとトランペットは1人ずつなので、音程の狂いは一切許されない。このソリのフレーズの中で許されたブレスは1回のみ。そのつ

もりで演奏しると、立石先生は何回も指導した。鐘が鳴り、少しずつ楽器が増えてゆく。下を支えるBの伸ばしが、メロディーのにわかなクレシェンドに加え、厳粛な曲想を与える。迫るようなクレシェンドから、曲の始まりを告げる8分音符のトゥッティ（3）は、アインザッツ（4）からリリース（5）まで綺麗にそろっている。豪快にパーカッションがリズムを奏でる中で、ホルンとユーフォニアムがオブリガートを吼える。3拍子の四分音符により、曲想は一転、シンコペーションを基礎とするものに変わる。

クラリネットやサクスのメロディーの裏では、フルート・ピッコロが忙しく3連符を奏でている。しかし、その顔は決して必死ではなかった。トロンボーンがリズムを刻み、低音郡はこれでもかといわんばかりに下を支える。しかし、いやみのない音量であった。実は低音楽器といえど、決して暇な楽譜ばかりでない。この後に備える3連符の挙列は、腱鞘炎になってもおかしくないほどのフィンガリングなのである。しかもこの楽譜がコントラバスやテューバに割り当てられていることを考えると、やはりスミスの曲は難しいことが分かる。

中間部。ティンパニの特殊奏法によって表現される鯨の鳴き声は、何とも神秘的である。常套中学校では、ティンパニの皮にスーパーボールをこすりつけるという方法でこれを表現している。ウィンドチャイムがさらに神秘的さを表現したところで、愛のサクソフォンのソロに差し掛かってゆく。このソロを演奏するに当たって、愛は泰徳に依頼し、翔に何度か指導を試みてもらったことがある。音色・アンブシュア・楽器の構え方まで、隅々まで教えてくれた。入部当時はどうしようもなかった問題児だったが、今はそれなりの努力をしている。泰徳も、愛の陰の努力は知っていたから、彼女が今回の演奏に対してどんな不服を抱こうとも、彼女を責める気はなかった。哀愁ただようこのサクソフォンソロは、いろんな意味で、愛にしか表現できないと思った。

再現部に差し掛かるとき、クラベスという打ち木が重要な役割を

果たすのだが、この楽器は予想以上に音を響かせることが難しい。しかしパーカッションパートきつてのエース・中島<sup>なかしま</sup> 理佐<sup>りさ</sup>は、度重なる練習によってコツはつかんでいた。そんな彼女の両手には、無数のまめが出来ていたことは言うまでもない。ホルンが吼え、鎖も暴れ、曲の再現部を告げる。直管楽器の勇ましいファンファールによって、曲想は覆される。この裏では、実は低音郡が10連符や7連符などを吹きこなしている。幸いスケールとあまり変わらなかつたので支障はなかつたが、泰徳は決して妥協しなかつた。正確に連符が収まるまで諦めなかつたのだ。トロンボーン特有のポルタメント（6）がオブリガートに移る中、木管楽器はせわしく指を動かしている。しかし、そのメロディーは確かに聴こえるのだ。2週間でこれほどの出来とは考えられない。冒頭の8分音符のモチーフが再び現れ、パーカッションの演奏にも気合が入っている。立石先生たつての希望で、最後のリタルダンド（7）はあまりかけず、荒々しい形で曲を終えることとなった。

しかしこの日の演奏は、確かに聴衆の胸に届いていたようだ。斬善事中学校の連中はどうか分からないが、少なくとも真里菜は、スタンディングオーベーションをしたかったに違いない。あれほどの涙を流していたのだから。

## 第74楽章 「海の男たちの歌」(後書き)

1…バスドラムを支える、土台のこと。楽器立て。  
2…演奏体系の1つ。またはそのための道具。座席を前から見て階段状にすることで、ムラ無く丁寧に演奏することが出来る。どこにどのパートが乗るかは、指揮者次第。

3…奏者全員で演奏すること。複数の奏者が同じ音(1オクターヴ)を演奏することを、ユニゾンunisonと言います。

4…音の出だし。「――が揃う」と使います。

5…音の終わり方。もとはrelease「米」:「逃がす」という語で、音をどのように逃がすか、というところからきているか。

6…音と音との間に、不安定な音程が入ること。グリッサンド奏法の1種です。

7…だんだん遅く。正式表記:ritardando 略記:r  
it.

## 第75楽章 「身内の音楽鑑賞会」

『ピンポン!』

夏のコンクールも少しずつ近づいてきて、課題曲と自由曲の練習も本格化してきたこの時期だが、今日に限って常套中学校吹奏楽部は練習が休みであった。その昼下がり、泰徳の家のベルが鳴った。

「はい」

留守番をしていた泰徳は、ゆっくりとドアを開けた。その先には、未来と美奈の姿があった。

「どうしたんだよ」

「いや、単純に暇だったから……」

「嘘付け」

美奈の発した言葉に、すかさず泰徳がいちやもんをつけた。

「どーせお前らのコトだ。自由曲の原曲聞かせろって言いたいんだろ」

「うっ……それは……」

図星のようだった。実は美奈、去年もローマの祭りをやった際に泰徳の家に押しかけ、原曲のCDを聞かせてくれとせがんだのだった。その時の美奈はチルチェンセスと主顕祭だけでは飽き足らず、ローマの松の最終楽章である、“アッピア街道の松”を聴いて帰ったのだ。泰徳はその日仕事があったため、早めに切り上げたかったのだが、泰徳の性格上それはできなかった。何とか連絡を入れて遅刻して行ったのだが、まだ入団して間もなかった頃だったので、二度と同じことはしたくなかった。

「今日はダフクロ聞いたら帰るんだぞ」

「わかったわよ……」

渋々口を動かす美奈。

「とにかく上がれよ」

そう言って、泰徳は美奈と未来を家に上げた。

「ダフクロは確か……」

そう言いながら、泰徳はCDを探す。相変わらず膨大な量のCDである。以前泰徳の家を訪問したときよりも、数が増えているような気がした。

「あ、あつたあつた」

泰徳はCDをデッキにセットして、再生し始めた。

第1楽章の『夜明け』。pの指示で低音のメロディーから始まるこの楽章は、高音楽器が常に12連符を奏でる『隠れ超絶技巧（1）』の楽曲となっている。全体的にゆっくりの流れになっているこの楽章は、息の長さがミソとなる。常套中学校では、腹式呼吸の練習時間を増やし、ロングトーンとリップスラーを重点的に練習するようにと立石先生からの指令が出ていた。

「ねえ、泰徳」

未来が聞く。

「あ？」

手入れをしていた泰徳は、おのずと安っぽい返事をしてしまった。

「ミュートの指示書いてるよ」

「あー、この前言ってたやつな」

「結局どうするの？」

「吹くときに舌巻いてみることにした」

「巻き舌？」

「ちげえよ。吹くときに『R』の舌でやるってことだよ。RICH  
って言ってみ？」

泰徳に言われるがまま、言ってみる。

「最初舌が巻かれるだろ？」

「うん」

「その状態で吹くってことだ。タブーだけだな」

「へえ……。なかなか高度なことやるのね」

「そうでもねえよ」

そうこうしているうちに、第2楽章に移った。ここは演奏する予定がないので、第4楽章の『全員の踊り』にスキップする。

第4楽章『全員の踊り』は、ダフニスとクロエを交え、人々が火を囲んで踊り狂う場面が描かれている。基本5拍子で書かれているこの楽章は、ベースの取り方が意外と難しい。

「へえ、結構はじけてる…」

泰徳が用意した固焼きせんべいを頬張りながら美奈が言う。

「もつと遅い演奏もあるけど、俺はこのテンポが好きだ」

「私も。遅すぎるのってなんかね」

「でもまあ、それは指揮者のセンスだろうな」

泰徳は手にしたマウスピースを楽器に挿し、ひと吹き。

「相変わらずいい音ね」

「同感」

「な…なんだよ」

いきなりの褒め言葉に、テレを隠しきれない泰徳。2人はこんな泰徳を見ると、楽器の実力はピカイチでも、まだまだ子どもだな、とほっこりとした気持ちになる。

「なんでもない、ない！　すごい終わり方ね」

「ほんと！」

今まで5拍子だったのが、クライマックスに近くなると3拍子になる。さらに アッチェレランド accelerate の指示で熱狂的に終わる。

「すごい曲なのねー」

「私たち、頑張らなくちゃ！」

「うん！！」

3人は曲を聴き終わると、最初の約束どおり解散した。泰徳の顔はまだ赤かった。

## 第75楽章 「身内の音楽鑑賞会」 (後書き)

1 ∴ 僕の母校の中学校では、表向きは簡単そうだけど、裏ですごく難しいことをしなければならぬ曲をこっぴど呼んでいました。

## コラム No.5 「コラボキャラ大解剖！」

こんにちは。いつもプラス魂シリーズをご愛読いただき、感謝しております。作者のGT・spiraiです。実は最近、コラボ企画で共演していただいているキャラクター及び、キャラクターを提供してくださっている作者様の紹介を忘れていることに気がつきましたので、今回はこのためのページに当てたいと思います。また、未登場のキャラクターを登場させる際には、作者様に直接オファーさせていただきますので、その際はよろしくお願いいたします。

さて、プラス魂シリーズも連載を開始して、はや4年になります。コラボ企画が始まったのは、第1シリーズの後半から。もう結構な期間やってます。最近は、新たに2作品とのコラボも決定し、少しずつではありますが、実現しています。それでは、コラボ共演のキャラクターと作者様を紹介させていただきます。尚、コラボ予定のキャラクターも紹介していますので、まだ出てきていないキャラクターには、いつ出てくるか楽しみにしていただければ幸いです。

### 【奏（Kanade）：につくん様】

プラス魂シリーズとのコラボを、一番最初に提案してくださった作品と、著作者である作者様です。年の差約7つ。その差を感じさせない純愛と友情に溢れる作品のKanadeですが、音楽要素ももちろん満載の、読み応えばっちりな、まさにわたくしの師範となる作品であります。このKanadeから登場しているキャラクターは、以下の人たち。

#### ○佐野 翔の かける

泰徳と幼馴染の関係であり、泰徳の先輩。しかし、幼馴染のため泰徳は彼に対して敬語は全くといって良いほど使いません。だけれど、

彼の担当楽器であるサクソフォーンの腕前は、泰徳自身も認めているようです。

○朝倉 陽乃 あさくら ひなの

Kanadeにおけるヒロインであり、翔の彼女です。本作品には登場機会はほとんどありませんが、少し登場しただけでとっても強いインパクトを与えるのが、彼女の利点。だと思ってますw 純粋でまっすぐな女の子です。

○秦野 恵梨 はたの えり

七海高等学校でパーカッションを担当しています。美奈とピティナピアノ国際コンクールで出会って以来、深い関係になりました。後輩である美奈に相談を持ちかけることも少なくな、その信頼関係は確かなものがあるようです。

○加藤 愛美 かとう めぐみ

出会いはなんとブログ。未来とメッセージ交換をするうちに、メルアドを交換してメルトにもなるまでに発展。ユーフォニアムを経験していることから、そこが接点のようで、ユーフォニアムのことは2人とも相談しあう仲。

○本堂 拓真 ほんだう たくま

美並と恋愛関係にある、チューバ吹きです。そのアツアツぶりに、七海高校側も常套中学校側も直視できないほどの深い絆を築いているよう。ちなみに、先に恋に落ちたのは拓真君のほうです。

【SAKURA WINDS: Asker様】

プラス魂とのコラボ第2弾は、このSAKURA WINDS。作者のAsker様は、僕より1個上の先輩であり、僕と一緒にの元

テューバ奏者。今はファゴットを担当していらつしやいます。文章の表現も語彙があるからか、幅広いです。想像力あってこそ面白く読める作品がこのSAKURA WINDS。キャラクターの個性が強く、読んでいて飽きない作品です。

○黒田 匠 くろだ たくみ

桜田中央高等学校の吹奏楽部に在籍する、ユーフォニアム奏者です。泰徳と一緒に愛媛県出身ですが、中学校は松方出身。常套中学校と北佐屋中学校、斎木高等学校が合同で行った『第1回 Spring joined Concert』を聴きに行った際、終演後に泰徳と大論争をしました。互いに力を試したかったからゆえの論争であつたため、その後泰徳と彼は親友であり、メル友であり、ライバル関係にあります。

○倉橋 加奈子 くらはし かなこ

桜田北中学校出身。トロンボーンセクションのリーダーを務める、匠と交際の豪快な性格の少女です。ただ、人見知りがあるようで初対面の人とはしばらく距離を置くようなことも。意外にも中学校時代はバレー部で、トロンボーンは初心者。才能なのかも（笑）そんな底知れない才能を発揮する場面を、今後Asker様に期待ということww

○西掛 先斗 にしかけ さきと

桜田第一中学校から、桜田中央高等学校に進学した、テューバセクションのリーダーです。音感が鋭く、学生指揮に推薦されるほどの実力がありますが、泰徳の楽器の実力にはまだ及ばず。ただ、小さい頃からしていたと言っピアノは、さすがに泰徳も勝てないようで彼のほうが1枚上手です。

【ブルーの低音：綾野 琴子様】

コラボ企画第3弾の作品。低音パートを主体として、学生の部活動ライフを繊細に書いた小説です。新入部員の勧誘からコンクールさらには文化祭から引退まで、吹奏楽部の活動を事細かに日記帳のようなストーリー展開でとても読みやすいストーリー構成になっています。吹奏楽部員は必読！

鈴木 悠輔  
○鈴木 悠輔

テューバ奏者です。中学校は松山市立明台中学校出身。風の噂で泰徳のことを聞き、泰徳をストーリーカーして常套中学校までついてきたという黒い過去（笑）があります。大柄な体格とは裏腹に、とても穏やかな性格なので、初対面の人はいつもギャップを感じてしまうようです。彼のほうが泰徳より1歳上ですが、彼は泰徳のことを『師匠』と崇めています。

相原 真琴  
○相原 真琴

貴作の主人公です。人と関わることが全般的に苦手で、先輩に話しかけられたことで吹奏楽部に入部しました。楽器はコントラバス。どんな形で登場するかは、これから検討します（笑）

【Harmony A Decade Ago：チキンライス様】

コラボ企画4作目。コラボ企画の中で、今現在最新作の小説です。作者であるチキンライス様は、ホルンの経験者であり、さらに社会人バンドに復帰されたホルンのパイオニアです。多くの吹奏楽経験者が悩むホルンの仕組みや起源の説明を、コラムで分かりやすく解説。ホルンのことを知るなら、この小説をお勧めします。時代設定は少々古いものの、持ち前の関西弁トークでそれぞれのキャラクターの味を十分に引き出しています。ホルンセクションの怒涛の毎日が、タフに書き上げられている作品。

○ 島岡 優しまおか ゆう

概して言えば、タフな人です。ホルンの実力は随一で、泰徳が唯一敬語で話す相手でもあります。一時期プロとして活動していましたが、短期間で退団。その後常套中学校のホルンセクショントレーナーとして常套中学校を訪問し、その後もトレーナーとしての仕事は続けているようで、泰徳と連絡を取り合う仲に。今後はプロに復帰するのが注目される登場人物。

○ 為則 泰二ためのり たいじ

テューバ奏者ですが、初心者です。まだ未登場ですが、ただいま検討中です。柏原の巧妙な口術により、テューバを始めたようで、低い音にどうも魅力を感じたとか。時制はこちらが早いので、大人としての彼を出すつもりでいます。

## 第76楽章 「見知らぬあの子」

最近、セミが思い出したかのようにせわしく鳴き叫び始めた。そろそろ県大会に向けて本腰を入れて練習をしなければならないのに、容赦ない太陽の日照りによって、練習の意気が吸い取られていくのを、常套中学校吹奏楽部は実感していた。

「あぢい……」

「ほんと、暑いねえ……」

「早く合奏にならないかなあ」

Bassパートの教室。まだ朝の8:00というのに、室内温度は既に26度をゆうに超えていた。

「あんでこんなに暑いんだよう……」

泰徳は暑さに弱いのか、子音がはつきりと発音できていない。その横では瑠璃加が

「大丈夫ですか……？ 先輩……」

と、うちわで泰徳を扇いでいる。

しかし、こうも暑い時期となると、木管楽器も例外ではないが、金管楽器には地獄の季節となる。まず、常套中学校のような、古くからの楽器を使用している学校は、異常なまでに音程が上下する。そして、楽器を構えたときに火傷しかねない。未来は、泰徳の警告があつたにもかかわらず、炎天下の中庭に楽器を放置し、音程こそギリギリ狂わなかったものの、素手で触ったので指を軽くやけどした。

「しっかし、ほんと暑いわね……。かき氷食べたい」

美奈がタオルをぶんぶん振り回す。その下手にいた泰徳は、その風を遠慮なく受けさせていただいている。美奈と泰徳の前髪が、風によつてなびいている。

「こんな季節に力キ氷かよ……」

「こんな季節だからこそ食べるんじゃない」

もはや泰徳の思考回路もショート寸前だった。そんな中、元気だったのは永岡 沙希1人だけである。

「先輩、何やってるんですか？ 練習しないと」

「ああ…。分かってるけど、暑すぎてやる気しねえよ……」

「沙希ちゃん、よく立ってられるわねえ…」

「何言ってるんですか！ これが普通です」

沙希は胸を張った。

「こんな光景見たら、なんていうかな…あの子」

不意に美奈が言葉を漏らした。

「あの子って？」

「私の友達。ピアノ習ってて、ピティナで知り合ったの。今は中学校3年生よ」

「ふーん…。秦野さんと一緒の動機だな」

そう言って、泰徳はぬらしたタオルを目の上に乗せた。

「そうなの。でもその子は知り合いのお姉さんの応援に来たみたいで。その子に出会ってから15分後に、秦野先輩と知り合ったのよ」

「偶然って怖いんだな…」

そう言って泰徳は苦笑いした。

「ところで、名前は何て？」

「相原 あいば 真琴 まことよ」

「相原……」

泰徳は、タオルを乗せたまま名前を繰り返した。

「どうしたの？」

「いや、どこかで聞いたような名前でさ…。そういえば、引っ越し

先どこだった？」

「横浜よ」

「横浜ねえ」

「そう。運がよければ、泰徳ももう出会ってるかもね」

そう言つと、泰徳に向かって微笑を残し、練習に戻っていった。泰徳は、美奈の口からこぼれた『相原 真琴』という名前が耳から離

れなかった。

「ほら、泰徳も練習しないと」

未来が泰徳を催促する。

「あ……ああ」

そう返事はしてみるものの、やはり気になる名前だ。美奈の言っていた通り、どこかで既に出会っているのかもしれない。

「泰徳？」

普段は練習まっしぐらな泰徳が、なかなか練習しないことを疑問に思った未来が、泰徳の顔を覗き込む。しかし泰徳は、

「相原、相原……」

と呟き続け、不気味な人物にすら思えてきた。

「美奈、何か吹き込んだの？」

「まっさかあ……！ 泰徳に心当たりがあるだけなんじゃないの？」

美奈はそう言つて大爆笑すると、「やあ……ねえ、未来ったら……」と後に付け加えた。それでも尚、泰徳は未だに「相原、相原……」と呟いていた。

「ねえ、泰徳。ちょっとそのことから離れて練習しない？」

未来がそう言いかけたとき、

「あ、思い出した……！！！」

と、泰徳が未だかつて無い大音量の声を上げた。あまりに唐突なことに、美奈と未来は腰を抜かせた。

「ど、どうしたの？！」

「相原だよ。俺が仕事で横浜に行ったとき、相原の友達のレッスンしたことがある！」

「え、そうなの？」

「ああ。顧問に頼まれて、仕事を受け持ったときにBassパートにいたんだ。そのときその子が、相原 真琴っていう名前を言つてたんだよ！」

「え……？ それって偶然過ぎない？ 出来すぎてるわよ」

「仮にそうでも、聞いたんだよ、相原 真琴って名前を。それに知

り合いだつて言つてたし。多分未来が知つてゐる相原さんと同一人物の可能性が高い」

「何を根拠にそんなことを…」

未来が苦笑いしながらそこまで言つと、泰徳は溜まっていたもののすべてが吐き出されたようにすっきりした様子で、「さあ、練習しようぜ」と楽器を持つてどこかに消えてしまった。

「人違いかもしれないけど、まさか泰徳も知っていたとは…」

「でも、泰徳なら不思議じゃないわよ」

「そうよね。プロだもの」

泰徳はもちろんのこと、未来も真琴のことは知らないものの、彼女と一度話してみたいと思つた。少なからず美奈も、真琴ともう一度話ししてみたいと思つたに違いない。

## 第76楽章 「見知らぬあの子」(後書き)

大変な亀更新です。次の更新は恐らく1カ月後になるかと。運がよければ10月内にもう1話くらい更新します。

## 第77楽章 「準備、危機、そして不安」

外では相変わらずセミがやかましい。セミと言えば夏、夏と言えばセミと作者は思うが、セミがここまでうるさいとイラついてくるし、気力も無くなる。

「たっただいま……」

立石先生に呼び出されていたBassパート副リーダー、中井 美奈が1枚の紙を抱えて帰ってきた。

「汗だくだな」

「そりやもう……。全力疾走しましたから……」

そう言うと、美奈の口は水筒に一直線だった。

「この紙、何？」

「サマコンの曲決め用紙だよ」

「へえ……。もうそんな時期なのね」

「ああ。早いな」

「そうねえ……」

感慨深く腕を組む泰徳と未来。横から、水分補給によって回復した美奈が首をつっこんだ。

「そうそう、オープニングは決まってるみたいよ、2部の」

「え、もう決まってるの？」

未来が目丸くする。

「うん。立石先生が、今年はこれやろうって張り切ってる」

「ふーん。で、何するんだ？」

「ファイナルファンタジーのメインテーマよ」

「ファイナルファンタジー!？」

2人が声をそろえて驚いた。

ファイナルファンタジーは、言わずと知れたRPGで、スクエア・エニックスが発売する、長寿シリーズのゲームでもある。シリーズ

は初代から??まであり、今回立石先生が選択したメインテーマは、『メインテーマ』というだけあって、ほとんどのシリーズに様々な編曲で使用されている。

「そう。楽譜も注文したって。っていうか、作ったって言うた」  
「作った?!」

「それ、著作権上大丈夫なの?」

「大丈夫なんじゃない? 後で払うって言うてたから」

「そんなのんきな……」

「そうよ……。もしもトラブルになったら……」

「大丈夫でしょ。あ、やってみたい曲書いといてね。なんか2部の曲は後から決めるみたいだから、1部でやる曲だけでいいって」

そう言うのと、美奈は心配そうな2人をよそに、トイレに席を立った。

「書いといてって言われても……ねえ」

そう言うって、未来は泰徳を見る。

「でも、パートリーダーが言うことだ。心配ないだろ」

少なくとも不安はあったが、今の泰徳にはこの言葉しか出なかった。泰徳は別室で練習している1年生と3年生を呼び、サマコンの曲選びをすることにした。

「1部は、例年通りコンクール曲+1曲だよな」

「そうね」

「何にしようか……」

「そうなあ……」

「去年何したつけ?」

「道祖神の詩よ」

答えたのは佐々木 香織だ。

「だったら今年も課題曲すつか?」

「それなら、『稲穂の波』がいいんじゃない?」

高橋 美並が提案する。

「稲穂の波ですか……」

「何それ」

「基本6/8拍子の曲さ。メロディーもあるぜ」

稲穂の波は、前回ジョイントコンサートでも演奏したことがある曲であつたため、譜読みもそこまで必要ないだろうという美並の判断だつた。しかし1年生の後輩には、すこしきつかるうという泰徳の意見も取り入れられた。

「だったら、風紋すれば？ あれなら無理なく吹けるでしょ」

未来が言う。

「風紋つて、保科 洋さんの？」

「そうよ。全体的に流れる曲」

「いいかもですね」

「でも、あれつて金管リズム難しくなかった？」

「そんなこと無いでしょう。確かにトランペットやトロンボーンはちよつと難しいかもですけど、先輩たちがいますからそこまで心配する必要はないかと」

泰徳の意見から、香織は妥当することにした。

「じゃあ、1部でやる曲は課題曲と自由曲、それから『風紋』つてことで、B a s s パートから申請していい？」

生パートリーダーである香織が言うつと、全員一致で風紋に決定した。しばらくして、美奈がトイレから帰ってきた。

「決まりました？」

「風紋になつたよ」

「風紋ねえ……。いいかも！」

美奈自身も、この風紋と言う曲はやつてみたい曲の候補に入っていた。コントラバスの奏法の1つである ピッチイカート pizzicato が目立つ曲でもあるし、美奈自身が苦手とするコントラバスでのスラーも目立つ。苦手克服にはもってこいの曲なのだ。

「でも、まずは県大会だね！」

「はい！！」

「あ、でも……」

香織が言葉をにこらせる。

「課題曲が変わるかもしれないって」

「え？ 海へ．．．じゃないんですか？」

「うん、その予定だったんだけど．．．。ほら、私たちってダブルリードが無いじゃない。だから魅力に欠けるというか、ダブルリードが有る無しで曲の雰囲気って変わるから。変えるかもって先生が」

「そんな．．．。県大会まであと１ヶ月ちよいですよ？」

「私も不安だけどね、先生は大丈夫だって言うのよ」

「ちよつと待ってくださいよ、それなら、１年の譜読みはどうするんですか？ 前田はメンバーじゃないけど、永岡は経験者ですが不安要素が残ります」

「うん．．．。だからそこも含めて、ちよつと今から先生との話し合いがあるの」

そこまで言つと、美並と香織は部室を後にした。

「そんな．．．。課題曲が今更変わるなんて．．．」

「どうするのよ？」

「んなこと言われたって．．．。ダフニスとクロエだけでも結構な大曲だ。？は前々から候補から外れてたから、あるとすれば？か？だな」

「そんな．．．」

コンクールを約１ヶ月前にして、大きな壁にぶち当たった常套中学校吹奏楽部。その動揺は部内全体に広まり、大きな波紋を広げて部員を襲った。

## 第78楽章 「悪夢」

コンクール県大会まで、残りあと約1ヶ月半となった。日照時間の関係でようやく中庭合奏ができそうだという話も出てきて、いよいよ本腰で練習しなければならないと動き出した常套中学校吹奏楽部。しかし、不運というものは相変わらず突拍子も無く現れるものだ。

その日、泰徳は部活を休んでいた。めったに休まぬ泰徳ではあったが、セミプロ奏者として活動している手前、忙しいのだろうと疑心暗鬼したものの、美奈と未来は納得したのであった。しかしその確信は、音楽室での立石先生のひと言で、全くの疑問と化した。

「先生、今日泰徳休みみたいですけど」  
未来が言う。

「ああ、そう見たいだなあ」

自分の楽器をリペアしながら、無頓着に呟く立石先生。

「やっぱり、仕事忙しいんですかね？」

美奈が問う。しかし立石先生の返答は、予想だになかった。

「仕事？ ああ、あれか。でも、今日は何も連絡着てないぞ」

「え……？」

「なんだ、何でそんな驚いた顔するんだよ。お前らのところにはてつきり……」

「連絡なんか、きてませんよ……」

「なんだって……？」

この場ににいる3人が、あの日の事態を想像する。以前泰徳が連絡無しに部活を欠席したのは、初めてセミプロとして活動することを決心した日。それ以前に無連絡で欠席した時の事態、いや、それは翌日の出来事であって、前日のことだ。とすれば、あれしかない。

「拡張型心筋症の発作……」

3人が同時に呟いた。そう。中学1年生のとき、泰徳はいきなり胸

を押さえて倒れた。救急車で搬送され、診断結果が『拡張型心筋症』であった。翌日、泰徳は連絡無しに部活を欠席した。

「まさか…。まさか、な」

「そうですねえ……。昨日まで元気だったのに」

「今日になっていきなり、なんて…。何の兆候も無かったし」

この日の前日、泰徳は元気に後輩を指導していたし、またいつものように練習熱心であった。もっとも、ロングトーンはぶつぶつ文句を言いながらやっていたのだが。

「？ 先生、電話のランプ光ってますよ」

内線だった。もう嫌な予感しかない。立石先生は覚悟して、受話器を取る。

「もしもし……？」

「あ、立石先生ですか？ 実は……」

その後しばらく受話器と会話し、立石先生は受話器を戻した。そして、その能面のような表情の顔を2人に向け、こう呟いた。

——「ちょっと……行ってくる……」

そう言うと、立石先生は猛ダッシュでどこかへ走っていった。2人は顔を見合わせた。どちらも血の気が引いている。

「はは。ははは……。笑っちゃうって。泰徳が？ 発作……？」

「待ってよ……。他の用事かも……」

無論その確証など無い。

「でも、分かってるんでしょ？ 泰徳が……なってるって」

「そんなわけ……」

ないじゃないの。続きの言葉が出ない。彼女達に蓄えられた語彙は『不安』という私的感情によってすべて消されてしまった。無理も無い。彼女達はあの日の泰徳を見ているのだから。

震える足をやっと支えて部室に戻ると、小島 かがりが練習していた。異変を察知したのか、心配そうに駆け寄る。

「どうしたんですか？ 顔色悪いですよ」

「いや、どうもしないよ……」

明らかに嘘だ。かおりは確信していた。理由は分からないが。そうこうしていると、沙希や瑠璃加までもが部室に集まった。心配そうな顔をしているのは見ていて分かる。心配してくれるのもありがたい。しかし、今の彼女達には、後輩の同情や心配の表情は苛立ちの材料としかならない。

「ちよつと…練習に戻ってくれる…かな？」

美奈が言うものだから、後輩達は妙な罪悪感にとらわれながらも練習場所に戻った。もっとも、彼女達は何も悪いことはしていないのだが。

「ねえ……」

「何？」

「なつてたら……どうする？」

「何が？」

「何がって、その…泰徳がさ……」

「やめてよ」

未来がみな声をさえぎる。

「そんなこと…あつても不思議じゃないけど、信じたくない」

もつともだ。美奈も同じ事を考えていた。しかし、そういう未来自身にも不安は断ち切れない。現に、彼女達は経験済みだ。あの日の泰徳の苦しそうな顔といったら……。思い出したくも無い。未来は続けた。

「泰徳は大黒柱なんだからさ」

「?!」

「私達の、大黒柱…なんだからさ……」

未来の声に、噁り泣きが混じる。

「絶対、帰ってくるよ……」

そうだった。泰徳はチューバ吹き。この常套中学校吹奏楽部の全体を支える、縁の下の力持ち。大事な『大黒柱』。

「うん、そうだね…」

美奈は、そう返すことしか出来なかった。酷く自分を悔やんだ。

「でも、本当にあと1ヶ月半だよ？」

「大丈夫だよ、泰徳なら…」

結局その日はろくな練習は出来ず、ただ呆然とすごしているだけだった。あの電話はやはり、泰徳が病院に搬送されたという連絡だった。はつぱり、と思いつつも、絶望はしなかった。泰徳が生きていたのだから。しかし彼女達はまだ知らなかった。

——泰徳が危篤である

ということを。

## 第79楽章 「痛すぎる現実」(前書き)

パソコン読み推奨。

携帯で読まれる方は、読みにくいですがよろしくお願いします。

## 第79楽章 「痛すぎる現実」

部活が終了した後、立石先生を含めたB a s sパート全員は、立石先生の車で泰徳の搬送先に足を急がせた。ワイルドな運転で定評のある立石先生だが、今日はハンドルを握る手も、アクセルを踏む足にも力が入っているのが目に見えて分かる。

「泰徳、大丈夫ですかね…?」

「分かん。ただ、危ない状況だと言うことは確かだ」

「意識あるんですか?」

「無い」

即答された。この会話をしていた未来は、少し後悔した。と同時に、驚いた。意識が戻っていないということが、彼女の不安を煽る。

「手術してるんですか?」

美奈が問うた。

「いや。竹林の心臓は、もはや心臓移植しないと危ないらしい」

「てことは、臓器提供者が必要ってことですか?」

「ああ。だが、優先順位はもっと先だ」

「だったら間に合わないって事も…」

不謹慎だと思いつつも、口にした。

「……あり得るかもしれないな」

立石先生も少し反応を鈍らせた。やはり、最悪の状況は覚悟していたほうがいい。車を走らせること約15分。泰徳の搬送先―愛媛県立中央病院に到着した。

「お前達はここで待ってる。先生が手続きしてくる」

そう言うと、立石先生はロビーへと足を運んだ。

「ねえ、美奈」

「何?」

「泰徳、生きてるよね?」

「当たり前じゃない」

「でも、ドナーが見つからないと…」

「そんなことは分かってる」

「だけど……」

「分かってる。分かってるよ……」

美奈は静かに答えた。しかしそれは芯のある声で、何かを決心したような声だった。

「美奈……」

「泰徳だってそんな柔<sup>やわ</sup>な人間じゃないわよ。それに、コンクール出ずして逝<sup>は</sup>つちやうなんて、私は許さないんだから」

相変わらず小声で答える美奈だが、しつかりとした声だ。美奈の横で後輩達は、真っ青な顔をしていた。先輩が卒倒したのだ。無理も無い。一方の先輩方も、泰徳のことを気にしてやまないようだった。「皆、手続きが終わったぞ。ついて来い」

そう言われて、Bass<sup>ICU</sup>パート全員は立石先生についていった。連れて行かれた先は、集中治療室ではなく、意外にも個室の病室だった。

「あれ、ICUじゃ無いんですね…。私2回目の発作だから、てつきりICUかと…」

「俺も疑問に思ってたとこだ。病院の先生から説明があるみたいだから、行ってくる。先に入ってくれ」

「はい……」

美奈達は、ゆっくり、そして恐る恐る引き戸を開けた。立石先生はその様子を確認すると、胸部心臓外科の第2診察室へと急いだ。

引き戸を開けると、そこには見るも無残な泰徳が横たわっていた。室内にはベッドが1台、テレビが1台、シンクがあり、トイレが設置してあるだけの結構綺麗な部屋だ。ベッドには、点滴を両手に2本ずつ打たれ、人工呼吸器が口を覆っていた。そして、その場には心電図の無機質な機械的な音が響く。

「泰徳………」

未来は、そんな泰徳の姿を見るだけで泣きそうになった。未来だけではない。美並、瑠璃加、香織、沙希、かおりも皆不安そうな表情をしている。いや、同情といったほうが半ば正しいだろう。

「なんでこんな…こんな…」

未来は耐え切れず、泰徳の右手を握ってその場に崩れた。涙がとめどなく溢れてくる。小学生依頼の付き合いである幼馴染であることもあり、泰徳への思い入れは人一倍だ。しかしそれは、泰徳に対しての恋ではない。泣き崩れる未来を、残りのメンバーは見ていることしか出来なかった。誰もが、今の自分を悔やんだ。誰もが、未来と同じ事をしたいというのに。誰もが、未来と同じ気持ちであるというのに。

「未来……」

美奈は未来の肩に手をかけようとして、やめた。今はそつとしておいたほうが良いだろう。そう思った。美奈自身も、このような痛々しい泰徳の姿を目の当たりにはできない。人工呼吸が付いているということとは、泰徳は自発呼吸が出来ないということ。それはすなわち、『常に死と隣り合わせ』ということ。そのようなきつい現実、精神力が強靱な未来でも向き合うのはつらい。

とにかく、泰徳の寝ている病室は心電図の音と未来のすすり泣く音、そして人工呼吸器の作動音がむなしく響いていた。

場所は胸部心臓外科第2診察室内。立石先生は、泰徳の病状や今後の対処などについて、細かな説明を受けている最中だった。

「今回の病状ですが、極めて危険です。すぐにでも手術が必要です」

……

「はい………」

主治医、遠藤 龍之介。泰徳を赤ちゃんの頃から見てきた、この病

院内でもっとも泰徳と親しい人物である。

「完治するには心臓移植が最適ですが、莫大な費用がかかる上、移植が出来てもかなり先になると思われます」

「そんな…。彼はなんですか？ 心臓移植については」

「それが難色を示してしまして…。心臓移植はあくまで移植患者の同意がないと出来ない決まりですので…。それに、泰徳君のQOL（１）を考えると無理ではないかと……」

「それでは、彼は……」

嫌な予感が立石先生の頭をよぎる。

「いや、その可能性は低いでしょう」

「?!」

「ロス手術という方法があります」

「ロス手術？」

「ええ。普段は大動脈弁置換術などの応用として行われる最高難度の手術ですが、こちらから招待状をお送りして手術をお受けいただけます」

「しかし、それではコンクールには……」

「はい、恐らく間に合わないかと」

「そんな……」

「しかし、私から一つ提案があります」

「と、いいますと？」

「ペースメーカーの使用です」

「ペースメーカー?!」

絶望という暗闇を、もうすぐで抜け出せそうな気がした。遠藤医師は、ペースメーカーについての説明を詳しく始めた。

## 第79楽章 「痛すぎる現実」(後書き)

1: Quality Of Life。患者と医師の入念な相談の結果から、得られる最善の治療法を探し出す。医療界では最優先で守らなければいけない、患者に対する人権保守のようなもの。

## 第80楽章 「諦めないで!!」

「ペース……メーカー？」

立石先生が遠藤医師に問う。

「はい」

「といいますと？」

「心臓に埋め込む電子機器でして、電流を流すことにより、心筋に正常な電気信号を送ることで心臓の本来の機能を回復する、というものです」

「それを埋め込めれば、現状は回避できますか？」

「ええ。しかし完治はしませんし、泰徳君の意識が直らないことには何とも……」

「そうですね……」

肩を落とす立石先生。しかし幸いにも、泰徳の心臓は前回の発作より大して酷くなったような形跡はなく、心臓移植が必要なのは変わらないが、ペースメーカーを埋め込むことで1年は持つだろう、と遠藤医師は話した。

「心臓移植は、いつごろになりそうですか……？」

不謹慎とは思ったが、教え子のこと。立石先生は聞かずにはいられなかった。

「うーん、そうですねえ……」

遠藤医師はしばらく思案した後、

「来年の10月ごろでしょうか」

と言い切った。泰徳の拡張型心筋症は、先天性ではないが小さい頃から持病として発祥していた。そのため、ドナーに対するレシピエントの順位もそこまで下ではないという。ただし、国内での心臓移植は難しく、やはりアメリカに飛ばなければならない、と遠藤医師は念を押した。

一方で泰徳の病室では、B a s s パート一同が、泰徳のベッドを囲むようにして泰徳の傍にいる。泰徳は未だ意識を取り戻さず、相変わらず人工呼吸器と心電図の音が響く。

「怖いわ……」

重い口を開いたのは、未来だった。

「何が？」

「泰徳よ……。もしも、もしもだけど、このまま死んでしまっ……」

「やめてよ!」

美奈が立ち上がった。

「私だって、あの時のことは思い出したくないの……! あの時だって、泰徳は直前まで……笑って、たのに……」

「美奈……」

「あの時も、最初は演技じゃないかって思った。だって、今でこそ見せないけどあんなに笑顔だったもん……。それなのに、それなのに……」

「……」

美奈の両手で握られた拳が、震えている。

「あの時って……?」

沙希が問うた。

「え?」

それに聞き返したのは、美奈ではなく香織だった。

「すみません……。聞いちゃいけないって言うのは分かってたんですけど……。あの時って……どの時ですか……?」

「ああ……。あの時はね……」

そうして香織は説明を始めた。去年の7月、泰徳が同様の発作で部活中に倒れたこと、その時は病状が比較的軽かったため、意識の回復や退院が早かったこと、そして今回は、思ったよりも病気が進んでいるかもしれない、ということ。

「そうだったんですか……。何かすみません、つかぬ事をお聞きして……」

「いいのよ。後輩なら知らなきゃいけないことだし」

「ちょっと香織……！」

「ううん、いいのよ、美並。私は泰徳君にもしもの事があつたとき、守る義務があるから。それに、泰徳君からも言われてたの。同じことが複数起きたら、その時は後輩に事実を教えてくれって」

時間だけが無常に過ぎていく。この部屋にいる時間が、とてつもなく長く感じられた。どれだけ静かな時間が経つただろうか、未来がトイレに立とうとしたとき、病室に立石先生が入ってきた。

「先生……！」

「どうだ、泰徳の調子は」

そう聞かれて、香織は首を横に振った。

「そうか……」

立石先生も肩を落とす。

「実は皆、話があるんだ」

立石先生はそう切り出し、先ほど遠藤医師から受けた説明をそのままBassパートに伝えた。泰徳の病状はそれほど進行していないが、すぐにでも手術もしくは心臓移植が必要なこと、心臓移植には莫大な費用がかかるが、病院側からも多少援助が出ること、ペースメーカーを埋め込む手術をすれば、少しは持ちこたえられること。

「それなら、泰徳は手術すれば助かるんですか？」

「そういうこと。ただし、泰徳の意識が戻らない限りは、手術も出来ない」

「そんな……」

「そこまで心配しなくても、泰徳はかならず目を覚ますさ。あいつもそこまで出来損ないの人間じゃない。いや、むしろしっかりした奴だ」

そう言い残し、立石先生は

「仕事が溜まつてる。お前達は好きなだけ泰徳の傍にいろ」

と笑いながら病室を出た。

「泰徳、早く目覚まさないかな……」

「ほんとね……」

「何とかコンクールまでに復活して欲しいんだけどな…」

「それまでに、泰徳をびつくりさせちゃうくらい上手くなるうよ」

「でも、泰徳が認めてくれるか…」

「認めるか認めないかじゃないでしょ！ やるかやらないかなの！」

行動派の美奈は、口よりも先に手が出る性格。たまにそういう所が傷になったりするのだが、今回は皆の励ましになったようだ。病室には未来だけが残ри、残りの皆は学校に変えることにした。未来は泰徳と幼馴染の間柄。別に2人だけでも泰徳は怪しみもしないだろう、ということだった。

「早く復活してよね、泰徳……」

そういうと、未来は携帯電話を広げ、知り合いの面々に今回のことを事細かに連絡した。もちろん、匠にも。

## 第81楽章 「匠の弱音」

泰徳が拡張型心筋症の発作で倒れてから3日経った。にもかかわらず、泰徳はいまだに目を覚まさない。病室には相変わらず無機質な電子音が響き、泰徳の心臓が正常に動いていることを教えてくれる。しかし、お見舞いに来ていた彼女・谷 未来は、それがいつ乱れるだろうかとハラハラしていた。

「やっぱり目を覚まさないね…」

病室に入って必ず最初に言うのが、この言葉だ。もう口癖のような感じになっている。

「あ、今日ね、コンクールの合奏があつたんだ。課題曲を中心にやったんだけどね、それはもうぼろぼろだったよ…えへへ」

おもむろに、独り言のように美奈は泰徳に話しかけた。泰徳が意識を回復しないから、寂しいのもある。お見舞いに来たのがすごく虚しく感じられて、こうして話していないと落ち着かない。

「ほら、課題曲って刻み多いじゃん。だからアーティキュレーションとかつけられなくてさあ…。テヌートとかならつけられるけど、クレシェンドが難しいんだよね…」

買ってきた花束を、花瓶に挿す。色とりどりの花が、空虚で真っ白な空間を彩る。

「それでね、今日美奈がさあ…」

おもむろに、ドアがガラツと開いた。

「黒田先輩…」

ドアの前に、匠が立っていた。その手には、楽譜と楽器が握られている。

「まだ…なのか…?」

真顔で問われた。未来はどう答えて良いか分からず、ただ静かに首を縦に振った。そうか、と匠は顔を俯かせた。

「心臓はちゃんと動いてるみたいなんですけどね」

そう言つて、美奈は目線を心電図に向けた。緑色の線が、心臓の鼓動を図式している。

「最近まで、元気だったのにな……」

「そうですね……」

会話が途切れる。何か話そうと、未来がとつさに口を開いた。

「なぜ、楽器を？」

「ああ、これか？ まさかのこともあるかもって思つて、泰徳にアドバイスもらいにきたんだけど……やっぱ無理だったわ」

ははは、と匠は自嘲気味に笑った。

「谷さんは、いつもお見舞いに？」

「はい。幼馴染ですから……」

「良い関係だな」

匠が呟いた。

「そんな事……」

そう言つて未来は頬を赤らめた。

「泰徳つてさあ、限界まで頑張る奴だよな」

「……そうですね」

未来は今までの泰徳を回想しつつ、答えた。

「緻密な練習して、妥協もしないで。本当に努力家だなあつて、つくづく思つよ」

「でも、泰徳はロングトーンが苦手です」

未来は苦笑した。中学1年のときの泰徳は、本当に怠け者だった。

ロングトーンに対して、『同じ音をいくら伸ばしたからつて、何が楽しいんだよ』と、先輩でありパートリーダーであつた石河にたてついたくらい、基礎練習が嫌いだった。

「でも、今は違う……」

その匠の言葉が、妙に胸に突き刺さつた。

「そう……ですね……」

「セミプロにもなつちやつたしな。高校に入ったらどうするんだろ？」

その言葉が、ナイーブな未来の心に止めを刺した。

「すいません、私、用事思い出したので…」

「あ、そうなの？　じゃ、また」

未来は席を外した。いや、帰宅した。確かに泰徳との距離は遠い。小学校のときから音楽の成績はトップだったし、歌だって上手かった。J・POPも、オペラも、合唱も。この先泰徳は、どんな道を選ぶんだろう。そう考えながら。匠は、そんな彼女の背中を見送った。

「はあ…」

匠は軽いため息をついた。

「谷さんは良い子だよな。謙虚で優しくて。俺もああいう彼女欲しいなあ」

そう言つて、眠っている泰徳の顔をチラッと見る。やはり、冗談は言える気がしない。

「アドバイス、なんてのは口実なんだよ、泰徳」

そう言つと、匠は楽器と楽譜を置いた。

「正直、緊張してんだよなあ。実は副部長になつてさあ…。本当は、課題曲のソロを吹いてもらつて、お前との実力差をはつきりさせてそのつもりだった」

まじまじと、匠は課題曲・海へ…。吹奏楽の為に見つめた。

「やっぱ俺、副部長とか似合わないなあ…。お前もそう思わない？　小編成だけど頑張つてみようつて思ったけれど、それでも副部長の責任の重大さは大編成と変わらない。『小編成はやっぱ小編成で、演奏もしよばかったし編曲もクソみたいで、まったく魅力が無い！』なんてことは俺は絶対に言わないけど、泰徳たちみたいなすごい演奏は雲の上の目標で……。わりいな。もうしばらく弱音を吐かせてくれよ……」

未来が挿して行つた花を、一本取り出す。匠はそれを、指先でくるくる回した。

「葛藤してるんだよ、俺だつて。小編成は嫌いじゃない…。いや、寧

る大好きだ。いつか大きなコンクールに出て、小編成でも可能性が大いにあることを証明したい。でも、やっぱり副部長つてのは、俺には荷が重過ぎると思うんだ」  
花を花瓶に戻す。

「恥ずかしい話、もう諦めちゃおうかなって思うときもあるよ。でも、やっぱり俺は小編成が大好きだし、離れるなんて思わない。ただ、副部長つてのがネックで……」

匠はちらつと時計を見た。お昼前。お腹もすいたし、お昼を買いに行こうとしたその時だった。匠が立ち上がるうとして、違和感を覚えた。裾を引っ張られているような、そんな違和感。匠はハツとして泰徳のほうを向く。

「……め……じゃ……ねえよ……」

泰徳が、匠のズボンを引っ張っていた。

「諦めんじゃ……ねえ……！」

「泰徳……気がついたのか?! ちよつと待て、先生を……」  
裾を握る力が、一層強くなった。泰徳は首を横に振った。

「だ、大丈夫なのか……?」

泰徳は小さく頷き、人工呼吸器を外した。そして、大きく深呼吸した。

「ごめんな、泰徳。やっぱり、こんな話なんか聞きたくなかったよな」

また匠は自嘲気味に笑った。

「なんで……? やっぱり、自分に自信がない……のか?」

泰徳の声はなおも小さいが、力がこもっていた。

「ああ。そっけない理由だけど。なんか泰徳が遠くに行っちゃったような気がして、俺もお前をずっと“良きライバル”として見てきたけど、やっぱりプレッシャーは拭えないなあ、なんて」

「そうか……。けれど、そんな理由で諦めっちゃったら、お前の面子が台無しじゃないか……」

「うーん……でもなあ……。あ、先生呼んでくるよ。話し長くなるだ

る？」

泰徳は諦めたのか、今度は首を縦に振った。匠自身が心が折れそうなのもあったし、泰徳の話聞きたくもあった。先生に泰徳が意識を回復したことを伝え、1人の医師と看護師がカルテを持って駆け出した。

「あまり騒がしくしてやらないでください」

匠は先生にお願いした。忘れるところだった、と匠は携帯電話を開き、美奈と未来に泰徳の意識が回復したことをメールで伝えた。

『今すぐ病院に行く!!!』

真っ先に返信が返ってきたのは、言うまでもなく未来だった。匠はふふっ、と笑い、携帯を閉じた。

## 第82楽章 「期待してるよ、先輩」

匠が昼飯を買って病室に戻ってくると、すでに未来が泰徳と話していた。その時の未来の表情は、それはもう形容の仕様がなくらいに幸せそうだった。未来は、他のメンバーももうすぐ到着します、と言って静かに席を立った。匠は、未来が座っていた横の椅子に腰掛けた。

「どうだ？ 調子は」

静かに問う。

「ああ。だいぶ良くなったよ」

いつもの泰徳の声だった。意識を回復した当初の泰徳は、本当に蚊の鳴くような声であったが、徐々に体力も回復したのか、しっかりしたものになった。

「ごめんな、あんなこと言って」

「何言ってるんだよ。お互い様だろ」

泰徳は過去に一回だけ、匠に相談をしたことがある。泰徳がセミプロでやって行く決断をした際に、所属先のセントラル・ウインドフィルハーモニーから「他の楽団と掛け持ちでやってもらっても構わない」という誘いがあった。泰徳が匠にどうするべきかを問うと、匠は喝を入れるわけでも、一蹴するわけでもなく、ただ優しく「お前が正しいと思う道を選べば良い」とだけ言ってくれた。泰徳は、今度は自分が乗ってやる番だと言う自覚も持っていたし、借りを返す、とも思っていた。

「で、副部長になったのか」

「ああ…。やっぱり不向きだよな、俺」

「何でそう思うんだよ」

泰徳は、おもむろに知恵の輪を手にとった。匠が「それどうしたんだよ」と聞く前に、「谷が持ってきてくれたのさ、暇つぶしに」と匠の言葉をさえぎった。やはり幼馴染の腐れ縁か、と匠は嫉妬に近

いため息をついた。その顔は、ほのかに笑っていた。

「俺ってほら、自分のことしか見えてなかっただろ？」

「というと？」

「お前と大論争したときだよ。あの時の俺の演奏は、浮いてるって言われることが多かったのさ。理由はただ一つ。俺が周りを見てなかったからだ」

恥ずかしいから言わせんなよ、と、匠は顔を赤くしてうつむいた。

「それが副部長のプレッシャーにどう関係してるんだよ」

「まあ、いろいろと……」

「ふーん」

それっきり、会話が途切れる。泰徳はどつと言つことはなかったが、比較的ナーバスになっている匠には、気まずくて仕方なかった。

「でもさ……」

泰徳が口を開く。

「それって匠の主観だけの判断じゃないの？」

「え……？」

バラバラになった知恵の輪を、泰徳は机の上に置く。

「だからさ、そう思うのは匠だけで、他の皆はそんなこと思ってないだろってことだよ」

「でも、浮いてるって言われたのは皆からで、それで俺はどうすれば良いか分かんなくて……」

「匠も結構考えてるんだな」

「は……？」

癪に障る。自分が普段何も考えてないような人物だと、泰徳に考えられているということを見ると、腹が立った。だが、すぐに泰徳が「俺の憶測ならごめんな」と言ったので、すぐにその気持ちはなくなつた。

「俺の仕事の知り合いに、片耳の聞こえない女性のコンマスがいるんだ」

泰徳は机の上に置かれてある大量の楽譜から、ベートーヴェンの交

響曲第7番のポケットスコアを取り出した。これらの楽譜は、すべて仕事で演奏したものらしい。

「コンマスは、匠にも分かるだろ？」

「ああ」

「コンマスはオーケストラの第2の指揮者だから、とっても耳の良  
い奴しかなることができない。だけど、その女性はコンマスなんだ。  
何で分かるか？」

「……分かんねえよ」

泰徳は軽くため息をつく、意を決したように言った。

「ツアー中に難聴になったからだよ」

「マジかよ……」

「ああ、マジだ。でもその女性は、難聴になったことを隠してまで  
コンマスをやっている。それは、彼女の意味でもあるんだ」

「……どういうことだよ？」

「『自分に与えられた仕事は、どんなことがあっても全うする』つ  
てことさ」

「……！」

「彼女はコンマスになるつもりなんてさらさらなかったんだ。ヴァ  
イオリン奏者だったが、言われるなら第2ヴァイオリンでも演奏で  
きるならそれでもよかった。だが、ある日楽長に言われたんだ。コ  
ンマスをやってくれないか、と。その時、彼女は思ったそうだ。自  
分に期待されている。なんとしてでもこの役割は全うしなければ、  
つてな」

泰徳がポケットスコアを広げて見せた。匠はそれをおずおずとのぞ  
く。

「これは……」

「そう、彼女から譲ってもらったスコアだ。ヴァイオリンに限らず、  
他のパートまでぎっしり書き込んだのである。それも丁寧に」

その書き込みは、中学生がやっているような楽譜を真っ黒にするま  
での書き込みでなく、要所要所に注意が書き込まれ、いかにも分か

りやすく書き込まれた楽譜だった。

「俺は書き込むだけが合奏に臨む体制じゃないと思ってる。いかに自分が理解して、それを吸収するか。そこにあると思うんだ。匠には、少なくともその力があると思う」

「ちよつと待て、それは買いかぶりすぎ……」

「いや、俺はそうは思わない」

匠に最後まで言わせず、言葉をさえぎった。

「大論争したあの日も、正直俺は驚いていた。確かにお前の曲分析はすごかった。楽譜の指示に忠実に対応しようとする姿勢、そして意欲。これは最近の中学生でもお前くらいしかないだろう」

「だったら……」

「だからこそだよ」

泰徳はポケットスコアを匠に手渡した。

「自分の演奏が浮いていることを理解できたのは、あの日の演奏会のおかげだ。俺のおかげではない。お前が俺らの演奏を疑問に思ったから楽屋に来了。そうじゃないのか？」

「そりゃそうだけど……」

「だったら、諦めんな。自分に与えられた仕事を最後までやり通せよ」

「だけど、俺だってプライドが……」

「じゃあ、そんなプライドなんか捨てちまえ」

「！？」

「悪いことと言いかもしれないが、そんなプライドは匠の感情の一部でしかない。部活をまとめる者には、そんなものは必要ないんだ」

「だけど……」

「よく考えるんだ、匠。部員は副部長のポジションをお前に託した」ということは、部員はお前に期待してるんだ」

「うん……」

「期待されてるのに、『プライド』という感情で部活を振り回すのは、俺は個人的に好きじゃない。いや、大嫌いだ」

「……………」

「むしろ本気で取り組んだ結果が怒りに繋がるのは俺が責めるべきじゃない。ただ、自分のプライドが許さなくて自虐するのは、絶対に許さない」

匠は俯いたまま、ポケットスコアを強く握った。

「お前にも夢がある。その夢をかなえるのは、お前じゃなくて部員全員だ」

匠はハツとした。そうだ。今まで俺は、自分の理想を部員に押し付けていた。そんな気がする。泰徳はそれを見抜いて言っただのか。全く、敵わない。

「分かったなら戻れよ。お前もコンクール前だし、忙しいんだろ？分かってるよ、部活サボってるって」

「…分かった、行くよ」

「そのスコアは匠に託すよ。今年はB部門も聴きに行くつもりだ。期待してるぜ、先輩」

そう言うのと、泰徳は滅多に見せない笑顔を匠に見せた。

「おう、任せとけ」

匠も満面の笑みで答えた。頑張らなくては。そう決心した。病室を出ようとすると、Bassパートメンバーと入れ替わりになった。匠は軽く会釈をして、病室を去った。

「黒田先輩、顔変わったね」

未来がそう言うのと、泰徳は

「期待されてるからな…」

とだけ言って、外を見た。雲ひとつない青空に、セミの大合唱が不釣合いに響いていた。

### 第83楽章 「本当の役割」

「え？ 手術を受ける？」

その知らせを受けたのは、匠がお見舞いに来た翌日のことだった。

その日、未来はいつものように泰徳のお見舞いに来ていたが、泰徳はすでに夕食を済ませていた。夕方の5：00ごろのことだ。

「手術はいつなの？」

りんごの皮をむきながら、未来が問うた。

「2週間後」

泰徳は、未来に頼んで持ってきてもらったマウスピースの掃除をしながら、そっけなく返事をした。

「2週間後？ てことは、県大会の直前じゃない」

「ああ。術後の検査もあるから、県大会に出られるかも不安だな」

「大丈夫なの？」

「遠藤先生に交渉してみるよ」

そう言つて、泰徳はマウスピーススクリーナーを吹きかけた。カーテンを開けていたので、泰徳たちの前に小さな虹ができる。

「ところでさ、泰徳」

「ん？」

「課題曲、3番になったって」

「パルセイションか」

「うん」

「大丈夫なのか？」

「それが、発音の問題云々でホルンがズタズタでね」

未来は軽くため息をついた。

「ふーん」

また素っ気なく返事をする。

「聞いたって『ふーん』はないでしょ……」

未来はうなだれた。剥き終わったりんごを皿に盛り、泰徳に手渡す。

一番手前のりんごを手に取り、泰徳は口にした。シャク、という音が、真っ白な病室にさわやかに響く。つい今朝のこと、集中治療《ICU》から通常病室に移動した。

「ところで、未来」

「何？」

「中井に何か変わったことは無いか？」

「どうして？」

泰徳が唐突に話題を変えたと思ったなら美奈にすることだったので、余計に疑問に感じられた。思わず言葉に出てしまった。

「いや、なんとなくそんな気がして」

そう言つて泰徳はりんごをもうひと口かじった。

「なんとなく、っていうのは嘘でしょ？」

洞察力の優れた泰徳のこと。予想であつたとしても理由はあるはずだ。そう思つた。

「うーん……。大したことじゃないけど、最近なんか溜め込んでる気がする。中井もたまに見舞いに来てくれるんだけど、表情に張りがないというか、元気がないというか」

元気だけが取り柄なのにな、と言つて、泰徳はふふ、と笑つた。一方の未来は、少なからず思い当たる節があつた。ここ最近、Bassパートとトランペットセクションの間でちよつとしたいざこざがあつた。それほどの理由ではないが、強いて言つとすれば、原因は『メロディーと伴奏、どちらがより大事か』ということであつた。

「また小学生みたいな争いだな」

泰徳はやれやれと言つた様子でため息をついた。

「でしょ？ 私もそう思う」

一個もらつね。そう言つて未来はりんごを手にする。

「だいたい伴奏とメロディー比べたつて仕方なくない？」

「それ以前に、伴奏とメロディーを区別することが間違つてるんじゃないか？」

「え？　どういうこと？」

予想外の泰徳の受け答えに、思わずりんごを落としそうになった。  
「だから、曲を伴奏とメロディーで二分するのはおかしいってことだよ」

「うん、もっと分かりやすく」

頭が追いついていかない。全く泰徳は、いつも何を考えているのだから。そう思うと、予想以上に泰徳は毎日を考えながら生活しているのが分かる。

「分かりやすくたって……」

「体験談でも良いから」

「体験談か……。あ」

泰徳が顔を未来のほうに向ける。

「神奈川県に仕事があった折に七海に寄ったんだ。その時翔に会いに行ったんだが、翔は相談したいことがあるといって、ある場所に連れて行かれた」

「どんなところ？」

「小さい頃、翔とよく一緒に遊んだ小さな公園だった。河原が近くにあつて、夕日がとても綺麗な場所で、俺も大好きな場所だった。正直、また陽乃さんのことかと思った。その場所で翔の相談と言ったら、恋愛関係だったからな。でも違った」

りんごの蜜で汚れた手を、泰徳はウェットティッシュで拭いた。

「翔はいきなりこう言ったんだ。『俺もチューバしてみたかった』ってな」

泰徳は、マウスピースを優しく撫でた。

「俺は驚いた。中学校からサククス一筋だった翔の口からそんなことが発せられるのは、予想外だった。けど、黙ったままでも悪いと思ったから、俺は一応『いきなりどうしたんだよ』そう尋ねた。もしたらあいつは、『東先生に怒られた』と言ったんだ。ばかばかすぎで、思わず大声を上げそうになったよ」

「でも、なんか理由があるんじゃないの？」

「ああ。あつたよ。聞くところによれば、中学校のときのトラウマを、今も引きずっていると言われたらしい」

「それがどう問題なの？」

泰徳は話そうか迷ったが、結局話すことにした。

「同じ町に風見台高校という学校があつて、その吹奏楽部にさの佐野修平しゅへいという男がいるんだ」

「兄弟？」

「いや、違うよ。ただ、そいつら2人は中学校が同じで、その時は『ダブル佐野』として親しまれた。楽器もアルトサクスで、一緒だった。そんな時、1つの曲が配られた」

「何？」

「エアーズだよ」

エアーズ。常套中学校では卒業式の入場曲として、メジャーな曲であるが、単純に考えると、エアーズ自体が翔の中学生時代の課題曲と一致する。

「その時最初に顧問と衝突したのは、サククスソロの部分だった」

「サククスソロって、愛が吹いたところ？」

「ああ、そうだ。2人の実力は肩を並べるほどだったし、どちらが1stを吹いてもおかしくなかった。だが、ソロを吹くのは結局修平のほうになったんだ」

「どうして？」

「『音楽性の違い』というやつだ。翔はロマンチストな部分があるから、ああいったフレーズが出てくると必ず歌い上げようとする。」

だが修平は完璧主義なところがあつたから、メロディーのフレーズよりも、エアーズという曲が課題曲であるという事実を重視した」

「結果的に、顧問は修平さんの判断に賭けたのね」

「そういうことになるな。俺も顧問の判断は間違っていないと思う。だが、翔は納得しなかった」

「なぜ？ 決まったなら諦めたら良いのに」

「翔は表現力を重視したからだ」

「ますます分かんない……」

「コンクールは技術点と表現点の2種で合計点が出る。ここからは俺の予想に過ぎないが、翔が表現力に重きを置いたのは、点稼ぎのためじゃない」

「じゃあ、どうして？」

「おそらく、エアーズという1曲を限界まで究めたかったんだと思う。翔と修平の通っていた中学校は、技術はそこそこあったほうだったから、翔は技術には触れずに表現に力を入れようとした。だが

――」

「顧問は事実を重視した……」

「そういうことだ。ただ、修平も課題曲と言うことを念頭に置きながら、課題曲としてのエアーズにふさわしい表現方法を探していた。翔の言う“表現”は、言ってしまうえば演奏会向けなんだ。だけど、それは望ましくない」

「？」

「吹奏楽コンクールは、練習した成果を『コンテスト』として評価してもらって、プロの音楽界からの推薦で全国大会に出場する“コンクール”であって、音楽発表会ではないからだ」

「……！！」

「コンクールにおける表現方法が、翔と修平の場合のどちらが正しい……と言えば語弊があるけど、どちらがふさわしいか考えると、俺も修平のほうを取る。オーバーブローな曲表現で点を失うより、コンクールという意識を持って演奏して、確実に点を稼ぐほうが、俺は得策だと思うから。本題に戻るけど、それが原因で一時期サックスから遠ざかった時期があった。いや、吹奏楽から。そして先生から言われたそうだ」

「何て言われたの？」

「『サックスをメロディー楽器と思うな。メロディーこそ伴奏と思え』って」

「どうということ？」

「そのまんまだよ。メロディーがあるからと言って強調して吹くと、バランスが崩れる。メロディーと伴奏がシンクロして始めて、伴奏が生きてくるってことだよ」

「深いねえ……」

「俺もそう思うよ」

泰徳は一息つくと、未来に1枚のCDを手渡した。

「何？ これ」

「昔の課題曲だ。『吹奏楽のための協奏的序曲』が入ってる。これを中井に聞かせてやってくれ。そして言ってくれ。どっちが大事なんかは関係ないって。そんなこと言うのは、お前らしくない、って……」

柄にもないことを言ったような気がして、泰徳はすこし俯いた。

「…分かった」

「ちよつと寝るから、カーテン閉めてくれ…」

「うん…」

未来は白いカーテンを閉め、泰徳は白い天井を見つめた。正直、セミプロになった今でも伴奏の役割など深く考えたことはない。だが、『メロディーと伴奏のバランスがとれて初めて、曲になる』。これは勉強になった。ありがとくと、翔にお礼を言いたくなった。泰徳はゆっくりと目を閉じた。白いカーテンの向こうにいる未来は、天使のような笑顔だった。

## 第84楽章 「暴かれる裏 2」

泰徳が入院して1週間が経ち、手術まであと10日となった。あらゆる紙に署名をし、ハンコを押し、手術に対する説明も受けた。

珍しい客が泰徳を見舞いに来たのは、いつも通り未来が見舞いに来院し、泰徳も病室の空虚な空間にもやっと慣れてきた頃であった。

「あのー……」

「……？」

引き戸が開かれ、泰徳と未来との会話が遮断される。引き戸が開かれたそこには、1人の少女がたたずんでいた。2人とも彼女が誰だか見覚えはあるのだが、それが誰だか思い出すことが出来ない。しかし彼女の次のひと言で、記憶がよみがえった。

「相沢なんですけど……」

思い出した。斬善事中学校のテューバ奏者、相沢 真里菜だ。多少いざごさはあったものの和解し、特に美奈や未来とは連絡を取り合う中になっている。実は彼女も斬善事中学校の悪徳運営に悩まされている1人だ。

「お、相沢じゃん。どうした？」

真里菜に気付いたのか、泰徳はにこやかに問うた。しかし真里菜の顔は浮かない。どうしたのかと思えば、いきなり土下座をした。

「すみません！！」

「お……おいおい、いきなりどうしたんだよ……」

個室とはいえ、病室。壁は薄く、その声は筒抜けだった。数分もしないうちに、野次馬が集まる。未来は野次馬を、「見世物じゃないんだから……！！」と払う。

「とにかく頭を上げてくれよ……」

いきなりの土下座に、さすがの泰徳もしどろもどろだ。真里菜が顔を上げる。

「……いきなり土下座なんてどうしたよ？」

改めて泰徳が問う。

「謝らなきゃいけないことがあって…」

「…？」

泰徳と未来が向きあう。全く意味が分からない。

「えと…どういふことか説明してくれるかな？」

未来が聞くと、真里菜はゆっくり話し始めた。

「実は…私達が恐れていたことがついに実行されてしまったんです

…」

「恐れていたことって？」

「賄賂です」

「…！！ど、どういうことだよ？」

「斬善事中学校の理事長である斬善事 清孝が、瀬川 政道に賄賂を渡したと言うことです」

「理事長がああキンキラ野郎に？」

「はい。理事長は、吹奏楽コンクールを斬善事中学校が管轄されている松山学園の繁栄の餌にしようとしているんです」

「でも、何のために…」

「理事長はああ見えて音楽には教養があります。今の斬善事中学校吹奏楽部の実力では、県大会を抜ける事は到底出来ません。理事長はこれを見通し、審査員である瀬川先生に賄賂を渡して、審査を有利に進めるようにしたんです」

「なんちゅう野郎だよ…」

「人間のクズじゃない！」

未来が憤慨している。無理もない。努力の末に勝ち取るはずの金賞、そして県代表として四国大会への切符をつかむはずが、斬善事中学校は金の力によって実現しようとしているのだから。

「それだけではありません。理事長は、常套中学校吹奏楽部を抹殺するつもりです」

「何だつて?!」

2人は驚愕した。何のために常套中<sup>うち</sup>学校の吹奏楽部を抹殺しようと

するのか意味が分からなかった。

「どういうことだよ?!」

「理事長はまず、吹奏楽部の強豪校に目をつけました。そうしてピクアップされたのが、3校。佐倉中学校、北佐屋中学校、そして…」

「常套中学校ってことか…」

「はい…。そして理事長は、その3つの学校長に圧力をかけて出場停止を図っています」

「何でそんなこと…」

「この3校が出ることによって、枠が確実に縮まるからです」

真里菜の説明によれば、最近5年間のコンクール受賞暦で連続金賞、そして県代表を誇っている学校が、上記にあげた3校だということだった。愛媛県大会からの四国大会出場枠は、6〜7校。斬善事清孝は、その強豪校が出場することによって枠が半減することを恐れていると言う。

「でも、そんなこと気にしなくたって、練習してうまくなれば良いのに」

「未来、それは言っちゃ駄目だ。練習してもうまくならない奴はいるさ」

「何で?」

「コツがつかめないからだ」

「コツ?」

「ああ。いくら練習してもコツがつかめなければ、イタチごっこだ。うまくなるかどうか、それはコツが掴めるか掴めないかだ。だから、それは斬善事も気にしているだろう」

「そうなんだ…。でも悪徳すぎでしょ」

「ああ、俺もそう思う」

「島岡さんからも噂は聞いたけど、ココまでって……」

「あの、島岡さんって…」

「一時期プロ中のプロとして活動していたホルン吹きだ。今は楽団

を渡ってどこに入るか健闘してるんだってよ」

真里菜はそれっきり黙ってしまった。一方の泰徳と未来はというと、正直焦っていた。まさか斬善事が賄賂行動を本格的に実行していたとは思ってもよらなかった。このことが露になれば、斬善事中学校吹奏楽部は出場停止では済まされない。

「放つといていいのか……？」

「そうよ。このままじゃ吹奏楽部が……」

未来は最後までいうことが出来なくなった。理事長の手のひらで踊らされている斬善事中学校の生徒がいたたまれなくなった。

「いけないと……思ってます……」

しばらくして真里菜が口を開いた。

「いけないと思ってます……。でも、私達にはどうすることも出来なくて……武藤先生もこんなのは初めてだって言って動いてくれなくて、正直私達も困惑してて……」

真里菜の目には涙が溜まっていた。その様子を見た泰徳は、優しく真里菜の手を握った。

「相沢、俺に任せてくれ。どうにかするよ」

「え……でも……」

「大丈夫だ。任せてくれ。頼む」

泰徳が静かに言った、

「俺に考えがある」

「……分かりました、よろしく願います……。でも、連絡は」

「分かっている。逐一するようにするよ」

それを聞いて安心したのか、真里菜は涙をぬぐい、用事があるので、と言って一礼し、病室を去った。

「泰徳、本当に大丈夫なの？」

不安そうに未来が尋ねる。

「ああ。あてがある」

そう言って泰徳は、仕事用の携帯電話を開いた。

## 第85楽章 「やっぱダメか…」

「本当に大丈夫なの…?」

「心配すんな。ちゃんと考えはあるから」

未来の心配をよそに、泰徳はある人物に電話をかけた。彼が最も尊敬し、信頼しているであろう人物だ。スピーカーモードにしていよ、という未来の言葉に、泰徳はただ頷いた。

『もしもし?』

2コールで電話に出た。

「あ、毅? 仕事中だった?」

『いや、今終わったところだよ』

「そうか。急にごめんな」

泰徳がかけた電話の相手は、セントラルウィンド・フィルハーモニーの主席テューバ奏者の要<sup>かなめ</sup>毅<sup>つよし</sup>だった。未来は、毅がついこの間まで泰徳の上に行く存在だったが、最近彼を追い抜いたと言う話を立石先生から聞いた。

『いいって。そんで? 何だよ』

「ああ…。斬善事 清孝って知ってるよな?」

『もちろん。その悪徳ぶりは日本中に伝わってるぜ』

理事長のことは、報道はされないものの噂で広まっているようであった。しかも全国規模で。

「その斬善事のことなんだが、厄介なことになってな」

『厄介なこと?』

「ああ。賄賂を使って全日本吹奏楽連盟愛媛県支部に干渉しようとしてる」

『審査員に?』

「ああ」

『誰?』

「瀬川だよ」

『瀬川……。またややこしい奴と関わってんな』

「毅は何か知ってんの？」

『まあ、色々』

「ふーん……。あえて聞かないよ。でも、その斬善事と瀬川のやり取りが妙でさ」

『妙？』

「ああ。賄賂をするには審査員7人全員に渡さなきゃ効力は発揮されないだろ？」

『まあ、そうだな』

「けど、斬善事は瀬川一人に賄賂を渡そうとしてるんだ。もう渡したかもだけど」

『それは妙だ』

隣で聞いている未来も、正直その点については疑問が解決されなかった。どれだけ賄賂を重ねたところで、特定の1人のみに賄賂を渡しただけでは残りの6人から咎めを受けるに違いない。

「毅なら、模試賄賂を渡すとして全員に渡すか？」

しばらくの沈黙が続く。そして毅は答えた。

『いや、そんな事はしない』

「!？」

予想外の答えに、泰徳と未来の2人は言葉を失った。

「ど……どうして？」

泰徳は震える喉を筋肉で締め付け、声を絞り出した。

『まず第一に、審査員7人に賄賂を渡すのは不自然だ。なぜなら、そうすることによって自己申告する、つまり、「私は賄賂を受け取りました」と自白する奴が出てくる可能性がある。それを避けるためには、少人数に渡したほうが効果的だ。7人だから、4人くらいか』

「……………」

『そして、その4人に賄賂を渡したとすると、口止めする必要があるな。ここで斬善事は、瀬川を出してくるだろう』

「…理由は？」

『瀬川と斬善事 清孝は、中学校の先輩後輩関係なんだ…』

急に毅の声が暗くなった。毅は、電話越しにこう呟いた。

『悪く…思っなよ…』

「？」

疑問に思っ2人をよそに、毅はぽつりと言った。

『その2人の出身校、つまり出身の中学校が、常套中学校なんだ…。  
しかも所属部は吹奏楽部…』

「…！！」

あいた口がふさがらない。あの2人がまさか自分達の通う常套中学校で、しかも同じ吹奏楽部所属だったとは。泰徳はまさか、という困惑と、今回のような賄賂疑惑に対する怒りで危うく携帯を落としそうになった。

「ど…どういうことだよ…」

『詳しい事は話すことが出来ない…。ただ、今回のコンクールで斬善事中学校が県大会を突破することが確実だと言う事は、覚えておいたほうが良い。それを考慮して、お前が通う常套中学校が残り6つの切符枠（1）に収まるような演奏をしないといけないのは、覚悟しておいたほうがいいぞ』

「……………」

『瀬川を使って、瀬川を含めた賄賂組4人と、残り3人に口止めをするだろう。だから、斬善事中学校の批評が他校と比べて飛び抜けて優れる事は免れない…。こんなことしか言えないが……頑張ってくれ…』

毅はそこまで言うと、次の仕事があるから、と電話を切った。

「ちょっと…どういうことよ…。理事長がうちの卒業生？ O B  
？ 訳分かんない…」

「それは俺も同じだ、谷…。けど今は、現状を受け止めるしかない…」

「でも、こんな事って……」

「谷！！！」

泰徳が未来を一喝した。未来は一瞬、身体をびくつかせた。

「仕方ない。これが事実なんだ…。今更動揺しても仕方がない。毅然も言ってたけど、斬善事中学校が県大会を突破する事は目に見えてる。今俺達がやるべき事は、斬善事を含めた7校の中に残ることだ。県大会を斬善事と一緒に抜けることだ。正直俺も焦ってる。でも真実を突き止めるのはコンクールが終わってからだ。俺達は今、コンクールのために必死になるべきなんだ」

しっかりと未来を見据えて泰徳は言った。泰徳も焦りを隠せない様子だったが、泰徳の言葉どおり、今更焦っても仕方がない。未来は思った。

「…わかった。この事はまだ黙っておくね」

「ああ…」

未来と泰徳は別れた。

「くっそ！！」

泰徳は、テーブルを力いっぱい殴った。

## 第85楽章 「やっぱダメか…」（後書き）

1：県の代表として、次の大会に進むことの出来る学校の数。この年の場合は7校なので、斬善事中学校を除く6校となります。

## 第86楽章 「つかの間の安心」

手術前日、泰徳はまだ現実を受け止められずにいた。斬善事中学校が金の力で全国大会への道のりをつなごうとしていること、その裏では松山学園の理事長である斬善事 清孝と瀬川が行動していること、その2人が同級生であること、そして、その2人が常套中学校吹奏楽部のOGであること。

「あ、泰徳起きた？ よく寝てたね」

泰徳が目を開くと、未来は既に来ていた。未来のほかに、今日は瑠璃加も来ているようだった。未来によると、お昼を買いに行っているという。時計を見ると、11:30を指していた。

「前田もつれてきたのか」

「うん。お見舞い行きたいって言うから、電車で来たの」

「そうか……」

なんとなく頭が重い。そういえば昨日は、斬善事の行動をどうやって止めるか考えていたのだったと、泰徳は後から思い出した。

「そういえば谷」

「ん？」

「斬善事のこと、みんなに話したのか？」

花瓶の花を差し替える未来の手が一瞬止まったのを、泰徳は見逃さなかった。

「……まだだよ」

「そうか……」

「でも、大体予想はついてるんじゃないかな、この前の一動で。それに、いちいち悩んでも仕方ないよ。私たちは私たちのベストを尽くせばそれで良い」

未来の言う通りだと思った。未来と美奈の付き合いは、泰徳よりもはるかに長い。未来の言うことだから美奈は察しが付いているのだろうと思った。

「手術明日でしょ？」

この雰囲気になんて耐えがなくなつた未来は話題を変えた。

「ああ」

「いつ退院できるの？」

「そんなに大したことない手術だからだいぶ早いらしいよ。明日から数えれば1週間後だな」

「1週間後かあ。コンクールギリギリだね」

「そうだな」

「あ、これ今日の合奏分ね」

そう言つて未来は楽譜を差し出した。今年演奏する課題曲『パルセイション』と、自由曲『ダフニスとクロエ』。未来は合奏があるたびに、立石先生の指示を事細かに楽譜に書き込んでくれている。字もきれいだし、何より指示が明確に記されてあるから分かりやすい。

「あ、悪いな、毎回」

「何言つてんの。お互い様でしょ」

「今はちょうど中庭合奏の時期か」

「うん。今年は去年より暑くて、楽器が…」

金管楽器奏者にとっては、日光は最大の敵であると言っても過言ではない。たいていが金属でできているため、熱を浴びれば金属が延び、音程が上がってしまう。そして長時間日光にさらしておく（1）と、熱くなりすぎて触れないのだ。

「保冷剤とかあるのか？」

「一応持つてくるお弁当についてる」

「だったら、マウスパイプ（2）に保冷剤をタオルで包んで当てておくと良い。間違つても直接つけるようなことはするな。急に冷えてしまつて管が変形する」

「そうなんだ…ありがと」

泰徳と未来に限らず、Bassパートではこういった素朴な質疑応答は日常茶飯事だ。泰徳がセミプロになったことで、どのパートよりも問題解決が早く、練習の要領が良い。

「ただいま帰りました」

「あ、瑠璃加ちゃん」

30分ほどして、瑠璃加が帰ってきた。泰徳の顔を見て、ホツとした様子を見せる。

「瑠璃加ちゃん、相当心配してたんだから」

「そうなのか。悪いな、前田」

眉間にしわを寄せ、渋そうな顔をする。瑠璃加の買ってきたプリンのふたをはぐ音が、病室に響いた。

「前田ってユーフォ何使ってたの？」

唐突な泰徳の質問に、未来と瑠璃加の2人は、揃って怪訝な表情を浮かべた。

「YAMAH Aです」

渋々応える瑠璃加。その表情はどこか緊張している。

「谷って何だった？」

「Minel Westonよ」

「なんだ、2人とも結構良い楽器使ってるんじゃないか」

「そうかな？ でも何で急にそんなこと聞くの？」

「最近Willsonっていう会社の楽器が売れてるそうだ」

「その楽器の長所って何ですか？」

「恥ずかしい話、俺は今までWillsonの社名を聞いたことがなかった。だから毅に聞いたところ、『音色が豊かでパッセージの演奏にも優れたユーフォニアムだ』って」

「へえ、そうなの…」

泰徳が2口目のプリンを口に運ぶ。未来のプリンカップの中身は、既に半分程度に減っていた。

「Willson試してみるか？」

「え、いいの？」

「ああ。セントラルウインドに、Willsonの在庫が2台くらい余ってるんだ。今の時期あつちはちょうど大掃除の時期でさ、よかつたら譲るよって言われてるんだけど」

「でもそれなら、瑠璃加ちゃんのほうが適任じゃない？」

「わ…私ですか？」

「うん。瑠璃加ちゃん金管バンドにも入ってたし、技術もそこそこだし…」

未来は瑠璃加のほうを見た。椅子に座っている瑠璃加は、少々戸惑い気味に頬を紅く染めていた。

「ちよつと待て」

プリンを食べ終わった泰徳が、真剣な顔をして未来を見た。

「技術があるから有名どころの楽器を使うんじゃない」

「そんなこと分かってるよ…」

「いや、分かってねえ。奏者とマウスピースの間に相性があるように、楽器にも奏者との相性と言うものがある。俺はそれを試してみないかと言ったんだ」

「……………」

「今は斬善事の不幸事のこととかで頭いっぱいかもしれないけど、そんな事はもう忘れてしまふべきだ。コンクールまで残り1週間弱この期間に仕上げをしなければ、県大会を抜ける事はできない」

「……………」

「まあ、俺もつい最近まで斬善事のことといっぱいだったけど、お前らがきてくれたから少し楽になったよ。どうだ、試してみるか？」

泰徳は真剣な表情のままで、未来と瑠璃加に尋ねた。2人とも少し考えた後、声をそろえて答えた。

「試す。試します」

それを聞いた泰徳は、今まで強張らせていた表情を緩めて言う。

「分かった。毅に連絡しておくよ。でも、試すのは県大会が終わってからな。今から楽器を変えたんでは、リスクが大きすぎる」

「分かった」

未来は頷いた。

「じゃ、私たちもう帰るね」

「失礼します」

「ああ。絶対県大会抜けような」

泰徳の声かけに、未来は大きなVサインで答えた。泰徳はさらに気持ちが軽くなったような気がした。こうやって仲間がいるから、苦しい時に分かり合える。持つべきものは仲間だと思った瞬間だった。

## 第86楽章 「つかの間の安心」(後書き)

1…本当はやらないほうがよいです。日光に長時間さらすことによつて金属が焼けてしまい、空気の振動が妨げられる可能性があるからです。特に夏場は強い日照りを避け、やむを得ず日光を浴びてしまう場合は、その場所に留まる時間をできるだけ最小限にしましょう。

2…マウスピースを接続する部分、またはマウスピースの接続部分からのある程度の長さの管を言います。マウスパイプがへこんだりすると、著しく音色が悪くなったり、音程が定まらなくなってしまう。楽器は大切に扱いましょうね。

## 第87楽章 「穴は塞がるか」

「やっぱり竹林の穴は大きいな……」

指揮台に立つ立石先生が、ポツリと呟いた。泰徳が入院してはや2週間程度。泰徳が本番のステージに立てるかどうかは分からないというの聞いていたが、その本番が1週間後に迫ったというのに、泰徳の入院は常套中学校吹奏楽部にとって、とても大きな穴となつて立ちは大かつていたのだ。既に合奏は終了していて、今は合奏場である第2音楽室において、立石先生は楽譜の整理の真つ最中だつた。

「やっぱりそう思います？」

それを手伝っていた部長―中尾 真実が、心配そうな口調で答える。彼女は部長と言う役職柄、部員達のことを真つ先に考えなければならなかった。そのため、彼女にかかるプレッシャーと責任の重さときたら、他人と比べるまでも無く大きすぎた。

「ああ。あいつもあいつなりに頑張ってるから、何とかしてやりたいたとは思っただけ……」

「でも彼、プロになつたんですね？」

「いや、正確にはプロじゃない」

「……どういふことですか？」

泰徳がプロ転向したと言う話は、あれほどB a s sパートに口外することを禁じていてもすぐに広まった。美奈らB a s sパートは口外を否定したが、それは事実のようだった。

「正確には向こう側から誘いを受けたんだよ」

「へえ……」

「それに泰徳はまだ中学生だ。いくらプロの入団資格に年齢が関係ないからといっても、教養が無さ過ぎる」

「プロの皆さんは、音大出身者ですもんね」

「そうだな。だから、泰徳はまだ本能的に音楽をやっているとしか

言えない。確かに楽器の技術はあるが、楽典やソルフェージュといった本格的な音楽的教養は、まだ足りないよ」

「ということは、楽器を演奏するには楽典が不可欠と言うことですか？」

「いや、そういうことじゃない。ただ、成すがままに演奏するのと、音楽の理屈を分かった上で演奏するのでは、曲との向き合い方が変わってくるって事さ」

「…難しいですね」

そう言つて、真実は顔を濁らせた。立石先生は苦笑しながら、でもあいつは音大を目指すだろう、と言つた。

合奏が終了した後、B a s sパートでは泰徳の手術の話で持ちきりだった。何しろこの日は、泰徳の手術当日なのだ。みんな心配で仕方なかった。

「絶対成功するよね」

「してもらわないと困るわよ」

楽器を片付けながらの会話は日常茶飯事であつたが、話題がどうも暗かった。辛気臭い雰囲気が大の苦手な美奈は、もう耐え切れなくなつていた。

「でも、もしもの事があつたら……」

「あー！！ もうないない！ 泰徳に限って手術に失敗しましたなんて無いー！！」

「…でも……」

「未来！ あんたね、少しは泰徳のこと信じてあげたらどうなの？！ 幼馴染でしょ？ そりゃ心配なのも分かるけどね、もうちょっと落ち着きなさいよ！」

「……ぷふっ……」

「ちよっ…何笑つてんのよ！」

「だって…ぷふふ…美奈が一番焦ってるから…」

「な…！ 焦ってない！ 焦ってないー！！」

美奈は顔を真っ赤にして、両手を振り回して否定した。しかし未来は分かっていた。彼女は感情がすぐに顔や言動に表れてしまうこと、そして、誰よりも敏感で繊細なこと、誰よりも泰徳を気にかけていること。

「そうだよ、絶対成功するよね」

「だからしてもらわないと困るの！　… Bass パートが！」

最後、付け足したでしょ。そういたい気持ちをグツと堪えて、未来はそうだね、と言だけ返した。まだ興奮が残っている美奈には、あまり返さないほうがいい。これは小学校からの付き合いで培ったアドバンテージだった。そして彼女なりの優しさだった。

「でも、明日これるのかな？」

「大丈夫でしょ。泰徳だもん」

「なにそれ」

そう言つて、未来は堪えるように笑った。しかし、実際には泰徳がいるのといないのでは、低音の重厚感が随分違っていた。

「だって、翔先輩も言ってたよ。泰徳は、そんなに柔な男じゃない。必ず復活する男や！　って」

「翔先輩が言うことなら、間違いないかもね」

「な…っ！　私の言うことは信じられないの？！」

「そうじゃなくて。翔先輩と泰徳は幼馴染でしょ。美奈とは付き合いの長さが違いすぎるよ」

「ぐっ…」

未来の言ったことがあまりに的を射ていたのか、美奈は口を噤んだまましばらく動こうとしなかった。

「とにかく待つしかないよ。泰徳だって好きで入院してるわけじゃないんだし、今朝から手術やって来週の当日にコンクール出場なんて、常識的に考えても無理があるから…」

「でも、出て欲しい…」

「それは私も一緒。でも、泰徳の回復のほうを優先させなきゃ。出られるものも出られなくなっちゃう」

「……そっか」

「…うん」

後輩達が帰ってしまった静かな教室に、沈黙が流れる。しばらくして沈黙を破った立石先生の声は、今までの2人のナーバスな気持ちを一扫するものとなった。

「竹林の手術、成功したって連絡があつたぞ！」

2人は手を取り合つて喜んだ。1週間後のコンクールは泰徳は絶対来る。2人はそう信じていた。

## 第88楽章 「俺、間違ってた」

「どうだ？ 調子は」

「まあまあかな…」

匠の問いかけに、まんざらも無い様子で答える泰徳。双方1週間後にコンクールを迎え、泰徳は退院待ち、そして匠は泰徳のお見舞いと、互いにせわしない日常を送っていた。

「すまないな、毎日」

「何言つてんだよ、お互い様だろ。それに、俺がお前のお見舞いに来るのは部活が終わってからだ。心配すんなよ」

「でもさ…」

まだ何か言いたげにしている泰徳の言葉を、匠は大丈夫だつて！とさえぎった。

「それよりか聞いてくれよ」

「？」

唐突な匠の話題転換。約1年付き合ってきて、このような事は稀だった。いや、無かったといってもいい。泰徳は少々戸惑った。

「俺らさ、A部門で出ることになったよ」

「マジで?!」

「ああ。なんか顧問が今年の4月に急に言い出してさ。自由曲は決まってたからいいものの、A部門とか出たことないし、なれないことだったから…。ほら、俺の学校って小編成じゃん？ だから、課題曲何にしようとかもうバタバタでさ」

匠は可笑しそうに話した。実際、泰徳は匠の所属する松方中学校は、大方B部門での出場が目立ったほか、A部門に出たことが無かった。そして泰徳自身も、匠と出会ったまでは松方中学校の名すら聞いたことが無かった。

「結局課題曲、何になったんだよ？」

「？だ」

「？か…」

泰徳は、あからさまに驚いた様子を見せた。この年の課題曲4番といえ、三澤 慶氏作曲の『海へ・・・吹奏楽の為に』である。

6/8拍子が楽譜の大半を占める上、ソロがホルンとユーフォニアムの2種、そしてさらには、鬼畜といっても過言ではないシロフオンのスケールの連続といった技術を必要とし、さらに曲を表現しようとするのは、正直言つて松方中学校には無理だと思われる。それが泰徳の率直な感想であり、常識的な思考だった。

そう思われるのも無理は無く、常套中学校と松方中学校を比べた際、大編成と小編成の違いがあるのは一目瞭然である。しかし、松方中学校にはダブルリードがあり、それを考えると演奏のレパートリーは、多少ではあるが松方中学校が有利だ。それでもB部門しか経験しておらず、ましてや小編成では、この曲は表現しきれないのではないか。そう思ったのだった。

しかしよく考えてみれば理にかなってもいた。毎年発表される課題曲5種は、2:3、もしくは3:2で大編成楽譜と小編成楽譜に分けられている。大編成にはダブルリードや4thホルンなどに単独のメロディーを奏でられることが可能であるが、小編成はそれを省いても演奏可能なように作曲されている。この度2006年度の課題曲は、？と？が小編成、？と？が大編成向けの楽譜なのだ。しかしだからといって、大編成のチームが小編成の楽譜を用いてはならない、とか、小編成のチームが大編成の楽譜を用いてはならない、とかいう決まりは無い。そういう面では、松方中学校は正しい判断を下したと言えた。

「ユーフォソロは、もちろん先輩が吹くんたる？」

「いや、それなんだが…」

匠は以外にも、言葉を濁した。

「？ 何か問題があるのか？」

「そういうわけではないんだが、そのソロのことで揉めてな…」

「ふーん…」

「松方中には、俺も含めて2人ユーフォ吹きがいるんだけどさ、ソロを誰が吹くかでちよつと険悪な雰囲気になった時期があつて…」

「先輩でいいんじゃないの？」

「俺も最初はそう思った。でも、後輩のほうがうまい氣もしたんだ」

「へえ。先輩つて実はヘタレなんだ」

「うつせえな！ まあ聞いてくれよ…。で、俺達2人は、顧問にソロを聞いてもらうことにしたんだ」

「で、結果は？」

「俺がソロ吹くことになった」

「よかったじゃん」

「でも、トロンボーンの持ち替えも担当してて、ユーフォ吹くのは課題曲のソロと、自由曲の半分だけなんだ」

「嫌なの？」

「ああ…ちよつと、な」

匠はしょんぼりと肩を落とした。彼は自他共に厳しいところがあるうえに、プライドを高く持ってしまう癖があつた。以前泰徳のお見舞いに來た際にも、プライドとモチベーションは全く別物だ、という話をしたばかりだった。

「トロンボーンよりもユーフォが吹きたかつたとか？」

「…正直に言えば…」

泰徳は大きくため息をついた。昨日話したばかりじゃないか。そう言つて殴つてやりたい氣持ちに駆られた。泰徳はそれを一生懸命我慢した。

「そんなにトロンボーンの持ち替えが嫌か？」

「嫌つて言うか…ユーフォ吹くのが当然だと思つてた」

「なぜ？」

「俺、専門の楽器はユーフォだから…ユーフォ吹くのが当然だと思つてたんだよ」

「今は？」

「その考え方、間違つてた……」

「だよな。この前も言っただろ？ プライドとモチベーションは全然違うものだぞって」

「うん…」

「先輩はいつもプライドが先行しちゃうんだよな。ま、今回は受け入れるしかないだろ」

「うん……」

匠は静かに顔を俯かせた。確かに匠のユーフォニアムはソロ向きの音色をしている。しかし匠は匠らしく、大論争があつて以来、吹奏楽に合うソロの音色はどのようなものなのかを研究してきた。

「ユーフォが吹けないことが悔しいのは分かる。けれど、もっと持ち替えとしての仕事をこなすほうが、先輩のためになると思っぜ」

「持ち替えとしての仕事？」

「ああ。先輩なら分かつてるはずだけど。要するに、松方中学校は小編成だけど、小編成の魅力を最大限に出すのが先輩の仕事ってこと」

「ってことは、持ち替えとしての仕事ってのは…」

「合奏の一部としての持ち替えの仕事じゃなくて、ひとつの技術とかパフォーマンズとしての持ち替えの仕事ってことだ」

「言っている事は哲学のような話をする泰徳。だがこれも、匠に与えるひとつのヒントだった。あえて難しい表現で会話することで、その真髓が何かを相手に考えさせる。これが泰徳の目的だった。」

「そうか…あと時間ちよつとしかないけど、頑張ってみるよ」

「ふふっ…そうしてくれ」

泰徳はそういうと、匠と別れた。別れ際、お前もコンクールに乗れよ。絶対にな！ と言って病室を出て行った。無論、泰徳もそのつもりだったので、手を振って応えた。

コンクール愛媛県大会まで、あと3日。

## 第89楽章 「快復してます」

「成功したって！ 泰徳の手術！！」

未来の合奏終了後の開口一番は、これだった。

実は昨日の夜から、泰徳の拡張型心筋症に対するペースメーカーの埋め込み手術が行われていたのだ。手術自体は今朝終わったらしいが、メールを送ってきたのが泰徳本人だったため、麻酔が切れてから送信されたものだと思われる。

「本当？！ よかったあ……」

B a s s パート全員が、安堵した。

「でも、コンクールとかは大丈夫なんですかね？」

「大丈夫みたいよ。大きな手術ではないし、抜糸もいらないし、これから検査して良好だったら、すぐ退院できるんだって」

「へえ、良かったじゃない」

「うん！」

えへへ。未来は思いっきり顔を崩して笑った。

実を言うと、ここのところ合奏がいまいちぱつとしなかった。泰徳が抜けていることで低音は不十分だし、それよりもB a s s パート全体がおぼついていなかった。みんな演奏中にもかかわらず上の空であつたし、立石先生が何度注意しても空返事ばかりだった。

「これでやつと合奏に集中できるよ」

「正直みんなに悪いことしたなあ……」

「だよねえ……。謝らないと」

「コンクール明後日だもんね」

あの後結局、課題曲は？のパルセイション、そして自由曲は、M<sup>モリス</sup>・ラヴェルの『ダフニスとクロエ 第2組曲』より、1楽章の“夜明け”と最終楽章の“全員の踊り”に決定した。プログラムは23番全37校のうちの最後のほうで、しかも常套中学校の次が斬善事中学校だった。

「泰徳に話したほうがいいかな…？」

「いいんじゃない？ 一番気にしてるし…」

「そうよね…。松方も上がってくるんだもんね」

そう、今年から匠の通う松方中学校は、A部門に格上げになった。

どうやら顧問の前々からの意思と、副部長にまでなった匠のこり押しが原因らしかった。

「今年はいろんな意味で大騒ぎなコンクールになりそうね」

「そうね」

ふふ、と未来が笑った。

「松方、大丈夫かな…」

「大丈夫ではないよ…。だって相手は斬善事。金賞とる為には手段は選ばなさそうだもん」

「だよねえ…」

未来はがつくりと肩を落とした。

『泰徳、大丈夫か?!』

「っ…！ つせえなあ、ちったあ静かにしろよ…」

泰徳は携帯電話に耳を使っていた。

『じゃあしい！ 俺がただけ心配したか分かつとんのか?!』

「だから心配かけたなって言ってるじゃんかよ…」

『そういう問題やない！ なんでもっと早く連絡せえへんかったんかて！』

「だからそれも悪かったってば…」

『だいたいお前は隠しすぎや！ 何で今さらになって手術しますなんて連絡が来んねん！ このクソ忙しいときに泰徳もようやるわ！ ！ だいたいなあ！……』

よほど心配していたのだろう。この後15分、翔によるお説教が続くこととなった。

『…ということや。分かったな?!』

「あーはいはい。分かった」

『いーや、わかってない!』

「わかってるて」

『分かってない!!』

「分かつとるって言うろうが、このドアホ!」

『ドアホ?! ドアホとは何や!』

「ドアホはドアホじゃ、アホ!!」

『なっ! 1度ならず2度までも…!! 親にもアホなんて言われたことn…』

「嘘付け」

翔が言い終わらぬうちに一周する泰徳。電話口の向こうで、翔はそんな泰徳を生意気だなと思いつつも、順調に回復していることを実感し、内心ホッとしていた。

「ところで翔」

『何や?』

「今年のコンクールは随分派手にやるそうじゃないか」

『…誰から聞いた?』

「誰って。そっちの顧問に決まってるじゃないか」

『東先生から?!』

「おう。仕事の関係で神奈川行ったときに偶然会ってな。そこで聞いた」

『くっそ…。泰徳には秘密にしておきたかったのに…』

「なんで秘密にする必要があるんだよ?」

『だってびっくりさせたいやん…』

「は?」

『だから、オレらもコンクール出る立場としてお前らをびっくりさせたかったの!』

「何言ってるんだよ…。もうなんの曲やるか聞いて度肝抜いたんだからな…」

『じゃあ言ってみい!』

「課題曲?と吹奏楽のための序曲。あ、ついでに言つと序曲は坂田さん作曲のやつな」

『……』

冷徹に言い放たれた2つの曲名は、翔をさらに凍りつかせた。いくら泰徳でも、コンクールで演奏する曲までは聞き出してはいないだろうという、翔の油断が生み出した瞬間氷結だった。

「ん、どうした? 妙に静かじゃないか」

『……まったく泰徳にはかなわへんな』

翔は電話口の向こうで大きなため息をついた。

「そっちは頑張ってるっばいな」

『まあな。今年は例年にもなくみんな本気やから』

「でも音楽はそれくらいやらないと面白くないだろ」

『まさに。結構面白くなつてきとるで』

「期待してるよ」

『ああ。泰徳もな』

「もちろん」

泰徳は静かに通話ボタンを押した。あさつてが本番。退院はほとんど本番ギリギリになつてしまふが、それでも本気で演奏しようという泰徳の心は変わっていなかった。

コンクール愛媛県大会まで、あと2日。

## 第90楽章 「いよいよ……！」

コンクール前日というのに、病院の風景を執筆するのはいささか気が引けるものである。が、常套中学校の部員たちの苦労は周知の事実な上、今回は泰徳が入院しているというコンクール前にもなつて異例の事態である。今回は、コンクール前日に泰徳がどんなことをしているのか、少し覗いてみることにしようと思う。

「……はあ……つまんねえなあ……」

テレビのチャンネルを次々と回し、そのたびにため息を漏らす泰徳。今日の午後退院できると分かり、本当のところは午後までぐっすり寝ていたかったのだが、何故か分からないが早朝に目が覚めてしまったのだった。

「……たたく……なんでこういう日に限って早起きなのかなあ……」

ふと、病室に置かれた横長デスクに目をやる。そこには、今まで美奈や未来が泰徳のためにとってきてくれたノート、楽譜、差し入れなど、様々なものが置かれてあった。泰徳はそこから、1枚の色紙を手にとった。

この色紙は、バスパートが泰徳の入院3日目に贈った色紙だ。色とりどりの枠取りの中にメンバーそれぞれのコメント、背景には色鉛筆などを駆使して描かれた、ユーフォニアム、テューバ、コントラバスの絵。未来によると、この絵は瑠璃加が1人で書いたものらしい。泰徳は心底、瑠璃加の絵心に関心した。その色紙に書かれたコメントは、それぞれ違っている。

- 泰徳君がいないと、バンド全体がもぬけの殻です。早く元気になつてね 美並 -

- 泰徳ー！ 早く戻ってきてー！！ 未来 -

・先輩がいないとなんだかつまらないです。またお仕事の話聞かせてください 瑠璃加・

・泰徳君が今のバンドの支えになってます。コンクール待ってるよ  
(・・ω・) 香織・

・先輩何やってんですか！ 毎日がつまらないじゃないですか！！  
早く戻って来てください 沙希・

・早く帰ってこないとお仕置きよ！↑キモイけど気にしないで 美奈・

・せんばーい、帰ってくるの待ってます！(・ε・) かおり・

それぞれ個性があり、それが文面と文字に現れている。『文字はその人の正確を表す』というが、まさにそのとおりだと思った。色紙を眺めていると、机の上においていた携帯電話が震えているのに気づいた。美奈からの電話だった。

「もしもし？」

『もしもし！ 泰徳？！』

「俺の携帯にかけてるんだから当然だろ」

『あ、そっかー！ てへ！』

美奈のテンションが少し高い。そして周りが少しうるさい。

「周りにみんないるのか？」

『そだよー！ んつとね、今泰徳の復帰パー！て…』

『こら美奈！ それは言わない約束でしょー！！』

『あ、そだった。テンションが上がってつい…』

このごろ聞けていなかった未来と美奈の漫才のような会話を聞き、思わず泰徳はクスツと笑ってしまった。

「おいおい、気になるじゃんか。教えてくれよ」

『だめー！ 泰徳が今日の午後に無事退院したら教えてあげるわよ』  
「だから退院するってば」

『分からないわよ？ もしかしたら帰りに交通事故に遭うかもしれないじゃない』

「無い。それは絶対ない」

『むう。あるかもなの！』

「はあ……。分かったよ」

この先は何を言っても無駄……とまではいかないが、意地っ張りな美奈のこと。泰徳がどのようにアプローチしようと、この電話の奥で行われていることに対しては絶対に口を割らないだろう。ただ、泰徳には察しがついてはいたが。

『じゃ、無事に帰ってきてねー！』

「ああ、分かった」

泰徳がそう言うのと、電話はプツツと切れた。泰徳は再び、色紙に目をやった。

「明日……か……」

ポツリとつぶやく。明日はコンクールの県大会当日。場数を踏んできた泰徳でさえも、今から少し緊張している。しばらく感傷に浸っていると、病院の引き戸が開けられた。

「泰徳、準備はできた？」

「ああ……うん」

「何見て……。あ、みんなに貰った色紙？」

「うん」

「いい人たちね、みんな。あんなに心配してくれたんだし、頑張らないとね」

「それはわかってるよ」

「ふふ。でもどう頑張るかは泰徳しだいよ」

「うん……」

泰徳の母、紀子は音大出身である。そのため音楽の道を進む厳しさ

は、ほかの誰よりも分かっていた。しかし紀子は、泰徳を責める気は早々なかった。泰徳の思う将来の道を歩いていつて欲しい、泰徳が決めた進路なら、それにすぐえるようにしたい、そう思っていた。「そろそろ行くわよ」

「うん」

そう言つて泰徳は色紙を握る。来たときには真つ白な空虚な空間が、この時だけは何の汚れもない美しい空間に見えた。入ってきた時と同じ状態に片付けたはずなのに、なぜか病室を去るときは、その空虚な白が美術の白に思える。この白に負けないくらいの美しい演奏を明日はしようと、泰徳は気持ちを新たに病室を去った。

全日本吹奏楽コンクール愛媛県大会まで   あと   1   日

## 第91楽章 「コンクールだよ！ 全員集合！」

翌日、今日は吹奏楽コンクール、まずは愛媛県大会の本番である。常套中学校吹奏楽部のメンツは、そろそろ出発するから中庭に並べ、という立石先生の指示通り、中庭にパートごとに整列している。だが、コンクールメンバーひとりひとりが、それぞれ迎える本番のプレッシャーに押しつぶされそうになっていた。そのうち、今のところ1人メンバーが欠けてしまっているBassパートは、いつもに比べて覇気がなかった。

「うう……いよいよ本番だよ……」

「ちよつと未来、しっかりしなさいよ！ そんなに弱気だったら、泰徳に怒られちゃうよ！」

いつも通り未来に接している美奈でさえも、その表情はひきつつている。

「そういう美奈だって、顔が……」

「う……うるさいわね！ 武者震いよ！」

「武者震い……」

分かりやすすぎる言い訳に、未来は美奈にジト目を向けた。美奈は耐え切れず、1人で悶絶していた。

「それはそうと、泰徳君は？」

香織が美奈を制しながら問う。

「竹林先輩なら、現地で落ち合うみたいですよ」

立石先生から聞きました、と沙希。

「でも泰徳、大丈夫かな？」

「何が？」

「だって、今日までずっと合奏出来なかったのに……」

「大丈夫よ。先生がチューバパートに指摘してたところは全部メモって泰徳に渡してあるから、きつとそのとおりやってくれるでしょ」  
「けど……やっぱり不安だよ」

「泰徳の力知らないの？」

「知ってる！ 知ってるけど…」

美奈の表情が曇る。

「泰徳のレベルは周りと違いすぎて、浮いちゃわなくなってる……心配なのよ」

「大丈夫よ」

未来は美奈の肩をぽんと叩いた。

「泰徳はプロよ？」

「うん…けど」

「泰徳、言ってたわ。どんな状況にも素早く応じて、周りに合わせるのがプロだって」

「……」

「だから大丈夫。泰徳なら、きっと周りの変化を直ぐに感じ取って、それを演奏に生かしてくれるわ。やってくれると思うけどな、泰徳なら」

「…そうかもね」

そんな気がしてきた、と、美奈は表情を和らげた。

「みんな揃ってるか？」

しばらくして、立石先生が中庭に姿を現す。タキシードに蝶ネクタイ。去年のように、会場に着いてから指揮棒を忘れた、なんてパプニングはやらないでいただきたい。

「竹林君を除いて、全員揃ってます」

「うむ。竹林は会場で合流するからな」

立石先生は肩の力を少し抜いた。

「コンクールメンバーも、そうでない部員も、県大会だけは吹奏楽部全体で行動することになる。1年生はこれを期に、どう動くべきか、どういう態度で居るべきかを学ぶこと。2、3年生も、1年生に恥じない態度で行動すること！」

「はい！」

「次に今日のことであるが、同じくコンクールメンバーの竹林は会場で合流する。彼には入口で待っているよう指示してあるから、Bassパート1、2年生は会場に到着後、楽器搬入よりも竹林との合流を先決するように」

「はい！」

「そういうこともあいまって、今年の県大会はタクシーで向かう。部長から整理券を受け取ってくれ」

部長、中尾 真実は、部員それぞれに整理券を渡していく。

「会場についたら、運転手さんにこの整理券を渡しなさい。お金は後援会が払ってくれることになっている。いかなる時も、感謝の気持ちを忘れないように」

「はい！」

「うむ。それじゃあ中尾、あとは任せたから、タクシーが到着したら順番に部員たちを乗せていってくれ」

「了解しました。1台何人までですか？」

「3人だ。助手席に1人、後部座席に2人。俺は後から車で部員たちを追う。だから先に出発させてくれ」

「わかりました」

立石先生は再び職員室に戻った。真実が指示を出す。

「みんなは校門へ！ タクシーが到着したら、フルートパートから3人ずつ乗ってください」

「はい！」

真実の指示により、部員全員がぞろぞろと校門へ移動する。移動した先には、もうすでに数台のタクシーが待機していた。

「では、手前のタクシーから順番に、3人ずつ乗って」  
的確な真実の指示。慣れというものはすごい。

松山市民会館。全日本吹奏楽コンクール愛媛県大会の会場であり、

3本指に入るとされる西日本屈指の多目的ホールである。そこには既に他校の生徒たちが群れを作って行動していた。せっかく和らいだ緊張も、この光景を見ることによってぶり返してくる。Bassパートの面々も、例外ではなかった。

「いよいよ来ちゃったね」

「私たちはまず泰徳を探さない」と

「たしか入口って先生言っていましたよ？」

「楽器搬入はほかのパートがしてくれてるけど、私たちも早めに手伝いにいかないとね」

「でも泰徳が見つからないことには…」

「わかってるわよ！」

緊張を感じさせない、いつものBassパートコント。けれどもメンバー全員、緊張しているのだ。しかし探せど探せど、泰徳の姿は見当たらない。

「もう…泰徳どこにいるのよ」

「背がちっちゃいから見つけられないとか？」

「そうじゃなくて…混みすぎ……」

運動大好きな美奈でさえも、肩を上下させている。業を煮やしたのか、美奈が叫んだ。

「もう！！ 泰徳どこにいのよー！！」

「ここだよ」

「！？」

いきなりの背後からの声に、美奈は口から心臓が出そうになった。驚きすぎて言葉が出ない。

「ったく…。いつまで探し回ってたんだよ……」

「な…なな……」

「何固まってるんだ。楽器の搬入途中なんだろう？ 早くいこうぜ」

「え、あ、ちよっ…待ってよー！」

せっかく再開できたのに、なんだこのそっけない再会は。未来は思ったことを静かに胸の奥に閉まった。

「泰徳」

「ん？」

「頑張ろうね」

「……ああ」

泰徳は静かに、ニツと笑った。根拠はないけれど、自身が湧いてきた。

第2チューニング室。常套中学校吹奏楽部は、楽器搬入と準備諸々を終え、係員の指示によってこの部屋に待機している。チューニング室を使えるのはわずか15分。この時間をいかに有意義に使い、コンパクトな最終調整が行われるかが鍵となる。

「先に言っておく。最終調整は必要ない！ 最低限な楽器鳴らしで十分だ」

立石先生の目に、迷いはない。

「今からの15分間、最終調整も含め、話したいことがある。耳の穴をかつぽじってよく聞くように」

コンクールメンバーたちも、その眼差しは真剣そのものだ。

「もちろんお前らも俺も、最高の演奏をしなければならぬ。だが、目指すのは金賞じゃない。四国大会への切符でもない。一番大事なのは、聴衆を感動させるような演奏をすることだ。審査員なんてどうでもいい。聴きに來ているお客さんを、感動させる演奏をしない」

「はい！」

「確かに夢は全国大会だ。県大会は、全国大会に駒を進めるための通過点に過ぎない。しかし、通過点を通らなければ、ゴールにはたどり着けない。まずは県大会だ！」

「はい！」

「俺はお前たちを、この県大会という舞台に立つお前たちを誇りに思う。押しつぶされそうなプレッシャーの中、お前たちはよくこ

まで頑張ってきた。今その努力の成果を見せる時だ！」

「はい！」

「ここまでで一番の演奏をするように！」

「はい！」

「よし！ 最終調整だ！」

「はい！！！」

割れんばかりの立石先生の声と、割れんばかりの部員たちの返事。そこから読み取れるものは、先生と生徒のやる気、そして、今後への希望。その時は、刻々と迫っている。

「常套中学校さん、準備お願いします」

係員の合図に、緊張が走る。

「よし、行くぞ！」

「はい！！！」

愛媛県松山市立常套中学校、いざ、出陣。

## 第92楽章 「愛媛県大会！」

『誰に向かって言ってるんだ？ それ』

この言葉を泰徳が未来の耳に突き刺したのは、つい先程のチューニング室でのことだ。あまり練習に参加できていない泰徳のことや、斬善事中学校の一件などで精神的に不安定であった未来は、チューニング室からこの舞台裏へくる際に、泰徳と会話していた。

「ねえ、泰徳」

「ん？」

「大丈夫？」

「何で」

「だって、あまり練習にも参加できてないし、ぶつつけ本番と変わらないでしょ？ だから、やりにくかったりとか吹けなかったりとかするのかなーって、ちよっと心配になって……」

「なあ、谷」

「……？」

「俺はなり立てだが、プロだ。自分をお膳立てするわけじゃないが、それなりに楽器の自信はある」

「…うん」

「だったらさ。その『やりにくかったり、吹けなかったり』っていうのは、誰に向かって言ってるんだ？ それ」

「えっ……」

「たしかに俺は迷惑をかけちゃった。けどその分、このコンクールで取り返すつもりだぜ？ 弱気になるなんてお前らしくないな」

この会話を経て、今舞台裏にいる。泰徳はやると言ったらやる男だ。それは重々承知しているし、幼馴染という関係をもってしても保証

できることだ。けれども、あのような自信に満ち溢れたセリフを泰徳が履くのは、未来と泰徳の付き合いでは初めてのことだった。

時の流れは構わずして、アナウンスが流れる。

「プログラム28番。愛媛県松山市立常套中学校。課題曲？に続きまして、自由曲はM・ラヴェル作曲 バレエ音楽『ダフニスとクロエ』第2組曲より、？・夜明け？・全員の踊り。指揮は、立石和則です」

立石先生が一礼すると、静かに拍手が湧く。その雰囲気は、数々の演奏会とは全く違うものであった。ひと呼吸おいて、静かにタクトが下ろされる。

課題曲？ パルセイション。木下 牧子氏による課題曲であるが、2006年の課題曲の中では一際移植を放っていた。パルスというのは刻みのことで、同じく課題曲であった『パルス・モーション？』という曲も同調のものである。最初は全てがpまたは同族の指示であり、音の瞬発力と発音の技術が顕著となる。ユーフォニアム、テューバ、コントラバスなどの中低音楽器のユニゾンから、少しずつ音が積み重なっていく。

第1主題。クラリネットのメロディーに続くミュートトランペットのソロは、かなり神経を使わなければならない。これを担当した久保 恵理子くぼ えりこは、相当な努力と時間を費やし、現在の音量と音色に仕上げた。決して楽な仕事ではない。これに続くBメロからのミュートトランペット及びEsクラリネットのソリも、同様である。これに関してEsクラリネットを担当する新羅にいらい 薪まきは、リードの研究を重ね、パルセイション専用のリード、ダフニスとクロエ専用のリードをそれぞれ作成したほどである。

第2主題につながる繋ぎと第2主題からは、トランペットとホルンが加わり、主にホルンがアンサンブルの増強を担当する。この部分から急激にオーケストレーションが変化するが、ここまでに松葉（1）をどううまく演奏するかが鍵となる。また、どの部分のバランスが過不足になっても減点対象になりかねない。

Aサビは、メロディーを担当する木管勢と対旋律を担当するホルン、そして全体的な飾りを付ける直管楽器に分かれるが、この部分で大事な役割を果たすのは、ほかでもなくパーカッションである。パルセイションの大きな特徴の1つとして、メロディーの裏で伴奏を担当する楽器は、常に8分音符か3連符を刻んでいる。打楽器も例外ではなく、この刻みがぶれてしまうと曲は成り立たない。マーチ以上に伴奏が重要な曲こそ、このパルセイションなのだ。

中間部。ここは主に木管アンサンブルを特筆すべきだろう。メロディーはフルートが奏で、伴奏にはクラリネットが回る。そしてトランペットとミュートトランペットがパラパラとトレモロ（2）をする。このバランスが非常に難しく、またオーケストレーションも比較的小さめにまとめられていることから、演奏はかなり難しい。またメロディーを受け継ぐユーフォニアムやテナーサクソも音域的に出しにくい音域のため、非常に吹奏感に抵抗を感じるのだ。

再現部、前半のメロディーと同じことを繰り返すのだが、オーケストレーションは数段アップして、重厚感がまるで違う。つまり、始まりから終わりまで気を抜けない曲であり、かなり楽譜に忠実に演奏しないといけないのだ。課題曲の中の課題曲である。最後は壮大な3連符からのホルンとフルートアンサンブルで曲は終わる。

課題曲の演奏を終え、続いて自由曲の演奏に移る。ダフニスとク口工第2組曲。夜明けの始まりであるがため、先生の神経の磨り減りようも半端ではない。そんな中で、自由曲の演奏が始まる。

## 第92楽章 「愛媛県大会！」（後書き）

1 クレシエンド及びデクレシエンドの組み合わせのこと。言語で書けば *crescendo*、*decrescendo* であるが、記号で表せば >、< となるため、その形から松葉と呼ばれる。

2 トリル ≠ トレモロ。トリルはちゃんと音符で表すことができるが、トレモロはできない。つまりトリルはテンポの中で演奏しなければならぬが、トレモロはそうではない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7474g/>

---

プラス魂♪ ~ Season ? ~

2012年1月8日17時53分発行